

農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

恵原新張遺跡

－ 1次・2次・3次調査－

2018

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

え ば ら に ば り い せ き

恵原新張遺跡

－ 1次・2次・3次調査 －



2018

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版1. 調査地全景① (南より)



巻頭図版2. 調査地全景② (東より)

序 言

本書は、愛媛県中予地方局による松山南部3期地区農道工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書です。調査地が所在する松山市恵原地区は松山平野南部に位置し、中世の城郭である荏原城跡や八ツ塚群集古墳などの県指定史跡をはじめ、縄文時代から中世に至る遺跡が数多く発見されています。

今回の調査では、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を発見しました。弥生時代では中期後半や後期末の竪穴建物が検出され、古墳時代では竪穴建物や掘立柱建物のほかに古墳に伴う石室2基が見つかりました。とりわけ、古墳時代では厨房施設であるカマドが検出され、当時の建物構造や建物廃棄時の様子が知れる貴重な資料を得ることができました。また、調査では古墳時代を通して集落が継続して営まれ、その後、7世紀には古墳が築造されるようになり、居住域から墓域へと移り変わる様子も明らかになりました。

このような成果をあげることができたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財の普及啓発や調査研究に活用していただければ幸いに存じます。

平成30年11月

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
理事長 本田 元広

例 言

1. 本書は公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが、平成27年5月から平成28年6月までの間に松山市恵原町内において、愛媛県中予地方局産業経済部農村整備第二課による農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書である。
2. 遺構は、呼称名を略号で記述した。
 竪穴建物：SB、掘立柱建物：掘立、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北で世界測地系に準拠している。
4. 本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2006）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や遺物実測図の縮分は、縮分値をスケール下に記した。
6. 報告書作成に伴う遺物の復元・実測・製図及び遺構の製図は、担当職員である水本完児の指示のもと、松本 美代子、越智田 美紀、坂本 久美子が行った。
7. 本書掲載の遺構写真は水本が撮影し、遺物写真の撮影は作田 一耕が行った。なお、写真図版の作成は水本が行った。
8. 発掘調査における基準点・水準点の設置は、株式会社真鍋設計事務所（1・3次調査）とセントラルエンジニアリング株式会社（2次調査）に業務を委託した。また、航空写真撮影は南海放送サービス株式会社に業務を委託した。
9. 本書の執筆と編集は水本が担当し、浄書は平岡 直美が行った。
10. 本書で作成した図面・記録類及び出土品は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査・整理・刊行組織	1
第3節	遺跡の立地と歴史的環境	4
第2章	調査の概要	7
第1節	調査の経緯	7
第2節	層位	8
第3節	遺構・遺物	9
第3章	恵原新張遺跡1次調査	13
第1節	調査の経緯	13
第2節	層位	14
第3節	遺構と遺物	22
第4節	小結	62
第4章	恵原新張遺跡2次調査	75
第1節	調査の経緯	75
第2節	層位	76
第3節	遺構と遺物	79
第4節	小結	97
第5章	恵原新張遺跡3次調査	105
第1節	調査の経緯	105
第2節	層位	105
第3節	遺構と遺物	109
第4節	小結	120
第6章	調査の成果と課題	125

挿図目次

第1章 はじめに

- 第1図 松山平野の主要遺跡分布図…………… 2
第2図 松山平野の地形概要図…………… 4

第2章 調査の概要

- 第4図 調査地位置図…………… 7
第5図 調査地区割図…………… 9

第3章 恵原新張遺跡1次調査

- 第7図 土層柱状図…………… 14
第8図 1区南壁土層図…………… 15
第9図 2区北壁土層図(1)…………… 16
第10図 2区北壁土層図(2)…………… 17
第11図 3区北壁土層図(1)…………… 18
第12図 3区北壁土層図(2)…………… 19
第13図 4・8区北壁土層図(1)…………… 20
第14図 4・8区北壁土層図(2)…………… 21
第15図 1区遺構配置図…………… 22
第16図 SB101 測量図…………… 23
第17図 SB101 カマド測量図…………… 24
第18図 SB101 出土遺物実測図…………… 25
第19図 SD101 測量図・出土遺物実測図 …… 26
第20図 SK103 測量図・出土遺物実測図 …… 27
第21図 1区第IV層出土遺物実測図…………… 29
第22図 SB201 測量図…………… 30
第23図 2区遺構配置図…………… 31
第24図 SB201 出土遺物実測図…………… 32
第25図 2区第II層出土遺物実測図…………… 36
第26図 2区第IV層出土遺物実測図…………… 37
第27図 3区遺構配置図…………… 38
第28図 SB301 測量図…………… 39
第29図 SB301 カマド測量図…………… 40
第30図 SB301 出土遺物実測図(1)…………… 42
第31図 SB301 出土遺物実測図(2)…………… 43
第32図 SB302 測量図…………… 44
第33図 SB302 出土遺物実測図…………… 45
第34図 掘立301 測量図…………… 46
第35図 掘立302 測量図…………… 47
第36図 SD301 断面図・出土遺物実測図 …… 48
第37図 SK302 測量図・出土遺物実測図 …… 49
第38図 SK304 測量図・出土遺物実測図 …… 50
第39図 SK308 測量図・出土遺物実測図 …… 51
第40図 3区柱穴出土遺物実測図…………… 54
第41図 3区第IV層出土遺物実測図……………
第42図 3区第V層出土遺物実測図…………… 55
第43図 4区遺構配置図…………… 57
第44図 1号墳測量図・出土遺物実測図 …… 58
第45図 SD401 断面図・出土遺物実測図 …… 60
第46図 SD402 断面図・出土遺物実測図……………
第47図 4区第III・IV・V層出土遺物実測図 …… 61

第4章 恵原新張遺跡2次調査

- 第48図 調査区位置図…………… 75
第49図 土層柱状図…………… 76
第50図 6区北壁土層図…………… 77
第51図 7区北壁土層図…………… 78
第52図 6区遺構配置図…………… 79
第53図 SB601 測量図…………… 80
第54図 SB601 出土遺物実測図…………… 81
第55図 SB602・604 測量図…………… 82
第56図 SB602 出土遺物実測図…………… 83
第57図 SB604 出土遺物実測図…………… 84
第58図 SB603 測量図・出土遺物実測図…………… 84
第59図 掘立601 測量図…………… 85
第60図 SD603 断面図・出土遺物実測図 …… 86
第61図 SD601・602 断面図・
出土遺物実測図…………… 87
第62図 SK601 測量図・出土遺物実測図 …… 88
第63図 SK602 測量図……………
第64図 6区第IV層出土遺物実測図…………… 89
第65図 7区遺構配置図…………… 91
第66図 2号墳測量図…………… 92

第 67 図	7 区第Ⅳ層出土遺物実測図	93	第 69 図	SB801 測量図	95
第 68 図	8 区遺構配置図	94	第 70 図	8 区第Ⅲ・Ⅴ層出土遺物実測図	97
第 5 章 恵原新張遺跡 3 次調査					
第 71 図	調査区位置図	105	第 79 図	SB502 測量図	113
第 72 図	5 区遺構配置図	106	第 80 図	SB502 出土遺物実測図 (1)	114
第 73 図	5 区西壁土層図 (1)	107	第 81 図	SB502 出土遺物実測図 (2)	115
第 74 図	5 区西壁土層図 (2)	108	第 82 図	SK502 測量図・出土遺物実測図	117
第 75 図	SB501 測量図	109	第 83 図	SK503 測量図・出土遺物実測図	
第 76 図	SB501 出土遺物実測図	111	第 84 図	SK505 測量図・出土遺物実測図	118
第 77 図	SB501 カマド出土遺物実測図 (1)		第 85 図	SP505 出土遺物実測図	119
第 78 図	SB501 カマド出土遺物実測図 (2)	112	第 86 図	5 区第Ⅳ層出土遺物実測図	

目 次

第 2 章 調査の概要

表 1	恵原新張遺跡一覧	8	表 2	検出遺構一覧	10
-----	----------	---	-----	--------	----

第 3 章 恵原新張遺跡 1 次調査

表 3	恵原新張遺跡 1 次調査一覧	13	表 20	SB301 出土遺物観察表 (土製品)	71
表 4	恵原新張遺跡 1 次調査検出遺構一覧	63	表 21	SB301 出土遺物観察表 (石製品)	
表 5	竪穴建物一覧	65	表 22	SB302 出土遺物観察表 (土製品)	72
表 6	掘立柱建物一覧		表 23	SB302 出土遺物観察表 (石製品)	
表 7	溝一覧		表 24	SD301 出土遺物観察表 (土製品)	
表 8	土坑一覧		表 25	SK302 出土遺物観察表 (土製品)	
表 9	柱穴一覧	66	表 26	SK304 出土遺物観察表 (土製品)	
表 10	SB101 出土遺物観察表 (土製品)	69	表 27	SK308 出土遺物観察表 (土製品)	
表 11	SD101 出土遺物観察表 (土製品)		表 28	3 区柱穴出土遺物観察表 (土製品)	
表 12	SK103 出土遺物観察表 (土製品)		表 29	3 区包含層出土遺物観察表 (土製品)	73
表 13	1 区包含層出土遺物観察表 (土製品)		表 30	3 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	
表 14	1 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	70	表 31	1 号墳出土遺物観察表 (土製品)	
表 15	SB201 出土遺物観察表 (土製品)		表 32	SD401 出土遺物観察表 (土製品)	74
表 16	SB201 出土遺物観察表 (石製品)		表 33	SD402 出土遺物観察表 (土製品)	
表 17	2 区包含層出土遺物観察表 (土製品)		表 34	4 区包含層出土遺物観察表 (土製品)	
表 18	2 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	71	表 35	4 区包含層出土遺物観察表 (石製品)	
表 19	2 区包含層出土遺物観察表 (玉類)				

第 4 章 恵原新張遺跡 2 次調査

表 36	恵原新張遺跡 2 次調査一覧	75	表 42	柱穴一覧	100
表 37	恵原新張遺跡 2 次調査検出遺構一覧	99	表 43	SB601 出土遺物観察表 (土製品)	101
表 38	竪穴建物一覧	100	表 44	SB601 出土遺物観察表 (石製品)	
表 39	掘立柱建物一覧		表 45	SB602 出土遺物観察表 (土製品)	
表 40	溝一覧		表 46	SB602 出土遺物観察表 (石製品)	102
表 41	土坑一覧		表 47	SB604 出土遺物観察表 (土製品)	

表 48	SB603 出土遺物観察表 (土製品) ……	102	表 52	6 区第Ⅳ層出土遺物観察表 (土製品) ……	103
表 49	SD603 出土遺物観察表 (土製品)		表 53	7 区第Ⅳ層出土遺物観察表 (土製品)	
表 50	SD601 出土遺物観察表 (石製品) ……	103	表 54	7 区第Ⅳ層出土遺物観察表 (石製品)	
表 51	SK601 出土遺物観察表 (土製品)		表 55	8 区包含層出土遺物観察表 (土製品)	
第 5 章 恵原新張遺跡 3 次調査					
表 56	竪穴建物一覧 ……	121	表 62	SK502 出土遺物観察表 (土製品) ……	123
表 57	土坑一覧		表 63	SK503 出土遺物観察表 (土製品)	
表 58	柱穴一覧		表 64	SK505 出土遺物観察表 (土製品) ……	124
表 59	SB501 出土遺物観察表 (土製品) ……	122	表 65	5 区柱穴出土遺物観察表 (土製品)	
表 60	SB502 出土遺物観察表 (土製品)		表 66	5 区第Ⅳ層出土遺物観察表 (土製品)	
表 61	SB502 出土遺物観察表 (石製品) ……	123	表 67	5 区第Ⅳ層出土遺物観察表 (石製品)	

写真図版目次

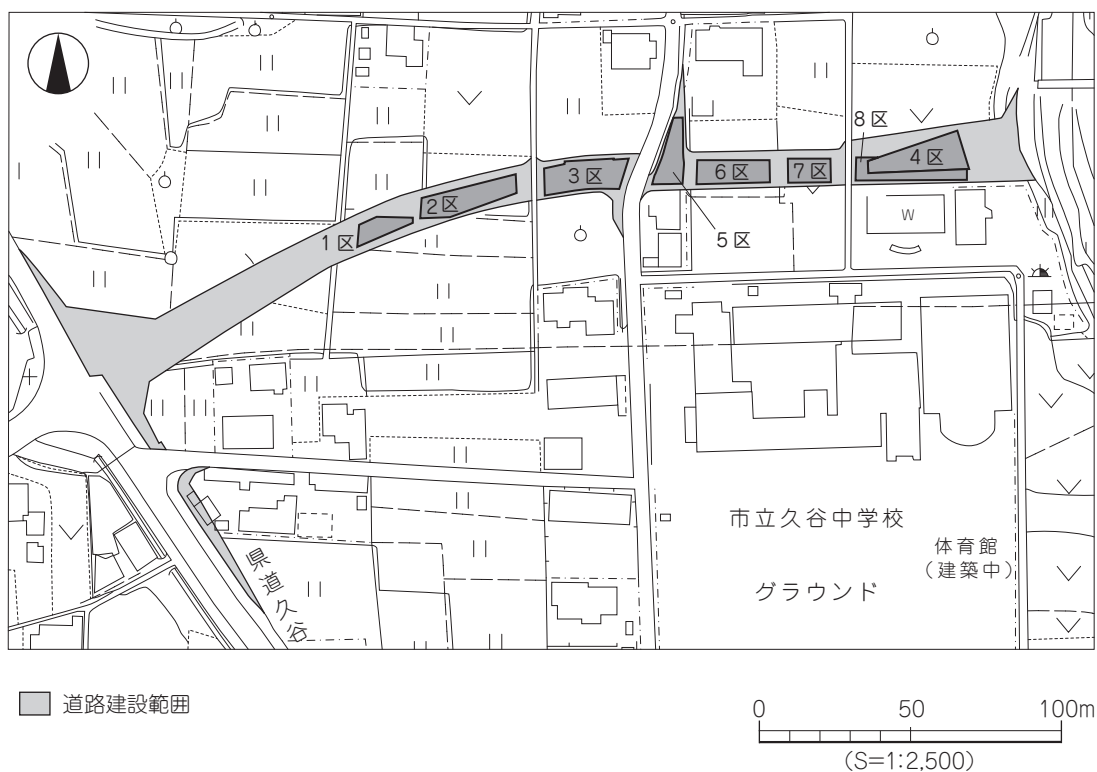
巻頭図版 1.	調査地全景① (南より)	図版 10	1. SB501 カマド検出状況 (東より)
巻頭図版 2.	調査地全景② (東より)		2. SB502 完掘状況 (北より)
図版 1	1. 1 区完掘状況 (南より)		3. SB502 遺物出土状況 (北より)
	2. SB101 検出状況 (西より)	図版 11	1. 出土遺物 (SB101 : 1・4・6 ~ 8・11、
	3. SB101 遺物出土状況 (西より)		SD101 : 13、1 区第Ⅳ層 : 20 ~ 22)
図版 2	1. 2 区完掘状況 (南東より)	図版 12	1. 出土遺物 (SB201 : 23 ~ 33、2 区第
	2. SB201 完掘状況 (北より)		Ⅱ層 : 34・35・38)
	3. 3 区完掘状況 (南東より)	図版 13	1. 2 区第Ⅳ層出土遺物
図版 3	1. SB301・302 完掘状況 (南東より)		2. SB301 出土遺物①
	2. 掘立 301 検出状況 (北東より)	図版 14	1. 出土遺物 (SB301 ② : 61 ~ 64、SB302 :
	3. 掘立 301 (SP319) 検出状況 (南東より)		65・66・68 ~ 71・73)
図版 4	1. 掘立 302 検出状況 (北東より)	図版 15	1. 出土遺物 (3 区第Ⅳ層 : 89・90・92・93、
	2. 3 区作業風景 (西より)		3 区第Ⅴ層 : 99・100)
	3. 4 区完掘状況 (北より)		2. 出土遺物 (1 号墳 : 105、SD402 : 107、
図版 5	1. 1 号墳検出状況 (南より)		4 区第Ⅲ層 : 108・109)
	2. SD402 検出状況 (南より)	図版 16	1. 4 区第Ⅳ層出土遺物
	3. 1 次調査現地説明会風景 (西より)		2. SB602 出土遺物
図版 6	1. 6 区遺構完掘状況 (西より)	図版 17	1. 出土遺物 (SB603 : 145、SD601 : 151、
	2. SB601 完掘状況 (北より)		6 区第Ⅳ層 : 157・160)
	3. SB602・604 完掘状況 (西より)		2. 出土遺物 (7 区第Ⅳ層 : 161・163・166、
図版 7	1. SB603 完掘状況 (北東より)		8 区第Ⅲ層 : 170・171・173・174)
	2. 7 区遺構完掘状況 (西より)	図版 18	1. 8 区第Ⅴ層出土遺物
	3. 2 号墳石室完掘状況 (南東より)		2. 出土遺物 (SB501 : 179・185、SB501
図版 8	1. 8 区遺構検出状況 (西より)		カマド : 189・190)
	2. 8 区遺構完掘状況 (北より)	図版 19	1. 出土遺物 (SB502 : 195・198・200・
	3. SB801 完掘状況 (西より)		203 ~ 205・211・214・215、SK502 :
図版 9	1. 5 区遺構完掘状況① (南東より)		217・218)
	2. 5 区遺構完掘状況② (北東より)	図版 20	1. 出土遺物 (SK503 : 219、SK505 : 220、
	3. SB501 完掘状況 (南東より)		5 区第Ⅳ層 : 224・227・229)

第2章 調査の概要

第1節 調査の経緯

発掘調査は農道工事の進行上、調査対象地を8つの地区（1区～8区）に分けて実施した（第4図）。平成27年度は1区から4区を調査対象とする恵原新張遺跡1次調査を行い、併行して6区から8区を調査対象とする2次調査を行った。さらに、平成28年度には5区を調査対象とした3次調査を実施した。各調査の経緯については、第3・4・5章の冒頭にて説明する。なお、各調査の期間や面積等は表1に記す。

発掘調査は重機を使用して表土層を掘削後、作業員による遺構検出や掘削作業及び測量作業を実施した。調査にあたり、調査地内に国土座標となる4級基準点を設置した。設置業務は埋蔵文化財センターが測量業者と委託契約を結び、調査毎に実施した。設置された基準点をもとに、調査地内に10m四方のグリッドを設定した。グリッドは調査地北側から南側へ向けてA・B・C・D・E、西側から東側へ1・2・3……21とし、A1・A2・A3……E21区といったグリッド名を付した（第5図）。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。また、遺構の検出状況及び完掘状況等の写真は高所作業車を使って撮影を行ったほかに、ドローンを使用して上空からの写真撮影も実施した。撮影業務は撮影業者と委託契約を結び、調査毎に実施した。



第4図 調査地位置図

表1 恵原新張遺跡一覧

調査名	調査区	調査場所	調査面積	調査期間
恵原新張遺跡（1次）	1～4区	恵原町甲 1460-4外5筆	1,361	H 27.5.11～9.18
恵原新張遺跡（2次）	6～8区	恵原町甲 1432-2外3筆	826	H 27.8.10～10.9
恵原新張遺跡（3次）	5区	恵原町甲 1454-3	207	H 28.5.9～6.3

第2節 層位

調査地は、調査以前には水田や畑及び雑種地であった。現況の標高は、70.50～70.80 mである。調査地の基本層位は、以下の7層である（第6図）。第Ⅰ層は近現代の農耕及び造成等に伴う客土であるが、各地区で土色・土質が異なっており、各章で説明する第Ⅰ層については調査区ごとに枝番号（第Ⅰ①層、第Ⅰ②層）を付けて説明している。

第Ⅰ層：近現代の農耕及び造成等に伴う客土で、地表下20～30cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層：灰白色を呈する粘質土(2.5Y 7/1)で、2・3区及び8区で検出され、層厚は3～10cmである。
本層中からは、鎌倉時代の遺物が出土した。

第Ⅲ層：褐灰色土(10YR 5/1)で調査地東側4区・8区のみで検出され、層厚は3～10cmである。
本層中からは、平安時代に時期比定される遺物が出土している。

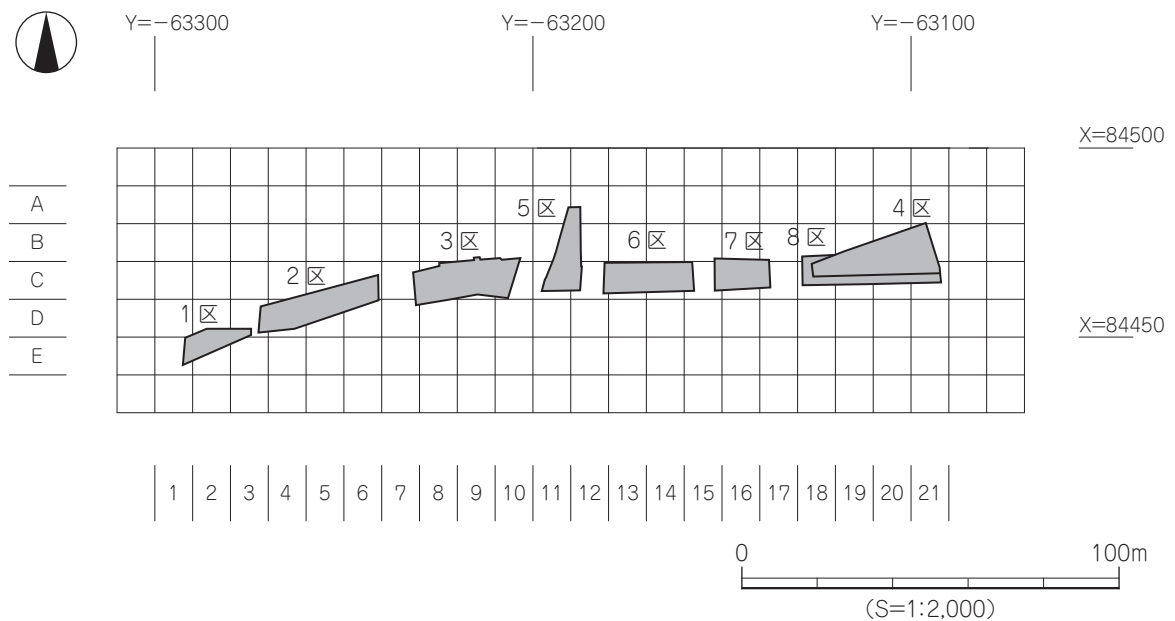
第Ⅳ層：黒色土(7.5YR 2/1)で調査地全域にみられ、層厚は3～18cmである。本層中からは、主に古墳時代に時期比定される遺物が出土している。

第Ⅴ層：黒褐色土(10YR 3/1)で4区・8区にみられ、層厚は5～15cmである。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器、石器が出土している。

第Ⅵ層：にぶい褐色(7.5YR 5/3)を呈する粘性土で、2区～4区及び8区にみられ、層厚は5～10cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第Ⅶ層：黄褐色土(10YR 5/8)で、本層上面は調査における最終の遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると起伏がみられ、調査地西方1区では標高70.40 mであるが、2区から3区にかけて徐々に標高は低くなり、3区では70.20 mとなる。ただし、調査地中央部5区では標高が高くなり70.40 m、6区では70.50 mと最も高い数値を示す。なお、7区から4区・8区に向けては徐々に低くなり、調査地東方の4・8区では70.00 mとなる。

検出遺構や出土遺物より、第Ⅴ層は弥生時代、第Ⅳ層は古墳時代、第Ⅲ層は古代、第Ⅱ層は中世までに堆積した土層と考えられる。



第5図 調査地区割図

第3節 遺構・遺物

恵原新張遺跡からは、縄文時代から近現代までの遺構や遺物を確認した（表2）。検出した遺構は、竪穴建物11棟、掘立柱建物3棟、溝11条、土坑41基、柱穴119基、古墳2基のほかに倒木址2基である。遺物は縄文土器（早期）、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）のほかに石器（石鏃・石庖丁・石斧・砥石・台石・剥片）や白玉が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（22 × 60 × 44mm）約28箱分である。

【検出遺構】

弥生時代	竪穴建物	: 2棟	(中期後葉・末)
	溝	: 3条	(中期後葉)
	土坑	: 12基	(中期中葉: 8基、中期後葉: 2基、中期: 2基)
古墳時代	竪穴建物	: 9棟	(5世紀後葉: 1棟、6世紀前葉: 1棟、6世紀中葉: 3棟、6世紀後葉: 2棟、7世紀前葉: 2棟)
	掘立柱建物	: 3棟	(6世紀中葉以降)
	古墳	: 2基	(7世紀中葉)
	溝	: 5条	(6世紀前葉: 2条、6世紀: 1条、7世紀前葉: 2条)
	土坑	: 15基	(5世紀後葉: 3基、6世紀: 12基)
	近現代	溝	: 3条
土坑		: 14基	

表2 検出遺構一覧

	縄文時代	弥生時代	古墳時代	古 代	中 世	近現代
1区		第Ⅳ層遺物	竪穴：1棟 溝：1条 土坑：4基			土坑：3基
2区		竪穴：1棟 土坑：2基	第Ⅳ層遺物		第Ⅱ層遺物	溝：3条 土坑：10基
3区		土坑：4基	竪穴：2棟 掘立：2棟 溝：2条 土坑：7基			土坑：1基
4区		竪穴：1棟	石室：1基 溝：2条 土坑：2基	第Ⅲ層遺物		
5区		土坑：5基	竪穴：2棟 土坑：1基			
6区		溝：3条 土坑：1基	竪穴：4棟 掘立：1棟 土坑：1基			
7区		第Ⅳ層遺物	石室：1基			
8区	第Ⅴ層遺物	竪穴：1棟 (SB401と同一)	溝：1条 (SD402と同一)	第Ⅲ層遺物		

【参考文献】

- 愛媛県 1986 「上野遺跡（谷田Ⅱ遺跡）」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会
 1986 「土壇原遺跡群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会
 1991 「愛媛県内古墳－分布調査報告書」愛媛県教育委員会
- 阪本 安光 1991 「大下田古墳群・釈迦面山遺跡群・谷田Ⅴ・Ⅵ遺跡」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 西川 真美 1988 「西野春日谷遺跡 通谷池2号墳」『えひめ子供の城建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田 俊彦 1979 『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会
- 河野 史知 2003 『松ヶ谷遺跡』松山市文化財調査報告書 第89集

第3章 恵原新張遺跡1次調査

第1節 調査の経緯

恵原新張遺跡1次調査は、2015（平成27）年5月11日より開始し、同年9月18日に終了した。調査対象区は、調査地西側の1区から3区と調査地東側の4区であり、調査面積は1,361㎡である（表3）。まず、調査対象面積の最も広い3区の調査に着手する。5月11日より重機（バックホー0.25㎡・3t不整地運搬車）を使用して表土の掘削・運搬を行い、その後、壁面精査と遺構検出作業を実施する。5月20日からは、3区の調査と併行して2区の調査を開始する。3区と同様、重機を使用して表土の掘削・運搬を行い、壁面精査や遺構検出作業を進める。5月21日、3区の遺構検出作業を終了し、竪穴建物や溝、土坑、柱穴を検出する。遺構の掘削は竪穴建物から着手し、その後、土坑や柱穴の半截と断面測量及び溝の掘り下げ等を行った。遺構測量図や遺構完掘平面図、及び調査壁の土層図は縮分1/20で作成した。なお、検出した竪穴建物にはカマドが付設されるものがあり、カマドの測量図は縮分1/10で作成した。

5月26日からは、1区の調査に取り掛かる。2区・3区と同様、重機を使用して表土の掘削・運搬を行う。5月27日、2区の遺構検出作業が終了し、5月29日には1区の遺構検出作業を終了する。1区と2区からは竪穴建物や溝、土坑、柱穴を検出する。とりわけ、1区検出の竪穴建物は炭化物や焼土が建物上面付近に散在しており、焼失住居と推測された。

6月2日からは、4区の調査に着手する。重機を使用して表土の掘削・運搬を行う。6月3日より2区と3区の遺構掘削作業を開始し、およそ1ヶ月を費やす。7月7日、3区の遺構掘削作業が終了し、写真撮影や測量作業を行う。7月16日には2区の遺構掘削作業を終了する。7月26日、一般市民を対象とした現地説明会を開催し、120名の参加者を得る。8月4日、2区と3区の調査が終了し、8月5日にはドローンを使用して上空より遺構完掘状況写真を撮影する。8月6日より、1区の遺構掘削作業を開始する。8月21日、1区の調査が終了する。同日、4区の遺構検出作業が終了し、竪穴建物や溝のほかに石室を検出する。8月21日にはドローンを使用して1区の遺構完掘状況と4区の遺構検出状況写真を撮影する。9月10日にはドローンにより4区の遺構完掘状況写真を撮影する。9月18日、4区の調査を終了し、本日にて屋外調査を終了する。

表3 恵原新張遺跡1次調査一覧

地区	調査面積 (㎡)	調査期間
1区	254	2015（平成27）年5月26日～同年8月21日
2区	349	2015（平成27）年5月20日～同年8月4日
3区	406	2015（平成27）年5月11日～同年8月4日
4区	352	2015（平成27）年6月2日～同年9月18日

第 2 節 層 位

調査地は、調査以前には水田や畑として利用されていた。現況の標高は、70.50～70.80 m である。調査地の基本層位は、以下の 7 層である（第 7～14 図）。なお、第 I 層は各調査区にて土色、土質が異なっており、調査区毎に土層番号や土色を掲載している。

第 I 層：近現代の農耕に伴う客土で、地表下 20～30cm まで開発が行われている。土色・土質の違いにより、5 種類に分層される（I①～I⑤層）。

第 II 層：灰白色粘質土（2.5Y 7/1）で 2 区と 3 区にみられ、層厚 3～7cm である。本層中からは、中世の土器片が出土した。なお、2 区の本層中から土師器坏 9 点がまとまって出土しており、本来は遺構に伴う遺物と推測される。

第 III 層：褐灰色土（10YR 5/1）で 4 区にみられ、層厚は 3～10cm である。本層中からは、平安時代後期に時期比定される土師器片や須恵器片が出土した。

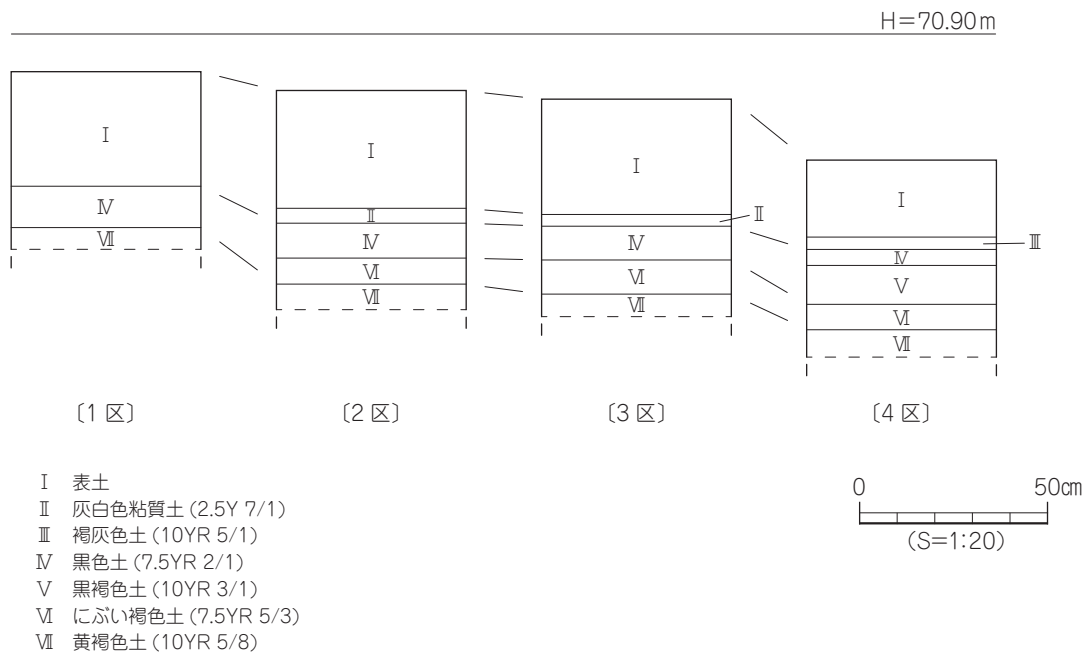
第 IV 層：黒色土（7.5YR 2/1）で、すべての調査区にみられ、層厚は 5～10cm である。本層中からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が数多く出土した。

第 V 層：黒褐色土（10YR 3/1）で 4 区にみられ、層厚は 5～12cm である。本層中からは、弥生土器や石器が出土した。

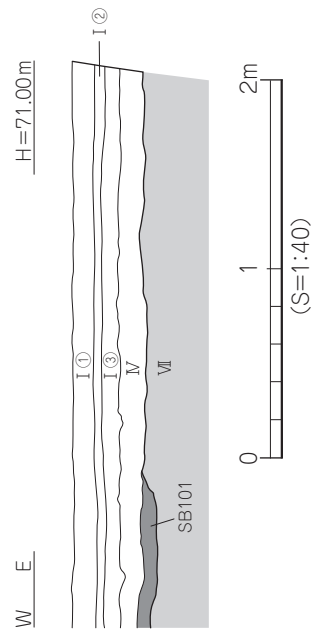
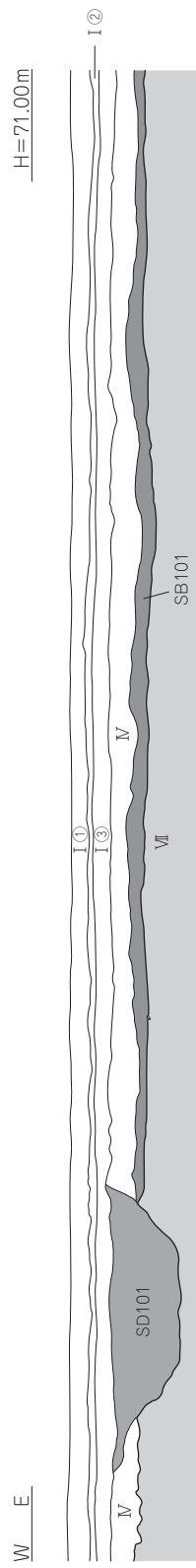
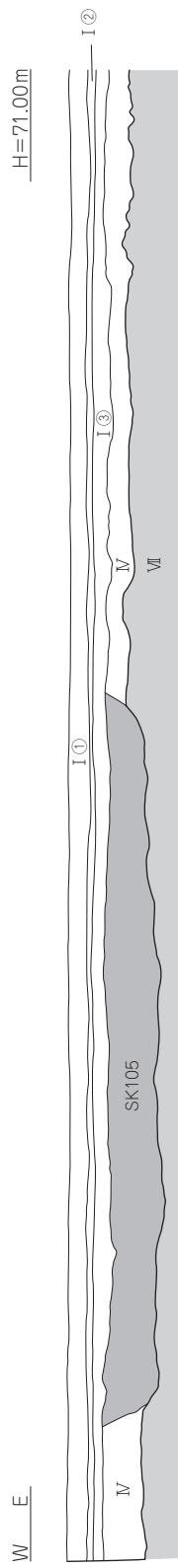
第 VI 層：にぶい褐色土（7.5YR 5/3）で粘性が強く、2 区～4 区に部分的にみられ、層厚は 6～10 cm である。本層中から、遺物の出土はない。

第 VII 層：黄褐色土（10YR 5/8）で、すべての調査区にみられる。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

検出遺構や出土遺物より、第 V 層は弥生時代、第 IV 層は古墳時代、第 III 層は古代、第 II 層は中世までに堆積した土層と推測される。



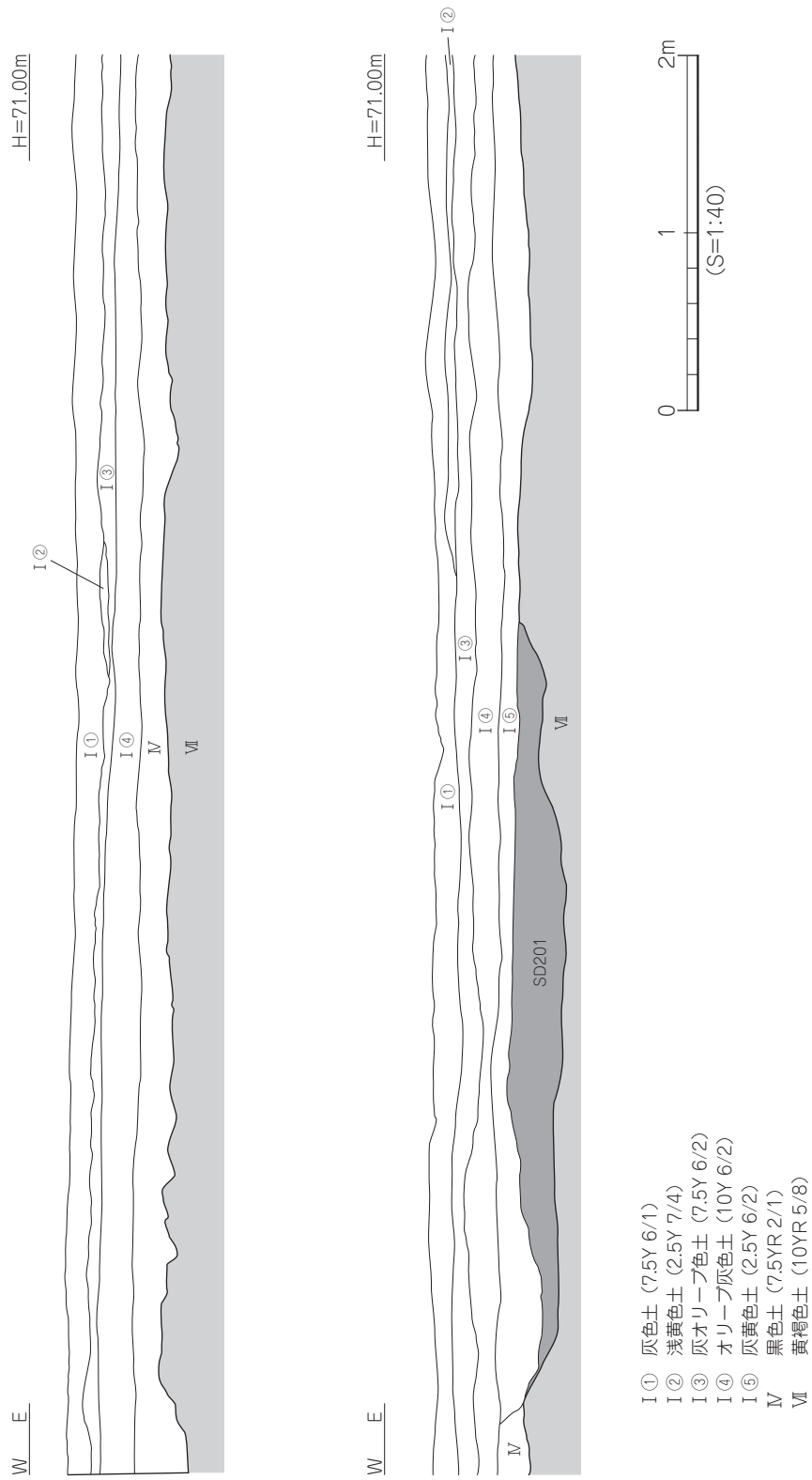
第 7 図 土層柱状図



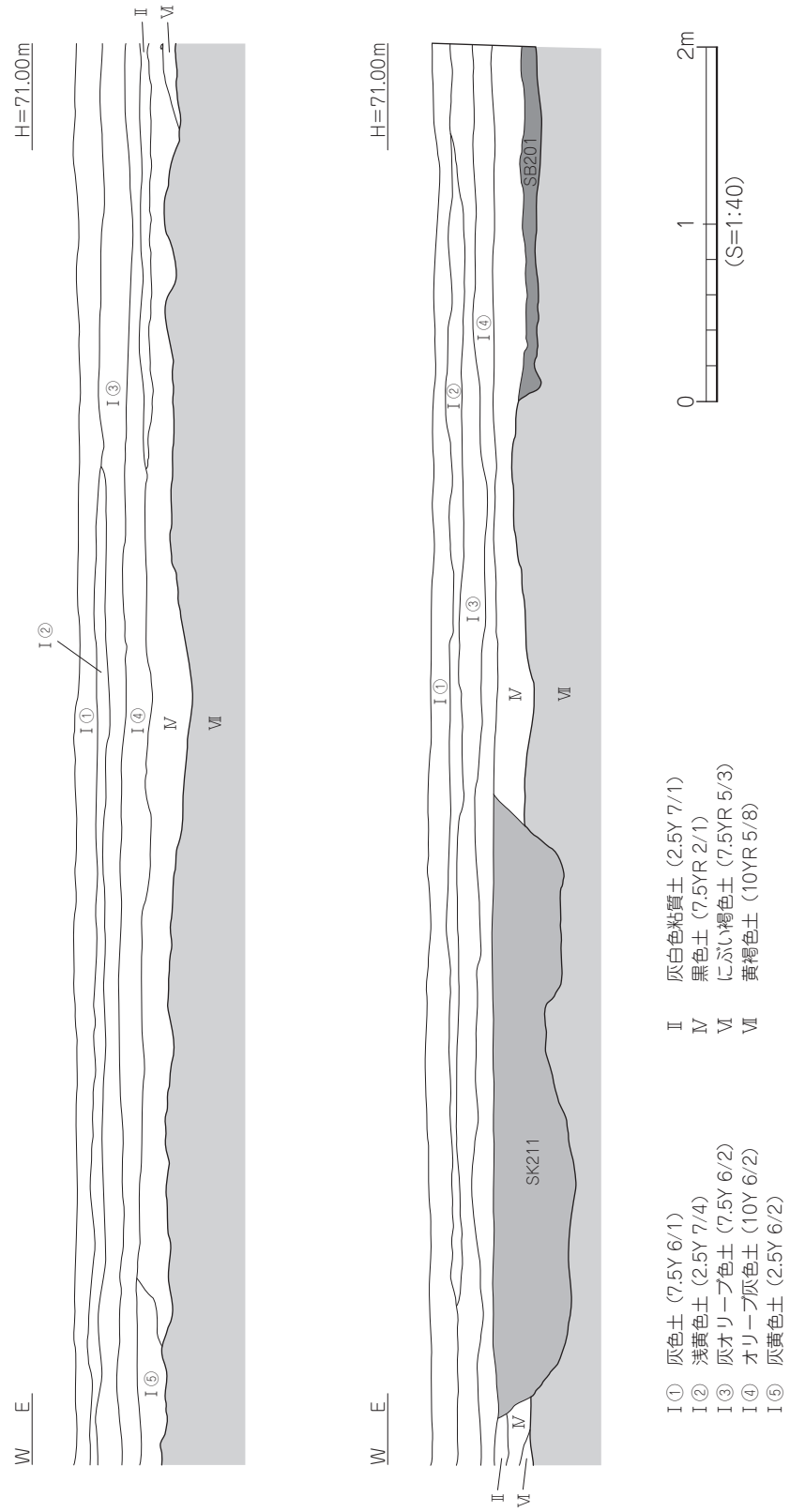
- I① 灰色土 (7.5Y 6/1)
- I② 浅黄色土 (2.5Y 7/4)
- I③ 灰オリーブ色土 (7.5Y 6/2)
- IV 黑色土 (7.5YR 2/1)
- VI 黄褐色土 (10YR 5/8)

層位

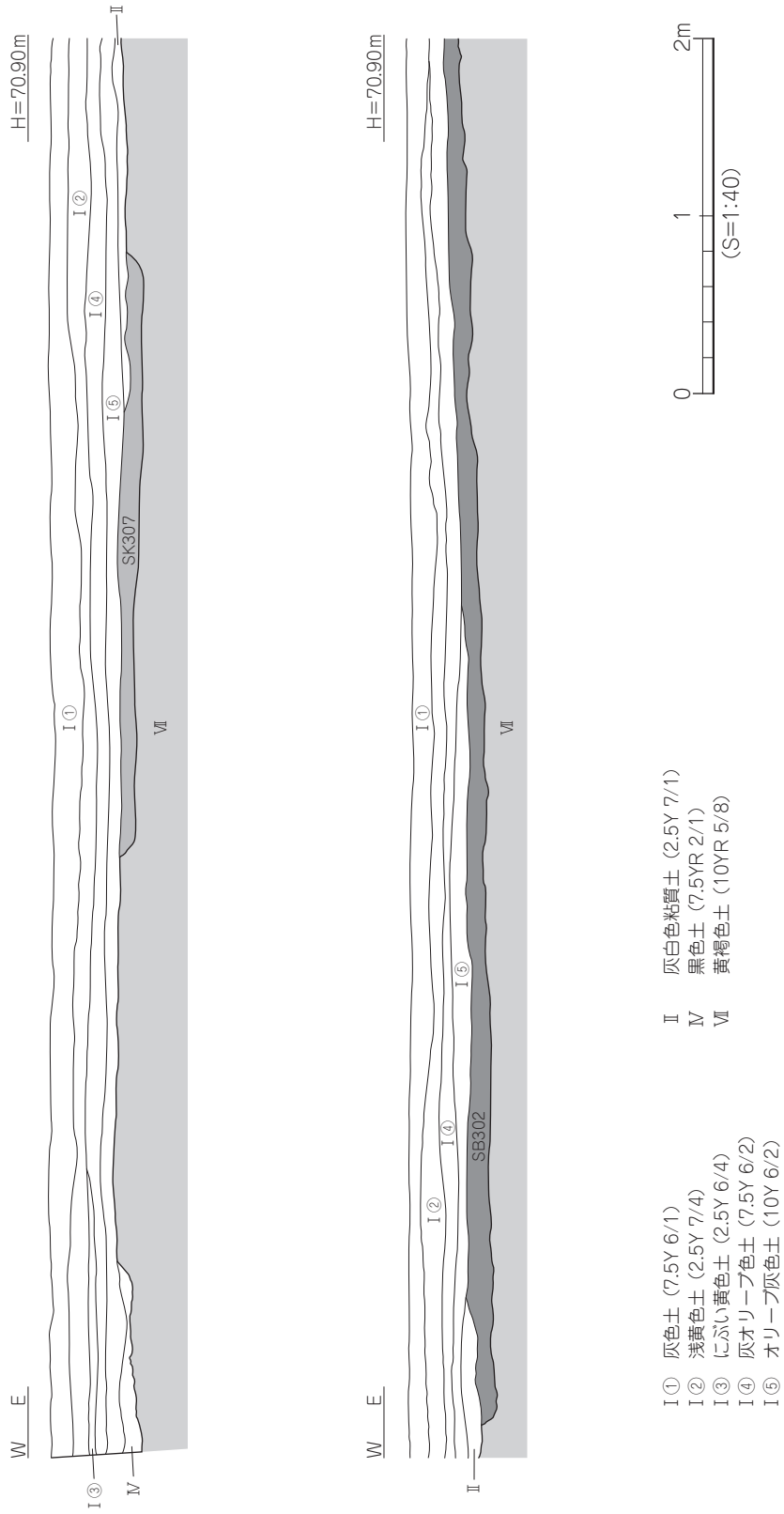
第8図 1区南壁土層図



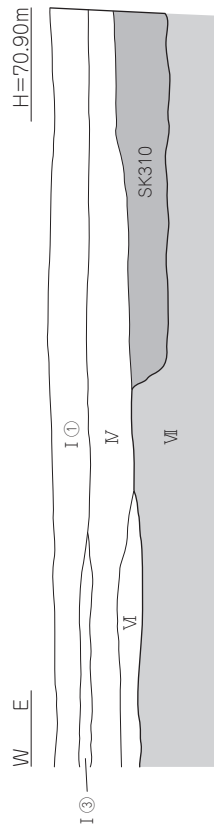
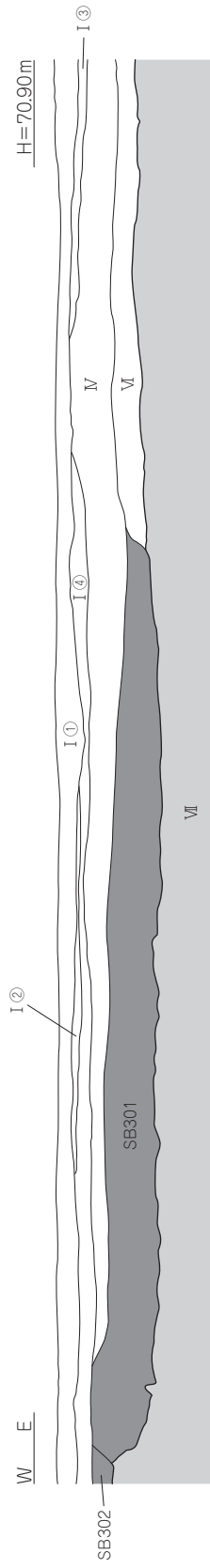
第9図 2区北壁土層図(1)



第10図 2区北壁土層図(2)



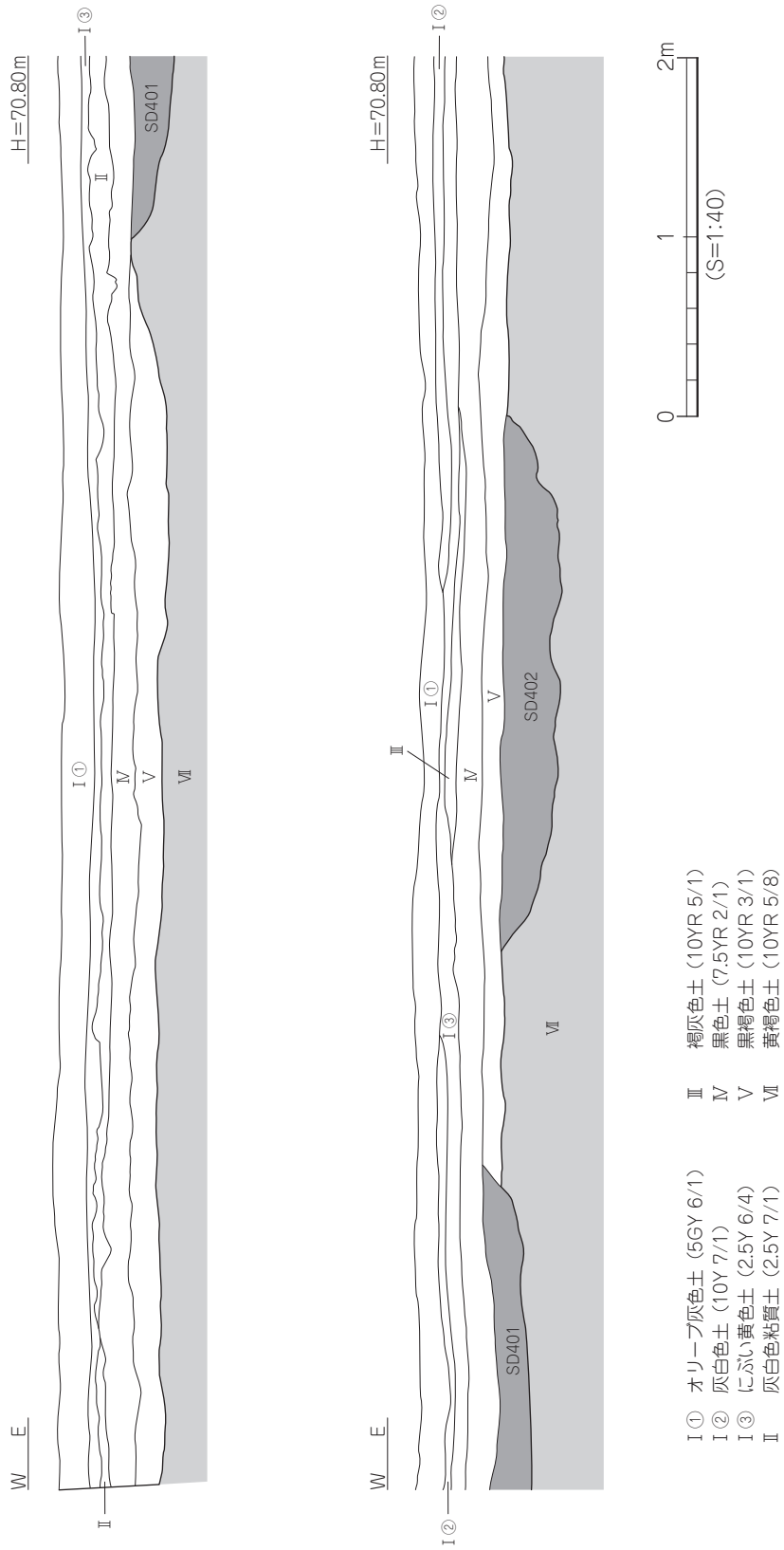
第11図 3区北壁土層図(1)



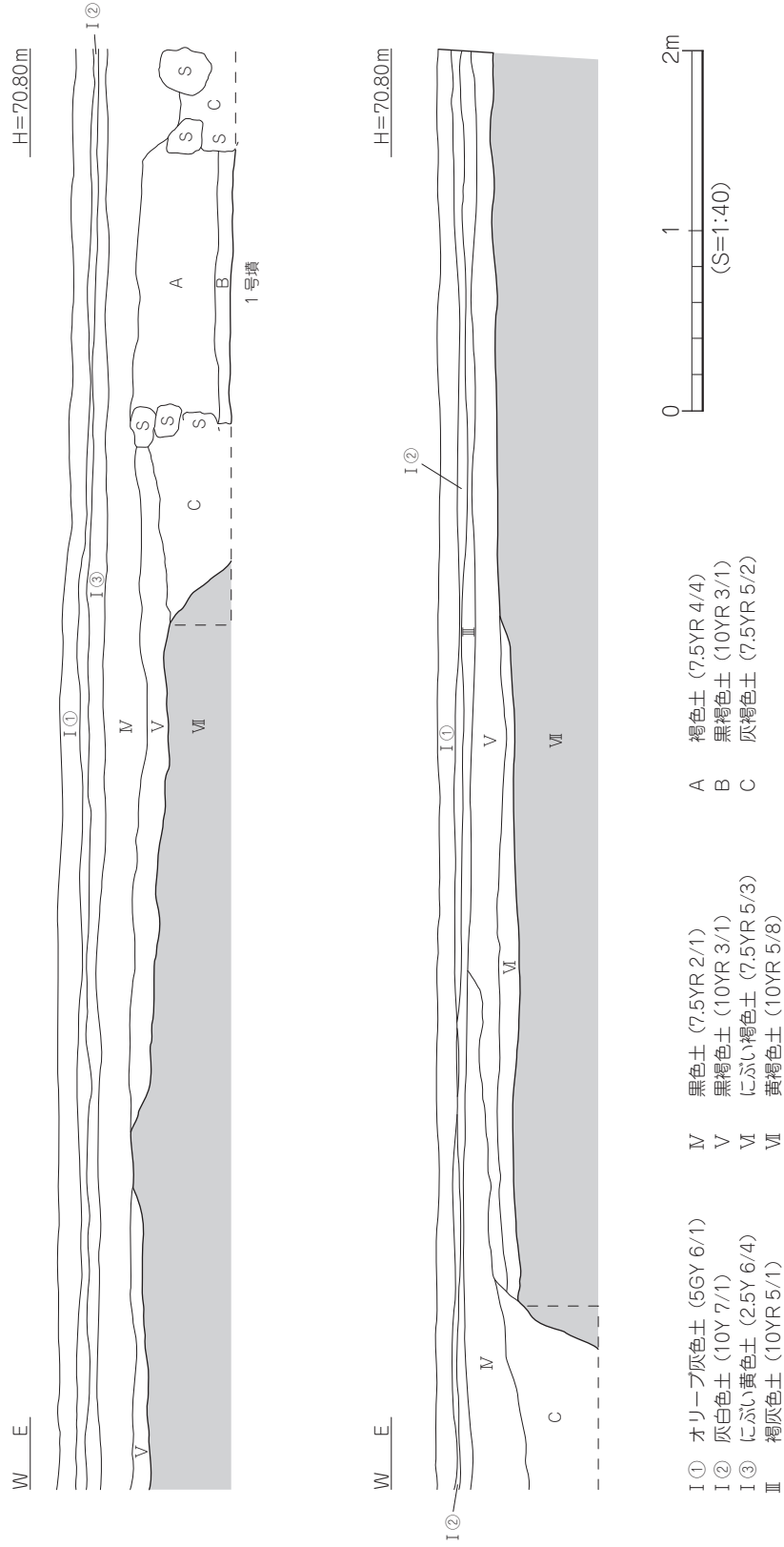
- I ① 灰色土 (7.5Y 6/1)
- I ② 浅黄色土 (2.5Y 7/4)
- I ③ にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)
- IV 黒色土 (7.5YR 2/1)
- V にぶい褐色土 (7.5YR 5/3)
- VII 黄褐色土 (10YR 5/8)



第12図 3区北壁土層図(2)



第 13 図 4・8区北壁土層図 (1)



第 14 図 4・8 区北壁土層図 (2)

第3節 遺構と遺物

恵原新張遺跡 1次調査では、竪穴建物 5 棟、掘立柱建物 2 棟、溝 8 条、土坑 33 基、柱穴 86 基のほか石室 1 基を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器のほか石器（石鏃・石庖丁・石斧）や白玉が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（22 × 60 × 44cm）約 11 箱分である。ここでは、調査区毎に検出した遺構や遺物を説明する。

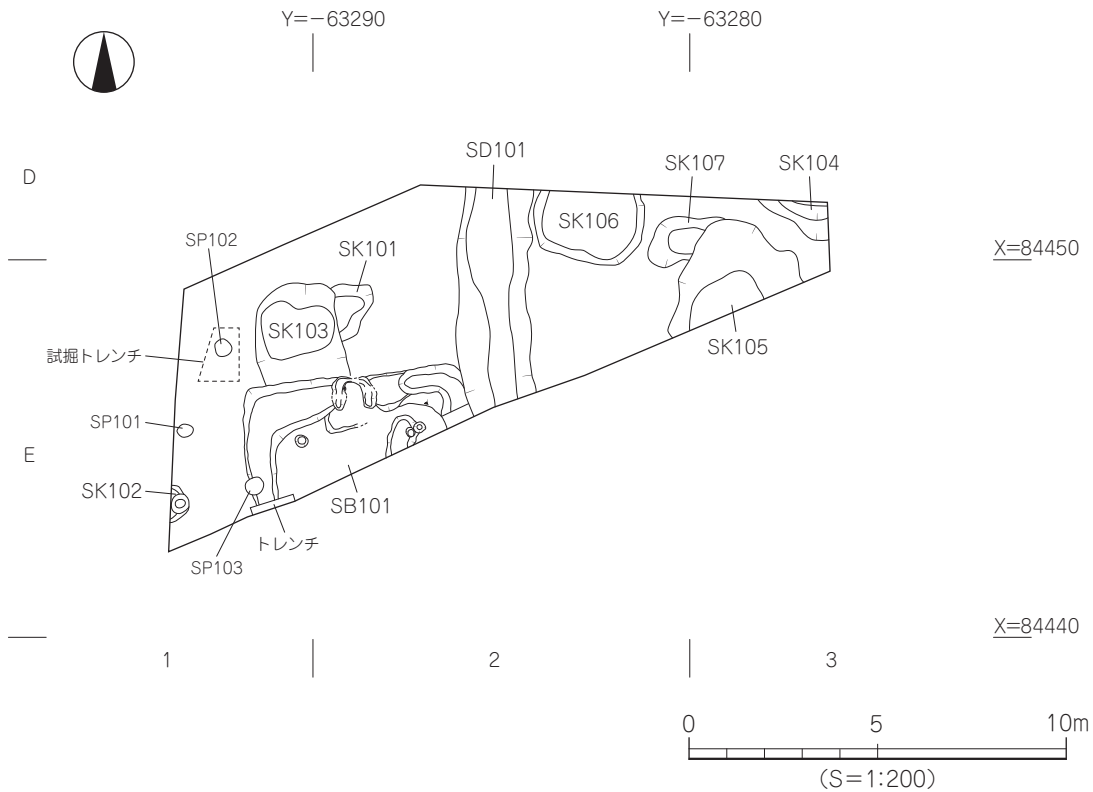
1. 1 区の調査

1 区では竪穴建物 1 棟、溝 1 条、土坑 7 基、柱穴 3 基を検出した（第 15 図、図版 1）。

(1) 竪穴建物

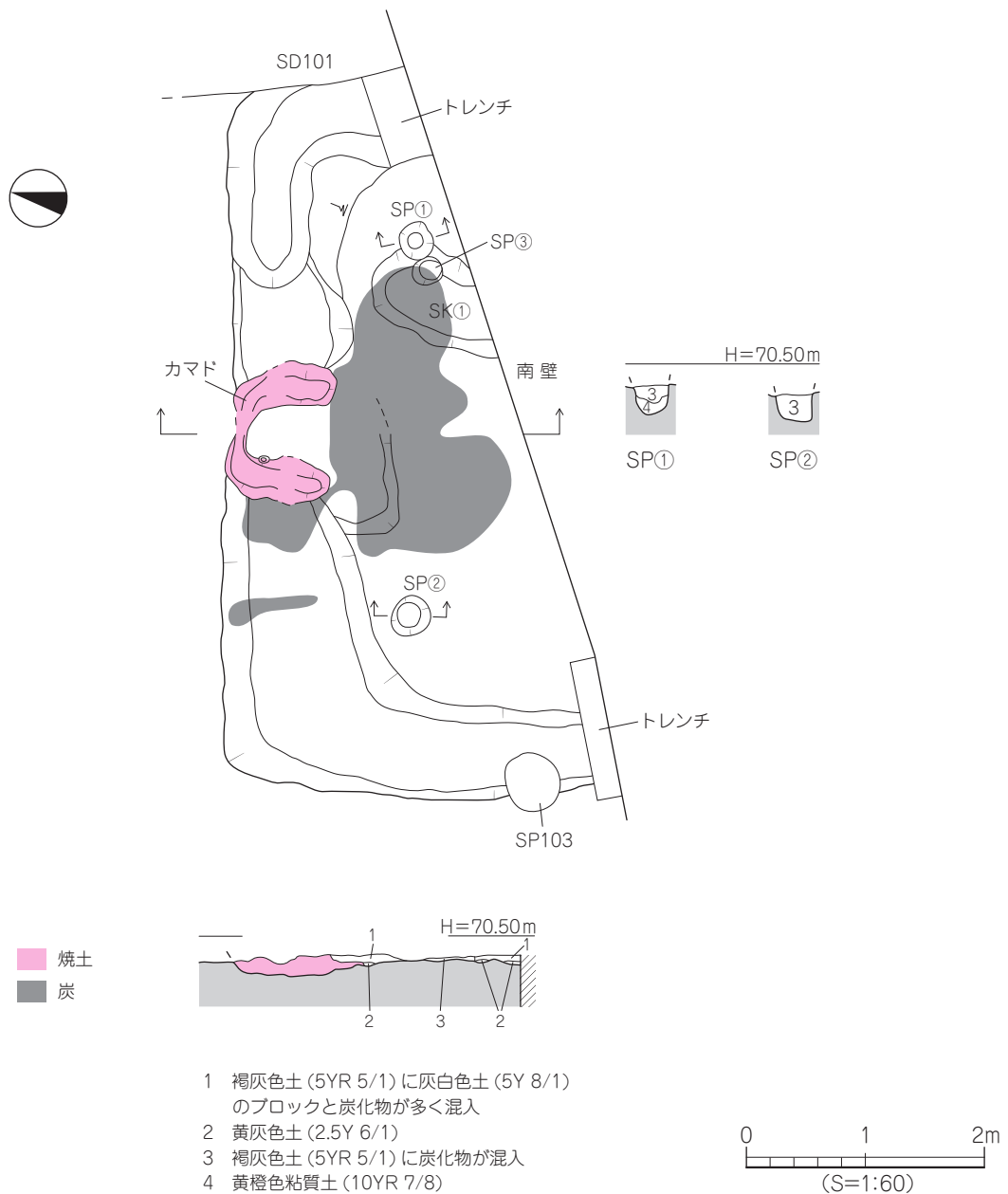
SB101（第 16・17 図、図版 1）

1 区南西部 E1・2 区に位置する建物址で、建物東側は溝 SD101 に一部削平され、南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形または長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長 6.08 m、南北検出長 3.24 m、壁高は 24cm である。建物理土は、褐灰色土（5YR 5/1）に灰白色土（5Y 8/1）がブロック状に混入するものである。内部施設は、カマドと柱穴及び溝を検出した。カマドは建物北側壁体中央部に造り付けられており、平面形態は馬蹄形状をなし、規模は南北長 0.9 m、東西長 1.1 m、高さ 22cm である。カマドは建物床面を円形状に掘り凹めた後、褐灰色土や黄橙色粘質土などを積み重ねて構築されている。カマド内からは、土師器の甕が押し潰された状態で出土した。建物床面からは、3



第 15 図 1 区遺構配置図

基の柱穴（SP①～③）を検出した。柱穴規模は径0.29～0.34m、深さ24～26cmで、柱穴掘り方埋土は褐灰色土（5YR 5/1）を基調とし、SP①下部には黄橙色粘質土（10YR 7/8）がブロック状に混入している。なお、SP①とSP②は配置より、SB101の支柱穴と考えられる。このほか、建物中央部東寄りには土坑SK①を検出した。SK①は重複関係よりSP①に先行することから、SB101構築以前の遺構と考えられる。ただし、SK①からは遺物の出土はなく、明確な時期は不明である。また、建物壁体に沿って幅0.35～0.60m、深さ10cm前後に溝が巡っており、溝埋土は建物埋土と同様である。SB101は前述したとおり、検出時に焼土や炭化物が建物上面に散在しており、火災等で焼失した可能性の高い建物である。遺物は建物埋土中より、完形品を含む須恵器や土師器が数多く出土した。



第 16 図 SB101 測量図

出土遺物 (第 18 図、図版 11)

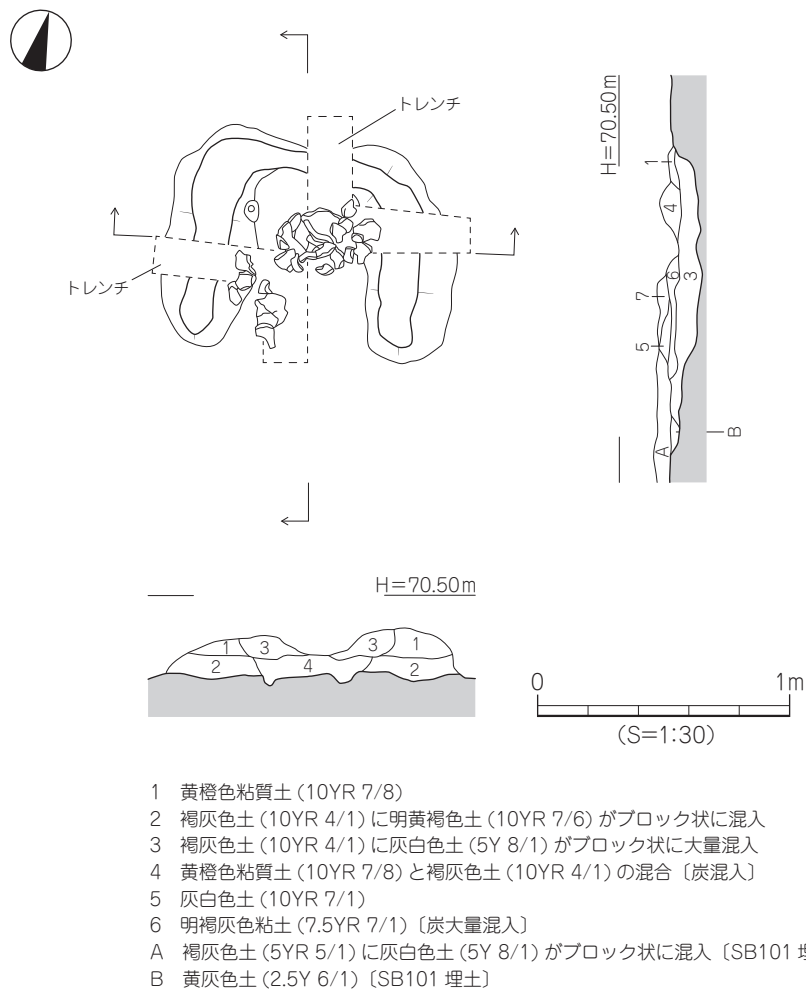
1～10は須恵器。1～3は須恵器。1～3は杯蓋で、断面三角形の鋭い稜をもつ。口縁端部は内傾し、1の天井部には焼成による焼け歪みが認められる。4・5は杯身。たちあがり端部は内傾し、4の底部外面には火だすきの痕跡が残る。6・7は有蓋高杯の蓋。つまみ上部は凹み、口縁端部は内傾する。7の口縁端部外面には、刻目を施す。8は直口壺の口縁部で、2条の凸線と凸線間に波状文を施す。口縁部外面には、部分的に自然釉が残る。9・10は壺。9の口縁部は肥厚し、頸部外面には回転カキメ調整がみられる。10は胴部片で、外面には平行叩き後、回転カキメ調整、内面は同心円叩きや円弧叩きがみられる。11・12は土師器甕。11の口縁部は僅かに内湾し、12は口縁部が外反する。

時期：出土遺物の特徴より、SB101の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀後葉とする。

(2) 溝

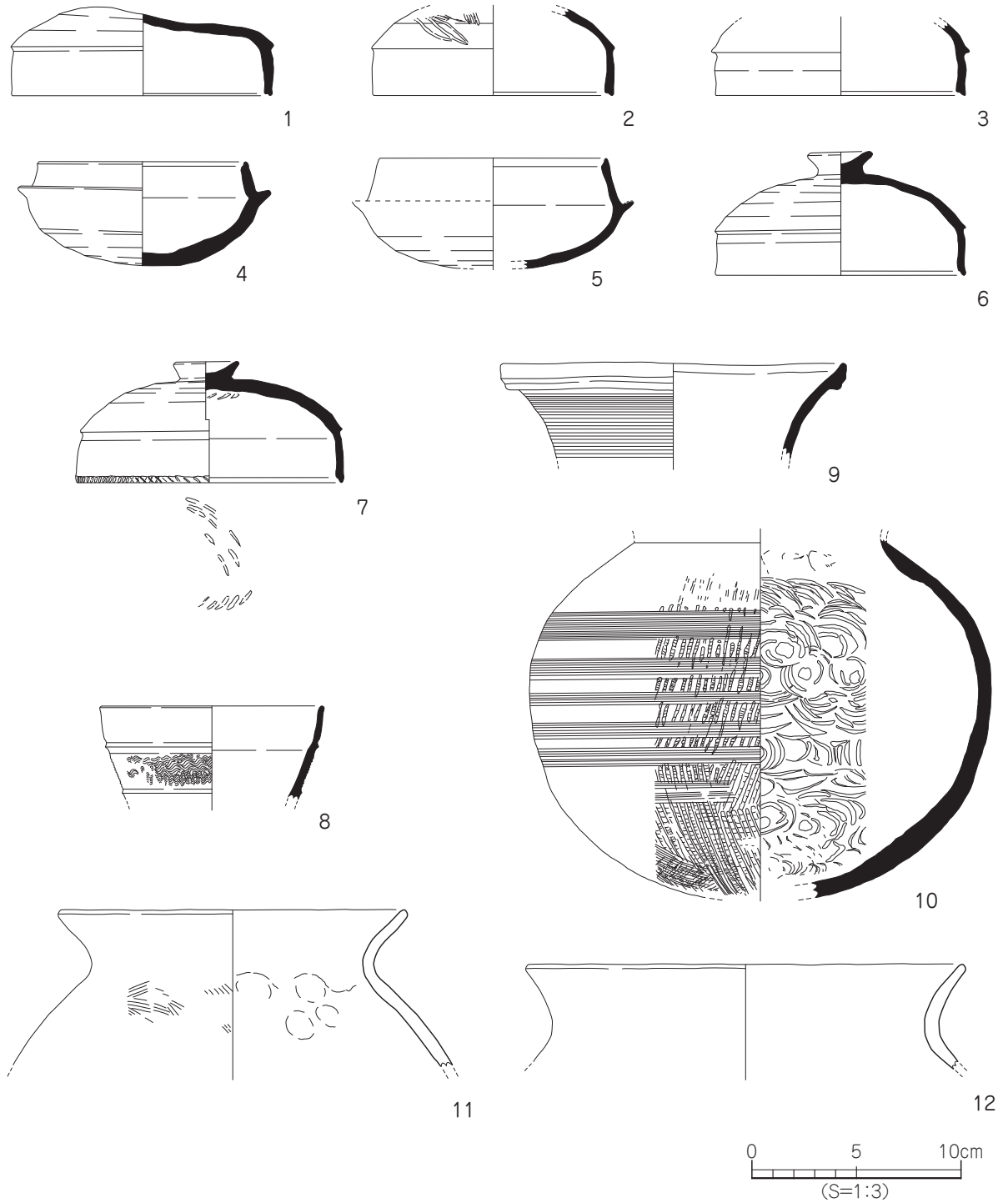
SD101 (第 19 図)

1区中央部D・E2区で検出した南北方向の溝で、溝南側はSB101と重複し、SD101が後出し、溝



第 17 図 SB101 カマド測量図

両端は調査区外に続く。規模は検出長 5.71 m、最大幅 2.00 m、深さ 26cmである。断面形態は舟底状をなし、埋土は灰色土 (5Y 6/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、僅かに北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす (比高差 3cm)。溝内からは、須恵器や土師器の破片が少量出土した。



第 18 図 SB101 出土遺物実測図

出土遺物 (図版 11)

13～16は須恵器。13～15は坏蓋で、断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。16は広口壺。口縁部は上下方に肥厚し、頸部外面は平行叩き後に回転カキメ調整を加える。

時期：出土遺物の特徴より、SD101は古墳時代後期、6世紀初頭から前葉とする。

(3) 土 坑

SK103 (第20図)

1区西側E1・2区で検出した土坑で、土坑南側はSB101に削平され、東側は土坑SK101と重複し、SK103が後出する。平面形態は楕円形をなし、規模は東西長2.21m、南北検出長2.59m、深さ24cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土(5YR 5/1)に黄褐色土(10YR 5/8)がブロック状に混入するものである。土坑内からは、土師器や須恵器の破片が少量出土した。そのうち、実測しうる遺物を2点掲載した。

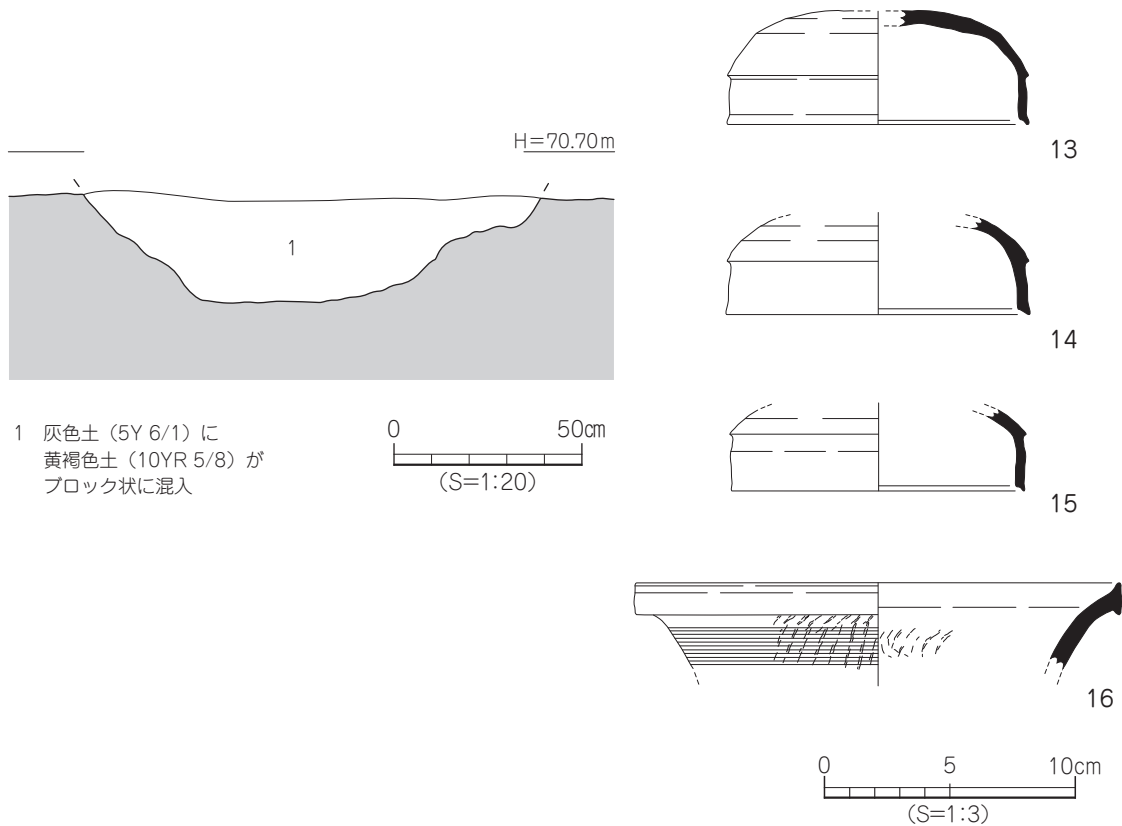
出土遺物

17・18は須恵器坏身。たちあがりは内傾し、端部は内傾斜する。

時期：出土遺物の特徴より、SK103は古墳時代中期、5世紀後葉とする。

SK101

1区中央部西寄り、E2区で検出した土坑で、土坑西側はSK103(古墳時代中期)と重複し、SK101



第19図 SD101 測量図・出土遺物実測図

が先行する。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.01 m、南北長 1.49 m、深さは 6cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は褐灰色土 (5YR 5/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SK103 に先行することから、概ね古墳時代中期後葉以前とする。

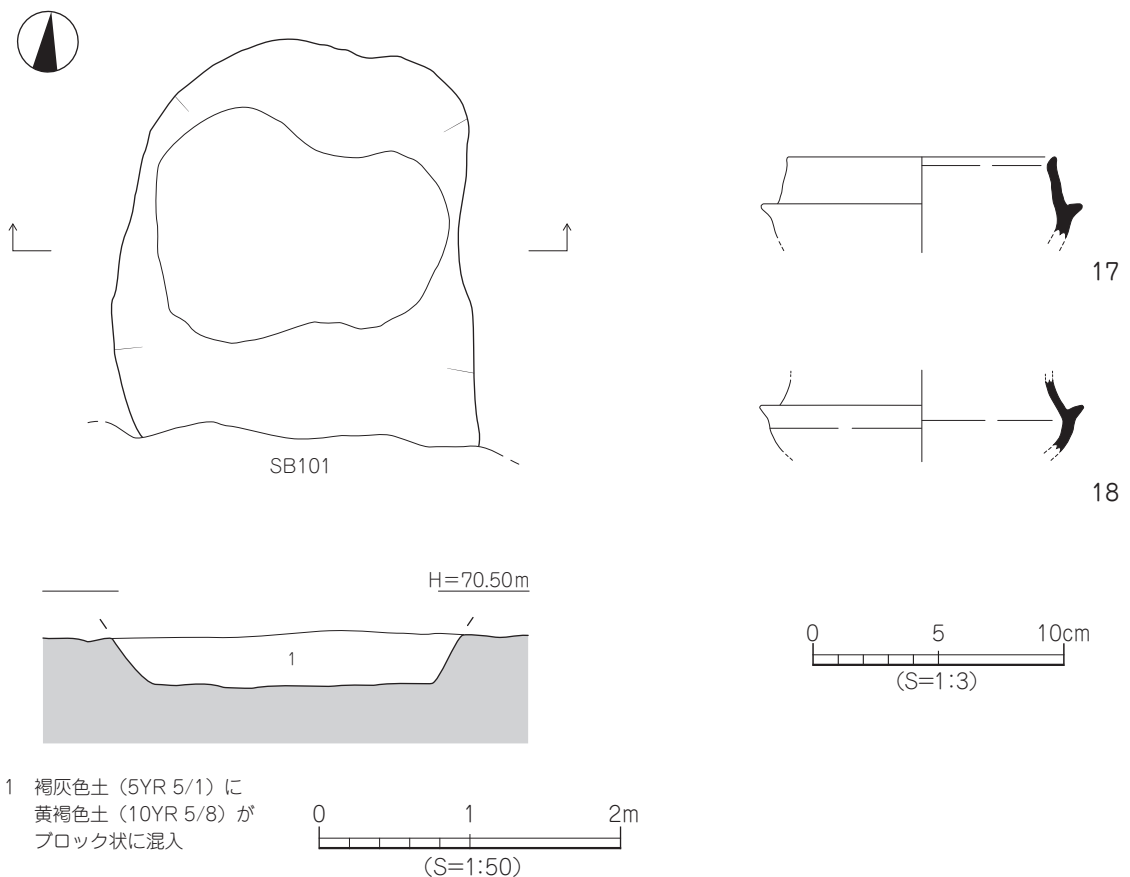
SK102

1 区南西部 E1 で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、第 IV 層が土坑上面を覆う。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北長 1.01 m、東西検出長 0.54 m、深さは 35cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土 (5YR 5/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SK101 と酷似することから、概ね古墳時代中期後葉以前とする。

SK106

1 区北壁中央部付近、D2 区で検出した土坑で、土坑北側は調査区外に続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西長 2.94 m、南北検出長 1.84 m、深さは 14cm である。断面形態は浅い



第 20 図 SK103 測量図・出土遺物実測図

逆台形状をなし、埋土は暗褐色土（7.5YR 3/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、後述する3区検出の竪穴建物 SB301 と埋土が酷似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK104

1区北東隅 D3区で検出した土坑で、土坑北側及び東側は調査区外に続く。壁面の土層観察により、SK104は第I②層中から掘削された遺構である。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.09 m、南北検出長 1.00 m、深さは 53cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は明褐色土（7.5YR 5/6）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より近現代の土坑と考えられる。

SK105

1区南東部 D3～E3区で検出した土坑で、土坑北側はSK107と重複し、SK105が後出する。壁面の土層観察により、SK105上面は第I③層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西長 3.81 m、南北検出長 3.31 m、深さは 14cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰色粘質土（5Y 6/1）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より近現代の土坑と考えられる。

SK107

1区東側 D2・3区で検出した土坑で、土坑東側はSK105と重複し、SK107が先行する。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 2.10 m、南北長 1.21 m、深さは 25cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰白色粘質土（5Y 8/1）単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSK105と酷似することから近現代の土坑と考えられる。

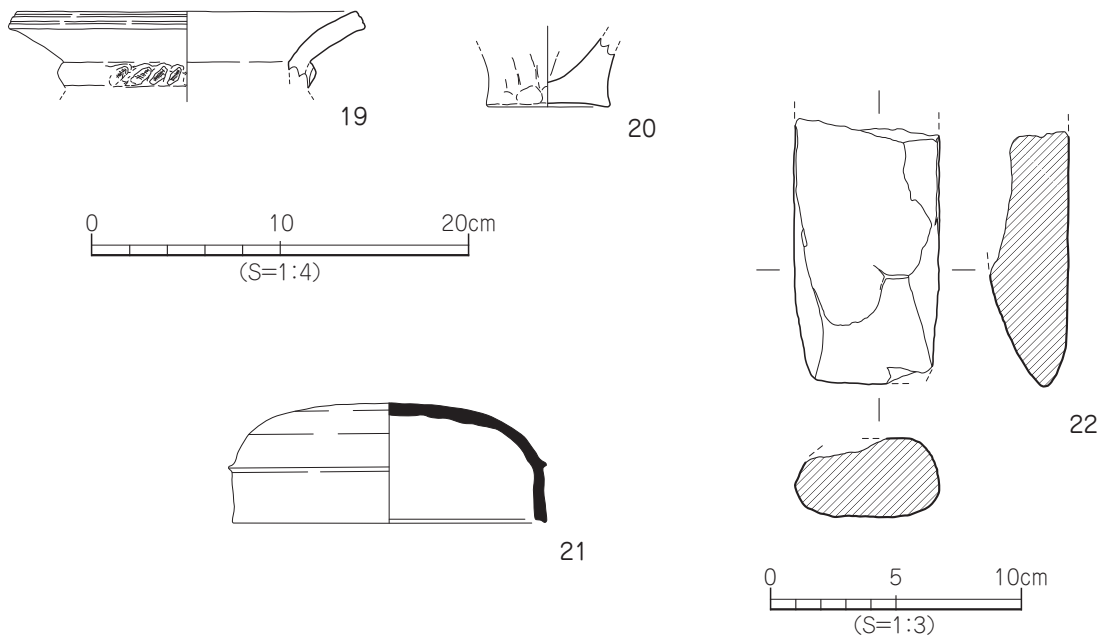
（4）その他の遺構と遺物

1）柱 穴

1区では、3基の柱穴を検出した。平面形態は円形をなし、規模は径 0.34～0.45 m、深さ 29～48 cmである。柱穴掘り方埋土は褐灰色土（5YR 5/1）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。各柱穴から遺物の出土はないが、埋土などから概ね古墳時代の遺構と考えられる。

2）1区包含層出土遺物（第21図、図版11）

19～22は第IV層出土品。19・20は弥生土器。19は広口壺の口縁部片で、口縁端面に凹線文2条を施し、頸部外面には凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を加える。20は甕形土器の底部で、僅かに上げ底をなす。弥生時代中期後葉。21は須恵器坏蓋。天井部は扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。古墳時代中期後葉。22は伐採斧。扁両刃で、基部は欠損する。結晶片岩製。



第 21 図 1 区 第IV層出土遺物実測図

(5) まとめ

1区では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、古墳時代の竪穴建物1棟、溝1条、土坑4基のほかに、近現代の土坑3基であり、詳細は以下のとおりである。SB101は一辺6m以上の隅丸方形または長方形の竪穴建物で、廃棄・埋没時期は古墳時代中期後葉、5世紀後葉と考えられる。建物内からは炭化物や焼土が散在して出土したことから、火災等により焼失したものと推測される。なお、3基の土坑(SK101～103)は重複関係や遺構埋土等からSB101廃絶以前に構築されたものと考えられる。一方、SD101はSB101より後出する溝で、出土遺物より6世紀初頭から前葉の遺構と思われる。

弥生時代の遺構は未検出であるが、第IV層中より中期後葉から後期の遺物が出土している。また、第IV層からは石斧や石器剥片などが出土している。

【検出遺構】

- 古墳時代中期後葉 : 竪穴 1棟 (SB101: 焼失家屋)
- 土坑 3基 (SK101～103)
- 古墳時代後期前葉 : 溝 1条 (SD101)
- (後期) : 土坑 1基 (SK106)
- 近 現 代 : 土坑 3基 (SK104・105・107)

2. 2 区の調査

2 区では竪穴建物 1 棟、溝 3 条、土坑 12 基、柱穴 23 基を検出した（第 23 図、図版 2）。

(1) 竪穴建物

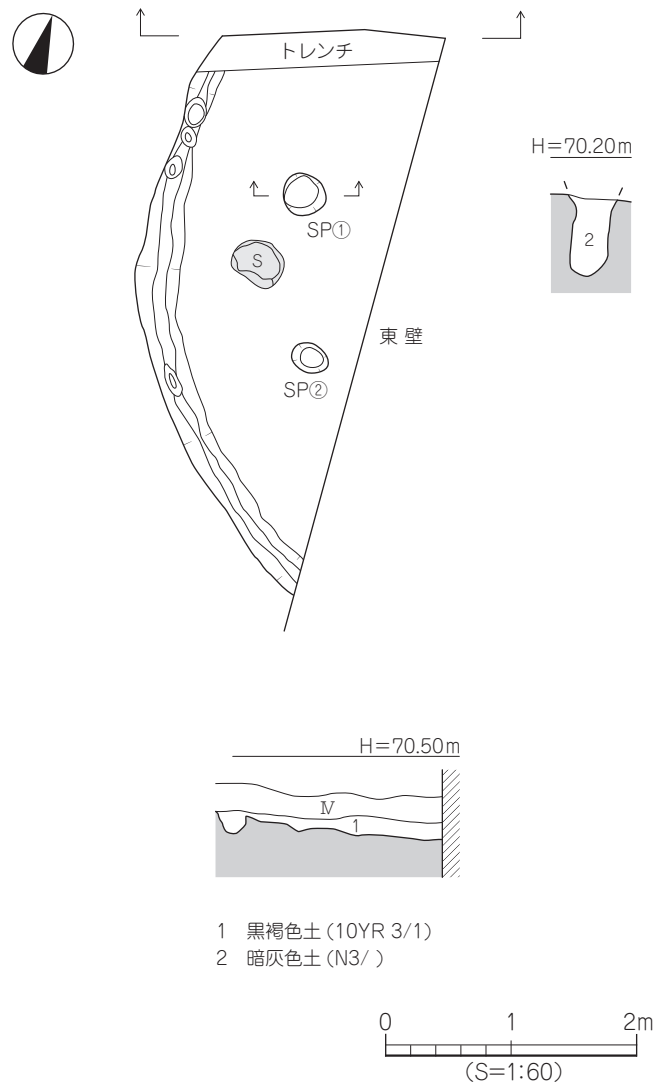
SB201（第 22 図、図版 2）

2 区北東隅 C6 区に位置する建物址で、建物北側及び東側は調査区外へ続く。壁面の土層観察により、SB201 上面は第 IV 層が覆う。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北検出長 4.58 m、東西検出長 1.84 m、壁高は 24cm である。建物埋土は、黒褐色土(10YR 3/1)単層である。建物壁体に沿って、幅 10～15cm、深さ 4～18cm の周壁溝が巡る。溝埋土は、建物埋土と同様である。建物床面にて、2 基の柱穴（SP①・②）を検出した。このうち、SP①は径 34cm、深さ 61cm を測る柱穴で、柱穴掘り方埋土は暗灰色土（N3/）単層である。検出状況より、SP①は SB201 を構成する主柱穴の可能性が。遺物は建物埋土中より弥生土器片が数多く出土したほか、砥石や石器素材などが出土した。

出土遺物（第 24 図、図版 12）

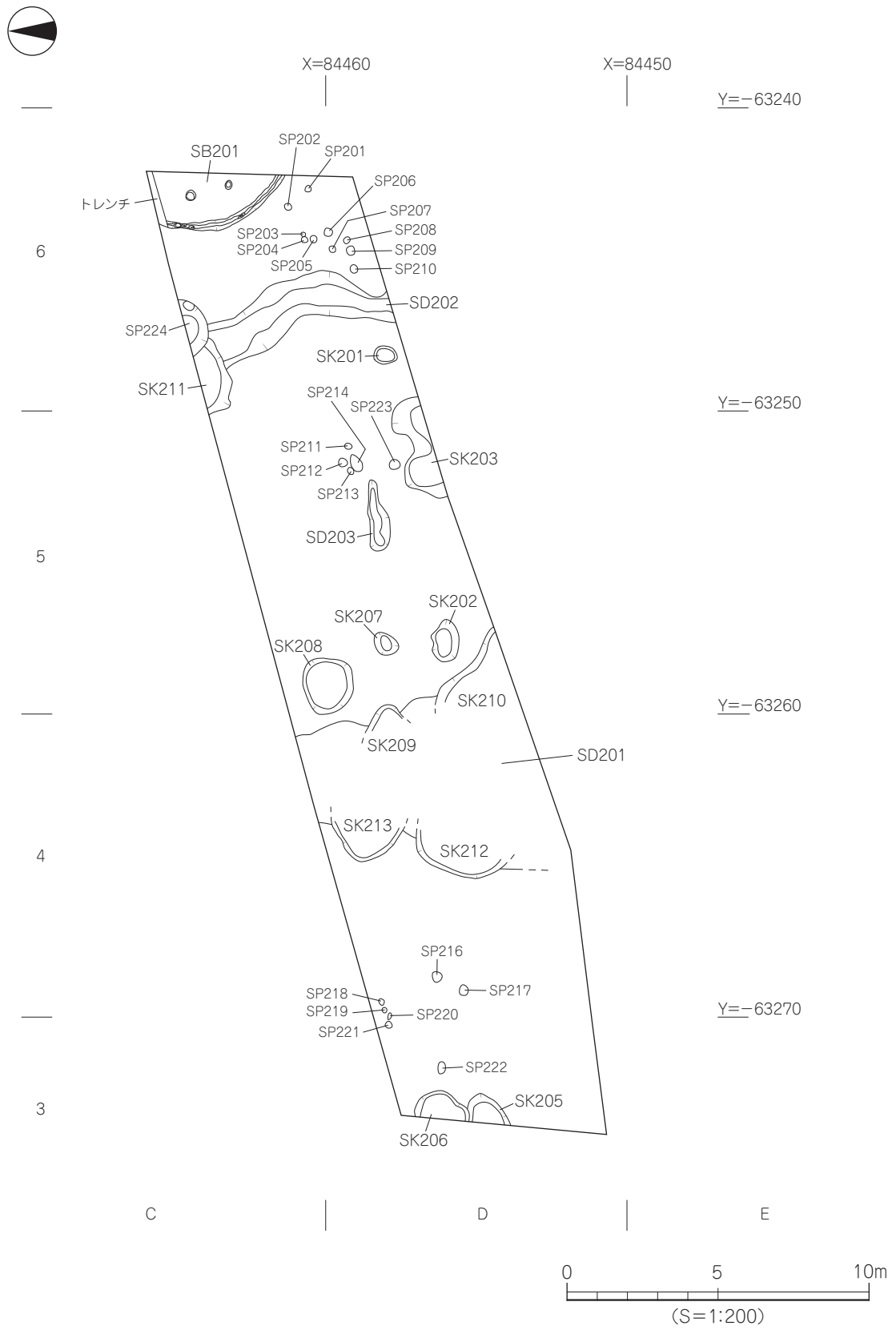
23～31 は弥生土器。23・24 は甕形土器。23 の口縁部は上方に肥厚し、口縁端面に凹線文 2 条を施す。頸部には凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。24 の口縁部は外反し、口縁端面はナデにより凹む。胴部外面には、タテ方向のヘラミガキを施す。25～27 は壺形土器。25 の口縁部は短く外反し、頸部外面にはヘラミガキ調整がみられる。26 は広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文を施す。27 は頸部片で、断面三角形状の凸帯 2 条を貼り付ける。28 は高坏形土器の脚部で、貫通する矢羽根状の透かしを施す。29～31 は甕形土器の底部。29 はくびれをもつ上げ底、30・31 は僅かに上げ底で、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整がみられる。32 は石棒で、厚さ 2cm を測る。結晶片岩製。33 は砥石で、3 面の砥面をもつ。砂岩製。

時期：出土遺物の特徴より、SB201 の廃棄・埋没時期は弥生時代中期後葉とする。



第 22 図 SB201 測量図

遺構と遺物



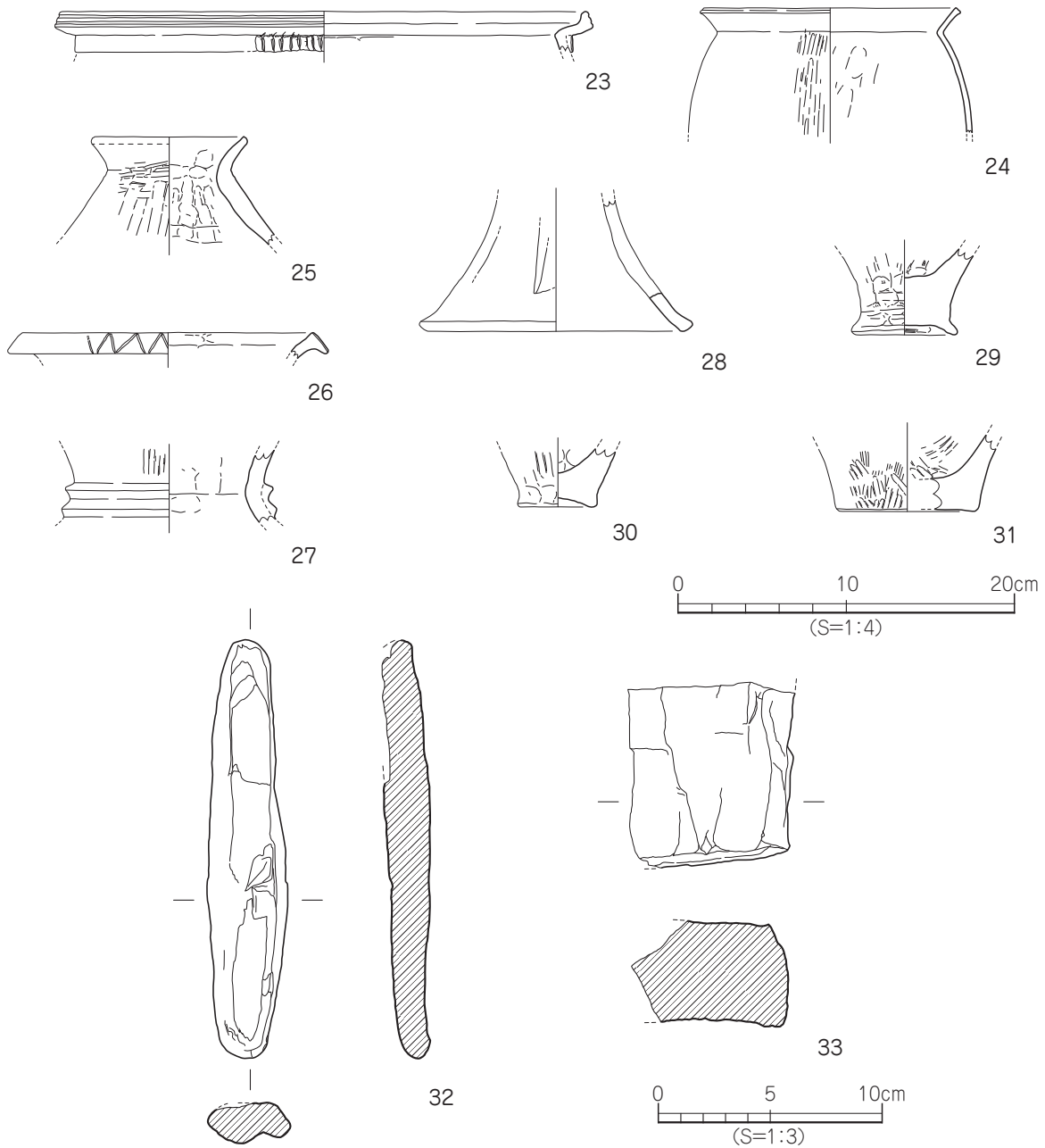
第 23 図 2 区遺構配置図

(2) 溝

SD201

2区中央部西寄りC4～D5区で検出した南北方向の溝で、4基の土坑と重複し、溝両端は調査区外に続く。壁面の土層観察により、SD201上面は第I⑤層が覆う。規模は検出長7.61m、最大幅6.00m、深さは20cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は明黄褐色土(10YR 7/6)単層である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位などから概ね近現代の溝とする。



第24図 SB201 出土遺物実測図

SD202

2区東側C・D6区で検出した南北方向の溝で、溝北側は土坑SK211と重複する。壁面の土層観察により、SD202上面は第I⑤層が覆う。規模は検出長5.91m、最大幅1.56m、深さは11cmである。断面形態は浅い皿状をなし、埋土は灰白色土(5Y 8/1)に黄褐色土(10YR 5/8)がブロック状に混入するものである。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位などから概ね近現代の溝とする。

SD203

2区中央部東寄りD5区で検出した東西方向の短い溝で、溝両端は消失する。規模は検出長2.38m、最大幅0.64m、深さは15cmである。断面形態は浅い皿状をなし、埋土は灰黄色土(2.5Y 6/2)単層である。溝基底面には凹凸が数多くみられたことから、農耕に伴う鋤溝の可能性はある。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位などから概ね近現代の溝とする。

(3) 土 坑

SK205

2区西端D3区で検出した土坑で、土坑西側は調査区外へ続く。壁面の断面観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北長1.41m、東西検出長1.00m、深さは24cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗灰色土(N3/)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土がSB201床面検出の柱穴掘り方埋土と酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃の遺構と考えられる。

SK206

2区西端D3区で検出した土坑で、土坑西側は調査区外へ続く。壁面の断面観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北長1.74m、東西検出長1.04m、深さは24cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗灰色土(N3/)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土がSB201床面検出の柱穴掘り方埋土と酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃の遺構と考えられる。

SK203

2区中央部東寄りD5・6区で検出した土坑で、土坑南側は調査区外に続く。壁面の土層観察により、第I③層が土坑上面を覆う。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は東西長3.50m、南北検出長1.06m、深さは20cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土(5BG 4/1)に黄褐色土(10YR 5/8)がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SK203は検出層位から、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK211

2 区北東部 C6 区で検出した土坑で、溝 SD202 と重複する。壁面の土層観察により、第 I ④層が土坑上面を覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西長 3.91 m、南北検出長 0.98 m、深さは 36cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK201

2 区東側 D6 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 0.81 m、短径 0.54 m、深さは 11cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK202

2 区中央部南寄り D5 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 1.34 m、短径 0.91 m、深さは 13cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK207

2 区中央部 D5 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 0.84 m、短径 0.61 m、深さは 9cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK208

2 区中央部北西寄り C・D5 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 1.71 m、短径 1.61 m、深さは 4cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK209

2 区中央部西寄り D4・5 区で検出した土坑で、土坑西側は溝 SD201 に削平されている。平面形態

は円形をなすものと思われ、規模は南北長 1.24 m、東西検出長 0.61 m、深さは 18cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期: 出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK210

2 区中央部南西寄り D5 区で検出した土坑で、土坑西側は溝 SD201 に削平されている。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.69 m、南北検出長 2.81 m、深さは 31cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期: 出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK212

2 区中央部西寄り D4 区で検出した土坑で、溝 SD201 と重複する。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.21 m、南北長 3.21 m、深さは 12cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期: 出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

SK213

2 区中央部西寄り D4 区で検出した土坑で、溝 SD201 と重複する。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.31 m、南北長 2.21 m、深さは 8cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗青灰色土 (5BG 4/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入するものである。土坑内から、遺物の出土はない。

時期: 出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土が SK203 と酷似することなどから、概ね近現代の土坑と考えられる。

(4) その他の遺構と遺物

1) 柱 穴

2 区では、23 基の柱穴を検出した (SP215 は欠番)。柱穴掘り方埋土は、以下の 2 種類である。

①類-暗灰色土 (N3/) : 20 基 [SP201 ~ 211・214・216 ~ 222・224]

②類-灰白色土 (5Y 8/1) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入 : 3 基 [SP212・213・223]

なお、検出した柱穴は埋土や検出層位より、①類は弥生時代中期から後期、②は近現代の遺構と考えられる。

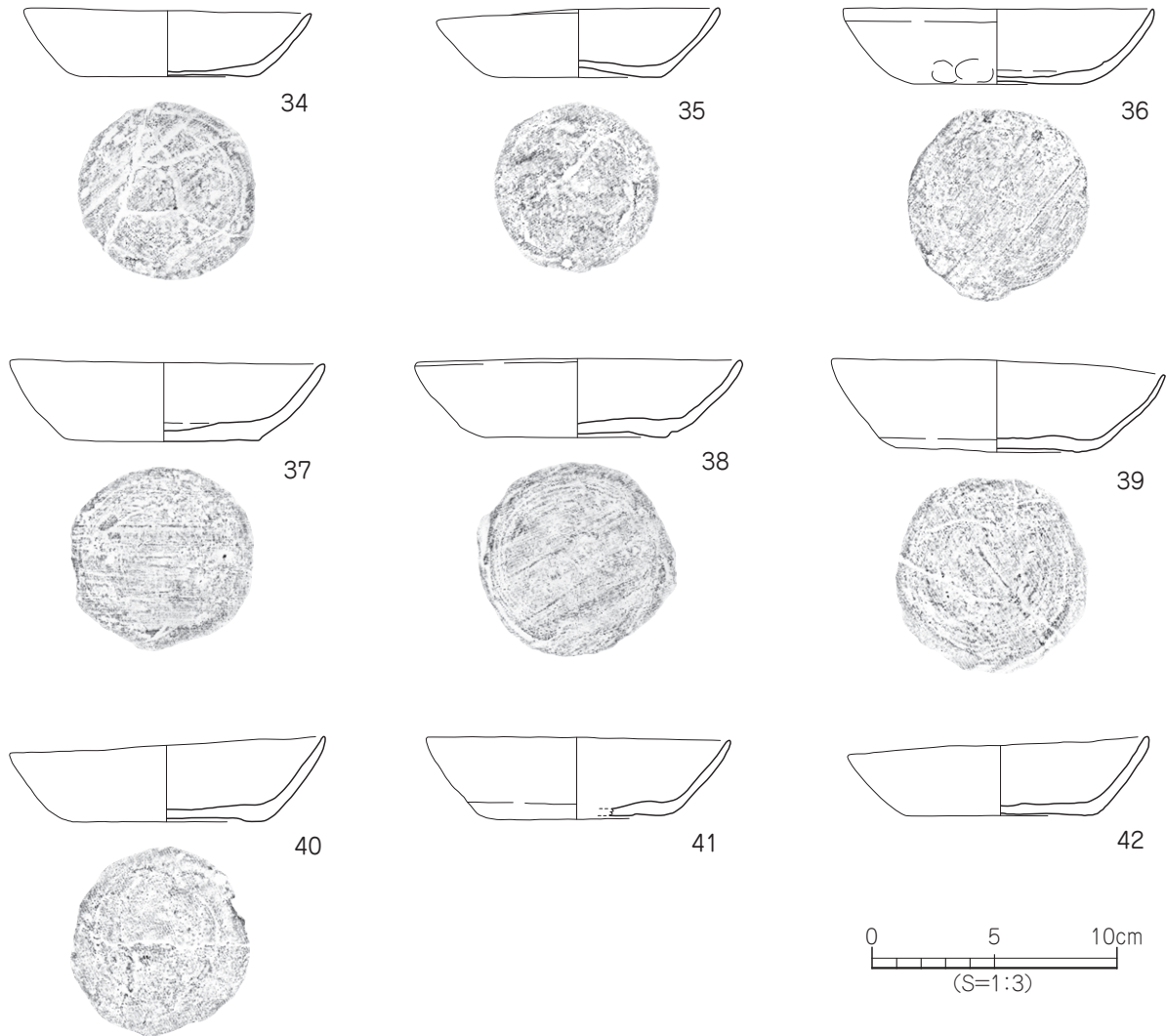
2) 2区包含層出土遺物

① 第Ⅱ層出土遺物 (第25図、図版12)

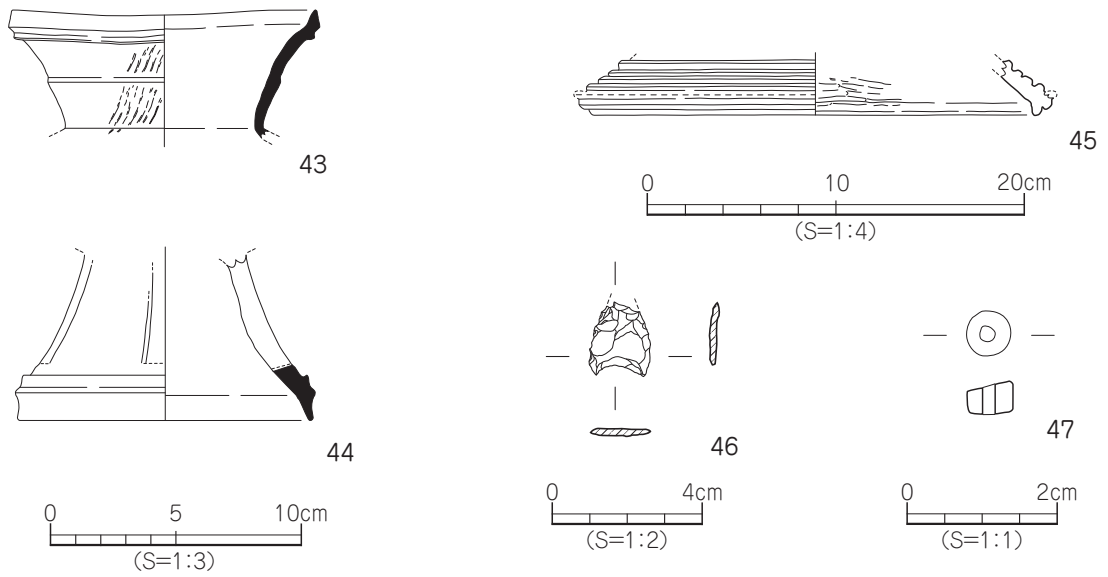
34～42は土師器坏。37・38は完形品。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げられる。法量は、口径11.4～13.5cm、底径6.6～8.0cm、器高2.7～3.7cmである。底部の切り離しは回転糸切り技法によるもので、36～41はスノコの痕跡が残る。なお、35の底部外面には、歪みによる割れが認められる。色調は黄灰色～灰白色で、35～37の胎土中には赤色酸化土粒が少量混入する。

② 第Ⅳ層出土遺物 (第26図、図版13)

43・44は須恵器。43は広口壺で、口縁部と頸部に凸線1条を施す。44は高坏の脚部片で、脚裾部に凸線が巡り、柱部には長方形の透かしが2ヶ所認められる。6世紀前葉。45は弥生土器の高坏形土器。脚部片で、脚端部を上下方に拡張し、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。弥生時代中期後葉。46は凹基無茎式石鏃で、先端部を欠損する。赤色珪質岩製。47は白玉。色調は暗灰色で、口径0.6cm、孔径0.2cm、厚さ0.4cmを測る。滑石製。



第25図 2区 第Ⅱ層出土遺物実測図



第 26 図 2 区 第 IV 層出土遺物実測図

(5) まとめ

2 区では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は弥生時代の竪穴建物 1 棟と土坑 2 基、近現代の溝 3 条及び土坑 10 基である。竪穴建物 SB201 と 2 基の土坑(SK205・206)は、弥生時代中期後葉の遺構である。古墳時代の遺構は未検出であるが、第 IV 層中からは古墳時代後期に時期比定される土師器や須恵器の破片が少量出土した。なお、第 IV 層中からは滑石製の白玉 1 点が出土している。

【検出遺構】

- 弥生時代中期後葉：竪穴 1 棟 (SB201)
 土坑 2 基 (SK205・206)
 近現代：溝 3 条 (SD201～203)
 土坑 10 基 (SK201～203・207～213)

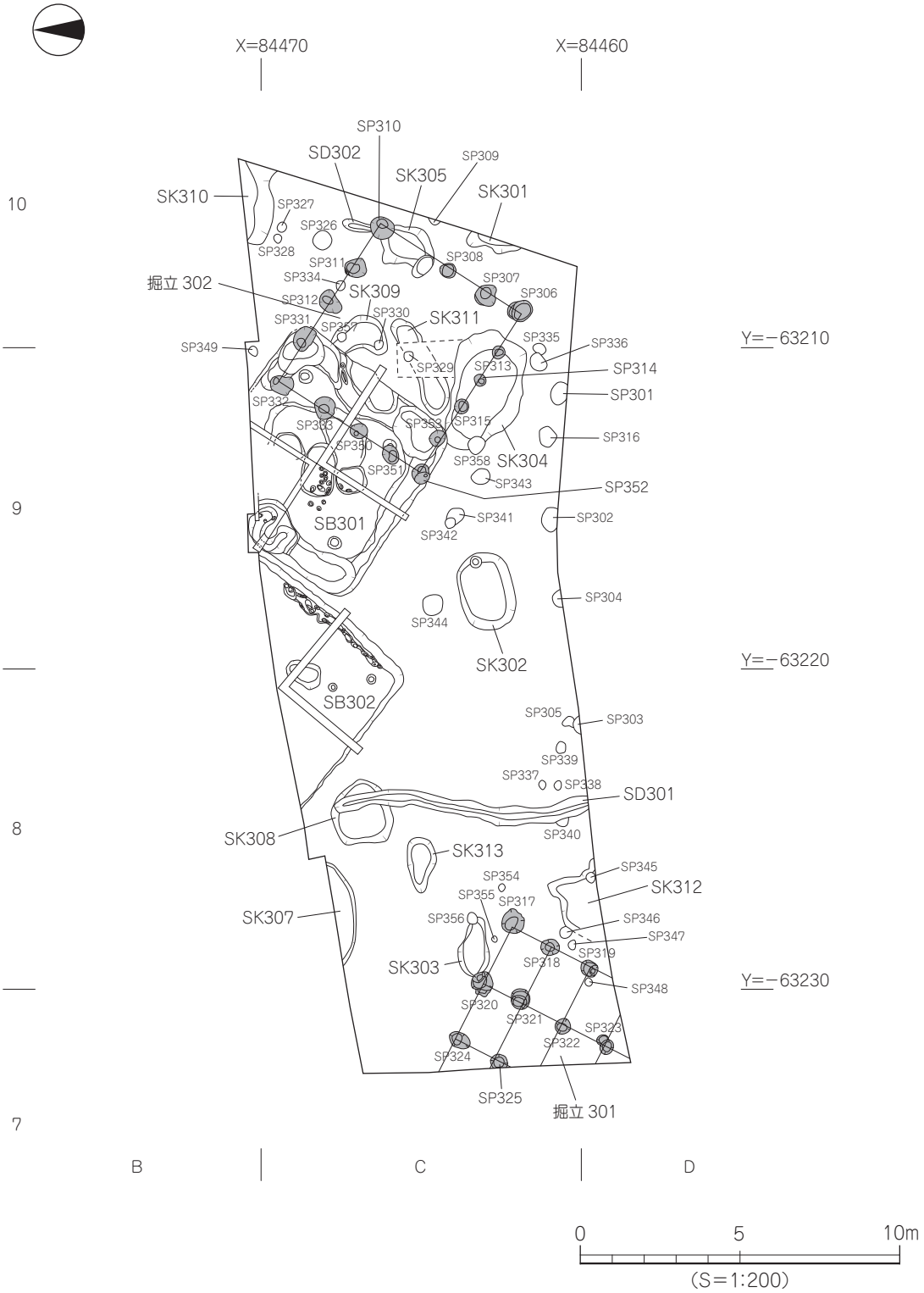
3. 3 区の調査

3 区では竪穴建物 2 棟、掘立柱建物 2 棟、溝 2 条、土坑 12 基、柱穴 58 基を検出した(第 27 図、図版 2)。

(1) 竪穴建物

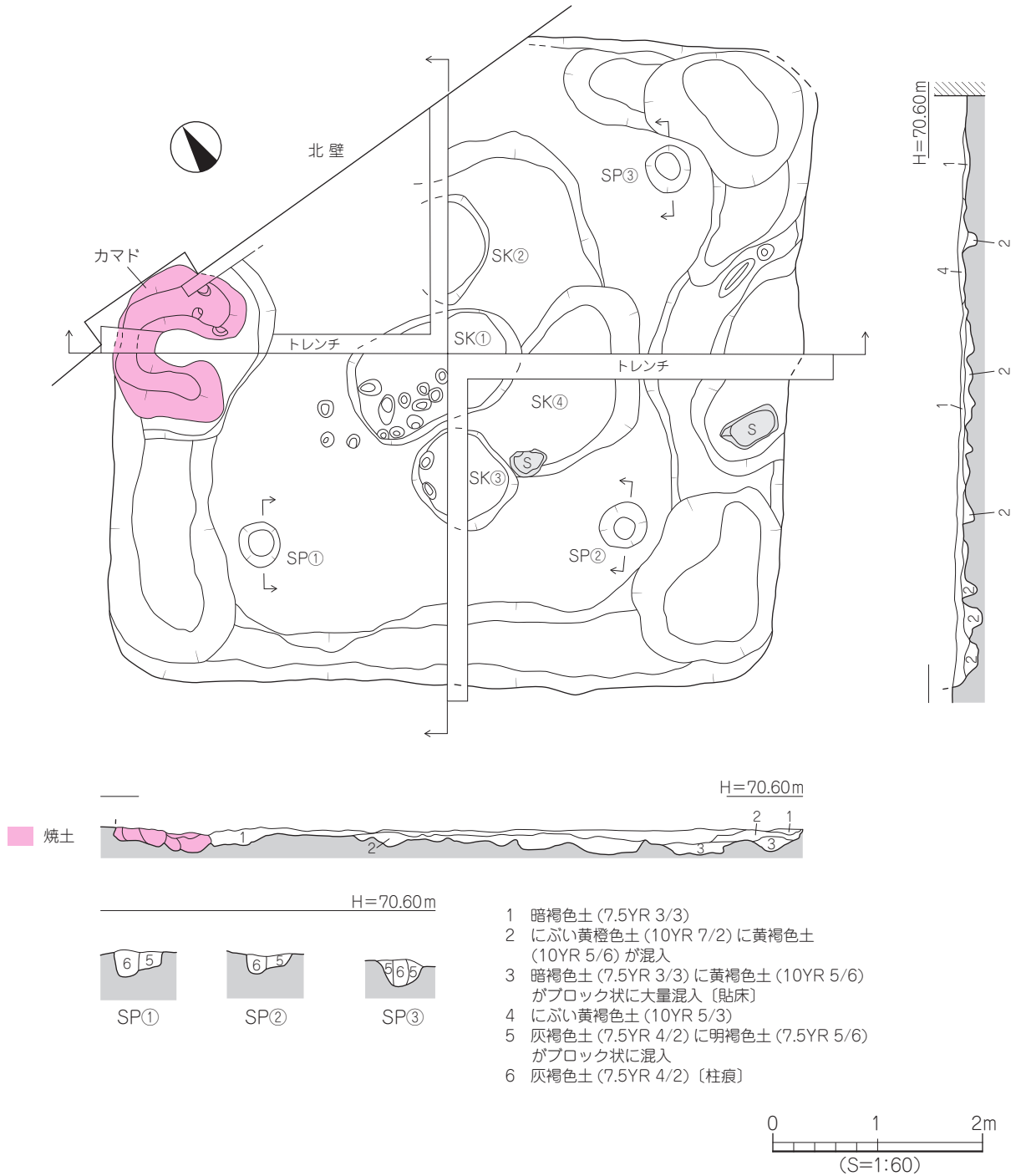
SB301 (第 28・29 図、図版 3)

3 区中央部北東寄り B9～C10 区に位置する建物址で、建物東側は土坑 SK309 と重複し、南東隅は土坑 SK304 と重複し、SB301 が後出する。また、建物上面にて掘立 302 を構成する柱穴 7 基を検出した。壁面の土層観察により、SB301 上面は第 IV 層が覆う。SB301 の平面形態は隅丸方形で、規模は東西長 6.36 m、南北長 6.21 m、壁高は 26cm である。建物埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) を基調とし、床面付近には、にぶい黄橙色土 (10YR 7/2) や黄褐色土 (10YR 5/6) が部分的に堆積する。内部施設はカ



第 27 図 3区遺構配置図

マドや土坑、柱穴のほか溝を検出した。カマドは建物北壁中央部にあり、平面形態は馬蹄形状をなす。規模は東西長 1.5 m、南北長 1.2 m、高さ 26cmほどが残存している。カマドは黒褐色土 (10YR 3/1) に、にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) が混入するものや、灰白色土 (10YR 8/2) と、にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) が混入する土壌などを積み重ねて構築されている。なお、カマド内部にはカマド上部に構築されていたと思われる灰黄褐色土 (10YR 5/2) や灰白色粘土 (7.5YR 8/2) が検出された。建物床面からは、3 基の柱穴 (SP①~③) を検出した。平面形態は円形で、規模は径 0.41 ~ 0.45m、深さは 18



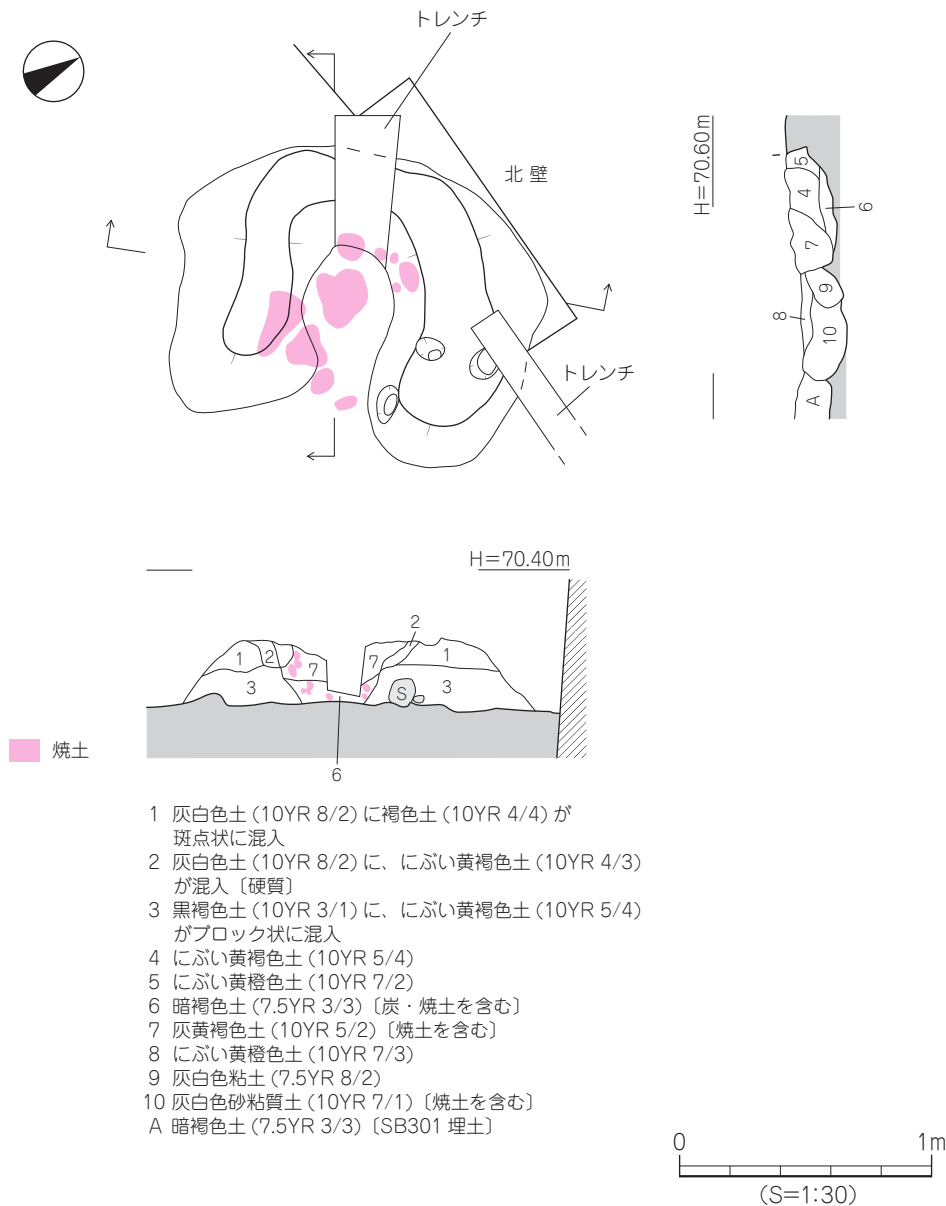
第 28 図 SB301 測量図

～28cmである。柱穴掘り方埋土は灰褐色土（7.5YR 4/2）に明褐色土（7.5YR 5/6）がブロック状に混入するものである。検出状況より、これら3基の柱穴はSB301の主柱穴と考えられる。このほか、建物床面にて4基の土坑（SK①～④）を検出した。また、壁体に沿って幅0.4～1.0m、深さ3～12cmの溝を検出した。これらの遺構はSB301に伴うものと推測されるが、用途や性格は不明である。

遺物は建物埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が数多く出土したほか、石庖丁や石鏃の破損品と石器剥片が出土した。また、カマド内からは土師器甕が押し潰された状態で出土している。なお、遺物の出土状況から、SB301は人為的に埋め戻された可能性の高い建物と推測される。

出土遺物（第30・31図、図版13・14）

48～51は須恵器。48は坏蓋。丸味のある天井部で、口縁端部は内傾する。天井部外面には、線刻が認められる。49は坏身。たちあがり端部は内傾し、受部端には沈線状の凹みが巡る。50は甕の口



第29図 SB301 カマド測量図

縁部片で、珠玉状に肥厚する。51は広口壺で、頸部～胴上半部外面には回転カキメ調整、胴下半部外面には格子目叩きを施す。内面は、胴部下半部に同心円叩きを施す。52～58は土師器。52～54は甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。53・54の口縁部中位付近には、不明瞭な稜をもつ。なお、胴部外面にはハケメ調整、内面はナデ調整と指頭痕が顕著に残る。55・56は椀。体部は内湾し、55の口縁部は尖り気味に仕上げる。57・58は甌。57は口縁部片で、口縁端部は「コ」の字状をなす。58は把手部で、断面形態は円形である。59・60は弥生土器。59は甕形土器の口縁部片で、胴部に凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を加える。60は高坏形土器の脚部片で、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。柱部には矢羽根状の透かしをもつ。61は石庖丁で、研磨段階の未成品である。結晶片岩製。62はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃で、先端部を欠損する。サヌカイト製。63・64は剥片で、石材は63がサヌカイト、64は結晶片岩である。

時期：出土した須恵器、土師器の特徴より、SB301の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀中葉とする。

SB302（第32図、図版3）

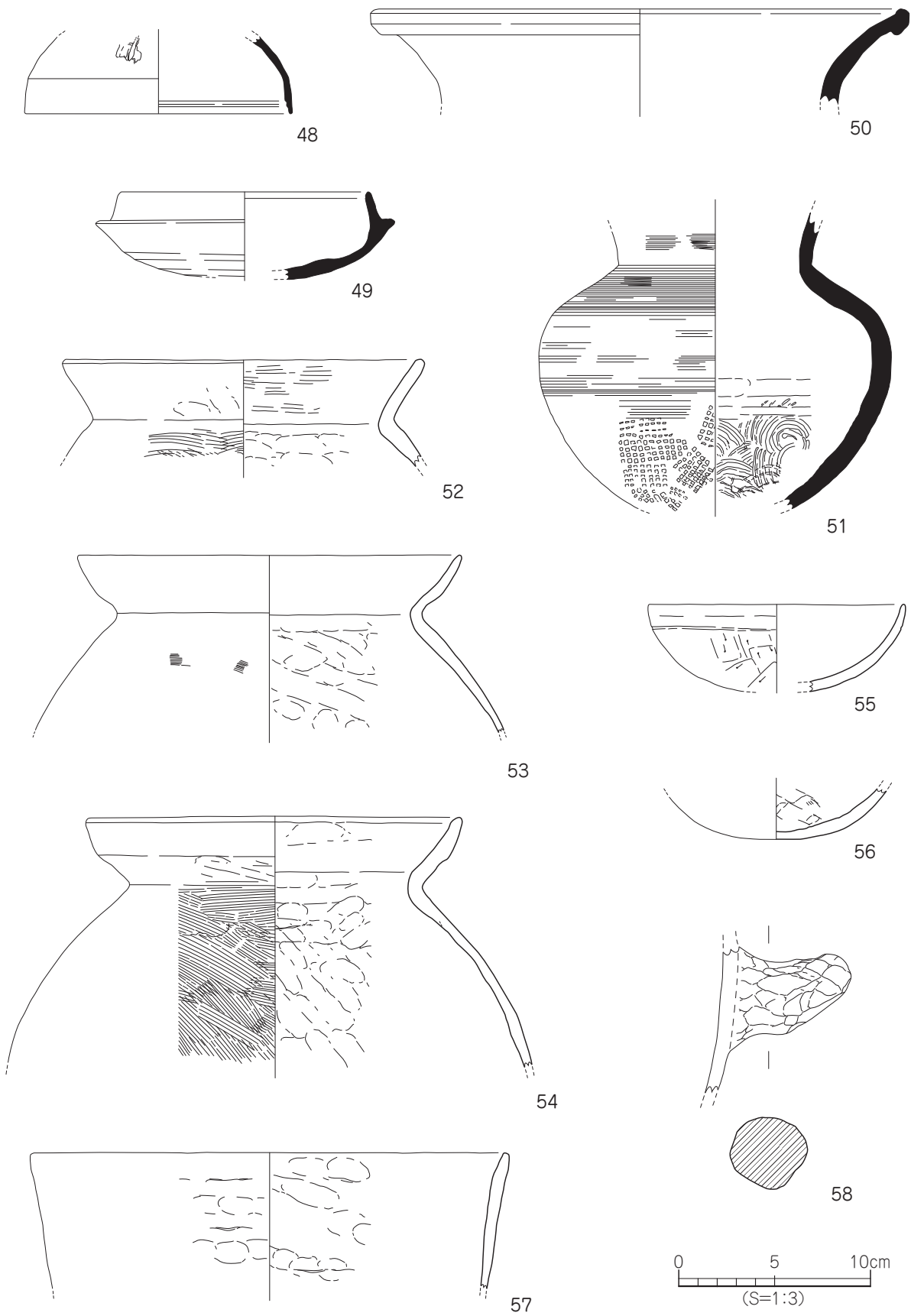
3区中央部北寄りC8・9に位置する建物址で、建物北側は調査区外に続く。壁面の土層観察により、SB302上面は第Ⅱ層が覆う。平面形態は隅丸方形もしくは長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長6.11m、南北検出長5.61m、壁高は22cmである。建物埋土は2種類あり、上層は暗褐色土（10YR 3/3）、下層は黒褐色土（10YR 2/3）である。なお、床面付近には黒褐色土（10YR 2/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入する土壌があり、これは床面修復のための貼床土と推測される。内部施設は、柱穴と土坑及び周壁溝を検出した。検出した2基の柱穴（SP①・②）のうち、SP②は径28cm、深さ24cmを測る円形柱穴で、柱穴の配置よりSB302の主柱穴と考えられる。また、土坑SK①は平面形態が楕円形をなし、規模は長径1.4m、短径0.81m、深さ11cmである。土坑埋土は、黒褐色土（10YR 2/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものであり、SB302に伴う遺構と思われる。このほか、建物壁体に沿って幅10～30cm、深さ3～10cmの周壁溝を検出した。溝基底面には径3～6cm、深さ3～6cmの小ピットが点在しており、杭が打ちこまれていたものと推測される。なお、SB302検出時には建物西側壁体中央部に焼土塊を検出した。おそらく、カマドの痕跡と思われるが、形状を確認するには至らなかった。

遺物は建物埋土中より、弥生土器や土師器、須恵器のほか石器剥片が少量出土した。SB301と同様、遺物の出土状況からSB302も人為的に埋め戻された可能性が高い建物と考えられる。

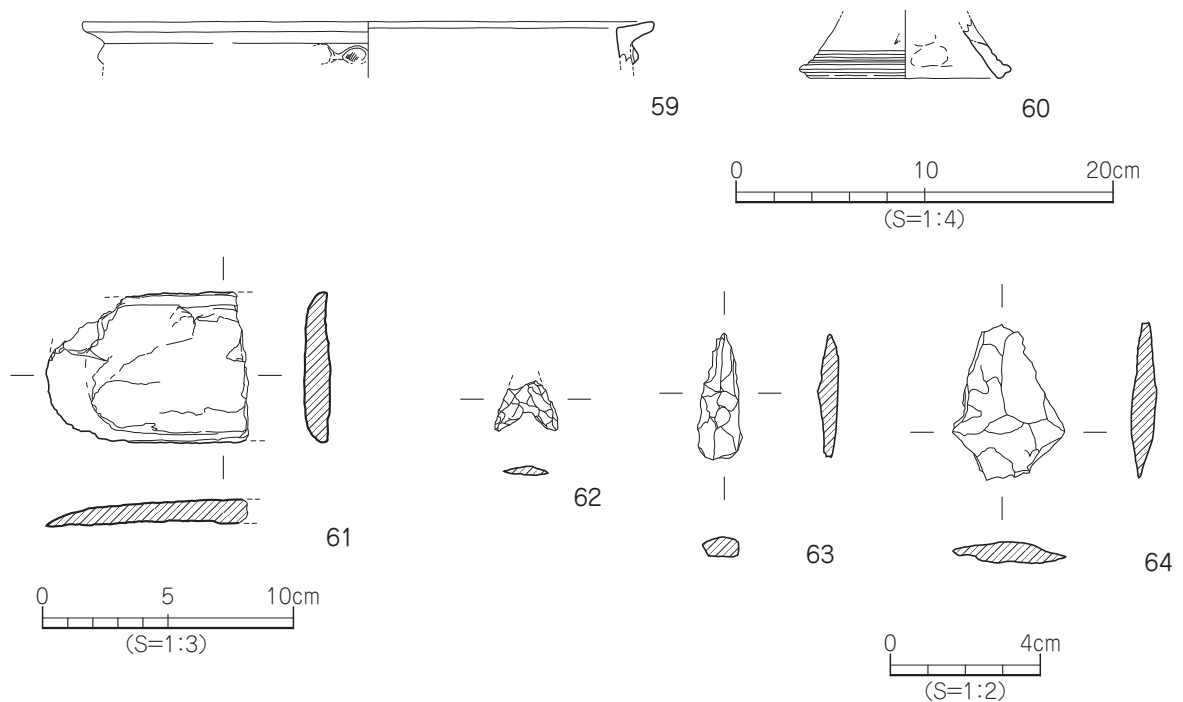
出土遺物（第33図、図版14）

65・66は須恵器。65は坏蓋で、天井部は丸味をもち、口縁端部は内傾する。天井部内面には、円弧叩きがみられる。66は坏身の完形品。たちあがり端部は内傾し、受部端には沈線状の凹みが巡る。67～70は土師器。67は甕で、口縁部は内湾する。68は完形の壺で口縁部は外反し、底部は平底である。69は鉢で、口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部は平底で、胴部外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。70は甌の胴部片で、外面にはハケメ調整がみられる。71は弥生土器。甕形土器の口縁部片で、頸部には凸帯が貼り付けられ、凸帯上に押圧を加える。胴部内外面には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。72は石器素材、73は剥片。結晶片岩製。

時期：出土した須恵器、土師器の特徴より、SB302の廃棄・埋没時期は6世紀前葉とする。



第30図 SB301 出土遺物実測図(1)



第 31 図 SB301 出土遺物実測図 (2)

(2) 掘立柱建物

掘立 301 (第 34 図、図版 3)

3区西側 C7～D8 区に位置する建物址で、土坑 SK303 と重複し、掘立 301 が後出する。東西 3 間以上、南北 4 間以上の総柱構造の建物址で、建物規模は南北検出長 4.27 m、東西検出長 3.9 m、床面積 20.85㎡である。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径 0.50～0.70 m、深さは 12～45cm である。柱穴掘り方埋土は、黒色粘質土 (N1.5/) に灰白色粘質土 (2.5Y 8/1) と明黄褐色砂 (10YR 7/6) が混入するものである。柱痕は SP319 で検出され、柱痕径 10cm、深さ 35cm である。なお、SP319 には柱材の一部が残存していた。各柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器の小片が数点出土したが、時期特定しうる遺物はない。

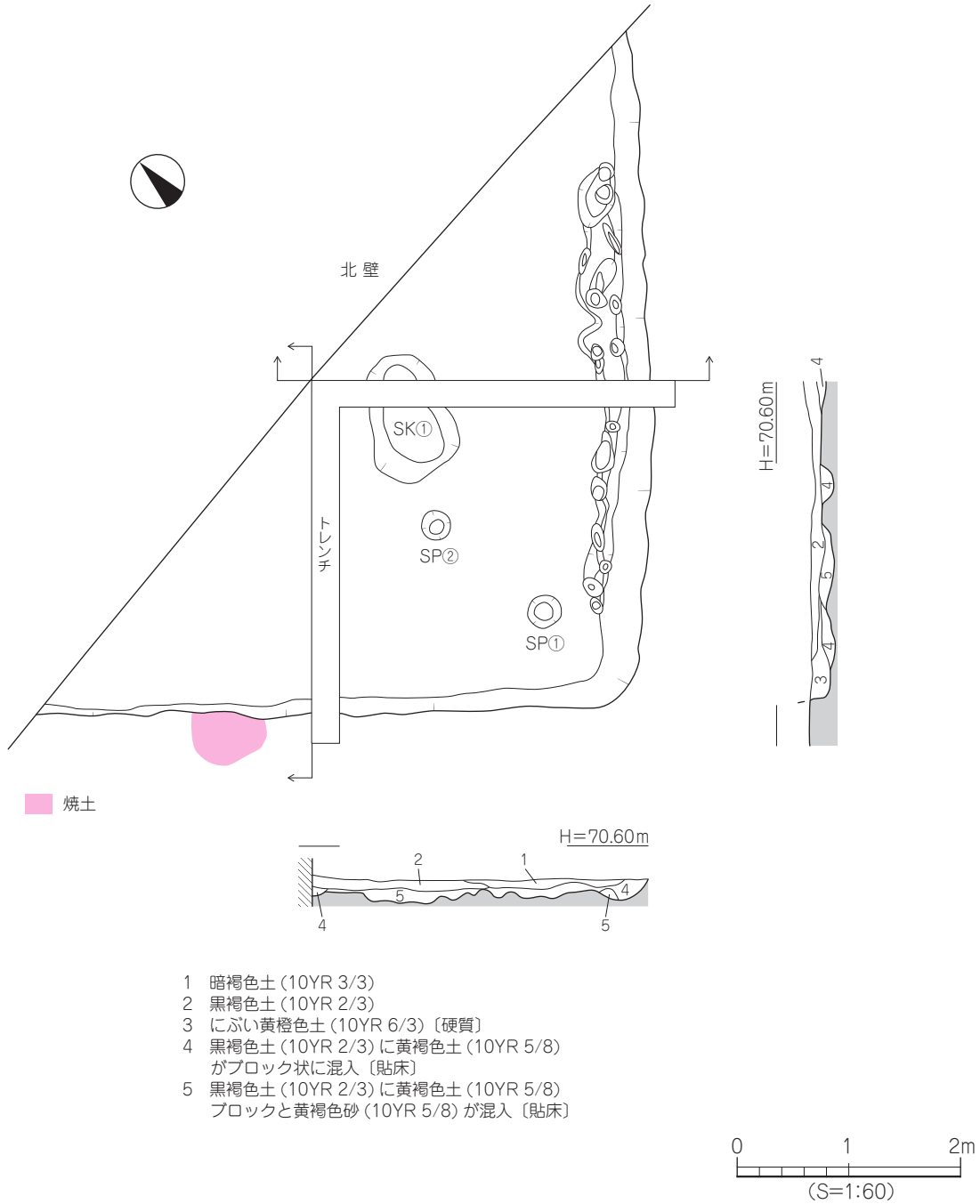
時期：出土遺物が僅少であり時期特定は困難であるが、後述する SK303 (古墳時代後期) より後出することから、概ね 6 世紀中葉以降の建物址とする。

掘立 302 (第 35 図、図版 4)

3区東側 C9～10 区に位置する建物址で、SB301 と 4 基の土坑 (SK304～306、309) と重複し、掘立 302 が後出する。東西 5 間、南北 4 間の東西棟で、側柱構造の建物址である。建物規模は桁行長 5.89m、梁行長 5.22m である。なお、建物方位は掘立 301 と同じである。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径 0.40～0.90m、深さは 6～40cm である。柱穴掘り方埋土は灰褐色土 (7.5YR 4/2) を基調とし、にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) がブロック状に混入するものである。柱痕は 6 基の柱穴で検出され、柱痕径 15～20cm、柱痕埋土は灰褐色粘土 (7.5YR 4/2) である。

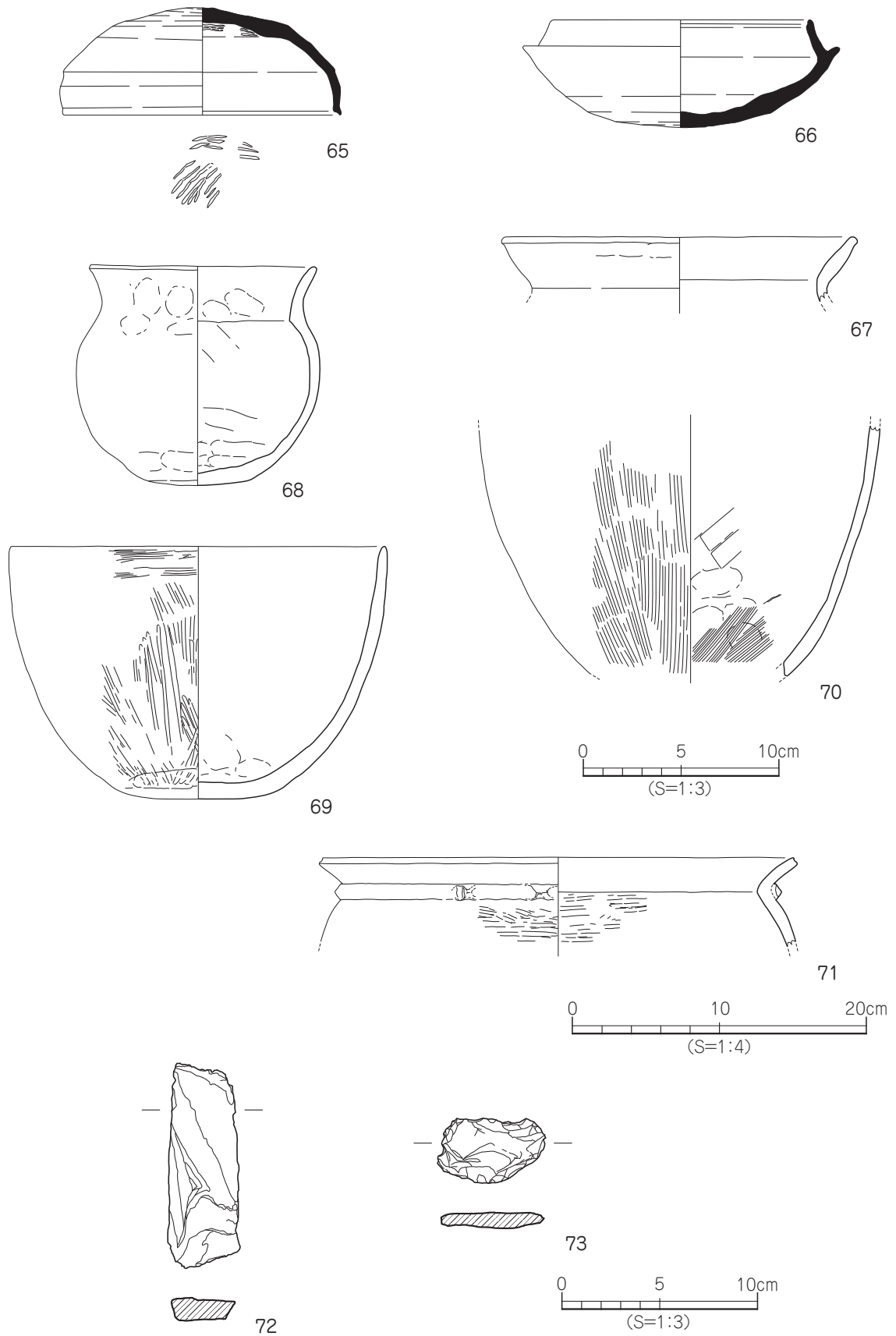
検出状況より、掘立 302 は柱を抜き取った後に廃絶されたと推測される。柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器の小破片が数点出土したが、時期特定しうる遺物はない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、柱穴掘り方埋土が SB301 検出の支柱穴掘り方埋土と類似することや、SB301 より後出することなどから、概ね古墳時代後期、6 世紀中葉以降の建物址とする。



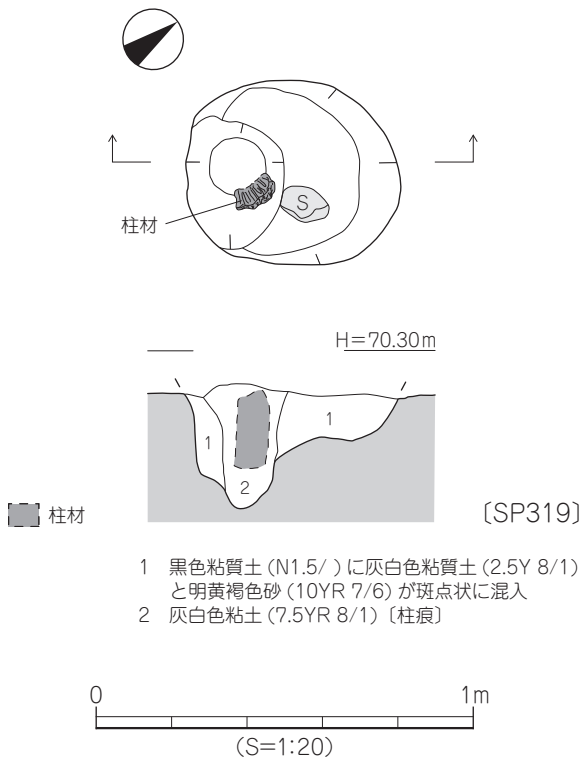
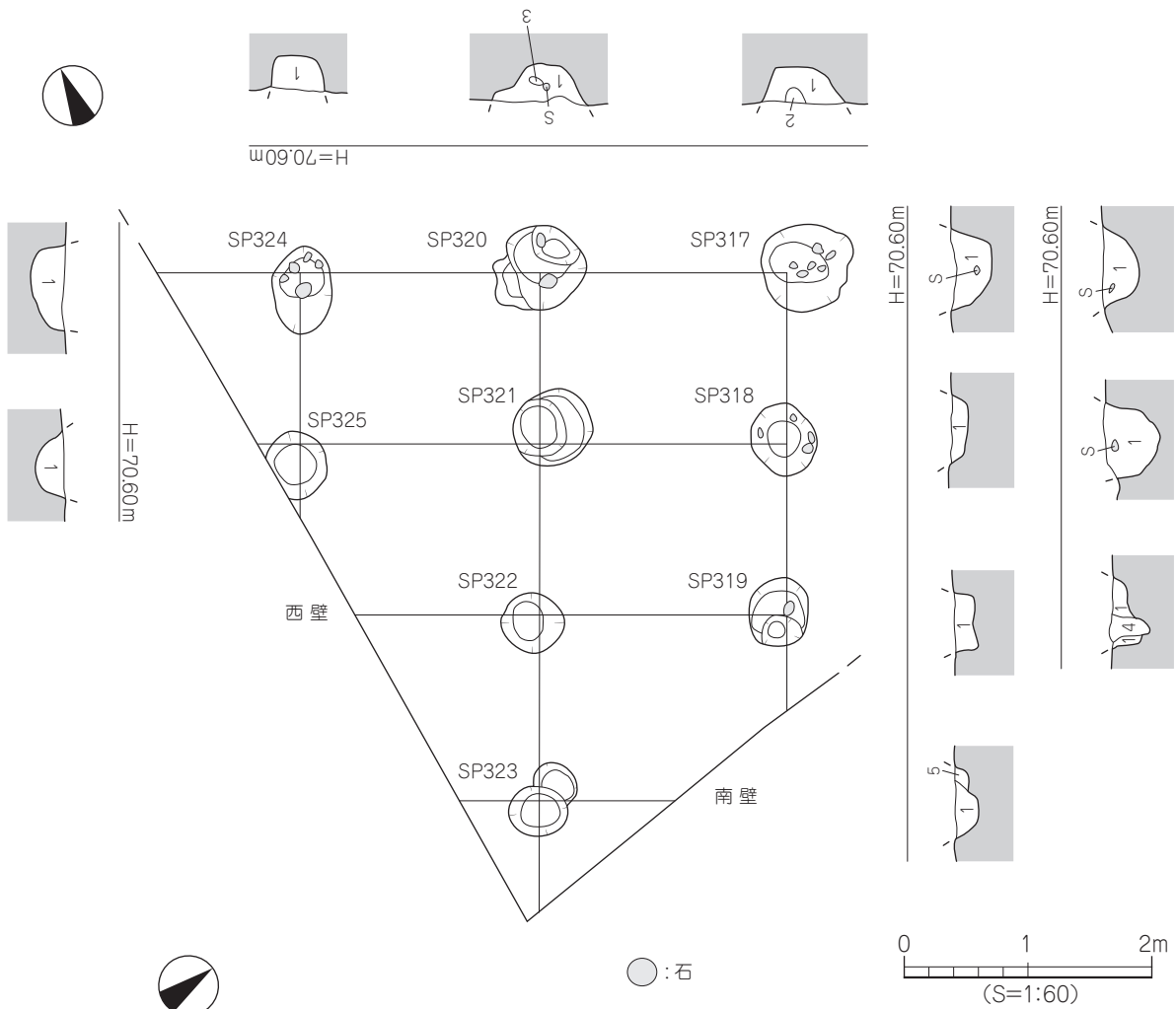
- 1 暗褐色土 (10YR 3/3)
- 2 黒褐色土 (10YR 2/3)
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR 6/3) [硬質]
- 4 黒褐色土 (10YR 2/3) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入 [貼床]
- 5 黒褐色土 (10YR 2/3) に黄褐色土 (10YR 5/8) ブロックと黄褐色砂 (10YR 5/8) が混入 [貼床]

第 32 図 SB302 測量図



第33図 SB302 出土遺物実測図

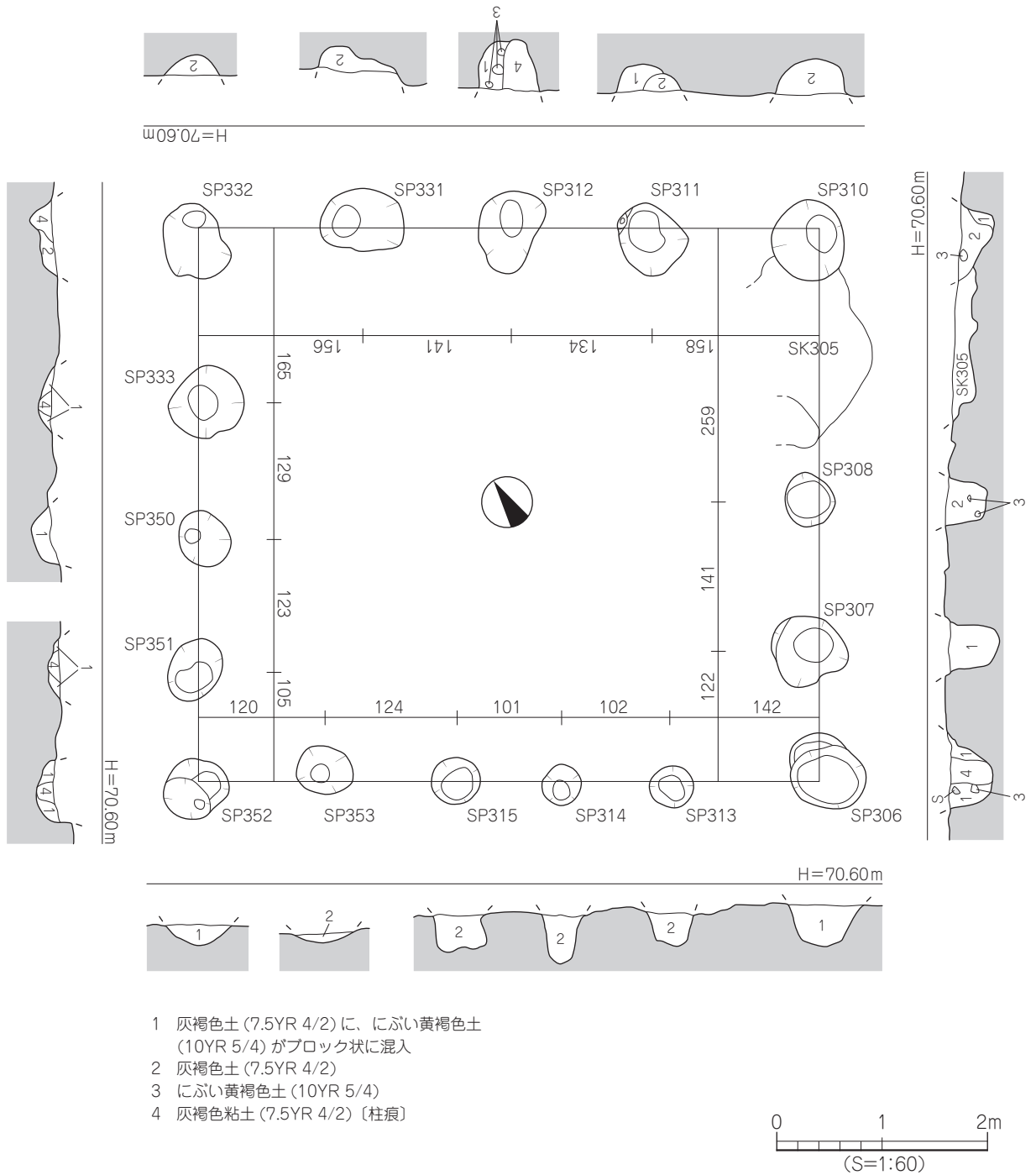
恵原新張遺跡 1次調査



- 1 黒色粘質土 (N1.5/) に灰白色粘質土 (2.5Y 8/1) と明黄褐色砂 (10YR 7/6) が混入
- 2 灰白色粘質土 (10YR 7/1)
- 3 明黄褐色土 (2.5Y 7/6)
- 4 灰白色粘土 (7.5YR 8/1) (柱痕)
- 5 黒色粘質土 (N1.5/) に、にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) が混入

- 1 黒色粘質土 (N1.5/) に灰白色粘質土 (2.5Y 8/1) と明黄褐色砂 (10YR 7/6) が斑点状に混入
- 2 灰白色粘土 (7.5YR 8/1) (柱痕)

第 34 図 掘立 301 測量図



第 35 図 掘立 302 測量図

(3) 溝

SD301 (第36図)

3区西側C・D8区で検出した南北方向の溝で、溝北側は土坑SK308と重複し、SD301が後出する。壁面の土層観察により、SD301上面は第IV層が覆う。規模は検出長8.04m、最大幅0.6m、深さは6cmである。断面形態は浅い皿状をなし、埋土はオリーブ黒色土(7.5Y 3/1)単層である。溝内からは弥生土器や土師器、須恵器の破片が少量出土した。

出土遺物

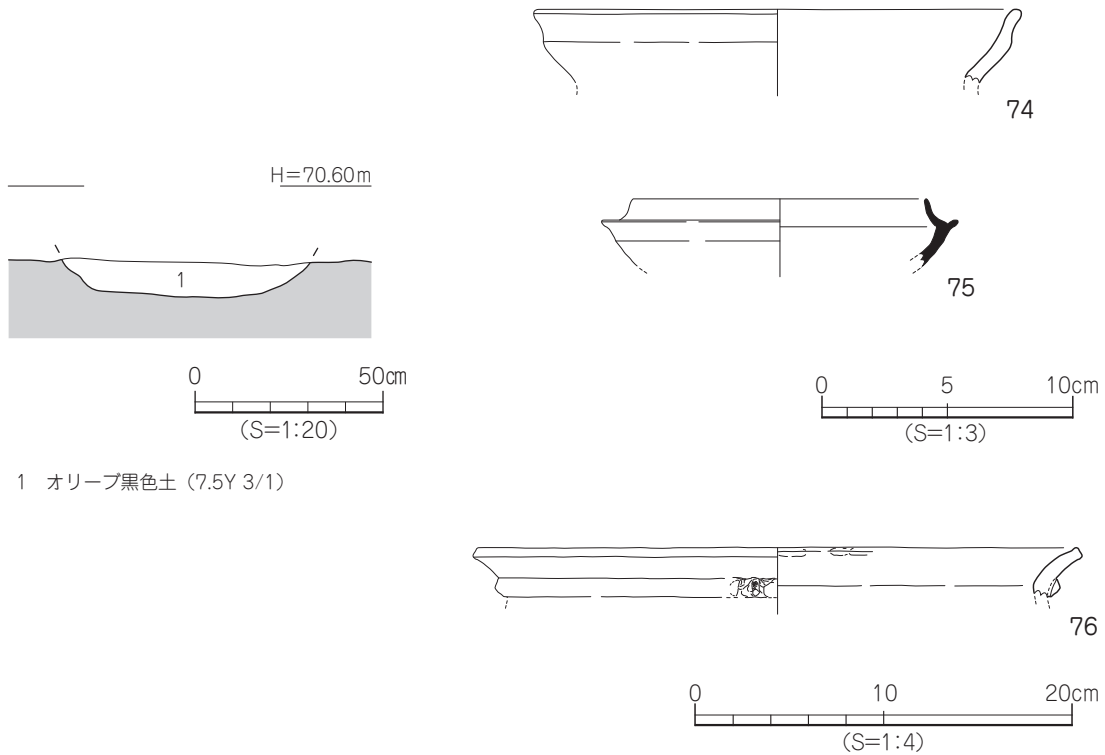
74は土師器甕。口縁部は内湾し、口縁中位に稜をもつ。75は須恵器坏身。たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。76は弥生土器。甕形土器の口縁部片で、頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に布目痕が残る。

時期：出土した須恵器、土師器の特徴より古墳時代後期、6世紀前葉とする。

SD302

3区東側C10区で検出した南北方向の短い溝で、溝南端は掘立302柱穴と重複し、SD302が先行する。規模は検出長1.00m、幅0.29m、深さは3cmである。断面形態は浅い皿状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)に明黄褐色土(10YR 7/6)がブロック状に混入するものである。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB301と類似することから、概ね古墳時代後期の溝とする。



第36図 SD301断面図・出土遺物実測図

(4) 土 坑

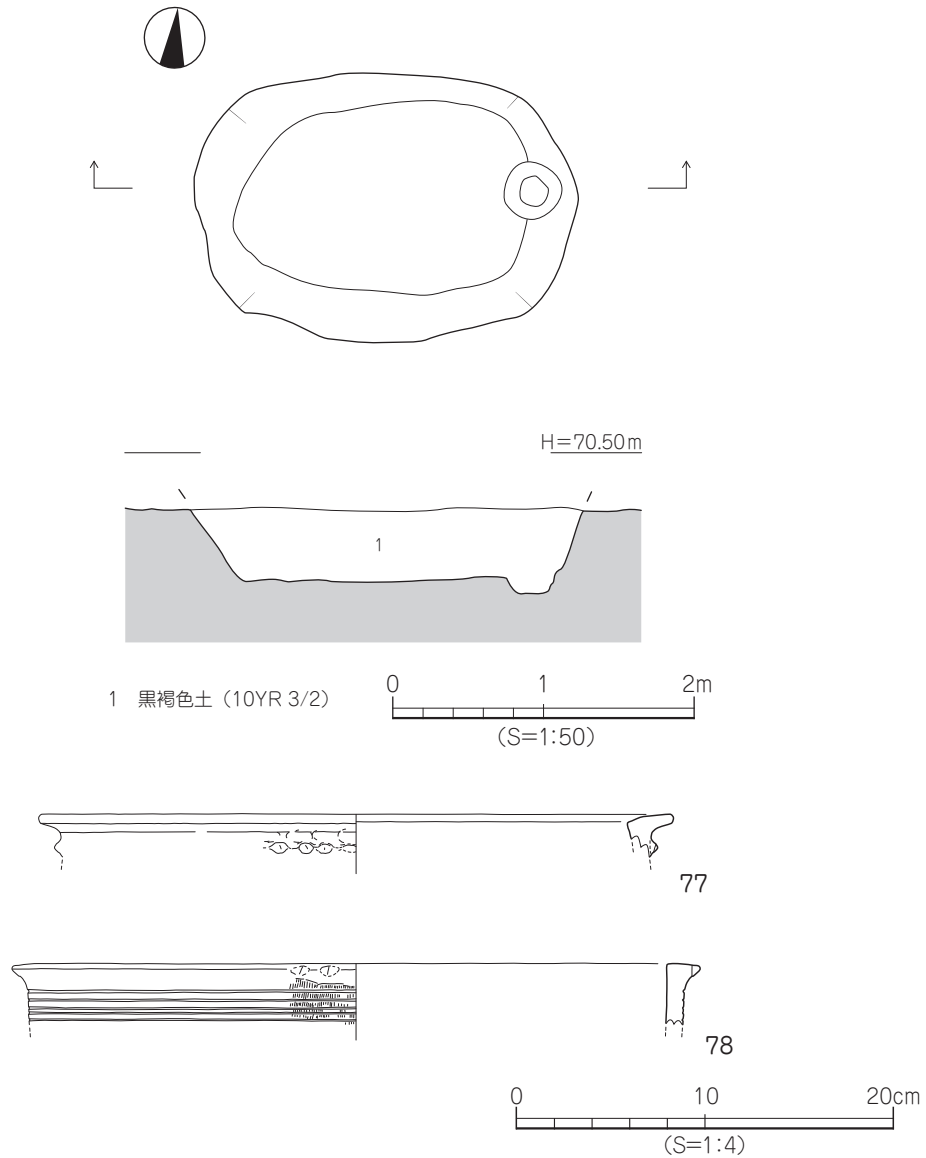
SK302 (第 37 図)

3区中央部南寄り C9区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 2.49m、短径 1.69m、深さは 43cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (10YR 3/2) 単層である。土坑基底面にて、径 40cm、深さ 12cmの小ピットを検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

77・78は弥生土器の甕形土器。77の口縁部は逆「L」字状をなし、頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を加える。78は貼り付けにより口縁部を形成し、口縁端部に刻目、胴部にはヘラ描き沈線文4条を施す。

時期：出土した弥生土器 (77) の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第 37 図 SK302 測量図・出土遺物実測図

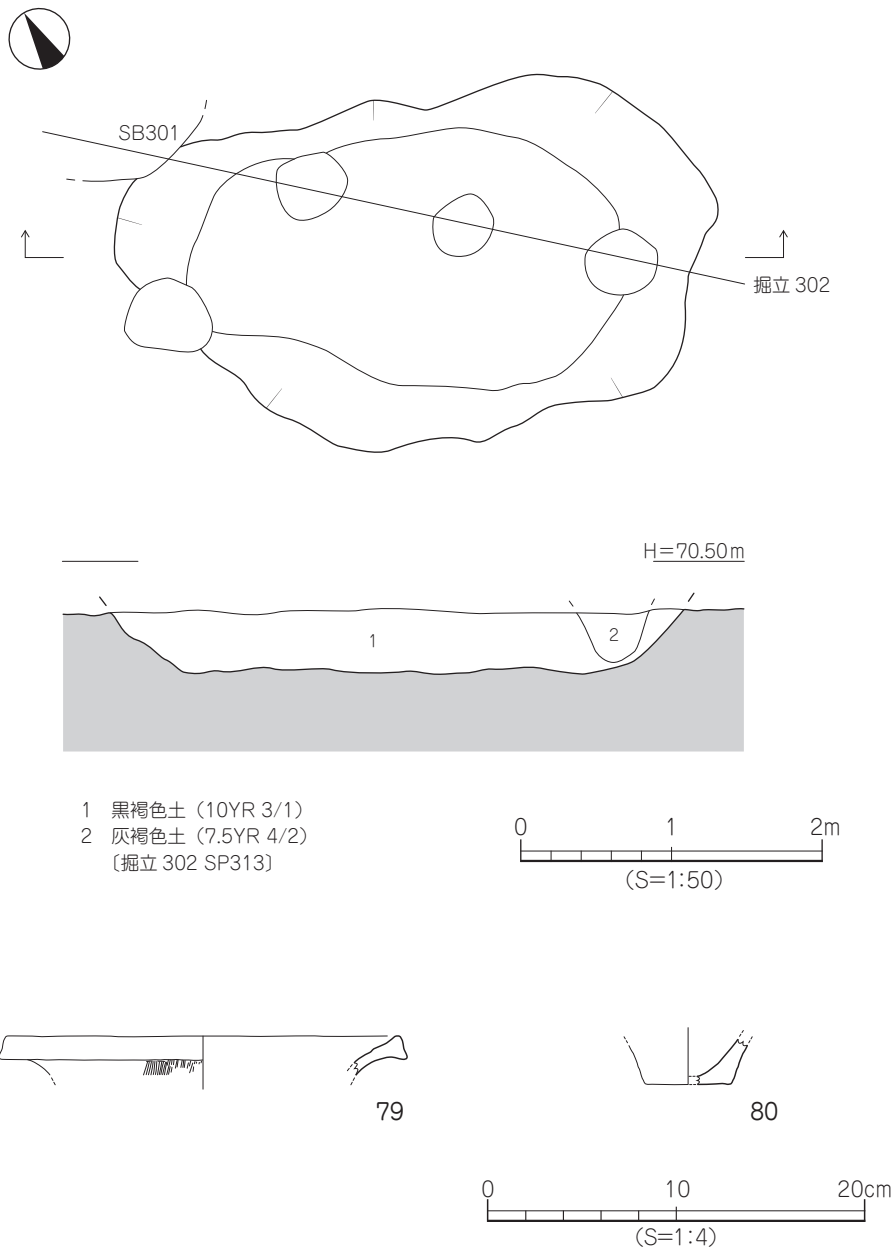
SK304 (第38図)

3区南東部C9・10区で検出した土坑で、SB301と掘立302と重複し、SK304が先行する。平面形態は楕円形をなし、規模は長径3.87m、短径2.18m、深さは39cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土(10YR 3/1)単層である。遺物は、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

79・80は弥生土器。79は広口壺で、口縁部を上下方に拡張し、口縁端面はナデにより凹む。80は甕形土器の底部で、僅かに上げ底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第38図 SK304 測量図・出土遺物実測図

SK308 (第 39 図)

3区中央部北寄り C8区で検出した土坑で、土坑上面にて溝 SD301 を検出した。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 2.01m、短径 1.91m、深さは 13cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (10YR 3/2) 単層である。遺物は、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

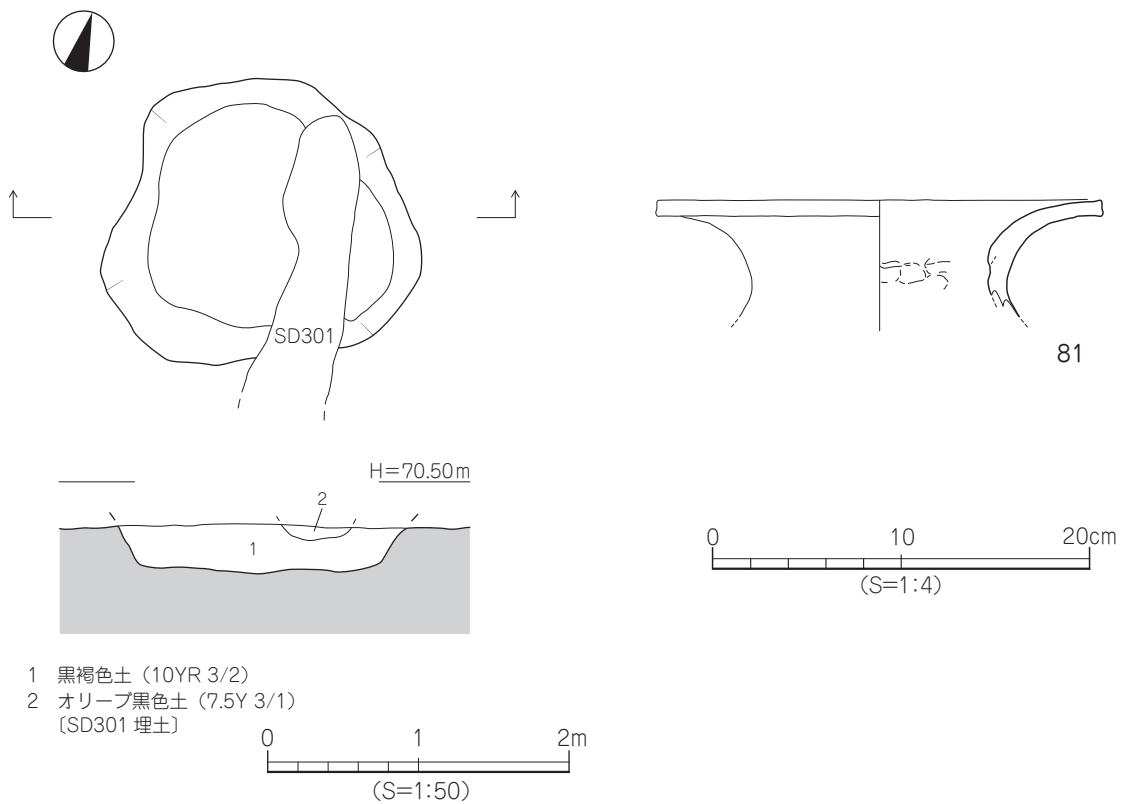
81 は弥生土器。広口壺で、口縁部は大きく外反し、口縁端面はナデにより凹む。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期中葉とする。

SK307

3区北西部 C8区で検出した土坑で、土坑北側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 3.31m、南北検出長 0.71m、深さは 8cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (10YR 3/2) 単層である。なお、埋土中には径 3～5cm 大の小礫が少量含まれていたが、土器の出土はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が SK302 や SK304 と酷似することから、概ね弥生時代中期中葉頃の土坑とする。



第 39 図 SK308 測量図・出土遺物実測図

SK305

3 区東側 C10 区で検出した土坑で、掘立 302 と重複し、SK305 が先行する。平面形態は楕円形をなし、規模は南北検出長 1.49m、東西長 1.41m、深さは 21cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰褐色土 (7.5YR 4/2) に、にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) がブロック状に混入する。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、掘立 302 に先行することから、概ね古墳時代後期以前の土坑とする。

SK309

3 区東側 C9・10 区で検出した土坑で、土坑北側は SB301 に一部削平されている。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長 1.68m、東西長 0.98m、深さは 9cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は褐灰色土 (7.5YR 4/1) に明黄褐色土 (10YR 7/6) がブロック状に混入する。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、SB301 に先行することや、1 区検出の SB101 と埋土が酷似することなどから、概ね古墳時代後期以前の土坑とする。

SK301

3 区東壁中央部南寄り C10 区で検出した土坑で、土坑東側は調査区外へ続く。壁面の土層観察より、土坑上面は第 IV 層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長 1.69m、東西検出長 0.49m、深さは 24cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。なお、埋土中には少量の炭化物や焼土が含まれている。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SB301 と類似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK303

3 区西側 C8 区で検出した土坑で、土坑南側は掘立 301 と重複し、SK303 が先行する。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は東西検出長 1.71m、南北長 0.94m、深さは 14cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) に黄褐色土 (10YR 5/8) がブロック状に混入する。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土が SB302 と類似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK310

3 区北東隅 B・C10 区で検出した土坑で、土坑北側及び東側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 2.49m、南北検出長 1.04m、深さは 24cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土が SB301 と類似することから、概ね古墳時代後期頃の土坑とする。

SK312

3区南西部C・D8区で検出した土坑で、土坑南側は調査区外へ続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長2.19m、南北検出長1.64m、深さは8cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。なお、埋土中には少量の炭化物や焼土が含まれている。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB301と類似することから、概ね古墳時代後期頃とする。

SK313

3区西側C8区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.84m、短径0.84m、深さは29cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSB302と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑とする。

SK311

3区東側C9・10区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径3.29m、短径0.94m、深さは14cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土はにぶい黄褐色土(10YR 5/4)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土や検出層位より、近現代の土坑とする。

(5) その他の遺構と遺物

1) 柱 穴

3区からは、58基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の3種類となる。

①類-灰褐色土(7.5YR 4/2)：27基

②類-黒色粘質土(N1.5/)：8基

③類-暗褐色土(7.5YR 3/3)に明黄褐色土(10YR 7/6)が混入：23基

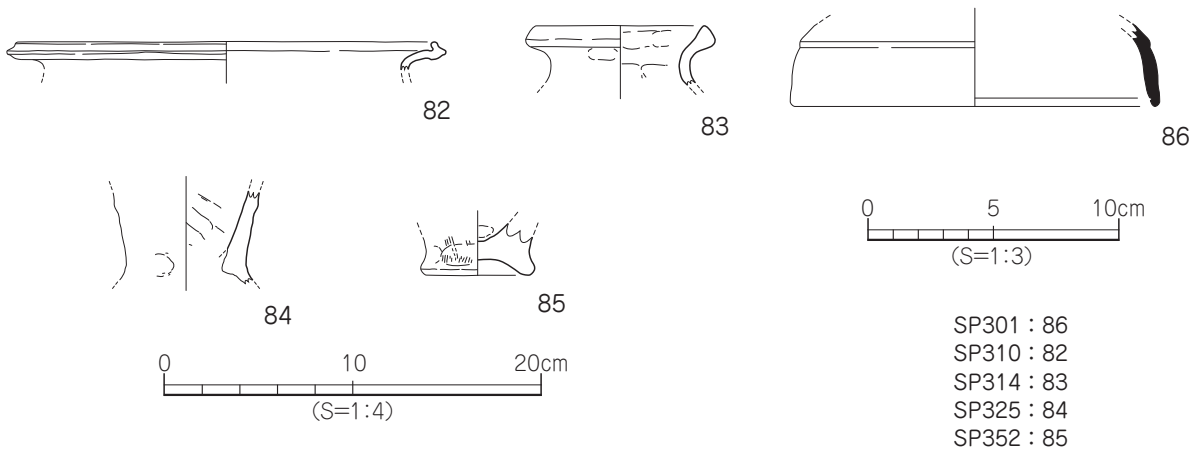
各柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器の小破片が少量出土したが、①類からは弥生土器、②・③類からは土師器や須恵器の破片が出土した。

出土遺物 (第40図)

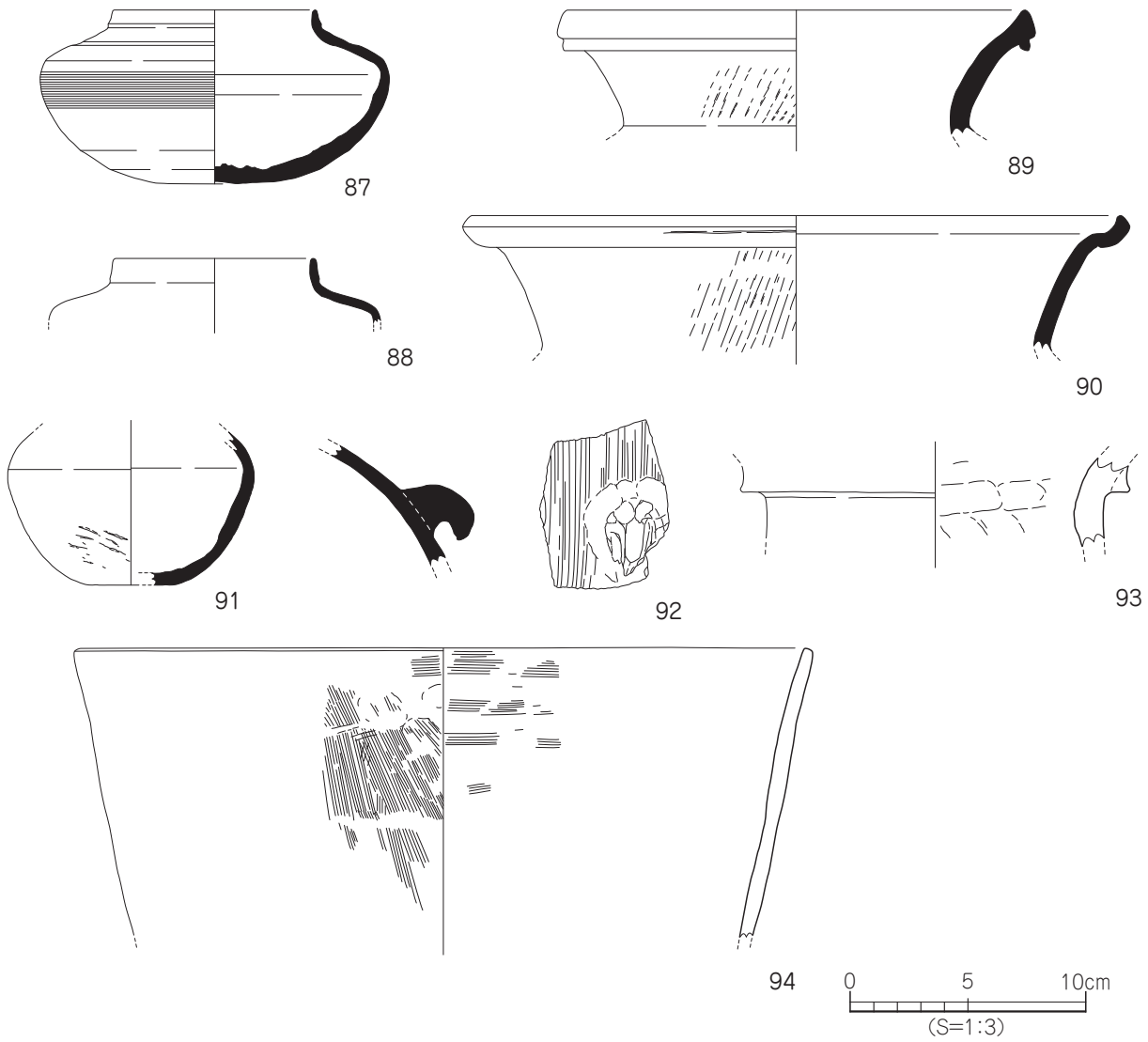
82～85は弥生土器。82はSP310出土の甕形土器で、口縁部を上方に拡張し、口縁端面はナデにより凹む。弥生時代中期後葉。83はSP314出土の壺形土器で、口縁部は肥厚する。弥生時代後期前葉。84はSP325、85はSP352出土品。84は壺形土器の頸部片、85は甕形土器の底部で、85は上げ底をなす。弥生時代中期後葉。86はSP301出土の須恵器坏蓋で、断面三角形の丸味のある稜をもち、口縁端部は尖り気味に丸い。古墳時代後期中葉。

2) 3区包含層出土遺物

3区では第IV層や第V層中より、弥生土器や土師器、須恵器のほかに石器が出土した。



第 40 図 3 区 柱穴出土遺物実測図



第 41 図 3 区 第IV層出土遺物実測図

① 第Ⅳ層出土遺物（第41図、図版15）

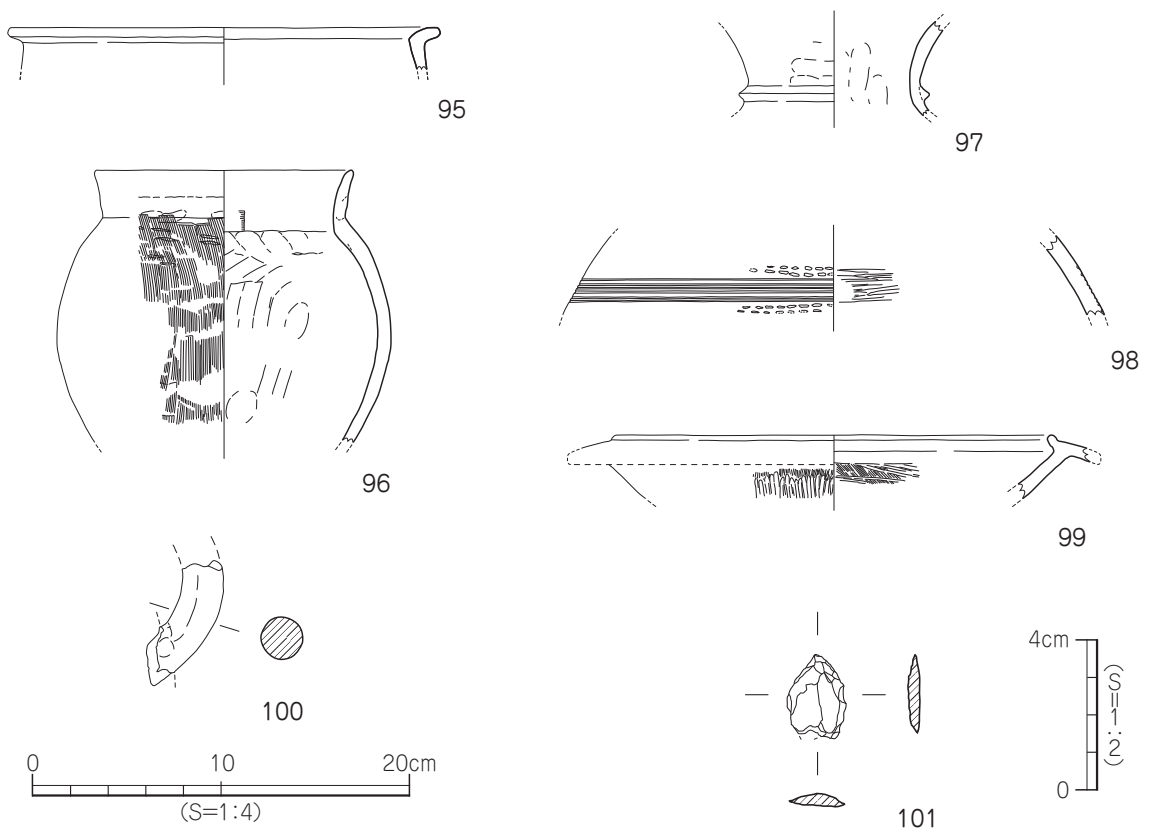
87～92は須恵器。87・88は短頸壺で、87の口縁端部は尖り気味に仕上げる。87の胴上部外面には回転カキメ調整がみられる。5世紀後葉。89は広口壺で、口縁部下に凸線が巡る。6世紀後葉。90は甕で、口縁部を内湾気味に拡張する。7世紀前葉。91は甕で、底部外面には叩きの痕跡が残る。6世紀。92は提瓶で、カギ状の把手をもつ。6世紀後葉。93・94は土師器。93は朝顔形埴輪で、断面三角形のタガをもつ。6世紀。94は甕で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。6世紀。

② 第Ⅴ層出土遺物（第42図、図版15）

95～100は弥生土器。95・96は甕形土器で、95は折曲により口縁部を成形する。弥生中期後葉。96は口縁部が僅かに外反し、胴部外面にはタタキ痕が残る。弥生末。97・98は壺形土器。97は頸部に凸帯を貼り付け、98はヘラ描き沈線文6条と、沈線文の上下に刺突文2列を施す。97は弥生時代中期中葉、98は弥生時代前期末。99は高坏形土器。口縁部は下外方に開き、口縁端部は内方に肥厚する。内外面共に、丁寧なヘラミガキを施す。弥生時代中期中葉。100はジョッキ形土器の把手部で、断面形態は円形をなす。弥生時代中期中葉。101は平基無茎式石鏃で、基部を欠損する。サヌカイト製。

(6) まとめ

3区では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は弥生時代と古墳時代及び近現代のものであり、弥生時代では土坑4基(中期中葉)、古墳時代は竪穴建物2棟(後期前葉・中葉)



第42図 3区 第Ⅴ層出土遺物実測図

と掘立柱建物 2 棟（後期中葉以降）、溝 2 条（後期前葉）、土坑 7 基を検出したが、溝 SD302 と 7 基の土坑は時期特定しうる遺物の出土がなく、検出層位や埋土等から 6 世紀代の遺構と考えた。

SB301・302 は隅丸形状の竪穴建物で、SB301 の北壁にはカマドが付設されている。カマド内には土師器甕が押し潰された状態で出土しており、建物廃絶に伴う祭祀行為が執り行われたものと推測される。廃絶時期は SB302 が後期前葉、SB301 は後期中葉である。なお、明確な時期は不明であるが、SB301 廃絶後に掘立 302 が構築されている。また、掘立 301 も掘立 302 と同様に時期特定は難しいが、他の遺構との重複より、概ね掘立 302 と同時期の建物と推測される。そのほかには、近現代の土坑 1 基を検出している。遺物は遺構や第Ⅴ層中より、弥生時代前期後半（98）や中期中葉から後期に時期比定される土器のほか、石鏃や石器剥片などが出土している。また、第Ⅳ層中からは古墳時代中期後葉から後期の土師器や須恵器が数多く出土しており、この中には朝顔形埴輪の破片 1 点（93）が含まれている。

【検出遺構】

- 弥生時代中期中葉：土坑 4 基（SK302・304・307・308）
- 古墳時代後期前葉：竪穴 1 棟（SB302）
- 溝 1 条（SD301）
- 古墳時代後期中葉：竪穴 1 棟（SB301）
- 掘立 2 棟（掘立 301・302）
- （古墳時代後期）：溝 1 条（SD302）
- 土坑 7 基（SK301・303・305・309・310・312・313）
- 近 現 代：土坑 1 基（SK311）

4. 4 区の調査

4 区では竪穴建物 1 棟、溝 2 条、土坑 2 基、柱穴 2 基のほか、石室 1 基を検出した（第 43 図、図版 4）。

（1）竪穴建物

SB401

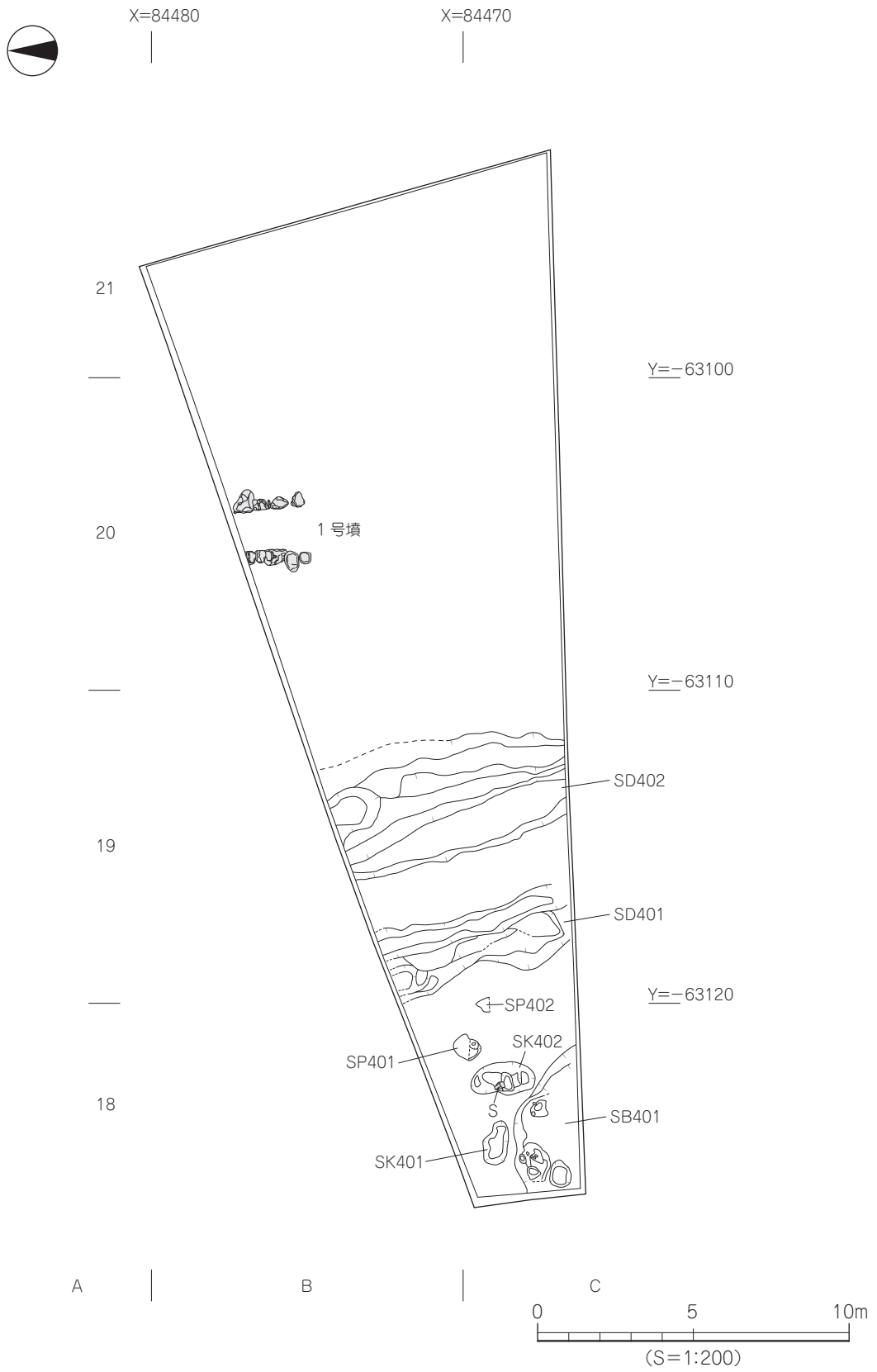
4 区南西隅 C18 区に位置する竪穴建物で、南側及び東側は調査区外へ続く。SB401 は第 4 章に掲載する 8 区検出の竪穴建物 SB801 と同一建物であり、詳細は第 4 章にて説明する。なお、建物埋土中からは弥生土器の小破片が少量出土したが、図化しうるものはない。ただし、外面に叩き調整がみられる破片が数点あり、SB401 の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。

（2）古 墳

1 号墳（第 44 図、図版 5）

4 区北壁中央部東寄り B20 区で検出した古墳で、石室 1 基を検出した。石室北側は調査区北側へ続き、南側は後世の開発等により削平されている。なお、墳丘は遺存しておらず、僅かに盛土と思われる土壌が部分的に検出された。1 号墳は横穴式の石室を主体部にもち、石室規模は現存長 2.0m、幅 1.2m である。両側壁には 4 個の基底石が残存しており、西側壁には 2 段の積石が残っている。石室には径

遺構と遺物

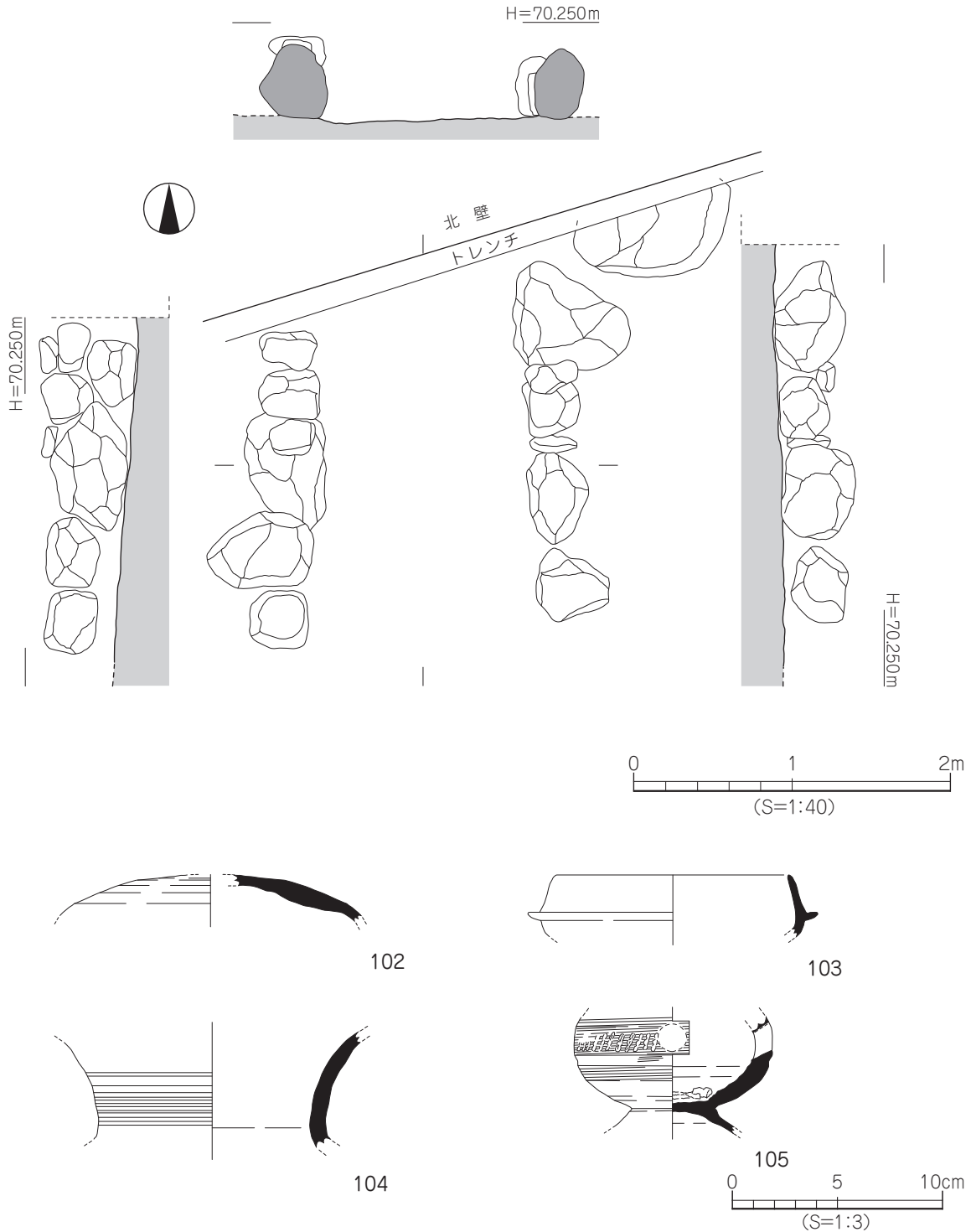


第 43 図 4区遺構配置図

20～80cm大の花崗岩が使用されており、石室内は上部からの崩落土と思われる褐色土で埋まっており、当時の状況を留めていない。石室内からは遺物の出土はないが、盛土内からは須恵器や土師器片が出土した。

出土遺物（図版 15）

102～105は須恵器。102は坏蓋、103は坏身の破片で、103のたちあがり端部は尖り気味に丸く仕



第44図 1号墳測量図・出土遺物実測図

上げる。104は壺の頸部片で、回転カキメ調整がみられる。105は脚付きの甕で、胴部に沈線と刺突列点文を施す。

時期：出土遺物の特徴より、古墳の造営時期は古墳時代後期、7世紀中葉頃と考えられる。

(3) 溝

SD401 (第45図)

4区中央部B・C19区で検出した南北方向の溝で、溝両端は調査区外へ続く。壁面の土層観察により、溝上面は第IV層が覆う。規模は検出長6.00m、最大幅2.40m、深さは10～30cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土はオリーブ黒色土(7.5Y 3/2)である。溝基底面には凹凸があり、南側から北側へ傾斜をなす(比高差12cm)。溝内からは土師器や須恵器の破片や径10～30cmの河原石が数点出土した。なお、検出層位や検出状況から、SD401は1号墳に伴う周溝の可能性はある。

出土遺物

106は須恵器の坏身。底部片で、外面に線刻(ヘラ記号)を施す。内面には、同心円叩きが残る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね古墳時代後期、7世紀代とする。

SD402 (第46図、図版5)

4区中央部B・C19区で検出した南北方向の溝で、壁面の土層観察によりSD402は第V層上面から掘削された遺構である。規模は検出長7.60m、幅2.50～3.80m、深さは10～35cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄褐色土(10YR 5/2)である。溝基底面には凹凸が著しく、数か所で凹みがみられる。溝内からは土師器や須恵器の破片が少量出土したほか、径10～20cm大の河原石が散在して出土した。

出土遺物 (図版15)

107は須恵器の提瓶で、口縁端部は長方形に肥厚する。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね古墳時代後期、7世紀前葉とする。

(4) 土 坑

SK401

4区西端C18区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.40m、短径0.80m、深さは36cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土(10YR 2/3)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土が3区で検出した古墳時代後期の遺構と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑と考えられる。

SK402

4区西側C18区で検出した土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径2.08m、短径1.00m、深さは38cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土(10YR 2/3)単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、SK401と同様、埋土が3区で検出した古墳時代の遺

構と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑と考えられる。

(5) その他の遺構と遺物

1) 柱 穴

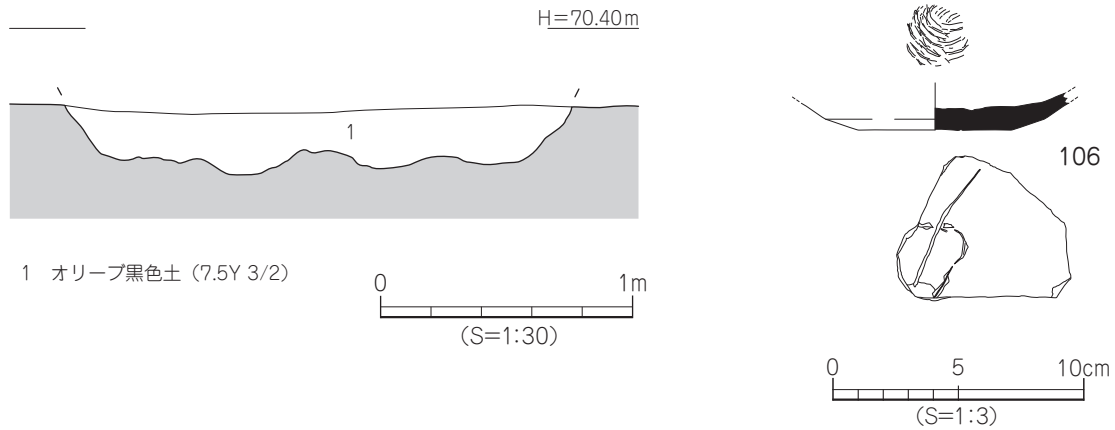
4区では、2基の柱穴を検出した。SP401・402の掘り方埋土は黒褐色土(10YR 3/1)単層である。柱穴内からは遺物の出土がなく時期特定は難しいが、埋土がSD401・402と酷似することから、概ね古墳時代の遺構とする。

2) 4区包含層出土遺物

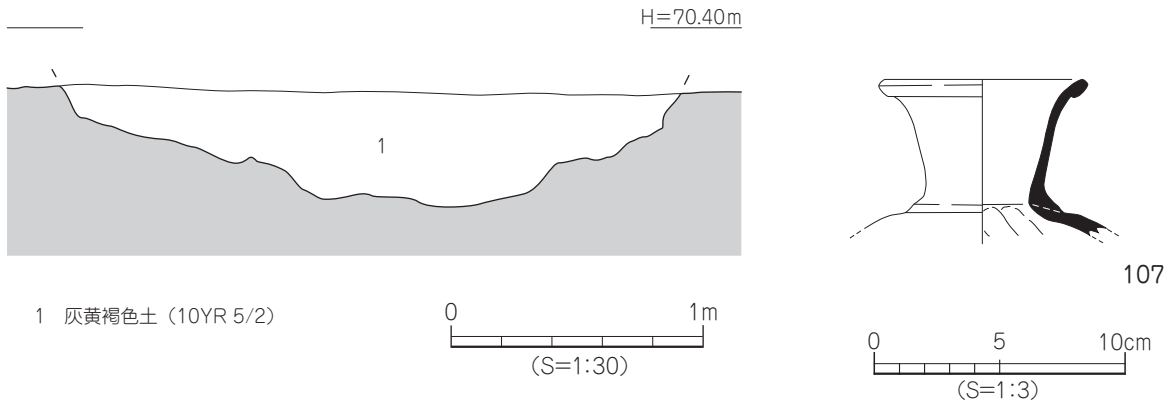
4区では第Ⅲ層や第Ⅴ層中より弥生土器や土師器、須恵器などの破片が出土したほか、石器が数点出土した。

① 第Ⅲ層出土遺物 (第47図、図版15)

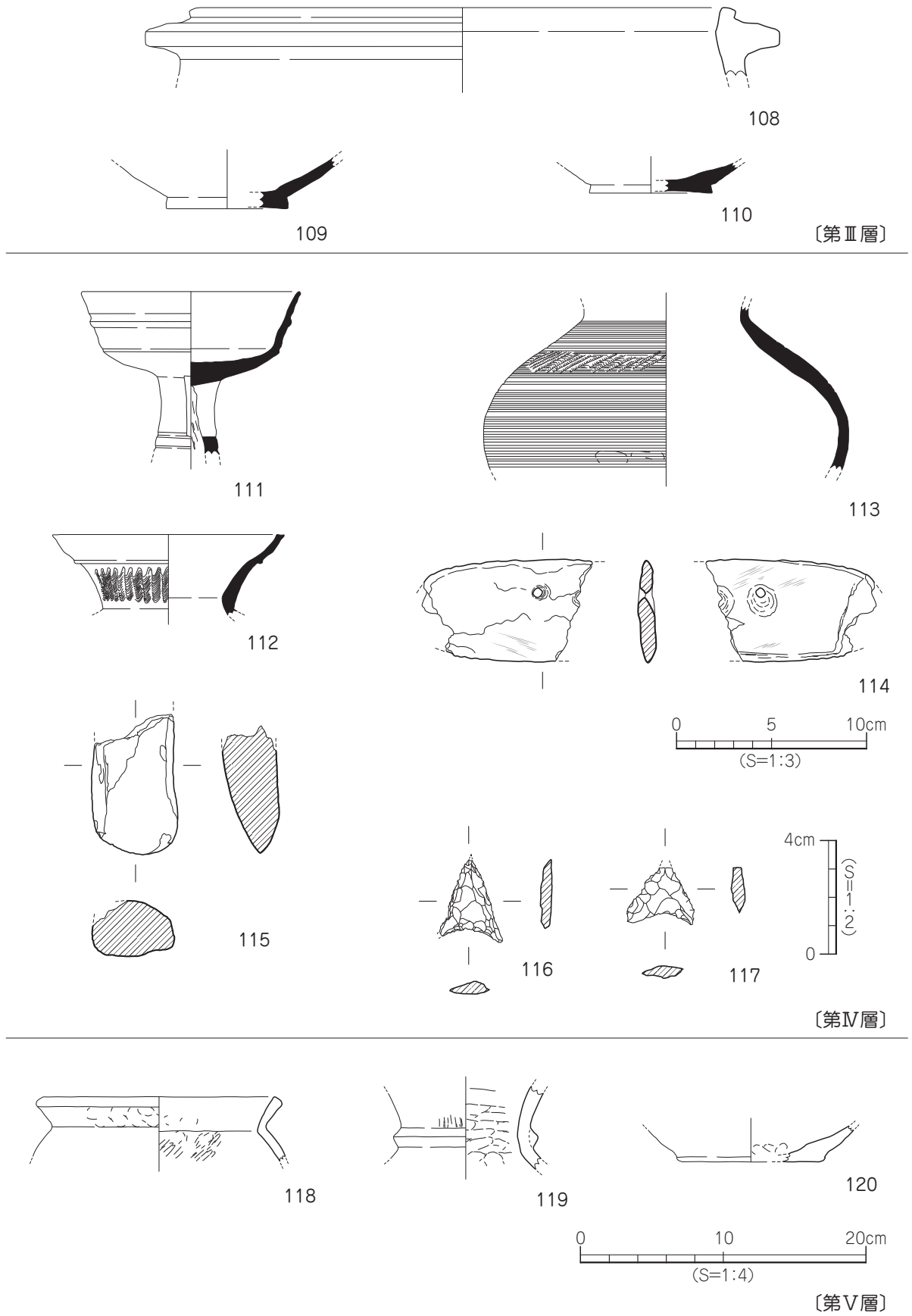
108は土師器の土釜で、断面方形の太い鑿を貼り付ける。109・110は須恵器の坏。円盤高台状の底部で、底部外面には回転糸切り痕が顕著に残る。平安時代後期。



第45図 SD401 断面図・出土遺物実測図



第46図 SD402 断面図・出土遺物実測図



第47図 4区 第III・IV・V層出土遺物実測図

② 第Ⅳ層出土遺物（第 47 図、図版 16）

111～113は須恵器。111は無蓋高坏で、坏部に凸線1条が巡り、脚部中位には2条の沈線が巡る。なお、長方形の透かしが2方向にみられる。6世紀後葉。112は甗。口縁端部は内傾する面をもち、頸部には波状文を施す。5世紀後葉。113は短頸壺。肩部に沈線と刺突列点文を施し、胴部中位には回転カキメ調整がみられる。6世紀後葉。114は石庖丁で、両面から穿孔である。結晶片岩製。115は伐採斧で、基部を欠損する。結晶片岩製。114・115共に破損品。116・117は凹基無茎式石鏃で、石材は116が赤色珪質岩、117はサヌカイトである。

③ 第Ⅴ層出土遺物（第 47 図）

118・119は弥生土器。118は甕形土器で、口縁部は外反し、口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。弥生時代後期前半。119は壺形土器で、頸部に凸帯を貼り付ける。弥生時代中期中葉。120は土師器の坏で、円盤高台状の底部をもつ。平安時代後期。

（6）まとめ

4区では、弥生時代から古代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、弥生時代の竪穴建物1棟と古墳時代の溝2条、土坑2基のほかに古墳1基である。弥生時代では、第Ⅳ層や第Ⅴ層中より弥生時代中期後葉から後期の土器が出土した。古墳時代は6世紀代と思われる土坑2基と、7世紀代の溝2条が検出されている。さらに、4区からは古墳1基を確認した。1号墳は横穴式石室を埋葬施設に持つ後期古墳であるが、遺存状態が良好でなく、墳形や規模は不明である。石室内からは遺物の出土がなく、正確な造営時期は不明であるが、石室周囲からは6世紀後葉から7世紀中葉の土器片が出土した。このことから、1号墳の造営時期は概ね7世紀中頃と考えられる。遺物では第Ⅳ層中からは石庖丁や石鏃、石斧など完形品や破損品が数点出土している。また、古代の遺構は未検出であるが、第Ⅲ層中より平安時代に時期比定される土師器や須恵器が少量出土している。

【検出遺構】

弥生時代末：竪穴 1 棟（SB401・・・SB801 と同一の建物）

古墳時代末：古墳 1 基（1号墳）

溝 2 条（SD401・402）

土坑 2 基（SK401・402）

第4節 小 結

恵原新張遺跡 1 次調査では、弥生時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。時代別に概要をまとめる（表 4）。

1. 弥生時代

弥生時代の遺構は、2・3・4区にて竪穴建物2棟と土坑6基を検出した。2区検出のSB201は推定直径6mの円形竪穴建物で、建物内からは弥生時代中期後葉に時期比定される土器が出土している。4区ではSB401を検出しているが、建物の大半は調査区外に続いており、形態や規模は定かではない

が、後述する 8 区検出の SB801 と同一建物であり、詳細は第 4 章にて説明する。なお、建物廃絶時期は、弥生時代後葉から末である。このほか、3 区からは 4 基の土坑を検出した。このうち、3 基の土坑(SK302・304・308)からは弥生時代中期中葉に時期比定される土器片が出土した。このことから、調査地内における集落の出現期は弥生時代中期中葉である。これら遺構以外には、第 V 層中より弥生時代前期後葉から末、及び中期中葉から後期前葉に時期比定される土器が出土している。

2. 古墳時代

古墳時代の遺構は、1・3・4 区より竪穴建物 3 棟、掘立柱建物 2 棟、溝 5 条、土坑 13 基のほか古墳 1 基が検出されている。竪穴建物は 1 区と 3 区で検出した。SB101 は一辺 6 m の隅丸方形建物で、建物内からは古墳時代中期後葉、5 世紀後葉の須恵器や土師器が数多く出土した。なお、SB101からは大量の炭化物や焼土が検出されており、火災による焼失建物と考えられる。また、3 区からは 2 棟の竪穴建物が検出された。SB301 は一辺 6.3 m の隅丸方形建物で、古墳時代後期中葉に時期比定される土器が出土した。一方、SB301 に隣接して SB302 が検出された。SB302 は建物全体の約 8 割が検出されており、一辺 6.1 m の隅丸方形建物である。出土遺物より、6 世紀前葉の建物である。SB101 と SB301 からは、造り付けのカマドを確認した。両者共に建物北壁中央部にカマドが付設されており、SB301 のカマド内には土師器甕が押し潰された状態で埋まっていた。おそらく、建物廃絶に伴う祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。カマドの検出は当時の厨房施設が知れる貴重な資料であり、さらに建物廃絶の方法を解明するうえでも重要な成果を得ることができた。なお、SB301 廃絶後には、掘立柱建物（掘立 302）が構築される。明確な時期は不明であるが、概ね 6 世紀中葉以降に建てられた建物である。掘立 302 は桁行 5 間、梁行 4 間規模の側柱構造の建物である。一方、掘立 301 は 3 間 × 4 間以上の総柱構造の建物であり、高床部をもつものである。なお、建物には、柱材が一部残存す

表 4 恵原新張遺跡 1 次調査 検出遺構一覧

時 代		1 区	2 区	3 区	4 区
弥生時代	前期末			(第 V 層)	
	中期中葉			土坑：4 基	
	中期後葉	(第 IV 層)	竪穴：1 棟 土坑：2 基	(第 V 層)	(第 V 層)
	末				竪穴：1 棟
古墳時代	中期後葉	竪穴：1 棟 土坑：3 基	(第 IV 層)		(第 IV 層)
	後期前葉	溝：1 条	(第 IV 層)	竪穴：1 棟 溝：1 条	
	後期中葉			竪穴：1 棟 掘立：2 棟	
	後期末			(第 IV 層)	石室：1 基 溝：2 条
	〔後期〕	土坑：1 基		溝：1 条 土坑：7 基	土坑：2 基
古 代					(第 III 層)
中 世			(第 II 層)		
近現代		土坑：3 基	溝：3 条 土坑：10 基	土坑：1 基	

る柱穴が1基認められた。構築時期は定かではないが、柱穴掘り方埋土や検出状況などから、概ね掘立302と同時期の建物と推測される。建物の推移をみると、古墳時代後期中葉を前後して、住居形態が竪穴建物から掘立柱建物へ移行した可能性がある。

このほか、4区からは古墳1基を検出した。1号墳の遺存状態は良好でなく、墳形や規模は不明であるが、横穴式石室を主体部にもつ古墳である。調査では玄室の一部を検出したが、石室内からは遺物の出土はなく正確な構築時期は分からないが、周辺の存在する盛土と思われる土壌からは古墳時代後期末、7世紀前葉から中葉の須恵器片が出土しており、概ね7世紀中葉頃の築造と推測される。

3. 古代

古代の遺構は未検出であるが、4区検出の第Ⅲ層中からは平安時代後期の土器片が出土した。この中には土師器や須恵器の坏と土師器の羽釜などがあり、これらの遺物は調査地近隣地域に古代集落が存在することを示す資料といえよう。

4. 中世

中世の遺構は古代と同様に検出されなかったが、2区検出の第Ⅱ層中からは鎌倉時代に時期比定される土師器坏9点がまとまって出土した。明確な掘り方は検出されなかったが、本来は遺構に伴う可能性の高い遺物である。古代同様、調査地近隣には中世集落の存在が伺われる。

5. 近現代

4区を除き、近現代に構築されたとと思われる溝や土坑が検出されている。これらは検出状況から、水田耕作や畑耕作に伴う遺構の可能性がある。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地 区 欄：グリッド名を記載。

規 模 欄：()は現存値を示す。

埋 土 欄：複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例)「褐灰色土 他」

出土遺物欄：遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、石→石器

(2) 遺物観察表

法 量 欄 ()：復元推定値

調 整 欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、つ→つまみ、頸→頸部、

体→体部、胴→胴部、胴上→胴部上半部、胴下→胴部下半部、底→底部

胎 土 欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒、黒→黒色酸化土粒

()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4)→「1～4mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 欄 焼成欄の略記について

◎→良好

遺構一覽

表5 竪穴建物一覽

竪穴 (SB)	区	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×壁高 (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	E1・2	隅丸方形	(6.08) × (3.24) × 0.24	褐灰色土 他	土師・須恵	古墳中期後葉
201	2	C6	円形	(4.58) × (1.84) × 0.24	黒褐色土	弥生・石	弥生中期後葉
301	3	B9～C10	隅丸方形	6.36 × 6.21 × 0.26	暗褐色土 他	弥生・土師・須恵・石	古墳後期中葉
302	3	C8・9	隅丸方形	(6.11) × (5.61) × 0.22	暗褐色土 他	弥生・土師・須恵・石	古墳後期前葉
401	4	C18	円形	(4.00) × (2.00) × 0.10	黒褐色土 他	弥生・石	弥生末

表6 掘立柱建物一覽

掘立	区	地 区	方 位	構 造	規 模		床面積 (㎡)	出土遺物	時 期
					桁行長 (m)	梁行長 (m)			
301	3	C7～D8	東西	総柱	4.27 (4間以上)	3.90 (3間以上)	20.85	弥生・土師・須恵	古墳後期中葉以降
302	3	C9～10	東西	側柱	5.89 (5間)	5.22 (4間)	30.74	弥生・土師・須恵	古墳後期中葉以降

表7 溝一覽

溝 (SD)	区	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	D・E2	舟底状	(5.71) × 2.00 × 0.26	灰色土 (黄褐色土混入)	土師・須恵	古墳後期前葉
201	2	C4～D5	皿状	(7.61) × 6.00 × 0.20	明黄褐色土		近現代
202	2	C・D6	皿状	(5.91) × 1.56 × 0.11	灰白色土 (黄褐色土混入)		近現代
203	2	D5	皿状	(2.38) × 0.64 × 0.15	灰黄色土		近現代
301	3	C・D8	皿状	(8.04) × 0.60 × 0.06	オリーブ黒色土	弥生・土師・須恵	古墳後期前葉
302	3	C10	皿状	(1.00) × 0.29 × 0.03	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳後期
401	4	B・C19	レンズ状	(6.00) × 2.40 × 0.30	オリーブ黒色土	土師・須恵・石	古墳後期
402	4	B・C19	レンズ状	(7.60) × 3.80 × 0.35	灰黄褐色土	土師・須恵・石	古墳後期

表8 土坑一覽

(1)

土坑 (SK)	区	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	E2	楕円形	逆台形状	1.49 × (1.01) × 0.06	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳中期後葉以前
102	1	E1	円形	逆台形状	1.01 × (0.54) × 0.35	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳中期後葉以前
103	1	E1・2	楕円形	逆台形状	(2.59) × 2.21 × 0.24	褐灰色土 (黄褐色土混入)	土師・須恵	古墳中期後葉
104	1	D3	楕円形	逆台形状	(1.09) × (1.00) × 0.53	明褐色土		近現代
105	1	D3～E3	楕円形	逆台形状	3.81 × (3.31) × 0.14	灰色粘質土		近現代
106	1	D2	楕円形	逆台形状	2.94 × (1.84) × 0.14	暗褐色土 (黄褐色土混入)		古墳後期
107	1	D2・3	不整楕円形	逆台形状	(2.10) × 1.21 × 0.25	灰白色粘質土		近現代
201	2	D6	楕円形	逆台形状	0.81 × 0.54 × 0.11	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
202	2	D5	楕円形	逆台形状	1.34 × 0.91 × 0.13	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
203	2	D5・6	不整楕円形	逆台形状	3.50 × (1.06) × 0.20	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
204	欠 番							
205	2	D3	楕円形	逆台形状	1.41 × (1.00) × 0.24	暗灰色土		弥生中期後葉
206	2	D3	楕円形	逆台形状	1.74 × (1.04) × 0.24	暗灰色土		弥生中期後葉
207	2	D5	楕円形	逆台形状	0.84 × 0.61 × 0.09	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
208	2	C・D5	楕円形	逆台形状	1.71 × 1.61 × 0.04	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
209	2	D4・5	円形	逆台形状	1.24 × (0.61) × 0.18	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代

惠原新張遺跡 1 次調査

土坑一覽

(2)

土坑 (SK)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
210	2	D5	楕円形	逆台形状	(2.81) × (1.69) × 0.31	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
211	2	C6	楕円形	逆台形状	3.91 × (0.98) × 0.36	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
212	2	D4	楕円形	逆台形状	3.21 × (1.21) × 0.12	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
213	2	D4	楕円形	逆台形状	2.21 × (1.31) × 0.08	暗青灰色土 (黄褐色土混入)		近現代
301	3	C10	楕円形	逆台形状	(1.69) × (0.49) × 0.24	暗褐色土 (炭・焼土混入)		古墳後期
302	3	C9	楕円形	逆台形状	2.49 × 1.69 × 0.43	黒褐色土	弥生	弥生中期中葉
303	3	C8	不整楕円形	逆台形状	(1.71) × 0.94 × 0.14	暗褐色土 (黄褐色土混入)		古墳後期
304	3	C9・10	楕円形	逆台形状	3.87 × 2.18 × 0.39	黒褐色土	弥生	弥生中期中葉
305	3	C10	楕円形	逆台形状	(1.49) × 1.41 × 0.21	灰褐色土 (にぶい黄褐色土混入)		古墳後期以前
306	欠 番							
307	3	C8	楕円形	逆台形状	(3.31) × (0.71) × 0.08	黒褐色土		弥生中期中葉
308	3	C8	不整楕円形	逆台形状	2.01 × 1.91 × 0.13	黒褐色土	弥生	弥生中期中葉
309	3	C9・10	楕円形	逆台形状	(1.68) × 0.98 × 0.09	褐灰色土 (明黄褐色土混入)		古墳後期以前
310	3	B・C10	楕円形	逆台形状	(2.49) × (1.04) × 0.24	暗褐色土		古墳後期
311	3	C9・10	楕円形	逆台形状	3.29 × 0.94 × 0.14	にぶい黄褐色土		近現代
312	3	C・D8	楕円形	逆台形状	(2.19) × (1.64) × 0.08	暗褐色土 (炭・焼土混入)		古墳後期
313	3	C8	楕円形	逆台形状	1.84 × 0.84 × 0.29	暗褐色土		古墳後期
401	4	C18	楕円形	逆台形状	1.40 × 0.80 × 0.36	黒褐色土		古墳後期
402	4	C18	不整楕円形	逆台形状	2.08 × 1.00 × 0.38	黒褐色粘質土		古墳後期

表9 柱穴一覽

(1)

柱穴 (SP)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	E1	円形	0.40 × 0.34 × 0.29	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳
102	1	E1	円形	0.45 × 0.38 × 0.34	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳
103	1	E1	円形	0.42 × 0.41 × 0.48	褐灰色土 (黄褐色土混入)		古墳
201	2	C6	楕円形	0.22 × 0.18 × 0.17	暗灰色土		弥生後期
202	2	C6	楕円形	0.18 × 0.14 × 0.17	暗灰色土		弥生後期
203	2	C6	円形	(0.16) × 0.16 × 0.08	暗灰色土		弥生後期
204	2	C6	円形	0.22 × 0.21 × 0.07	暗灰色土		弥生後期
205	2	C6	円形	0.21 × 0.20 × 0.08	暗灰色土		弥生後期
206	2	D6	円形	0.26 × 0.24 × 0.11	暗灰色土		弥生後期
207	2	D6	円形	0.26 × 0.25 × 0.16	暗灰色土		弥生後期
208	2	D6	円形	0.21 × 0.20 × 0.08	暗灰色土		弥生後期
209	2	D6	円形	0.26 × 0.24 × 0.24	暗灰色土		弥生後期
210	2	D6	円形	0.26 × 0.25 × 0.10	暗灰色土		弥生後期
211	2	D5	楕円形	0.22 × 0.10 × 0.08	暗灰色土		弥生後期
212	2	D5	円形	0.21 × 0.20 × 0.04	灰白色土 (黄褐色土混入)		近現代
213	2	D5	円形	(0.24) × 0.20 × 0.04	灰白色土 (黄褐色土混入)		近現代

遺構一覽

柱穴一覽

(2)

柱穴 (SP)	区	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
214	2	D5	橢円形	0.58 × 0.40 × 0.06	暗灰色土		弥生後期
215	欠 番						
216	2	D4	円形	0.31 × 0.31 × 0.02	暗灰色土		弥生後期
217	2	D4	円形	0.32 × 0.31 × 0.03	暗灰色土		弥生後期
218	2	D4	円形	0.18 × 0.14 × 0.02	暗灰色土		弥生後期
219	2	D4	円形	0.14 × 0.14 × 0.03	暗灰色土		弥生後期
220	2	D4	橢円形	0.14 × 0.08 × 0.03	暗灰色土		弥生後期
221	2	D3	円形	0.21 × 0.20 × 0.04	暗灰色土		弥生後期
222	2	D3	橢円形	0.31 × 0.24 × 0.06	暗灰色土		弥生後期
223	2	D5	円形	0.34 × 0.30 × 0.05	灰白色土 (黄褐色土混入)		近現代
224	2	C6	円形	0.32 × 0.31 × 0.17	暗灰色土		弥生後期
301	3	C9	円形	(0.58) × 0.54 × 0.47	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
302	3	C9	円形	0.68 × (0.44) × 0.43	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
303	3	C8	円形	0.58 × (0.22) × 0.24	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	石	古墳
304	3	C9	円形	0.54 × (0.22) × 0.08	灰褐色土		古墳
305	3	C8	橢円形	(0.24) × 0.20 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
306	3	C10	橢円形	0.79 × 0.62 × 0.43	灰褐色土	弥生・土師	古墳
307	3	C10	橢円形	0.74 × 0.66 × 0.48	灰褐色土		古墳
308	3	C10	円形	0.51 × 0.48 × 0.39	灰褐色土	弥生	古墳
309	3	C10	円形	0.32 × (0.18) × 0.24	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	土師	古墳
310	3	C10	橢円形	0.74 × 0.69 × 0.32	灰褐色土	弥生	古墳
311	3	C10	橢円形	0.66 × 0.60 × 0.26	灰褐色土	弥生・土師	古墳
312	3	C10	橢円形	0.79 × 0.57 × 0.46	灰褐色土		古墳
313	3	C9	円形	0.41 × 0.41 × 0.32	灰褐色土	弥生	古墳
314	3	C9	円形	0.39 × 0.39 × 0.48	灰褐色土	弥生	古墳
315	3	C9	円形	0.44 × 0.44 × 0.32	灰褐色土	弥生	古墳
316	3	C9	円形	0.54 × 0.54 × 0.31	灰褐色土		古墳
317	3	C8	橢円形	0.74 × 0.71 × 0.29	黒色粘質土		古墳
318	3	C8	橢円形	0.58 × 0.49 × 0.40	黒色粘質土		古墳
319	3	D8	橢円形	0.54 × 0.48 × 0.34	黒色粘質土		古墳
320	3	C7・8	橢円形	0.71 × 0.64 × 0.31	黒色粘質土		古墳
321	3	C7	円形	0.64 × 0.61 × 0.14	黒色粘質土		古墳
322	3	C7	円形	0.52 × 0.44 × 0.18	黒色粘質土		古墳
323	3	D7	不整円形	0.61 × 0.46 × 0.21	黒色粘質土		古墳
324	3	C7	橢円形	0.71 × 0.48 × 0.29	黒色粘質土		古墳
325	3	C7	円形	0.54 × 0.48 × 0.24	灰褐色土	弥生	古墳
326	3	C10	円形	0.58 × 0.56 × 0.26	灰褐色土		古墳

惠原新張遺跡 1 次調査

柱穴一覽

(3)

柱穴 (SP)	区	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
327	3	C10	円形	0.34 × 0.32 × 0.21	灰褐色土		古墳
328	3	C10	円形	0.18 × 0.18 × 0.18	灰褐色土		古墳
329	3	C9	円形	0.26 × 0.24 × 0.09	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
330	3	C10	円形	0.27 × 0.25 × 0.06	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
331	3	C9・10	橢円形	0.80 × 0.58 × 0.32	灰褐色土		古墳
332	3	C9	橢円形	0.72 × 0.54 × 0.22	灰褐色土		古墳
333	3	C9	橢円形	0.70 × 0.64 × 0.14	灰褐色土		古墳
334	3	C10	円形	0.30 × 0.30 × 0.18	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
335	3	C9・10	橢円形	0.38 × 0.24 × 0.05	灰褐色土		古墳
336	3	C9	橢円形	0.58 × 0.48 × 0.05	灰褐色土		古墳
337	3	C8	円形	0.22 × 0.22 × 0.15	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
338	3	C8	橢円形	0.24 × 0.22 × 0.22	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
339	3	C8	円形	0.29 × 0.29 × 0.18	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
340	3	C8	円形	0.34 × (0.21) × 0.05	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
341	3	C9	橢円形	(0.56) × 0.42 × 0.04	灰褐色土		古墳
342	3	C9	円形	0.32 × 0.32 × 0.06	灰褐色土		古墳
343	3	C9	橢円形	0.51 × 0.39 × 0.08	暗褐色土 (明黄褐色土混入)		古墳
344	3	C9	円形	0.61 × 0.58 × 0.12	灰褐色土		古墳
345	3	D8	円形	0.32 × 0.30 × 0.11	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
346	3	C8	円形	0.32 × 0.31 × 0.07	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
347	3	C8	円形	0.32 × 0.30 × 0.11	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
348	3	D8	橢円形	0.29 × 0.21 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	石	古墳
349	3	B9	橢円形	0.29 × 0.21 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	石	古墳
350	3	C9	橢円形	0.54 × 0.46 × 0.21	灰褐色土	弥生・土師	古墳
351	3	C9	橢円形	0.63 × 0.48 × 0.11	灰褐色土		古墳
352	3	C9	円形	0.61 × 0.54 × 0.21	灰褐色土	弥生	古墳
353	3	C9	橢円形	0.54 × 0.44 × 0.08	灰褐色土	弥生	古墳
354	3	C8	円形	0.15 × 0.15 × 0.04	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
355	3	C8	円形	0.14 × 0.14 × 0.03	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
356	3	C8	円形	0.39 × 0.39 × 0.29	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
357	3	C10	円形	0.26 × 0.26 × 0.11	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
358	3	C9	円形	0.51 × 0.51 × 0.38	暗褐色土 (明黄褐色土混入)	須恵	古墳
401	4	B・C18	橢円形	0.82 × 0.52 × 0.37	黒褐色土		古墳
402	4	C18・19	橢円形	0.54 × (0.26) × 0.30	黒褐色土		古墳

遺物観察表

表 10 SB101 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏蓋	口径 12.3 器高 4.2	断面三角形の稜をもち、口縁端部は内傾する凹面をなす。天井部は焼成時の歪みあり。2/3の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		11
2	坏蓋	口径 (11.2) 残高 4.1	口縁端部は内傾する凹面をなす。1/2の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
3	坏蓋	口径 (11.7) 残高 3.4	断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。小片。		回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
4	坏身	たちあがり 口径 (9.8) 器高 5.0	たちあがり端部は内傾し、底部は丸味を持つ。底部外面に火だすきの痕跡あり。4/5の残存。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 灰色	密 ◎		11
5	坏身	たちあがり 口径 (10.6) 残高 5.2	たちあがり端部は内傾する。1/3の残存。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
6	蓋	つまみ径 2.8 口径 11.8 器高 5.9	高坏の蓋。断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。4/5の残存。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ・ナデ	灰色 灰色	密 ◎		11
7	蓋	つまみ径 2.8 口径 12.6 器高 5.8	高坏の蓋。口縁端部は内傾し、外面に刻目あり。天井部外面に重ね焼きの痕跡あり。完形品。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	㊸円弧叩き ㊹回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		11
8	壺	口径 (10.4) 残高 4.4	直口壺。2条の凸線と凸線間に波状文あり。小片。		回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	11
9	壺	口径 (16.2) 残高 4.5	広口壺。口縁部は肥厚し、頸部外面に回転カキメ調整あり。1/5の残存。		回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
10	壺	残高 17.5	胴～底部片。1/6の残存。	平行叩き →回転カキメ	円弧叩き・ 同心円叩き	灰色 灰色	密 ◎		
11	甕	口径 (16.4) 残高 7.4	僅かに内湾する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。1/2の残存。	㊹マメツ ㊹ハケメ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1～2) ◎		11
12	甕	口径 (20.6) 残高 5.0	外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		

表 11 SD101 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
13	坏蓋	口径 (11.9) 残高 4.5	断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する凹面をなす。1/2の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		11
14	坏蓋	口径 (11.8) 残高 3.8	口縁端部は内傾する。小片。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
15	坏蓋	口径 (11.4) 残高 3.2	口縁端部は内傾する。小片。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
16	壺	口径 (19.0) 残高 3.4	広口壺。口縁部は上下方に肥厚し、頸部外面に回転カキメ調整あり。小片。	㊹回転ナデ ㊹平行叩き	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表 12 SK103 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
17	坏身	たちあがり 口径 (10.6) 残高 3.2	たちあがり端部は内傾する。小片。		回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
18	坏身	残高 2.8	小片。		回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 13 1区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	壺	口径 (17.9) 残高 4.1	口縁端面に凹線文2条と頸部に凸帯を貼付し、凸帯上に押圧を加える。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1～3) ◎	第IV層	
20	甕	底径 6.3 残高 3.6	僅かに上げ底。底部完形。	ヨコナデ	ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1～5) ◎	第IV層	11
21	坏蓋	口径 12.4 器高 4.8	扁平な天井部。口縁端部は内傾する凹面をなす。4/5の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	第IV層	11

恵原新張遺跡 1 次調査

表 14 1 区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
22	伐採斧	1/2	結晶片岩	10.2	5.6	3.1	320.28	扁両刃、破損品 第IV層	11

表 15 SB201 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	甕	口径 (31.0) 残高 2.4	口縁部は上方に肥厚し、口縁端面に凹線文2条と、頸部に刻目凸帯文を貼付ける。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		12
24	甕	口径 (14.8) 残高 7.5	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。小片。	◎ヨコナデ ◎ヘラミガキ	ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1) ◎		12
25	壺	口径 (8.8) 残高 6.4	短く外反する口縁部。1/4の残存。	◎ナデ ◎ヘラミガキ	◎ナデ ◎ナデ上げ	灰褐色 黒色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	12
26	壺	口径 (17.2) 残高 1.5	広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文あり。小片。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	12
27	壺	残高 4.3	断面三角形の凸帯を2条貼付ける。1/4の残存。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎		12
28	高坏	底径 (15.3) 残高 7.8	ラッパ状に開く脚部。矢羽根状の透かし(貫通)あり。1/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) ◎		12
29	甕	底径 6.2 残高 5.1	くびれをもつ上げ底。2/3の残存。	◎ハケ→ナデ ◎ハケ(8本/cm)	ハケ→ナデ	灰褐色 暗灰色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	12
30	甕	底径 4.3 残高 3.4	上げ底。底部完形。	ヘラミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	12
31	甕	底径 (8.0) 残高 4.5	僅かに上げ底。1/3の残存。	ハケ →ヘラミガキ	ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1) ◎		12

表 16 SB201 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
32	石棒	ほぼ完形	結晶片岩	18.5	3.5	2.0	158.35		12
33	砥石	一部欠損	砂岩	8.0	7.0	4.5	471.04	破損品	12

表 17 2 区包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
34	坏	口径 11.6 底径 7.0 器高 2.7	口縁部の1/3を欠損。底部の切り離しは回転糸切り技法による。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1) ◎	第II層	12
35	坏	口径 11.4 底径 6.6 器高 2.8	口縁部の1/4を欠損。底部には歪みによる割れあり。底部の切り離しは回転糸切り技法による。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎	第II層	12
36	坏	口径 12.6 底径 6.6 器高 3.1	ほぼ完形品。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1) ◎	第II層	
37	坏	口径 12.7 底径 7.8 器高 3.3	完形品。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ◎	第II層 黒斑	
38	坏	口径 13.2 底径 7.2 器高 3.2	完形品。口縁部には、僅かに歪みあり。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎	第II層	12
39	坏	口径 13.5 底径 8.0 器高 3.7	口縁部の1/5を欠損。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~5) ◎	第II層	
40	坏	口径 12.6 底径 7.6 器高 3.4	口縁部1/5を欠損。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~5) ◎	第II層 黒斑	
41	坏	口径 12.3 底径 7.0 器高 3.3	口縁部2/3を欠損。底部外面に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~3) ◎	第II層 黒斑	
42	坏	口径 12.2 底径 7.0 器高 3.2	底部1/4を欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~3) ◎	第II層	
43	壺	口径 (12.0) 残高 5.0	広口壺。口縁下に凸線1条と頸部に凸線1条あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第IV層	13

遺物観察表

2区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
44	高坏	底径 (11.3) 残高 6.5	脚裾部に凸線が巡り、柱部に長方形の透かし2ヶ所を看取。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第IV層	
45	高坏	底径 (23.2) 残高 2.9	脚端部は上下方に拡張し、脚裾部に4条、脚端面に2条の凹線が巡る。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 黒褐色	石・長 (1~3) ◎	第IV層 黒斑	

表 18 2区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
46	石鏃	一部欠損	赤色珪質岩	2.0	1.6	0.1	0.97	凹基無茎鏃 第IV層	13

表 19 2区包含層出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
47	白玉	完形	滑石	0.6	0.2	0.4	0.182	色調：暗灰色	13

表 20 SB301 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
48	坏蓋	口径 (13.8) 残高 4.1	丸味のある天井部。口縁端部は内傾する。天井部外面に線刻あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
49	坏身	口径 (12.7) 残高 4.5	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		13
50	甕	口径 (27.0) 残高 4.9	口縁部は珠玉状に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
51	壺	残高 15.2	広口壺。扁球形の胴部。頸～胴上半部外面に回転カキメ調整あり。1/2の残存。	㊨回転ナデ ㊩回転ナデ ㊪格子目叩き	㊫回転ナデ ㊬回転ナデ ㊭同心円叩き	灰白色 灰白色	密 ◎		13
52	甕	口径 (18.4) 残高 5.2	内湾口縁。口縁端部は僅かに内傾する。1/5の残存。	㊮ヨコナデ ㊯ハケ (6本/cm)	㊰ヨコナデ →ハケ ㊱ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎		13
53	甕	口径 (19.6) 残高 9.2	内湾口縁。口縁端部は僅かに内傾する。1/6の残存。	㊲マメツ ハケ (14本/cm)	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ◎		
54	甕	口径 19.2 残高 13.0	口縁部中位に稜をもち、口縁端部は内傾する。2/3の残存。	㊳ヨコナデ ハケ (4~5本/cm)	㊴ヨコナデ ナデ	茶褐色 橙色	石・長 (1~3) 金 ◎		13
55	椀	口径 (13.0) 残高 4.9	体部は内湾し、上位に沈線1条が巡る。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		13
56	椀	残高 2.6	底部片。	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		
57	甌	口径 (24.3) 残高 7.0	口縁部片。口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎		
58	甌	残高 7.3	把手部。断面円形。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		13
59	甕	口径 (30.0) 残高 2.2	逆「L」字状口縁。胴部に凸帯を貼付け、凸帯上に押圧を加える。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎		
60	高坏	底径 (10.0) 残高 3.1	脚裾部と脚端面に凹線文、脚柱部に矢羽根状の透かしあり。小片。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎		

表 21 SB301 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
61	石庖丁	1/2	結晶片岩	6.0	7.8	1.0	71.93	未成品	14
62	石鏃	2/3	サマカイト	1.3	1.7	2.0	0.44	破損品	14
63	剥片	ほぼ完形	サマカイト	3.3	1.0	0.5	1.88		14
64	剥片	ほぼ完形	結晶片岩	4.0	2.9	0.6	5.85		14

表 22 SB302 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
65	坏蓋	口径 14.0 器高 5.5	丸味のある天井部。口縁端部は内傾する。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	㊸凹弧叩き ㊹回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		14
66	坏身	口径 13.0 器高 5.5	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。ほぼ完形。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 灰色	密 ◎		14
67	甕	口径 (17.8) 残高 3.2	内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎		
68	壺	口径 11.4 底径 5.3 器高 11.2	口縁部は外反し、底部は平底風に仕上げられる。ほぼ完形品。	ナデ	ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	14
69	鉢	口径 (19.0) 底径 4.8 器高 12.8	口縁端部は尖り気味に丸く仕上げ、底部は平底。1/3の残存。	㊹ヨコナデ ㊺ヘラミガキ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	14
70	甌	残高 12.7	胴部片。3/4の残存。	ハケ(4~5本/cm)	ハケ・ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	14
71	甕	口径 (32.0) 残高 6.0	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に押圧を加える。小片。	㊹ヨコナデ ㊺ヘラミガキ	㊹ヨコナデ ㊺ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ◎		14

表 23 SB302 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
72	石器素材	ほぼ完形	結晶片岩	10.4	3.3	1.1	72.99		
73	剥片	ほぼ完形	結晶片岩	3.2	5.2	0.8	17.47		14

表 24 SD301 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
74	甕	口径 (19.2) 残高 2.9	口縁部中に稜をもち、口縁端部は僅かに内傾する。小片。	マメツ	マメツ	橙色 茶褐色	石・長 (1) ◎		
75	坏身	口径 (11.8) 残高 2.7	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。小片。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
76	甕	口径 (31.6) 残高 2.5	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に布目痕あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~4) ◎		

表 25 SK302 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
77	甕	口径 (33.1) 残高 2.2	逆L字状口縁。頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に押圧を加える。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 暗褐色	石・長 (1~2) ◎		
78	甕	口径 (33.1) 残高 1.7	貼付口縁。口縁端部に刻目、胴部にヘラ描き沈線文4条あり。小片。	㊹ヨコナデ ㊺ハケ (10本/cm)	ヨコナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎		

表 26 SK304 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
79	壺	口径 (20.8) 残高 2.2	広口壺。口縁部は上下方に拡張し、口縁端面は凹む。小片。	㊹ヨコナデ ㊺ハケ (10本/cm)	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		
80	甕	底径 (4.6) 残高 2.4	僅かに上げ底。小片。	ナデ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	

表 27 SK308 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
81	壺	口径 (23.2) 残高 6.0	広口壺。口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ◎		

表 28 3区柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
82	甕	口径 (22.0) 残高 1.6	口縁部は上方に拡張し、口縁端面はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	SP310	

(1)

遺物観察表

3区柱穴出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
83	壺	口径 (8.8) 残高 3.0	短く外反する口縁部。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ◎	SP314	
84	壺	残高 4.7	頸部片。小片。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~3) ◎	SP325	
85	甕	底径 (5.4) 残高 2.7	くびれをもつ上げ底。1/3の残存。	ハケ→ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎	SP352	
86	坏蓋	口径 (14.2) 残高 3.3	断面三角形の丸味をもつ稜あり。口縁端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SP301	

表 29 3区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
87	壺	口径 (8.4) 底径 3.5 器高 7.3	短頸壺。口縁部は短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。胴上部外面に回転カキメ調整あり。1/2の残存。	㊶回転ナデ ㊷回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	第IV層	
88	壺	口径 (8.2) 残高 2.7	短頸壺。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎	第IV層	
89	壺	口径 (19.4) 残高 5.2	大口壺。口縁下に凸線1条あり。1/4の残存。	㊶回転ナデ ㊸叩き→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第IV層	15
90	甕	口径 (27.4) 残高 5.7	口縁部は上方に拡張し、端部は丸い。	㊶回転ナデ ㊸叩き→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第IV層	15
91	甕	底径 4.0 残高 6.4	平底。小片。	㊸回転ナデ ㊷叩き→ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第IV層	
92	提瓶	残高 5.0	カギ状の把手あり。小片。回転カキメ調整が全面にみられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	第IV層	15
93	埴輪	残高 3.7	朝顔形埴輪。小片。	マメツ	マメツ	橙色 灰白色	石・長 (1) ◎	第IV層	15
94	甗	口径 (30.5) 残高 12.1	口縁部片。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1/4の残存。	ハケ(10本/cm)	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 金◎	第IV層	
95	甕	口径 (22.6) 残高 2.2	折曲口縁。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	茶褐色 橙色	石・長 (1~2) ◎	第V層 黒斑	
96	甕	口径 (13.4) 残高 14.4	短く外反する口縁部。口縁端部は尖り気味に仕上げる。1/3の残存。	㊶マメツ ㊸タキ→ハケ	㊶ナデ ㊹板ナデ	橙色 黄褐色	石・長 (1~3) ◎	第V層	
97	壺	残高 4.9	断面三角形の凸帯1条あり。小片。	ヨコナデ	マメツ	灰黄色 黒褐色	石・長 (1~4) ◎	第V層	
98	壺	残高 4.3	ヘラ描き沈線文6条と、沈線文の上下に刺突文2列あり。小片。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎	第V層	
99	高坏	口径 (23.0) 残高 3.4	口縁部は下外方に開き、口縁端部は内方に肥厚する。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ →ヘラミガキ	ハケ →ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~5) ◎	第V層	15
100	ジョッキ	残高 4.5	把手部。断面円形。	ナデ	—	橙色	石・長 (1) ◎	第V層	15

表 30 3区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
101	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.2	1.5	0.3	1.16	破損品、第V層	

表 31 1号墳出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
102	坏蓋	残高 2.2	扁平な天井部。1/4の残存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
103	坏身	口径 (11.0) 残高 3.0	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
104	壺	残高 5.5	頸部片。外面に回転カキメ調整あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

恵原新張遺跡 1 次調査

1 号墳出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
105	甕	残高 5.5	胴部に沈線 1 条と刺突列点文あり。脚付きで回転カキメ調整あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 黒◎	自然釉	15

表 32 SD401 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
106	坏身	残高 1.4	底部片。底部外面に線刻あり (ヘラ記号)。	回転ヘラケズリ	回転ナデ 円弧叩き	灰白色 灰色	密 ◎		

表 33 SD402 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
107	提瓶	口径 7.8 残高 6.2	口縁部片。口縁端部は長方形に肥厚する。口縁部完形。	マメツ	マメツ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	15

表 34 4 区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
108	土釜	口径 (27.2) 残高 3.5	断面方形の鋸あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ◎	第Ⅲ層	15
109	坏	底径 (6.2) 残高 2.7	円盤高台状の底部。底部外面は回転糸切り痕あり。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	第Ⅲ層	15
110	坏	底径 (6.4) 残高 1.5	円盤高台状の底部。底部外面は回転糸切り痕あり。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第Ⅲ層	
111	高坏	口径 11.4 残高 8.4	無蓋高坏。坏部外面に凸線 1 条が巡り、柱部中に沈線 2 条あり。長方形の透かしを 2 か所看取。1/2 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第Ⅳ層	16
112	甕	口径 (11.9) 残高 4.2	口縁端部は内傾する面をもち、頸部外面に波状文あり。1/6 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第Ⅳ層 自然釉	16
113	壺	残高 8.5	短頸壺。肩部に沈線と刺突列点文あり。体部外面に回転カキメ調整がみられる。2/3 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	第Ⅳ層	16
118	甕	口径 (16.2) 残高 4.6	外反口縁。口縁端部は「コ」の字状に仕上げる。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) 金◎	第Ⅴ層	
119	壺	残高 5.8	断面三角形の凸帯 1 条を貼付ける。1/5 の残存。	ヘラミガキ	ヨコナデ	褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ◎	第Ⅴ層	
120	坏	底径 (7.2) 残高 1.9	円盤高台状の底部。1/5 の残存。	マメツ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	第Ⅴ層	

表 35 4 区包含層出土遺物観察表 石製品

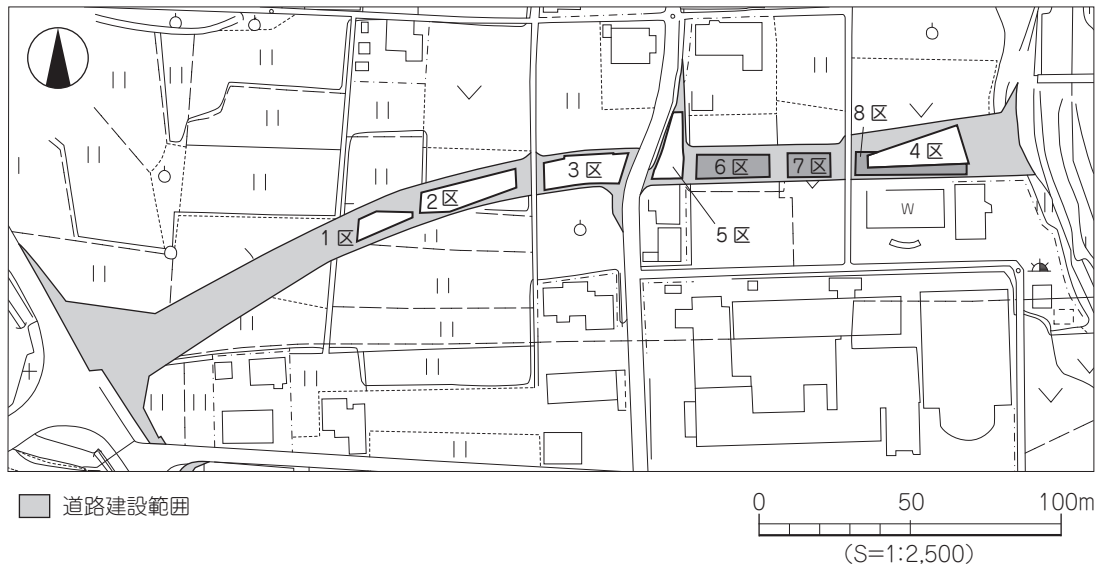
番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
114	石庖丁	1/2	結晶片岩	5.4	8.1	0.9	55.91	破損品、第Ⅳ層	16
115	伐採斧	1/2	結晶片岩	7.1	4.3	2.8	132.09	破損品、第Ⅳ層	16
116	石鏃	完形	赤色珪質岩	2.8	2.1	0.4	1.78	凹基無茎鏃、第Ⅳ層	16
117	石鏃	一部欠損	サヌカイト	2.0	2.3	0.4	1.67	凹基無茎鏃、第Ⅳ層	16

第4章 恵原新張遺跡2次調査

第1節 調査の経緯

恵原新張遺跡2次調査は、2015（平成27）年8月10日より開始し、同年10月9日に終了した。調査対象区は、調査地東側6区から8区の3地区であり、調査面積は826㎡である（第48図・表36）。

8月10日より調査地東端、8区の調査を開始する。重機（バックホー0.1㎡・3t不整地運搬車）を使用して表土の掘削・運搬を行い、その後、壁面精査と遺構検出作業を実施する。9月7日、遺構検出作業を終了し、竪穴建物や溝、柱穴を検出する。なお、本日より8区の調査と併行して6区の調査を開始する。6区も8区と同様、重機を使用して表土の掘削・運搬を行う。9月9日より、7区の調査に着手する。7区も重機（バックホー0.25㎡・3t不整地運搬車）を使用して、表土の掘削と運搬作業を行う。9月9日、8区の遺構掘削作業を終了する。9月10日、ドローンを使用して上空より8区の遺構完掘状況写真を撮影する。その後、8区は遺構の測量や写真撮影等を行う。9月15日、6区の遺構検出作業が終了し、竪穴建物や掘立柱建物のほか溝や土坑、柱穴を検出する。9月18日、本日にて8区の調査を終了する。9月19日より、6区検出の遺構掘削作業を始め、9月28日、6区の調査を終了する。9月29日、7区の遺構検出作業を終え、古墳1基を検出する。10月6日、ドローンを使用して6区と7区の遺構完掘状況写真を撮影する。10月9日、6区と7区の調査を終了し、本日にて、屋外調査を終了する。



第48図 調査区位置図

表36 恵原新張遺跡2次調査一覧

地区	調査面積 (㎡)	調査期間
6区	368	2015（平成27）年9月7日～同年10月9日
7区	248	2015（平成27）年9月9日～同年10月9日
8区	210	2015（平成27）年8月10日～同年9月18日

第2節 層位

調査地は、調査以前には水田や畑として利用されていた。現況の標高は、70.50～70.80 mである。調査地の基本層位は、以下の7層である。なお、2次調査では基本層位の第Ⅱ層は検出されなかった(第49～51図)。また、8区の土層図については「第3章 恵原新張遺跡 1次調査」で掲載しているため、ここでは省略している。

第Ⅰ層：近現代の農耕に伴う客土〔灰色土 (5Y 6/1)〕で、地表下 25～30cmまで開発が行われている。

第Ⅲ層：褐灰色土 (10YR 5/1) で8区にみられ、層厚は3～10cmである。本層中からは、平安時代後期に時期比定される土師器片や須恵器片が出土した。

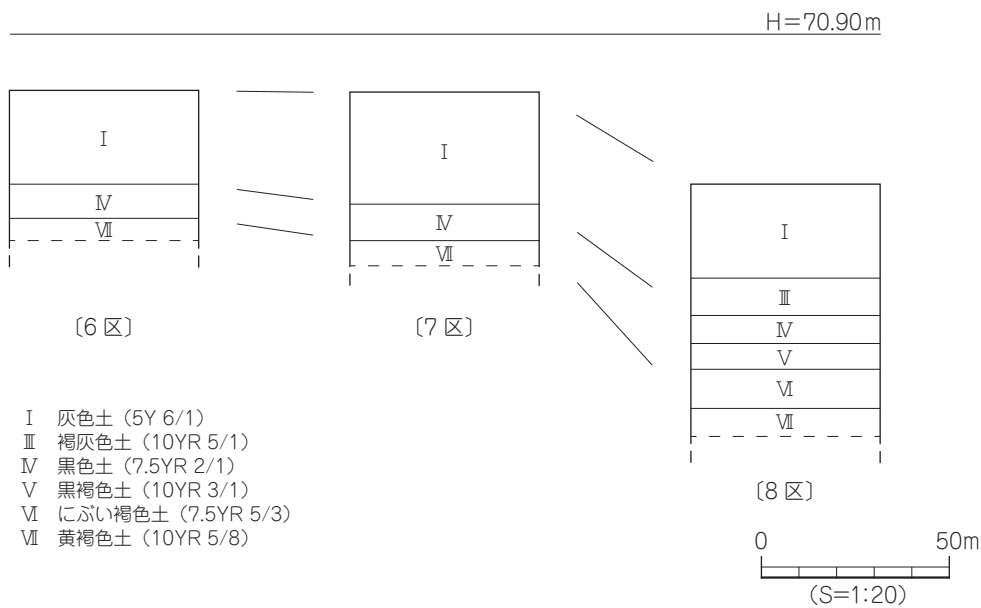
第Ⅳ層：黒色土 (7.5YR 2/1) で、すべての調査区にみられ、層厚は5～10cmである。本層中からは、弥生土器や土師器、須恵器が出土した。

第Ⅴ層：黒褐色土 (10YR 3/1) で8区にみられ、層厚は5～12cmである。本層中からは、弥生土器や石器が出土した。

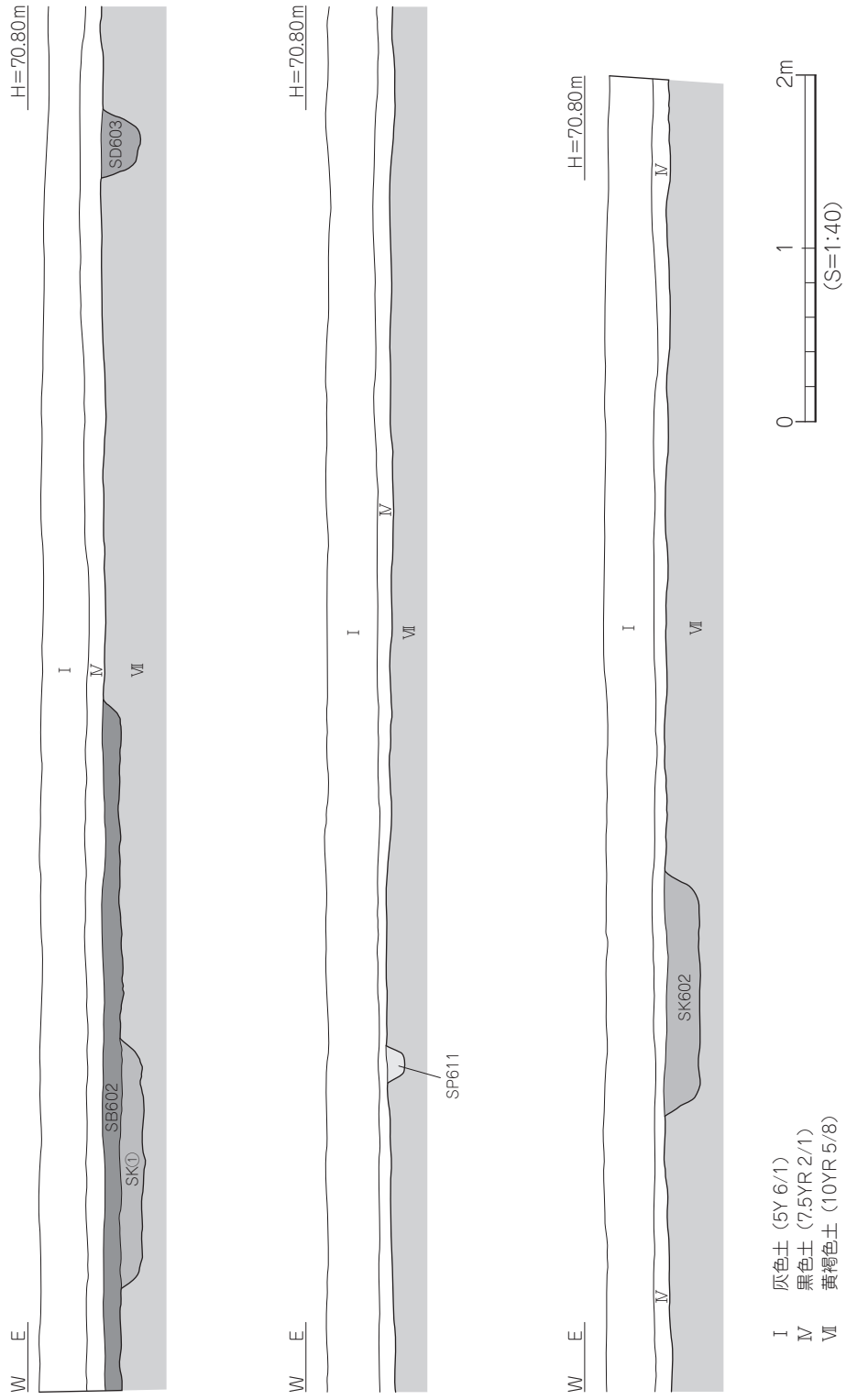
第Ⅵ層：にぶい褐色土 (7.5YR 5/3) で粘性が強く、8区で部分的にみられ、層厚は6～10cmである。本層中から、遺物の出土はない。

第Ⅶ層：黄褐色土 (10YR 5/8) で、すべての調査区にみられる。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

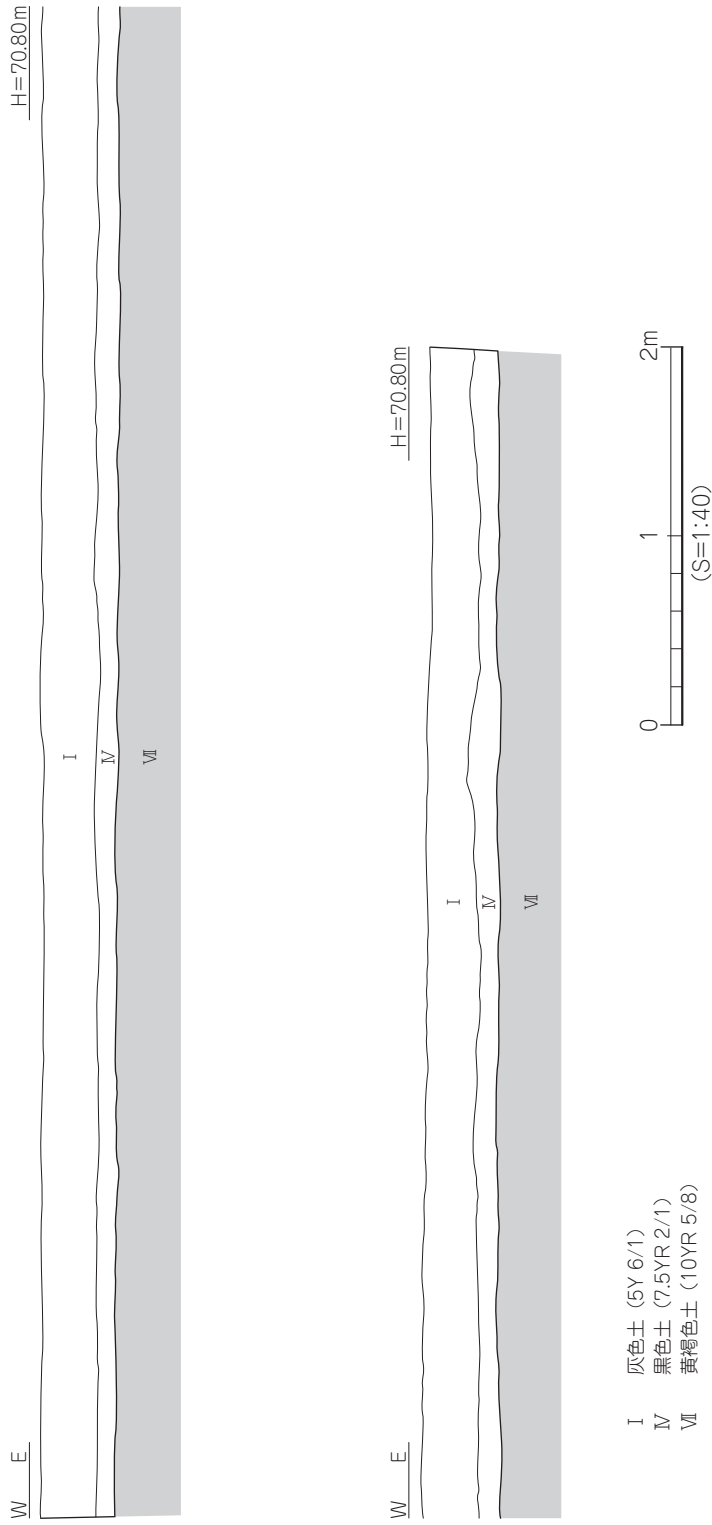
検出遺構や出土遺物より、第Ⅴ層は弥生時代、第Ⅳ層は古墳時代、第Ⅲ層は古代までに堆積した土層と考えられる。



第49図 土層柱状図



第 50 図 6 区北壁土層図



第 51 図 7 区北壁土層図

第3節 遺構と遺物

恵原新張遺跡2次調査では、竪穴建物5棟、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑2基、柱穴23基、倒木址2基を検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器のほか石器（石庖丁・石斧・台石）が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（22×60×44cm）約3箱分である。ここでは、調査区毎に検出した遺構や遺物を説明する。

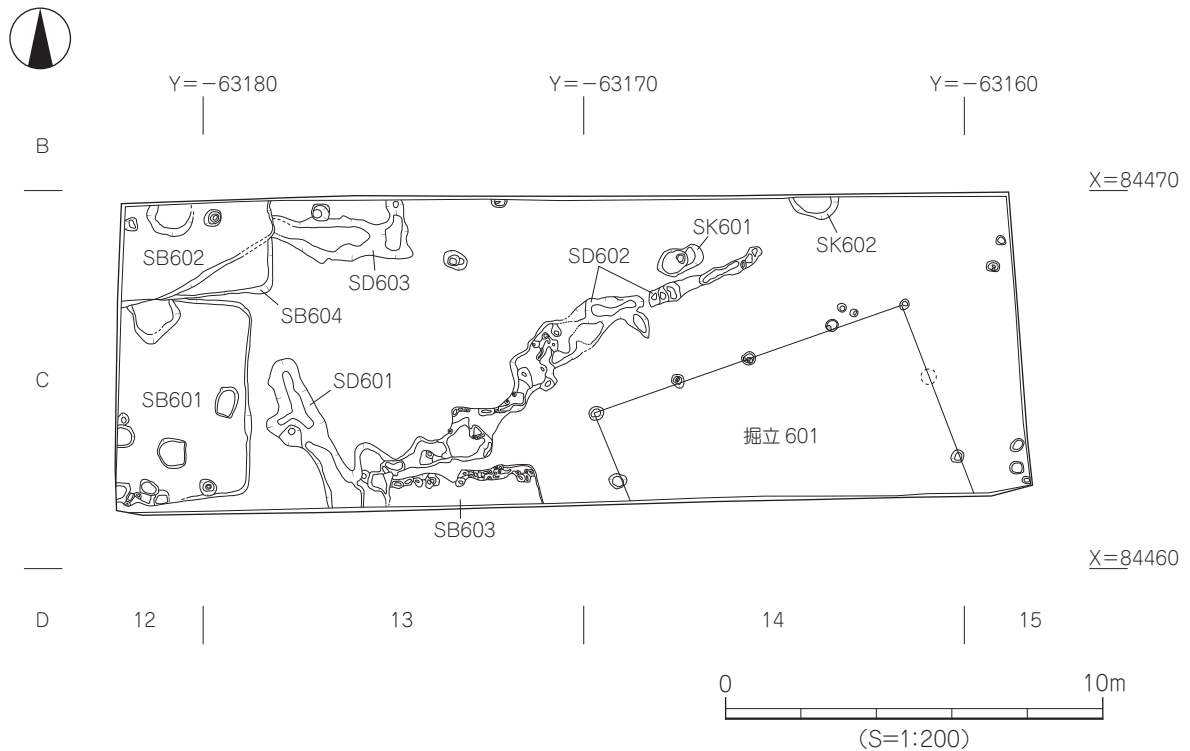
1. 6区の調査

6区では竪穴建物4棟、掘立柱建物1棟、溝3条、土坑2基、柱穴18基を検出した（第52図、図版6）。

(1) 竪穴建物

SB601（第53図、図版6）

6区南東隅C12・13区に位置する竪穴建物址で、北壁中央部はSB602に一部削平されており、建物西側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は南北長5.36m、東西検出長3.50m、壁高は10cmである。建物の埋土は暗褐色土（10YR 3/4）を基調とし、部分的に淡黄色土（5Y 8/4）や明黄褐色土（10YR 7/6）がブロック状に混入するものである。建物北壁中央部にて、焼土塊を検出した。建物に付随するカマドと考えられたが現状を留めておらず、形状は不明である。なお、焼土塊の東側には炭化物の広がり（30×80cm）を確認した。建物床面にて大小8基の柱穴を検出したが、支柱穴を特定するには至らなかった。遺物は建物の埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が散在



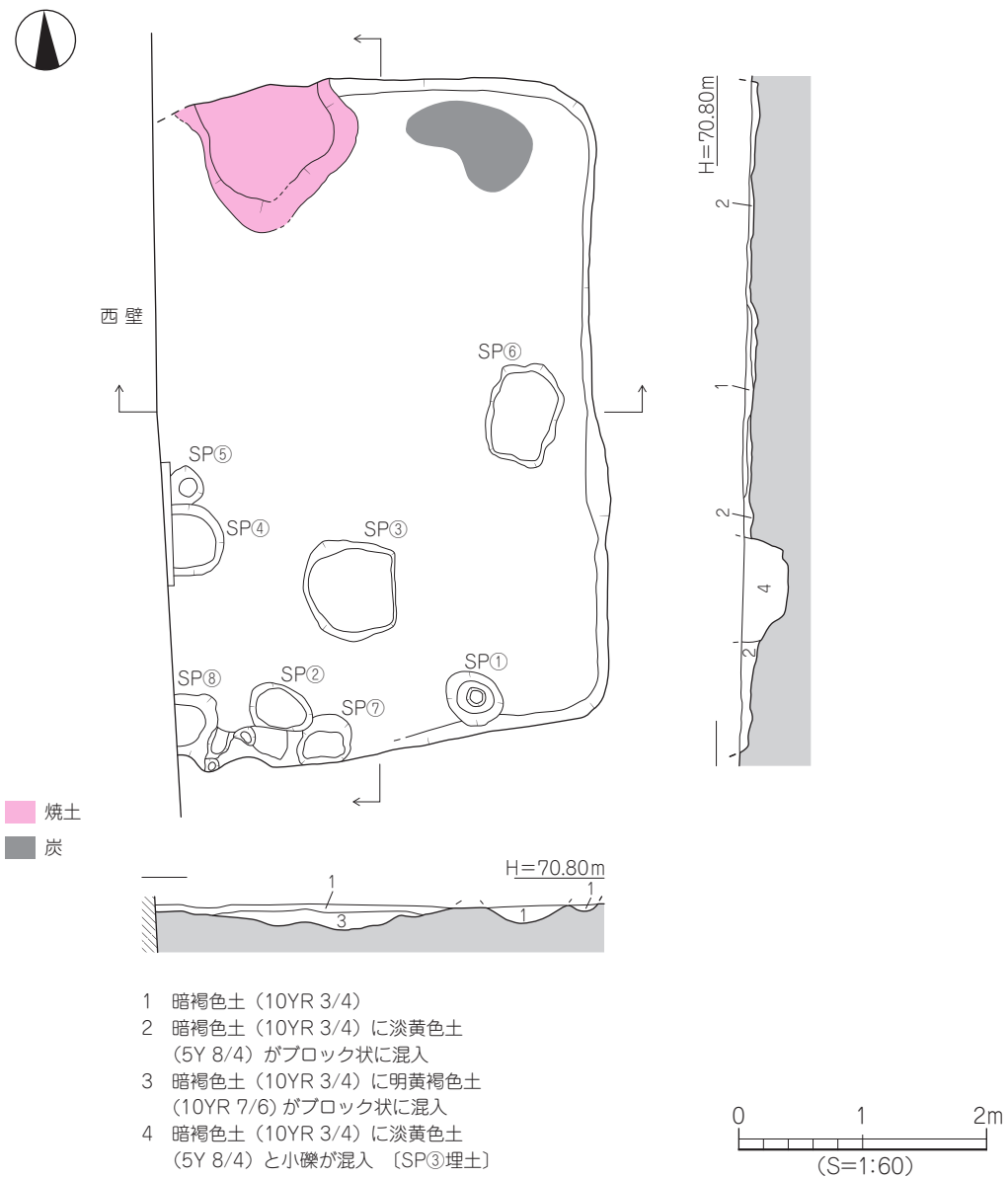
第52図 6区遺構配置図

して出土したほか、石器剥片が数点出土した。遺物の出土状況や堆積状況から、SB601 は人為的に埋め戻された建物と推測される。

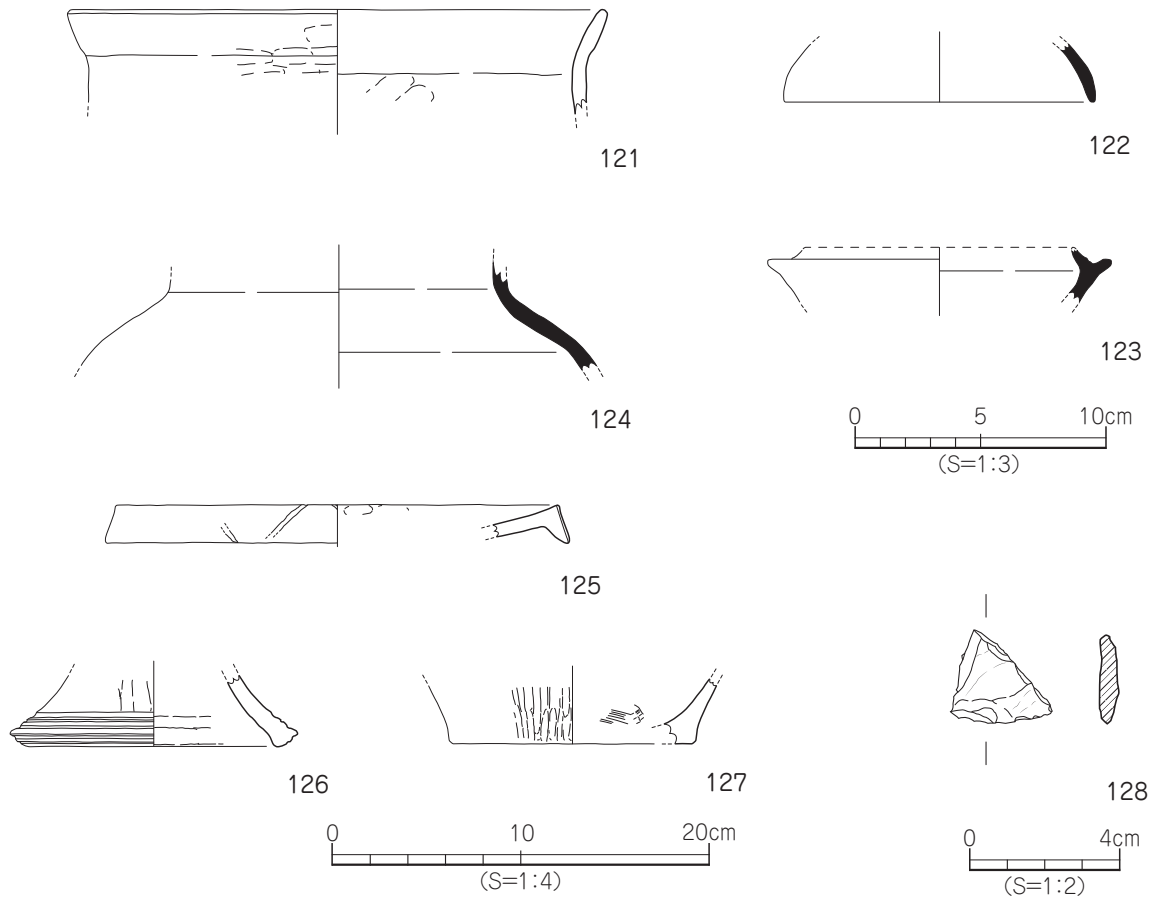
出土遺物 (第 54 図)

121 は土師器の鉢。口縁部は僅かに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。122 ~ 124 は須恵器。122 は坏蓋で、口縁端部は丸い。123 は坏身で、たちあがりは短く内傾する。124 は短頸壺の肩部片である。125 ~ 127 は弥生土器。125 は広口壺で、口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文を施す。126 は高坏形土器で、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。127 は甕形土器の底部。平底で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。128 は剥片で、石材は赤色珪質岩である。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴より、SB601 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、7 世紀初頭から前葉とする。



第 53 図 SB601 測量図



第 54 図 SB601 出土遺物実測図

SB602 (第 55 図、図版 6)

6 区北西隅 C12・13 区に位置する竪穴建物で、建物南東部は SB604 と重複し、SB602 が後出する。壁面の土層観察により、SB602 上面は第 IV 層が覆う。平面形態は隅丸方形ないし長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長 5.00m、南北検出長 2.72m、壁高は 16cm である。建物埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/2) に黄橙色土 (7.5YR 7/8) がブロック状に混入するものである。遺物は建物埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土したほか、台石が 1 点出土している。

出土遺物 (第 56 図、図版 16)

129～137 は須恵器。129～131 は坏身で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。132・133 は壺で、132 の外面には回転カキメ調整がみられる。134 は甕で、沈線と波状文を施す。135 は高坏の脚部、136・137 は甕である。137 の外面には平行叩き後にハケメ、内面は同心円叩きや円弧叩きを施す。138 は土師器の甑。把手部で、断面形態は楕円形をなす。139～141 は弥生土器。139・140 は壺形土器で、139 は頸部に凸帯を貼り付け、140 は肩部に列点文を施す。141 は甕形土器の底部で、上げ底をなす。142 は台石で、重量 3.3kg である。結晶片岩製。

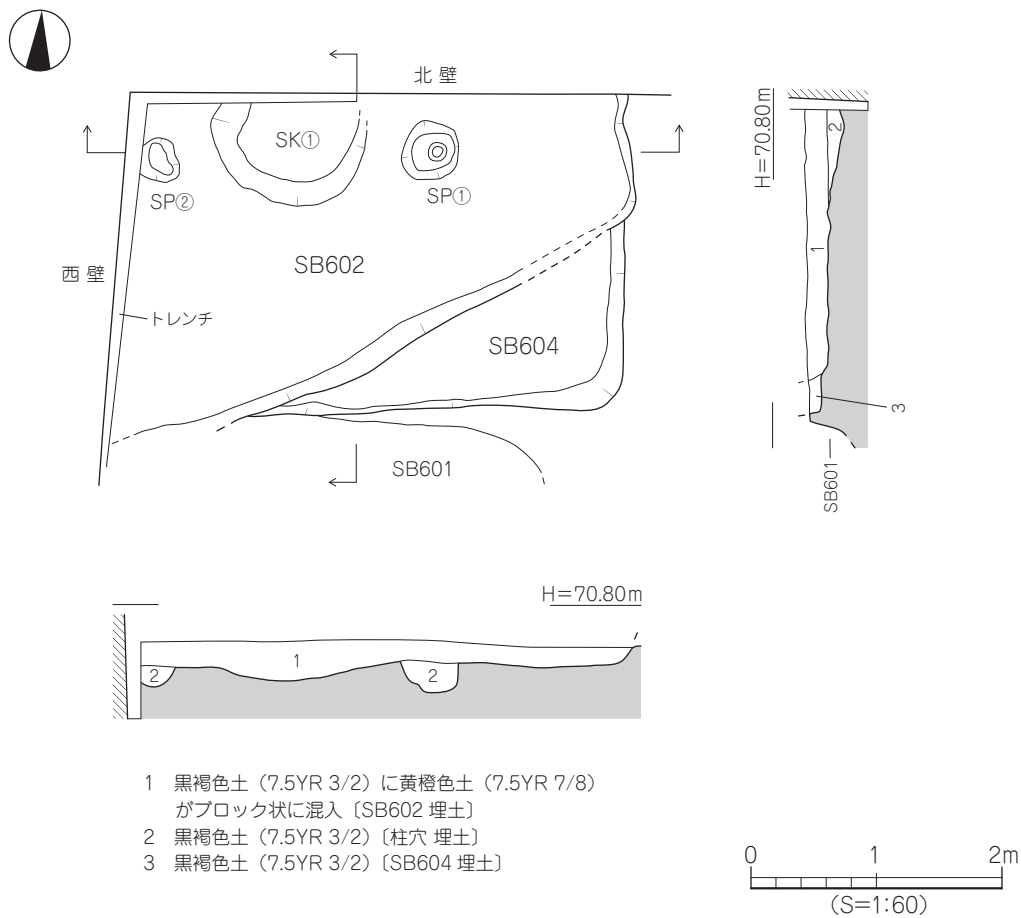
時期：出土遺物の特徴より、SB602 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、7 世紀前葉とする。

SB604 (第 55 図、図版 6)

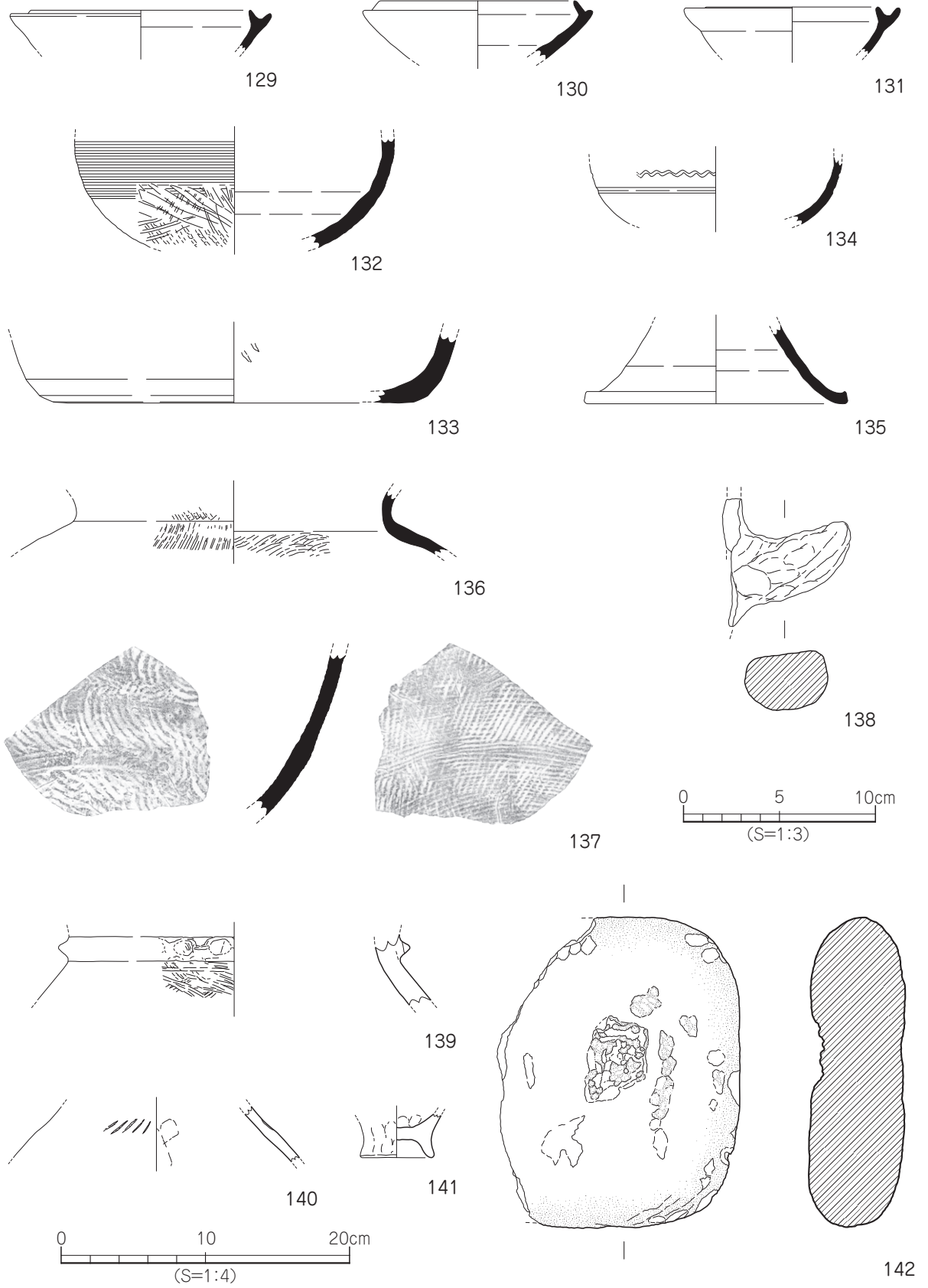
6 区北西部 C12・13 区に位置する竪穴建物で、SB602 と重複し、SB604 が先行する。平面形態は隅丸方形または長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長 2.90m、南北検出長 1.50m、壁高は 7cm である。建物の埋土は、黒褐色土 (7.5YR 3/2) 単層である。建物床面にて土坑 1 基と柱穴 2 基を検出した。SK ①は楕円形をなす土坑で、規模は径 1.22m、深さ 15cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/2) 単層である。土坑内からは遺物の出土はないが、埋土が建物の埋土と酷似することから SB604 に付随する遺構と考えられる。また、SP ①・②は円形柱穴で、規模は径 30～40cm、深さ 18～21cm であり、柱穴掘り方埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/2) 単層である。柱穴の配置より、2 基の柱穴は SB604 の主柱穴と考えられる。遺物は埋土中より土師器片や須恵器片が数点出土した。

出土遺物 (第 57 図)

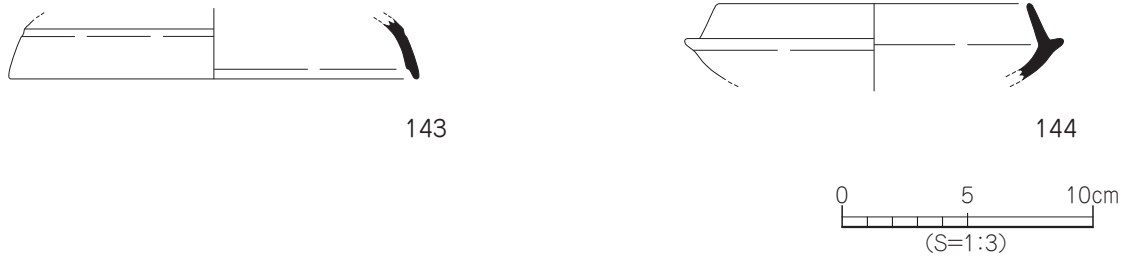
143 は坏蓋で、口縁端部は内傾する。144 は坏身で、たちあがりは内傾し、たちあがり端部は丸い。
 時期：出土遺物の特徴より、SB604 の廃棄・埋没時期は 6 世紀後葉とする。



第 55 図 SB602・604 測量図



第 56 図 SB602 出土遺物実測図



第 57 図 SB604 出土遺物実測図

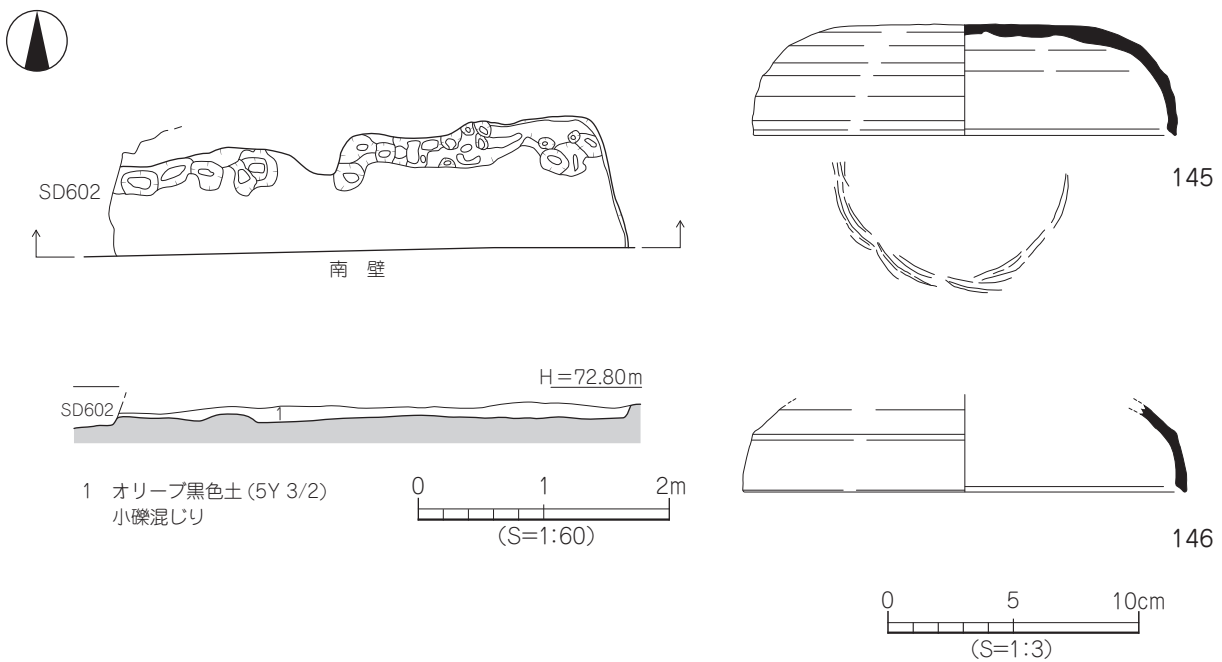
SB603 (第 58 図、図版 7)

6 区南壁中央部西寄り C13 区に位置する竪穴建物で、建物南側は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は東西長 4.05m、南北検出長 0.96m、壁高は 11cm である。建物埋土は、オリーブ黒色土 (5Y 3/2) 単層であるが、少量の小礫を含む。内部施設は、周壁溝を検出した。建物北壁に沿って、径 3～10cm、深さ 2～4cm 大の小ピットが点在しており、これらは壁体に沿って打ち込まれた杭痕と考えられる。遺物は埋土中より土師器や須恵器の破片が数点出土した。

出土遺物 (図版 17)

145・146 は須恵器坏蓋。145 の天井部は扁平で、口縁端部は内傾斜する。天井部内面には、数多くの円弧叩きが残る。146 は小片で、口縁端部は内傾する。

時期：出土遺物の特徴より、SB603 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6 世紀中葉とする。



第 58 図 SB603 測量図・出土遺物実測図

(2) 掘立柱建物

掘立 601 (第 59 図)

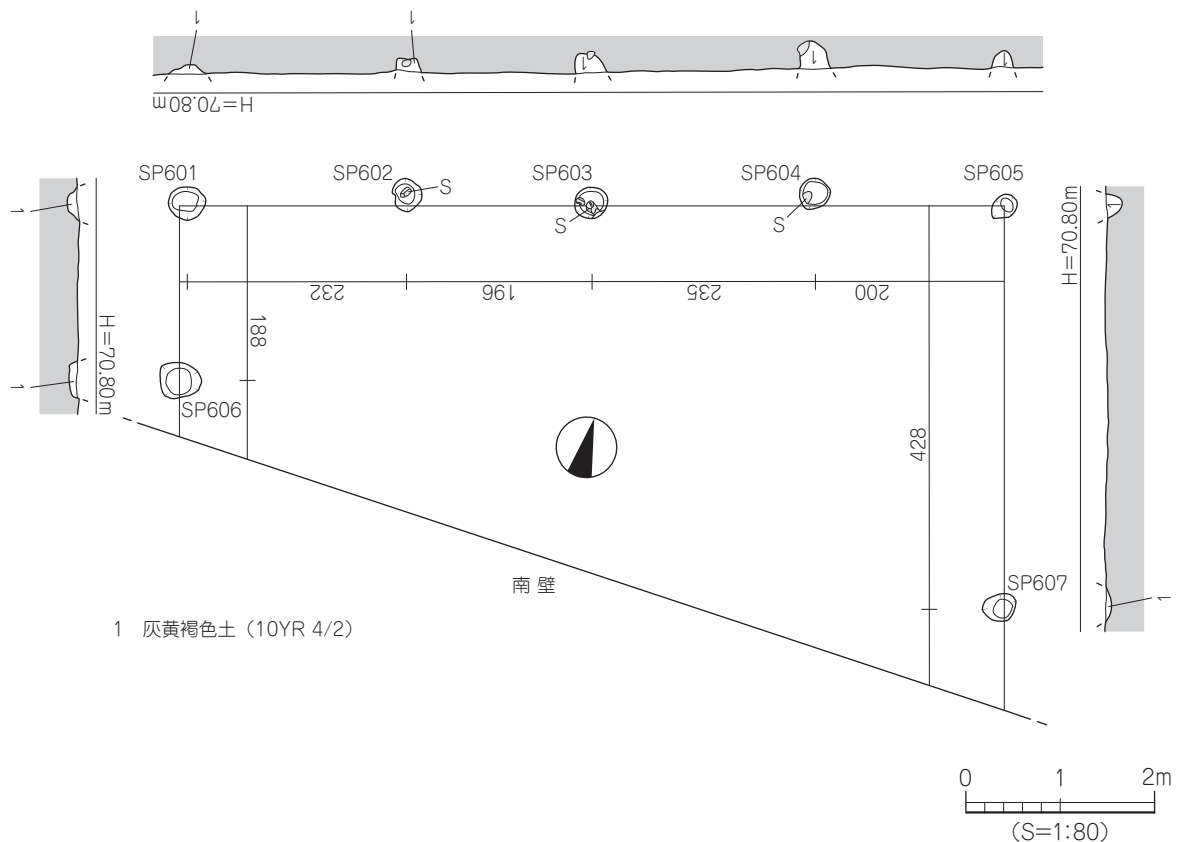
6区南東部C14・15区に位置する建物址で、東西4間、南北2間以上を検出した。側柱構造の建物址で、建物方位は真北である。建物規模は桁行長8.63m、梁行検出長5.32mである。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径20～40cm、深さは6～20cmである。柱穴掘り方埋土は、灰黄褐色土(10YR 4/2)単層である。柱痕は検出されなかったが、3基の柱穴基底面付近には径5～10cm大の扁平な石が敷かれていた。各柱穴からは、土器の出土は見られなかった。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴掘り方埋土が3区検出の掘立302と酷似することから、概ね6世紀中葉以降の建物と考えられる。

(3) 溝

SD603 (第 60 図)

6区北西部C13区で検出した東西方向の溝で、溝西側はSB602に削平されている。壁面の土層観察により、溝上面は第IV層が覆う。規模は検出長3.75m、最大幅1.03m、深さ28cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土(7.5YR 3/2)に黄橙色土(7.5YR 7/8)がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、僅かに北側から南側に向けて傾斜をなす(比高差3cm)。溝内からは、弥生土器片が数点出土した。



第 59 図 掘立 601 測量図

出土遺物

147～150は弥生土器。147は壺形土器の肩部片で、列点文を施す。148は高坏形土器。坏部に凹線文3条を施す。外面はハケメ調整後にヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。149・150は甕形土器。149は胴部片で、外面はハケメ調整後にヘラミガキ、内面はナナメ方向のヘラミガキを施す。150は底部片で平底をなし、外面にはタテ方向の丁寧なヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期後葉とする。

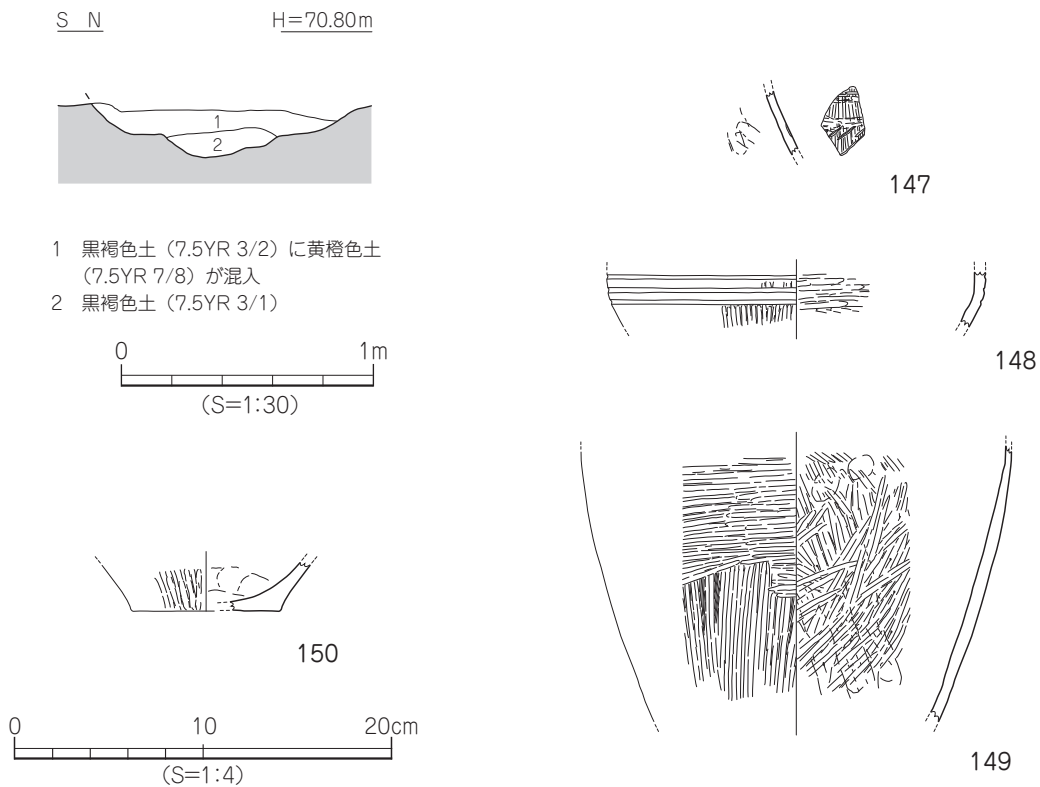
SD601 (第61図)

6区南西隅C13区で検出した南北方向の溝で、溝南側はSD602と合流し、南端は調査区外に続く。壁面の土層観察により、溝上面は第IV層が覆う。規模は検出長4.37m、最大幅1.30m、深さ18cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土(7.5YR 3/2)に黄橙色土(7.5YR 7/8)がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、僅かに北側から南側に向けて傾斜をなす(比高差3cm)。溝内からは弥生土器片が数点出土したほか、石庖丁の未成品1点が出土した。

出土遺物 (図版17)

151は結晶片岩製の石庖丁で、穿孔段階の未成品である。重量96.19g。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位とSD603の埋土が酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃と考えられる。



第60図 SD603断面図・出土遺物実測図

SD602 (第 61 図)

6区中央部 C13・14区で検出した北東-南西方向の溝で、溝南側は SD601 と合流する。規模は検出長 12.35 m、最大幅 1.25 m、深さ 12cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は SD601 と同様の黒褐色土 (7.5YR 3/2) に黄橙色土 (7.5YR 7/8) がブロック状に混入するものである。溝基底面には凹凸があり、北東から南西に向けて傾斜をなす (比高差 5cm)。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SD601 と酷似することから、概ね弥生時代中期後葉頃の溝と考えられる。

(4) 土 坑

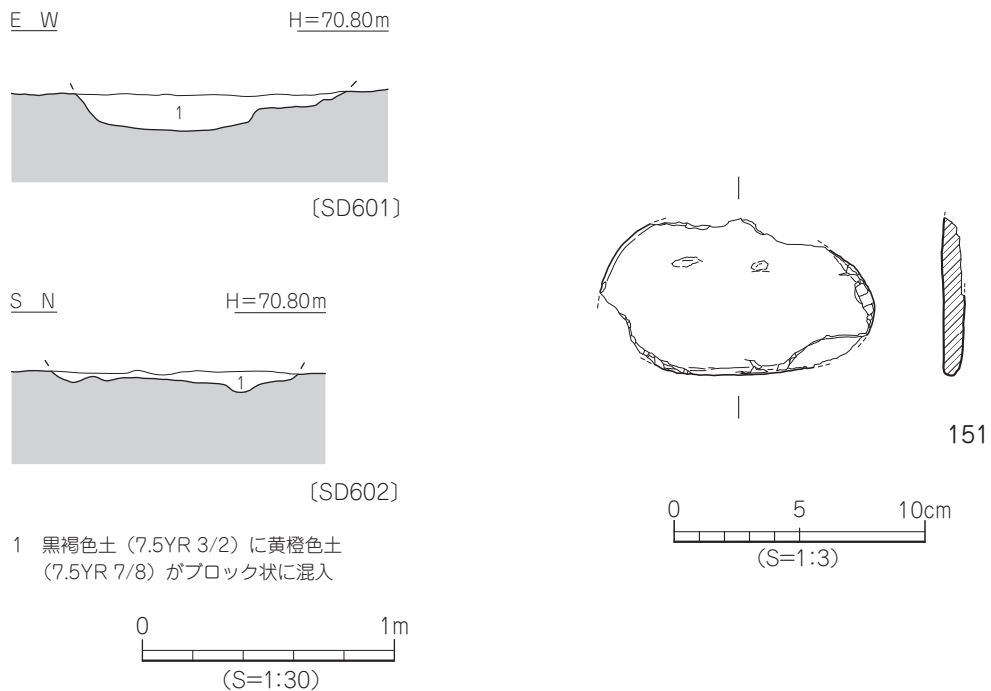
SK601 (第 62 図)

6区中央部北寄り C14区で検出した土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 1.24 m、短径 0.72 m、深さ 14cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰黄褐色土 (10YR 4/2) 単層である。土坑基底面にて、柱穴 1 基 (SP ①) を検出した。平面形態は円形をなし、規模は径 20cm、深さ 14cm である。柱穴掘り方埋土は、暗褐色土 (10YR 3/4) 単層であり、SK601 に先行する時期の遺構と推測される。遺物は土坑内から、弥生土器片が数点出土した。そのうち、実測しうる遺物を 1 点掲載した。

出土遺物

152 は弥生土器の甕形土器。底部片で、上げ底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第 61 図 SD601・602 断面図・出土遺物実測図

SK602 (第 63 図)

6区北東部C14区で検出した土坑で、土坑北半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.36 m、南北検出長 0.66 m、深さは 24cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土はオリーブ黒色土 (5Y 3/2) に暗褐色土 (10YR 3/4) がブロック状に混入するものである。土坑内からは、遺物の出土はない。

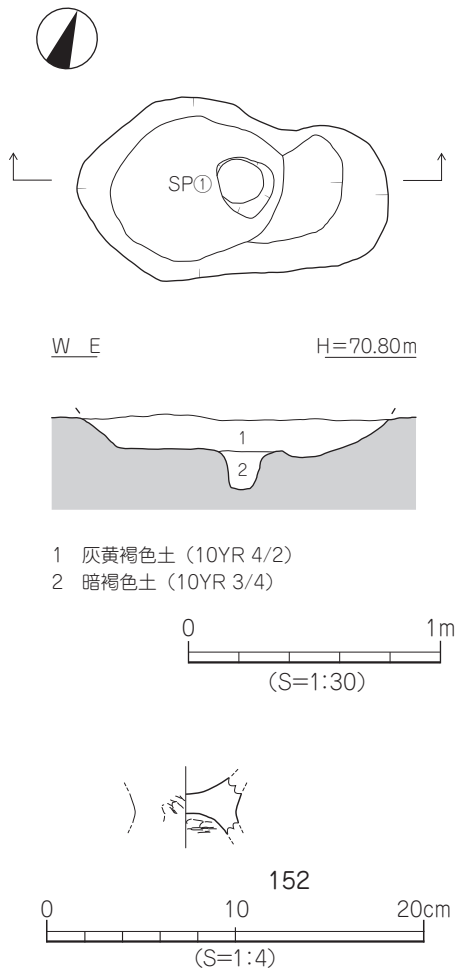
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位と埋土がSB601と類似することから、概ね古墳時代後期の土坑と考えられる。

(5) その他の遺構と遺物

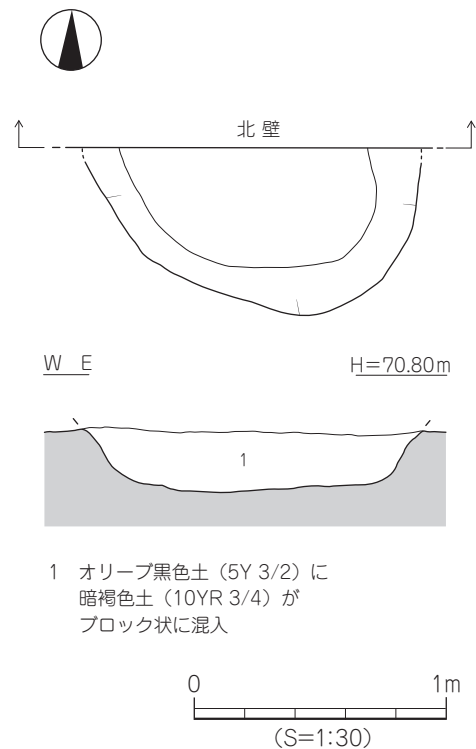
6区では、18基の柱穴(掘立柱建物柱穴7基を含む)を検出した。また、第IV層中からは弥生土器や須恵器、土師器が出土した。

1) 柱 穴

検出した18基の柱穴のうち、掘立柱建物を除く柱穴の掘り方埋土は、以下の4種類に分類される。なお、各柱穴からは、遺物の出土はない。



第 62 図 SK601 測量図・出土遺物実測図



第 63 図 SK602 測量図

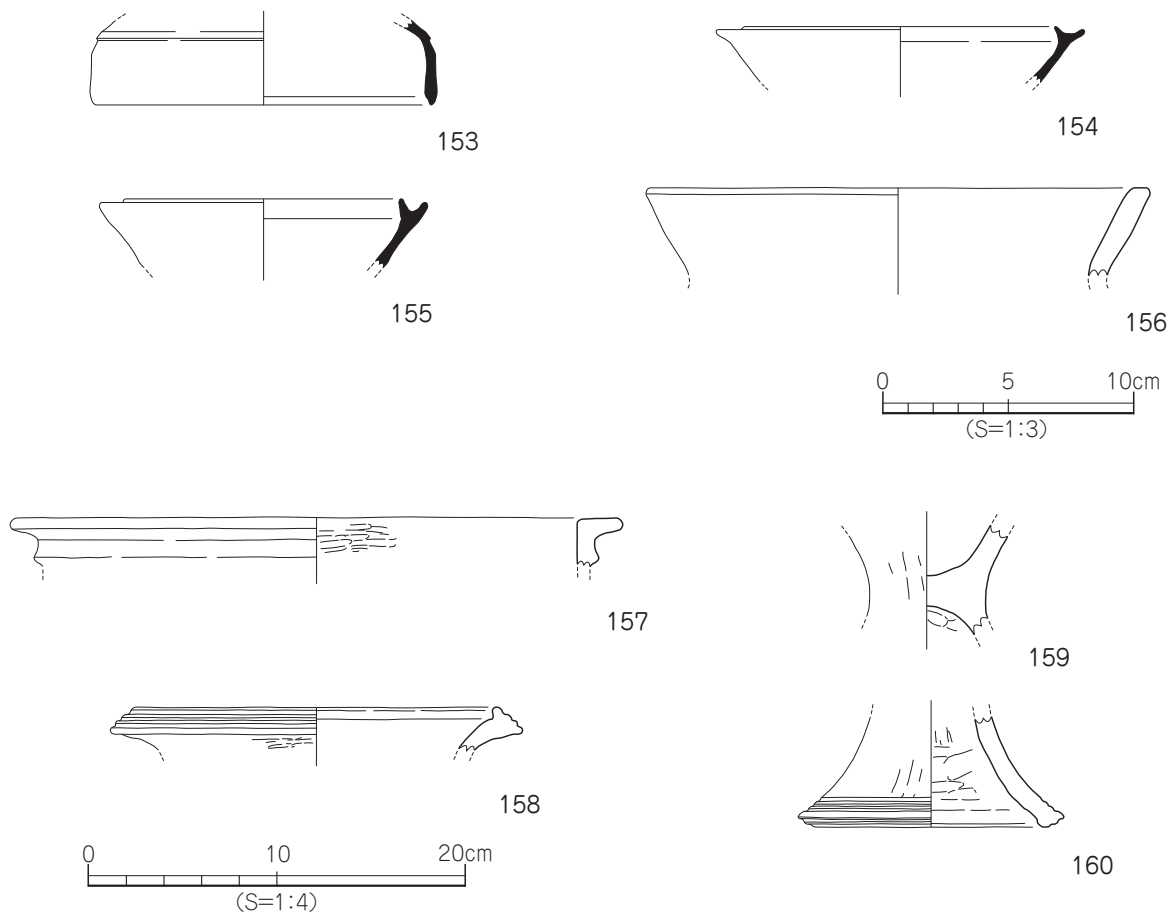
- ① 暗褐色土 (10YR 3/4) : 3 基
- ② 黒褐色土 (7.5YR 3/2) に黄橙色土 (7.5YR 7/8) がブロック状に混入 : 5 基
- ③ オリーブ黒色土 (5Y 3/2) : 1 基
- ④ 灰黄褐色土 (10YR 4/2) : 2 基

2) 第IV層出土遺物 (第64図、図版17)

153～155は須恵器。153は坏蓋で、断面三角形の稜をもち、口縁端部は内傾する。5世紀後葉。154・155は坏身で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。7世紀前葉。156は土師器の甕。口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。6世紀。157～160は弥生土器。157は甕形土器で、胴部に凸帯を貼り付ける。弥生時代中期中葉。158は広口壺で、口縁端面に凹線文3条を施す。弥生時代中期後葉。159は甕形土器の底部で、上げ底をなす。弥生時代中期後葉。160は高坏形土器。脚部片で、脚裾部と脚端面に凹線文を施す。弥生時代中期後葉。

(6) まとめ

6区では、弥生時代から古墳時代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は竪穴建物4棟、掘



第64図 6区 第IV層出土遺物実測図

立柱建物 1 棟、溝 3 条、土坑 2 基である。弥生時代は溝 3 条と土坑 1 基、古墳時代は竪穴建物 4 棟と掘立柱建物 1 棟、及び土坑 1 基を検出している。このうち、4 棟の竪穴建物は 6 世紀中葉から 7 世紀前葉に廃棄・埋没されている。なお、掘立柱建物は、建物を構成する柱穴掘り方埋土が 3 区検出の掘立 302 と酷似することから、6 世紀中葉以降に構築された建物と思われる。遺物は第Ⅳ層中より、弥生時代中期中葉から後期、古墳時代中期後葉から後期に時期比定される土器が出土している。

【検出遺構】

- 弥生時代中期中葉：土坑 1 基 (SK601)
- 中期後葉：溝 3 条 (SD601 ~ 603)
- 古墳時代後期中葉：竪穴 1 棟 (SB603)
- 掘立 1 棟 (掘立 601)
- 後期後葉：竪穴 1 棟 (SB604)
- 後期末：竪穴 2 棟 (SB601・602)
- (後期)：土坑 1 基 (SK602)

2. 7 区の調査

7 区では、古墳 1 基を検出した。なお、1 次調査 4 区からは古墳 1 基 (1 号墳と呼称) を検出しており、本調査検出の古墳は 2 号墳として取り扱う (第 65 図、図版 7)。

(1) 古 墳

2 号墳 (第 66 図、図版 7)

7 区北東部 C16・17 区に位置する古墳であるが、墳丘は遺存しておらず、石室の一部を検出した。ここでは、調査工程をふまえて説明する。まず、重機の使用による表土掘削時、7 区北東部にて径 10 ~ 30cm 大の礫がまとまって出土したことから掘削を中断し、作業員による手作業にて調査を進めた。東西 2.5 m、南北 4 m の範囲に褐色土の広がり認められ、その後、その内部にて径 3 ~ 5cm 大の石組を検出した。そこで、検出状況の図面を作成後、上部の石を除去しながら作業を進めた。その結果、東西及び南北方向に並ぶ石列を検出したことから、石室と判断した。

石室の規模は南北検出長 2.90 m、東西検出長 1.15 m である。石室中央部から南側にかけては近現代の造成等により床面と側壁の一部は遺存していなかった。また、南東部には石室に使用された石の抜き取り痕を確認した。形状より、南側に開口する横穴式石室と考えられ、北側床面には径 3 ~ 5cm 大の小礫が敷き詰められている。なお、石室内からは、遺物の出土は見られなかった。墓坑は長方形に掘削されており、規模は東西長 2.55 m、南北長 4.0 m、深さ 25cm である。埋土は、褐色土 (7.5YR 4/3) に橙色土 (7.5YR 6/6) や暗褐色土 (10YR 3/4) がブロック状に混入するものである。墓坑からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、石室の形状や 1 号墳の検出等より、概ね古墳時代末、7 世紀中葉頃の造営と考えられる。

(2) その他の遺構と遺物

7区では、第IV層中より弥生土器や土師器、須恵器のほか石器が数点出土した。

第IV層出土遺物 (第67図、図版17)

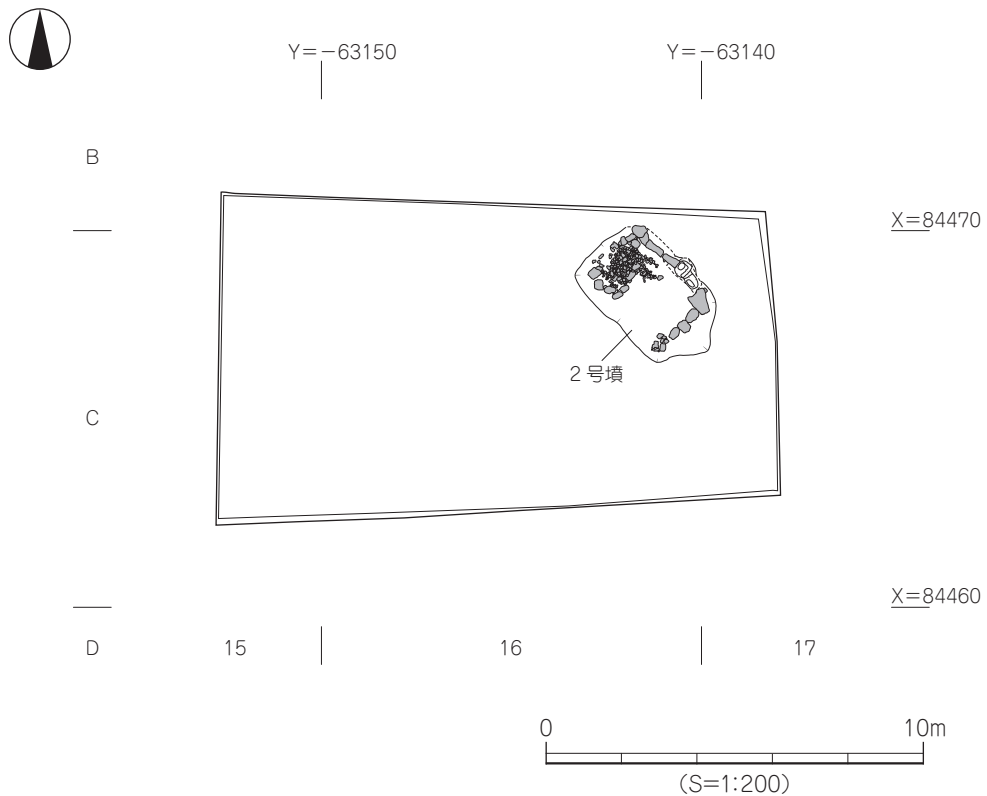
161・162は弥生土器の甕形土器。161は上げ底、162は僅かに上げ底の底部である。弥生時代中期後葉。163・164は須恵器。163は蓋で、焼成時における重ね焼きの一部が付着する。164は短頸壺。6世紀後葉。165は土師器の甕で、内面には板状工具による強いナデを施す。6世紀。166は柱状片刃石斧で、刃部と基部を欠損する。結晶片岩製。

(3) まとめ

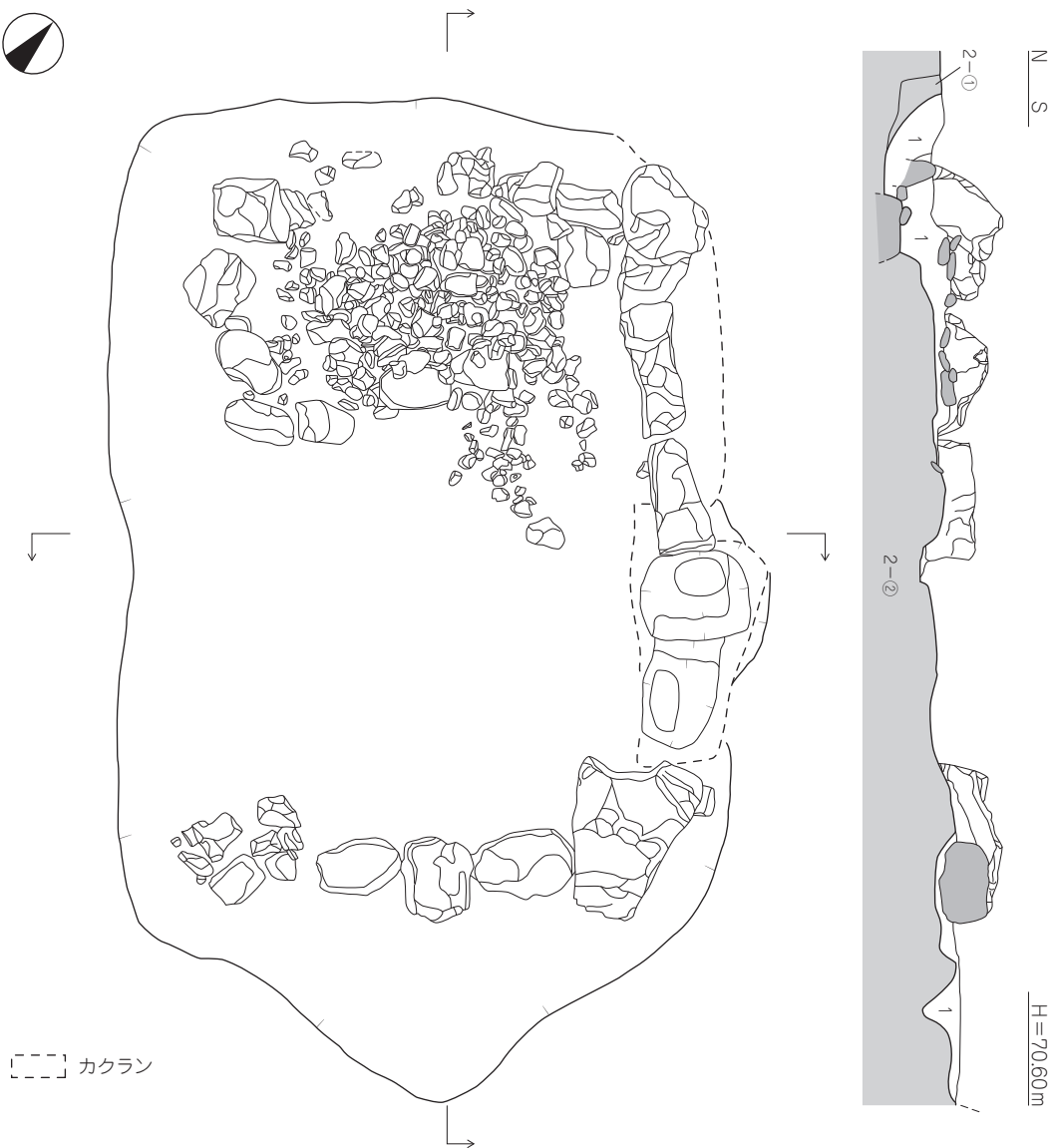
7区では、弥生時代から古墳時代の遺構、遺物を検出した。弥生時代の遺構は未検出であるが、第IV層中からは弥生時代中期後葉から後期の土器片が少量出土したほか、石斧をはじめ石器が数点出土した。古墳時代では、石室1基を検出した。2号墳は横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳であるが、盛土は遺存しておらず、墳形や規模等は不明である。石室床面には小礫が敷き詰められていたが、石室内から遺物の出土はなかった。時期特定は困難であるが、1号墳と同様、古墳時代後期末、7世紀中葉頃の造営と推測される。

【検出遺構】

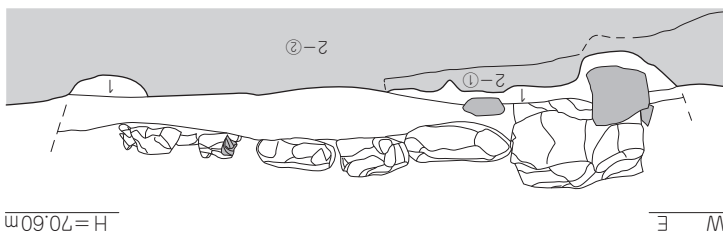
古墳時代後期末：古墳 1基 (2号墳)



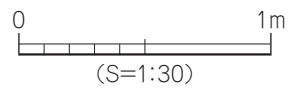
第65図 7区遺構配置図



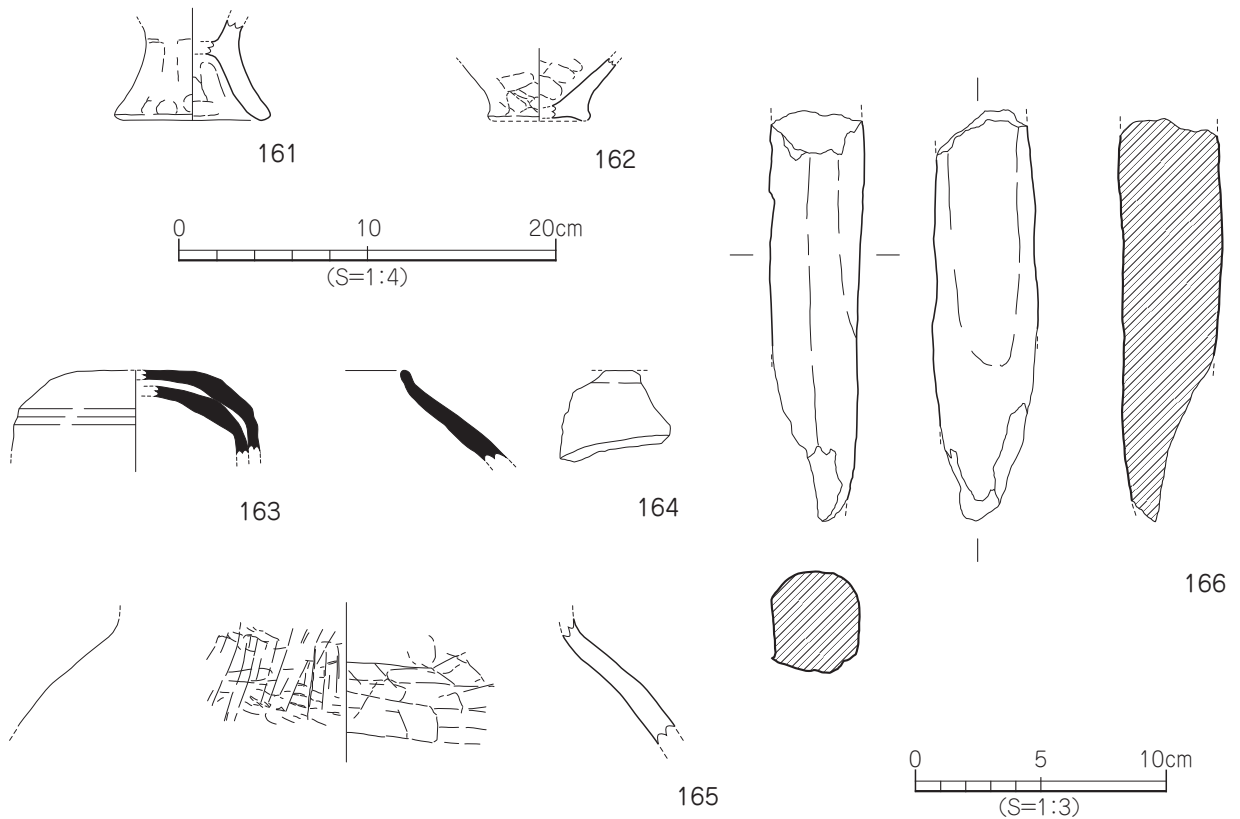
カクラン



- 1 褐色土 (7.5YR 4/3) に橙色土 (7.5YR 6/6) が混じる
- 2-① 褐色土 (7.5YR 4/3) に暗褐色土 (10YR 3/4) と砂が混じる〔地山〕
- 2-② 2-①に小石・小礫 多含〔地山〕



第 66 図 2号墳測量図



第 67 図 7 区 第 IV 層出土遺物実測図

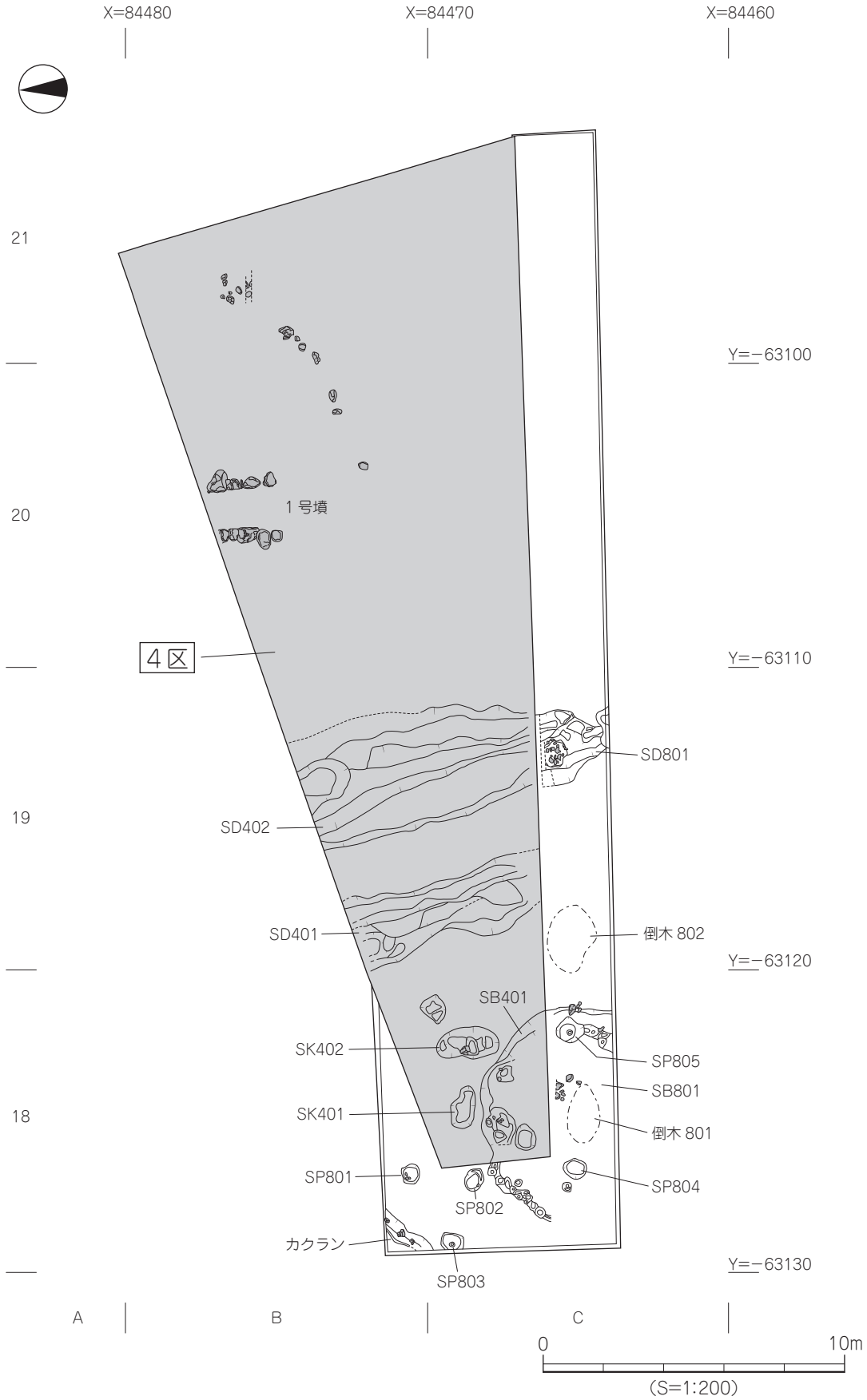
3. 8 区の調査

8 区では竪穴建物 1 棟、溝 1 条、柱穴 5 基と倒木址 2 基を検出した（第 68 図、図版 8）。

(1) 竪穴建物

SB801（第 69 図、図版 8）

8 区西端 C18 区に位置する竪穴建物で、4 区で検出した SB401 と同一の建物である。建物西側と東側は、2 基の柱穴（SP804・805）により一部削平されており、建物南側は調査区外へ続く。壁面の土層観察により、建物上面は第 V 層が覆う。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は径 7.3 m 以上、壁高は 18cm である。建物埋土は褐色土（7.5YR 4/4）単層である。内部施設は、柱穴と周壁溝を検出した。検出した 4 基の柱穴（SP ①～④）の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径 25～40cm、深さ 20～25cm である。柱穴掘り方埋土は、すべて褐色土（7.5YR 4/4）単層であるが、支柱穴を特定するには至らなかった。このほか、建物北西部と南東部には壁体に沿って周壁溝を検出した。径 5～10cm、深さ 3～10cm 大の小ピットが点在しており、壁体沿いに打ち込まれた杭の痕跡と考えられる。なお、建物南東部には壁体より内側に周壁溝の一部を検出しており、建て替えの施された建物と推測される。建物床面中央部には、倒木址（倒木址 801）と思われる円形状の凹みが認められた。凹みには、褐色土（7.5YR 4/4）と黄褐色土（10YR 5/8）が互層堆積をなす。遺物は建物埋土中より弥生土器の小片が数点と径 3～10cm 大の河原石が散在して出土したが、図化しうる土器はない。ただし、SB401



第 68 図 8 区遺構配置図

と同様、外面に叩き痕の残る破片が数点みられた。

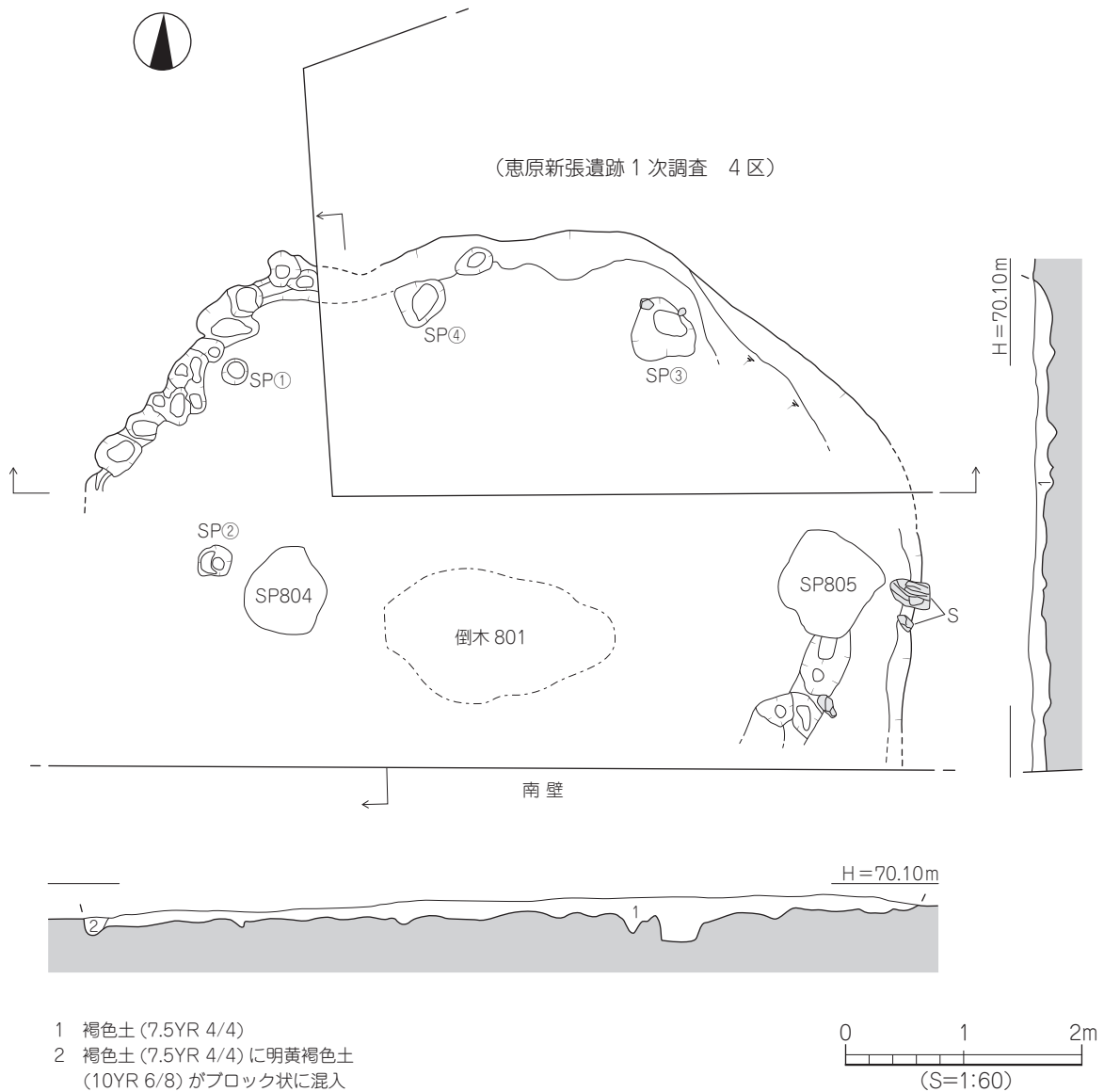
時期：遺物が僅少で時期特定は困難であるが、叩きの残る破片が出土したこと、建物の平面形状などから、SB801の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。

(2) 溝

SD801 (第68図)

8区中央部C19区で検出した南北方向の溝で、4区検出のSD402と同一の溝である。規模は検出長2.30m、最大幅2.40m、深さは28cmである。断面形態は「U」字状をなし、埋土は、にぶい褐色土(7.5YR 5/4)単層である。溝からは土師器や須恵器の小片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少であるが、1次調査の結果より、古墳時代後期、6世紀後葉とする。



第69図 SB801 測量図

(3) その他の遺構と遺物

8区では、柱穴5基と倒木址2基を検出した。このほか、第Ⅲ層からは古代、第Ⅴ層中からは縄文時代や弥生時代の遺物が出土した。

1) 柱 穴

8区からは、5基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の3種類となる。

- ①類-褐灰色土 (10YR 5/1) : 3基
- ②類-にぶい褐色土 (7.5YR 5/4) : 1基
- ③類-灰褐色土 (7.5YR 4/2) : 1基

2) 倒木址

8区では、2基の倒木址を検出した。倒木址801はSB801床面にて検出され、倒木址802は調査区南西部にて検出された。褐色土(7.5YR 4/4)を基調とし、明黄褐色土(10YR 7/6)や黄褐色土(10YR 5/8)が混在している。なお、倒壊方向は両者共に東から西である。

3) 8区包含層出土遺物

① 第Ⅲ層出土遺物 (第70図、図版17)

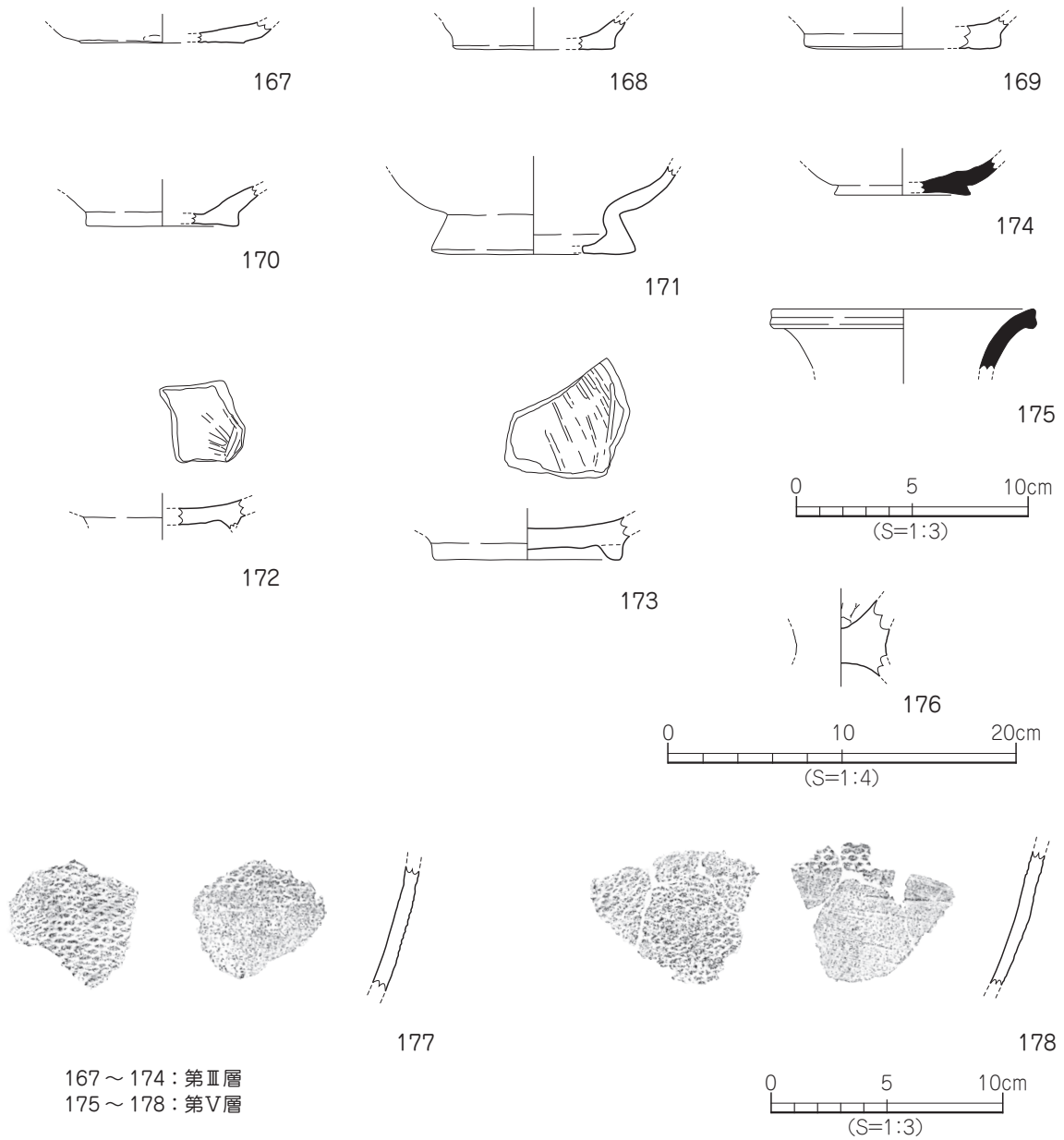
167～173は土師器。167～171は坏で、167は平底、168～171は円盤高台状の底部をもつ。167の底部外面には回転糸切り痕、169の外面には回転ヘラ切り痕が残る。なお、168・169の胎土中には赤色酸化土粒が少量含まれる。172・173は内黒椀で、底部内面には暗文を施す。平安時代後期。174は須恵器の坏で、円盤高台状の底部をもつ。底部外面には、回転糸切り痕が残る。平安時代後期。

② 第Ⅴ層出土遺物 (第70図、図版18)

175は須恵器の広口壺で、口縁端部には凹線が巡る。古墳時代後期。176は弥生土器。甕形土器の底部で、上げ底をなす。弥生時代中期中葉。177・178は縄文土器。早期の深鉢で、内外面に押型文を施す。

(4) まとめ

8区では、縄文時代から古代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、弥生時代の竪穴建物1棟と古墳時代の溝1条である。SB801は推定直径7.3m以上の円形竪穴建物で、1次調査検出のSB401と同一建物である。出土遺物より、SB801は弥生時代末に埋没した建物と考えられる。また、SD801は1次調査検出のSD402(7世紀前葉)と同一の溝である。縄文時代では、第Ⅴ層中より早期の土器片2点が出土した。5×5cm大の破片で、内外面には押型文が施されている。また、第Ⅲ層中からは古代、平安時代後期に時期比定される土師器や須恵器などの供膳具が、破片ではあるが比較的多く出土している。



第 70 図 8 区 第Ⅲ・Ⅴ層出土遺物実測図

【検出遺構】

- 弥生時代末 : 竪穴 1 棟 (SB801) ……SB401 と同一建物
古墳時代後期末 : 溝 1 条 (SD801) ……SD402 と同一溝

第 4 節 小 結

恵原新張遺跡 2 次調査では、縄文時代から古代までの遺構や遺物を確認した。ここでは、時代別のまとめを行う。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であるが、8区検出の第Ⅴ層中より早期に時期比定される土器片が2点出土している（第70図177・178）。調査地周辺では、谷田Ⅱ遺跡から該期の土器が出土しており、縄文時代早期の集落が存在したことを示す重要な資料といえよう。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴建物1棟と溝3条、土坑1基を確認した。SB801は円形竪穴建物で、1次調査4区で検出したSB401と同一の建物である。一部のみを検出であるが、推定直径7.3m以上の比較的大型の竪穴建物である。建物内からは弥生土器の小破片が少量出土したが、時期特定しうる遺物はない。ただし、数点ではあるが、外面に粗目の「叩き」を施す破片が含まれており、その特徴からSB801の廃棄・埋没時期は弥生時代末頃と考えられる。また、6区からは3条の溝が検出されている。これらの溝は形状が不規則であり、用途は不明であるが、水流は認められない。出土遺物より、弥生時代中期後葉の溝と考えられる。さらに、6区からは土坑1基を検出した。土坑内からは、弥生時代中期中葉に時期比定される土器片が数点出土している。このほかには、8区検出の第Ⅴ層中より弥生時代中期中葉、6区と7区検出の第Ⅳ層中からは弥生時代中期中葉から後葉の土器片が少量出土した。1次調査の1区から3区において、弥生時代中期中葉から後葉の遺構が数多く検出されており、2次調査の結果をふまえると、調査地内全域には弥生時代中・後期集落の存在が明らかとなった。

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴建物4棟、掘立柱建物1棟、溝1条、土坑1基のほか古墳1基を検出した。4棟の竪穴建物は、すべて6区で検出された。建物の推移をみると古墳時代後期中葉、6世紀中頃にはSB603、後期後葉、6世紀後葉にはSB604、さらに7世紀初頭にはSB601、7世紀前葉にはSB602が廃棄・埋没している。いずれの建物も平面形態は隅丸方形または長方形をなすものと思われ、SB601には造り付けのカマドが付設されていた。掘立柱建物（掘立601）は4間×2間以上の建物で、1次調査検出の掘立301・302と建物方位を等しくする。時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴掘り方埋土が掘立302と酷似することなどから、概ね6世紀中葉以降に構築された建物と推測される。このほか、6区からは古墳時代後期の土坑SK602のほか、8区では溝SD801などが検出されている。出土品の中には、7区検出の第Ⅳ層中より重ね焼きを行ったことを示す須恵器片が出土している。

(4) 古代

古代の遺構は未検出であるが、8区検出の第Ⅲ層中からは比較的多くの土師器や須恵器の破片が出土した。円盤高台状の底部をもつ土師器坏をはじめ、内黒碗や須恵器坏など、平安時代後期に時期比定されるものである。1次調査4区からも同時期の遺物が出土しており、4区・8区を中心とする周辺地域には古代集落の存在を示す資料といえよう。

表 37 恵原新張遺跡 2 次調査 検出遺構一覧

時 代		6 区	7 区	8 区
縄文時代	早 期			(第V層)
弥生時代	中期中葉	土坑：1 基		(第V層)
	中期後葉	溝：3 条	(第IV層)	(第V層)
	後 期	(第IV層)	(第IV層)	(第V層)
	末			竪穴：1 棟 (SB401 と同一)
古墳時代	中期後葉	(第IV層)		
	後期前葉	(第IV層)		
	後期中葉	竪穴：1 棟 掘立：1 棟		
	後期後葉	竪穴：1 棟	(第IV層)	(第IV層)
	後期末	竪穴：2 棟	古墳：1 基	溝：1 条 (SD402 と同一)
	[後期]	土坑：1 基		
古 代				(第III層)

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地 区 欄：グリッド名を記載。

規 模 欄：() は現存値を示す。

埋 土 欄：複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例) 「暗褐色土 他」

出土遺物欄：遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、石→石器

(2) 遺物観察表

法 量 欄 ()：復元推定値

調 整 欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 天→天井部、口→口縁部、胴上→胴部上半部、胴下→胴部下半部

胎 土 欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1～2) → 「1～2mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 欄 焼成欄の略記について

◎→ 良好

惠原新張遺跡 2次調査

表 38 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	区	地区	平面形	規 模 長さ×幅×壁高 (m)	埋 土	出土遺物	時 期
601	6	C12・13	隅丸方形	5.36 × (3.50) × 0.10	暗褐色土 他	弥生・土師・須恵・石	古墳後期末
602	6	C12・13	隅丸方形	(5.00) × (2.72) × 0.16	黒褐色土 (黄橙色土混入)	弥生・土師・須恵・石	古墳後期末
603	6	C13	隅丸方形	4.05 × (0.96) × 0.11	オリーブ黒色土	土師・須恵	古墳後期中葉
604	6	C12・13	隅丸方形	(2.90) × (1.50) × 0.07	黒褐色土	土師・須恵	古墳後期後葉
801	8	C18	円形	7.30 × (4.50) × 0.18	褐色土	弥生・石	弥生末

表 39 掘立柱建物一覧

掘立	区	地区	方 位	構 造	規 模		床面積 (㎡)	出土遺物	時 期
					桁行長 (m)	梁行長 (m)			
601	6	C14・15	東西	側柱	8.63 (4間)	5.32 (2間以上)	45.91		古墳後期中葉以降

表 40 溝一覧

溝 (SD)	区	地区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
601	6	C13	レンズ状	(4.37) × 1.30 × 0.18	黒褐色土 (黄橙色土混入)	弥生・石	弥生中期後葉
602	6	C13・14	レンズ状	(12.35) × 1.25 × 0.12	黒褐色土 (黄橙色土混入)		弥生中期後葉
603	6	C13	レンズ状	(3.75) × 1.03 × 0.28	黒褐色土 (黄橙色土混入)	弥生	弥生中期後葉
801	8	C19	U字状	(2.30) × 2.40 × 0.28	にぶい褐色土	土師・須恵	古墳後期後葉

表 41 土坑一覧

土坑 (SK)	区	地区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
601	6	C14	不整楕円形	逆台形状	1.24 × 0.72 × 0.14	灰黄褐色土	弥生	弥生中期中葉
602	6	C14	楕円形	逆台形状	(1.36) × (0.66) × 0.24	オリーブ黒色土 (暗褐色土混入)		古墳後期

表 42 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	区	地区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
601	6	C14	円形	0.38 × 0.34 × 0.20	灰黄褐色土		掘立 601
602	6	C14	円形	0.33 × 0.32 × 0.14	灰黄褐色土		掘立 601
603	6	C14	円形	0.34 × 0.32 × 0.20	灰黄褐色土		掘立 601
604	6	C14	円形	0.32 × 0.31 × 0.29	灰黄褐色土		掘立 601
605	6	C14	楕円形	0.32 × 0.24 × 0.16	灰黄褐色土		掘立 601
606	6	C14	円形	0.43 × 0.38 × 0.08	灰黄褐色土		掘立 601
607	6	C14	円形	0.33 × 0.31 × 0.05	灰黄褐色土		掘立 601
608	6	C15	楕円形	0.33 × 0.25 × 0.05	暗褐色土		
609	6	C15	円形	0.26 × 0.24 × 0.05	暗褐色土		
610	6	C15	円形	0.22 × (0.20) × 0.30	暗褐色土		
611	6	C15	円形	0.35 × 0.31 × 0.14	黒褐色土 (黄橙色土混入)		
612	6	C15	楕円形	0.40 × 0.28 × 0.12	黒褐色土 (黄橙色土混入)		

遺物観察表

柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
613	6	C13	(円形)	0.42 × (0.22) × 0.25	オリーブ黒色土		
614	6	C13	(円形)	(0.42) × (0.22) × 0.16	黒褐色土 (黄橙色土混入)		
615	6	C13	(円形)	(0.44) × (0.38) × 0.40	黒褐色土 (黄橙色土混入)		
616	6	C13	円形	0.44 × 0.44 × 0.30	黒褐色土 (黄橙色土混入)		
617	6	C14	円形	0.18 × 0.18 × 0.24	灰黄褐色土		
618	6	C14	円形	0.21 × 0.19 × 0.18	灰黄褐色土		
801	8	B18	円形	0.66 × 0.56 × 0.26	褐灰色土		
802	8	C18	楕円形	0.76 × 0.53 × 0.32	褐灰色土		
803	8	C18	(楕円形)	0.74 × (0.46) × 0.34	にぶい褐色土		柱痕
804	8	C18	円形	0.72 × 0.69 × 0.40	褐灰色土		
805	8	C18	円形	0.80 × 0.75 × 0.38	灰褐色土		柱痕

表 43 SB601 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
121	鉢	口径 (20.9) 残高 4.2	僅かに外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		
122	坏蓋	口径 (12.2) 残高 2.3	口縁部片。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
123	坏身	残高 2.1	たちあがりは短く内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
124	壺	残高 4.3	短頸壺。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
125	壺	口径 (23.4) 残高 2.0	広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に山形文あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1~2) ◎		
126	高坏	底径 (13.0) 残高 3.7	脚裾部に凹線文3条、脚端面に凹線文2条あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ◎		
127	甕	底径 (12.5) 残高 3.4	平底。小片。	ヘラミガキ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	

表 44 SB601 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
128	剥片	完形	赤色珪質岩	2.5	2.6	0.5	3.67		

表 45 SB602 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
129	坏身	たちあがり (11.3) 残高 2.0	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		16
130	坏身	たちあがり (10.0) 残高 3.0	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
131	坏身	たちあがり (8.9) 残高 2.4	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		16
132	壺	残高 5.6	扁球形の胴部。胴部中に回転カキメ調整あり。1/5の残存。	ⓍP 回転ナデ ⓍD 平行叩き →ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		

SB602 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
133	壺	底径 (18.8) 残高 3.2	底部片。小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
134	甕	残高 3.3	沈線1条と波状文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	褐色 赤褐色	密 ◎		16
135	高坏	底径 (13.6) 残高 4.0	ラッパ状に開く脚部。脚端部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
136	甕	残高 3.2	肩部片。	平行叩き	円弧叩き	灰白色 灰白色	密 ◎		
137	甕	残高 8.3	胴部片。1/5の残存。	平行叩き→ハケ	同心円叩き・ 円弧叩き	青灰色 灰色	密 ◎		
138	甕	残高 6.7	把手部。断面楕円形。	ナデ	ナデ	橙色	石・長 (1) ◎		16
139	壺	残高 4.9	頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に押圧を加える。小片。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 黄灰色	石・長 (1~2) ◎		
140	壺	残高 3.8	肩部に列点文あり。小片。	マメツ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		16
141	甕	底径 (5.0) 残高 3.0	上げ底。底部完形。	マメツ	ナデ	橙色 黄橙色	石・長 (1~3) ◎		

表 46 SB602 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
142	台石	一部欠損	結晶片岩	21.3	20.8	6.6	3,300		

表 47 SB604 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
143	坏蓋	口径 (16.2) 残高 2.3	天井部と口縁部の境界は凹線状の凹みがある。口縁端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
144	坏身	口径 (12.2) 残高 3.0	たちあがり端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 48 SB603 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
145	坏蓋	口径 (16.6) 残高 4.4	扁平な天井部。口縁端部は内傾する。3/4の残存。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	㊦円弧叩き ㊧回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		17
146	坏蓋	口径 (17.4) 残高 3.4	天井部と口縁部の境界は不明瞭な稜をもち、口縁端部は内傾する。小片。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表 49 SD603 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
147	壺	残高 3.3	肩部片。列点文あり。小片。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ◎		
148	高坏	残高 2.9	坏部に凹線文3条あり。小片。	ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		
149	甕	残高 14.6	胴部片。1/3の残存。	ハケ →ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎		
150	甕	底径 (7.6) 残高 3.6	平底。1/3の残存。	ヘラミガキ	ナデ	明赤褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		

遺物観察表

表 50 SD601 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
151	石庖丁	一部欠損	結晶片岩	6.2	10.9	0.85	96.19	未成品	17

表 51 SK601 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
152	甕	残高 3.0	上げ底。2/3の残存。	ハラミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	

表 52 6区第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
153	坏蓋	口径 (13.2) 残高 3.3	断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。小片。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
154	坏身	口径 (12.2) 残高 2.2	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
155	坏身	口径 (10.9) 残高 2.7	たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
156	甕	口径 (19.6) 残高 3.5	内湾口縁。口縁端部は内傾する。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 石赤 ◎		
157	甕	口径 (31.8) 残高 2.5	逆L字状口縁。胴部に貼付凸帯1条あり。小片。	ヨコナデ	ハラミガキ	橙色 灰黄色	石・長 (1~3) 石金 ◎		17
158	壺	口径 (19.0) 残高 2.3	広口壺。口縁部は上方に拡張し、口縁端部に凹線文3条あり。小片。	ハラミガキ	ハラミガキ	茶褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		
159	甕	残高 5.8	上げ底。2/3の残存。	マメツ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	
160	高坏	底径 (12.0) 残高 5.8	脚裾部に凹線文3条、脚端部に凹線文2条あり。1/4の残存。	マメツ	ナデ	橙色 褐灰色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	17

表 53 7区第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
161	甕	底径 (7.6) 残高 5.3	上げ底。1/3の残存。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長 (1~2) ◎		17
162	甕	底径 (5.1) 残高 3.3	上げ底。1/2の残存。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎		
163	蓋	残高 3.3	短頸壺の蓋。重ね焼きの痕跡あり。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		17
164	壺	残高 3.6	短頸壺。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
165	甕	残高 5.0	胴部片。小片。	ナデ	板ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		

表 54 7区第IV層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
166	石斧	一部欠損	結晶片岩	16.2	3.8	4.0	366.6		17

表 55 8区包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
167	坏	底径 (7.0) 残高 0.9	平底。底部の切り離しは回転糸切り技法による。1/4の残存。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ◎	第III層	

恵原新張遺跡 2次調査

8区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
168	坏	底径 (6.6) 残高 1.3	円盤高台状の底部。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎	第Ⅲ層	
169	坏	底径 (8.4) 残高 1.3	円盤高台状の底部。底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。小片。	マメツ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ◎	第Ⅲ層	
170	坏	底径 (6.4) 残高 1.7	円盤高台状の底部。1/4の残存。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1) ◎	第Ⅲ層	17
171	坏	底径 (8.8) 残高 3.8	円盤高台状の底部。1/2の残存。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長 (1) ◎	第Ⅲ層	17
172	椀	残高 1.2	内黒椀。底部内面に暗文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 黒色	石・長 (1) ◎	第Ⅲ層	
173	椀	底径 (7.8) 残高 1.8	内黒椀。底部内面に暗文あり。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 黒色	石・長 (1) ◎	第Ⅲ層	17
174	坏	底径 (5.8) 残高 1.6	円盤高台状の底部。底部外面に回転糸切り痕あり。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第Ⅲ層	17
175	壺	口径 (11.2) 残高 2.5	口縁部片。口縁端部は凹線1条が巡る。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	第Ⅴ層	
176	甕	残高 4.4	上げ底。1/2の残存。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎	第Ⅴ層	
177	深鉢	残高 5.3	胴部片。内外面に押型文あり。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ◎	第Ⅴ層	18
178	深鉢	残高 5.7	胴部片。内外面に押型文あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎	第Ⅴ層	18

第5章 恵原新張遺跡3次調査

第1節 調査の経緯

恵原新張遺跡3次調査は、2016（平成28）年5月9日より開始し、同年6月3日に終了した。調査対象区は、調査地中央部の5区であり、調査面積は207㎡である（第71図）。調査は工事の都合上、北側と南側に分割して実施した。まず、北側の調査から開始する。重機（バックホー0.25㎡・3t不整地運搬車）を使用して表土の掘削と運搬作業を行う。同日、壁面精査と遺構検出作業を実施する。5月14日、遺構検出作業を終了し、竪穴建物や柱穴を検出する。5月14日より、遺構の掘削作業を開始する。5月24日、高所作業車を使用して遺構完掘写真を撮影する。5月26日より、南側の調査に着手する。北側と同様に重機を使用して表土の掘削と運搬作業を行う。5月27日、遺構検出作業を終了し、竪穴建物や土坑、柱穴を検出する。6月3日、すべての調査が終わり、屋外作業を終了する。

第2節 層位

調査地は、調査以前は雑種地であった。現況の標高は、70.50～70.80mである。5区では基本層位のうち第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅴ層、及び第Ⅵ層は検出されなかった（第73・74図）。

第Ⅰ層：近現代の造成や農耕に伴う客土で、土色・土質の違いで3種類に分層される。

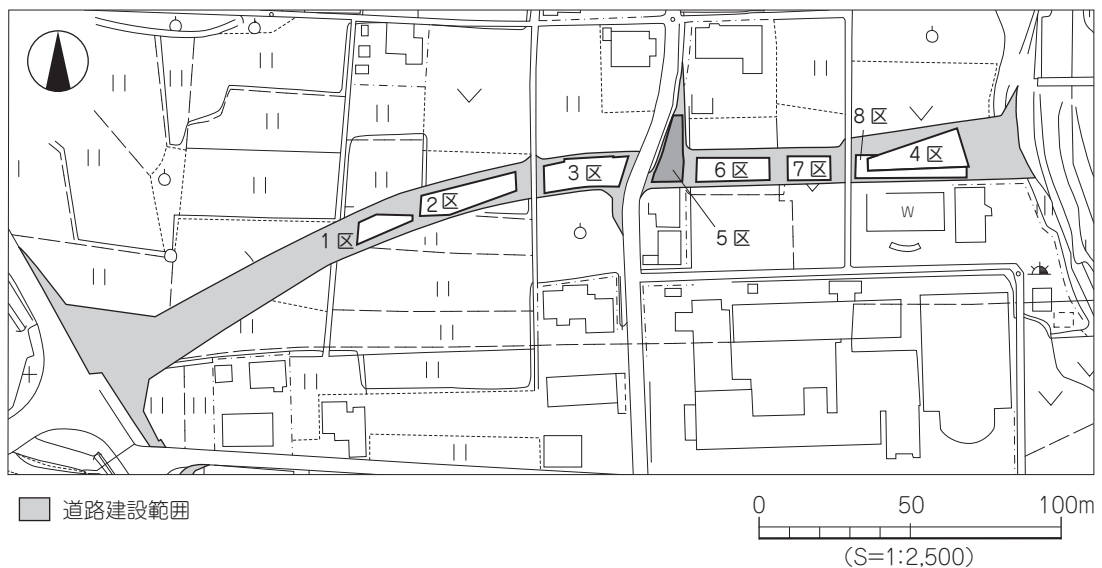
第Ⅰ①層－近現代の造成に伴う真砂土で、地表下10～55cmまで開発が行われている。

第Ⅰ②層－近現代の農耕に伴う耕作土〔灰黄色土（2.5Y 6/2）〕で、層厚3～18cmである。

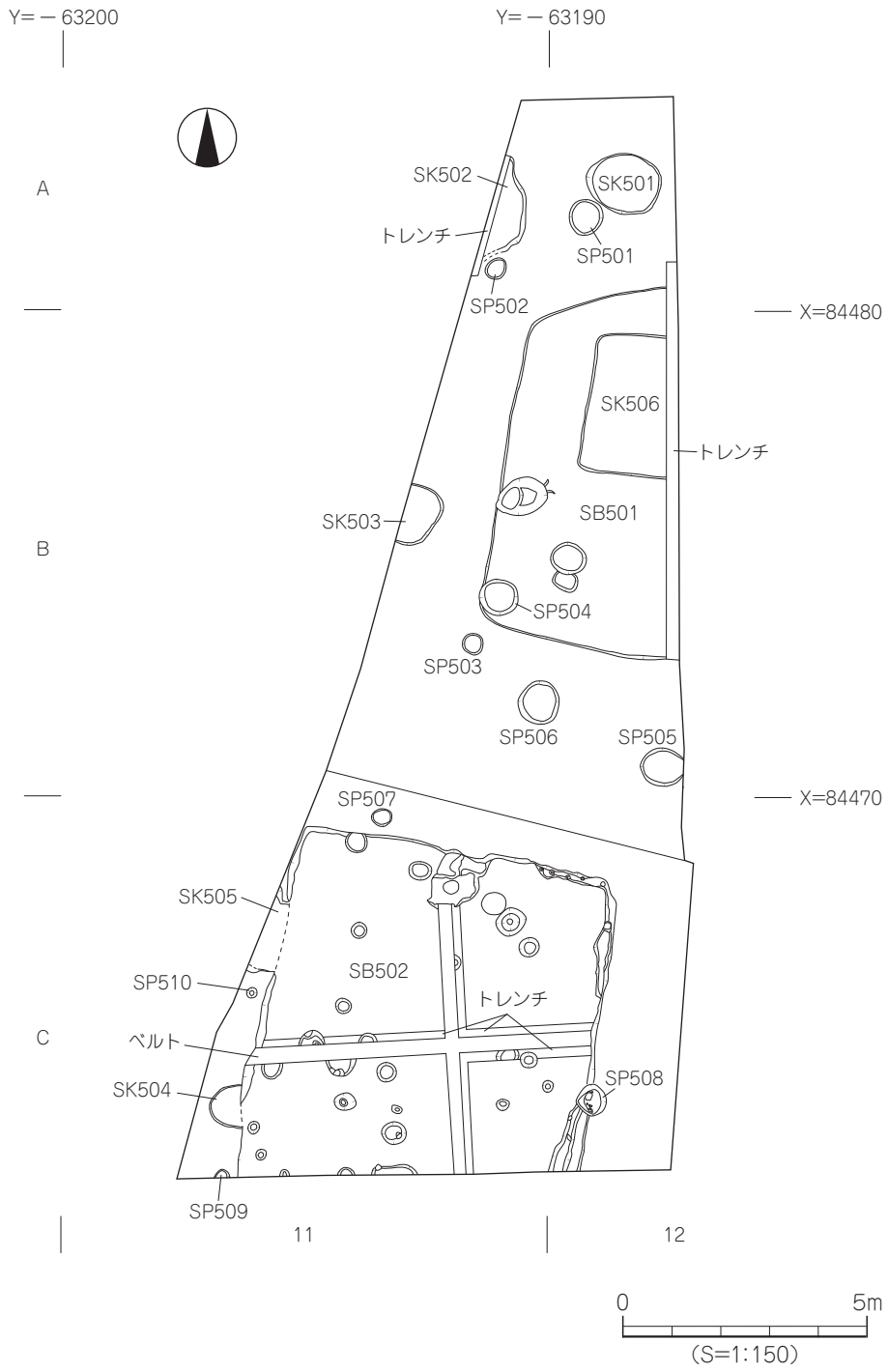
第Ⅰ③層－近現代の農耕に伴う床土〔淡黄色土（2.5Y 8/3）〕で、層厚3～16cmである。

第Ⅳ層：黒色土（7.5YR 2/1）で、層厚は3～20cmである。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器のほか石器が出土した。

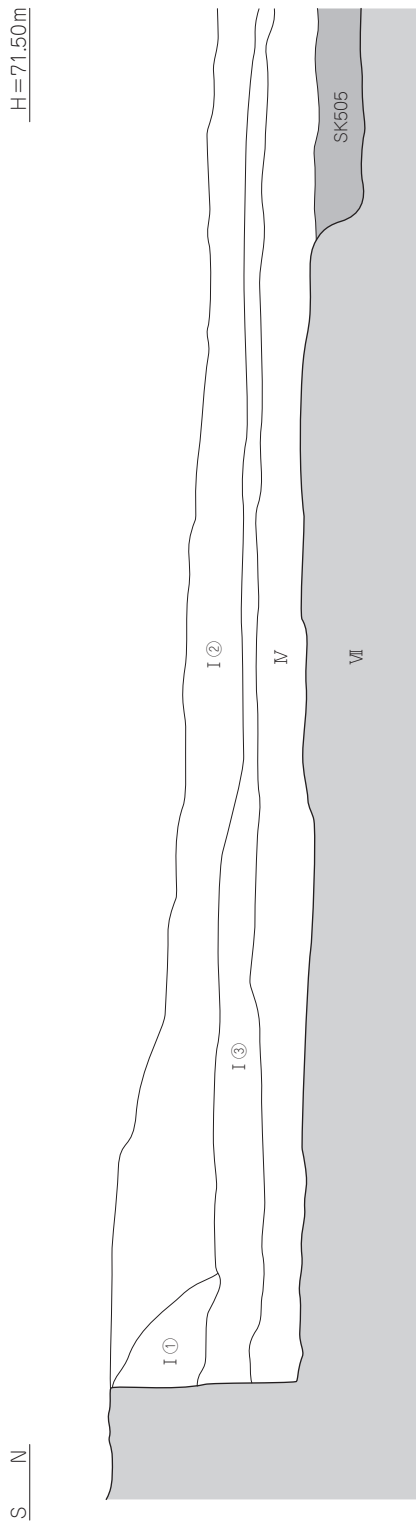
第Ⅶ層：黄褐色土（10YR 5/8）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。



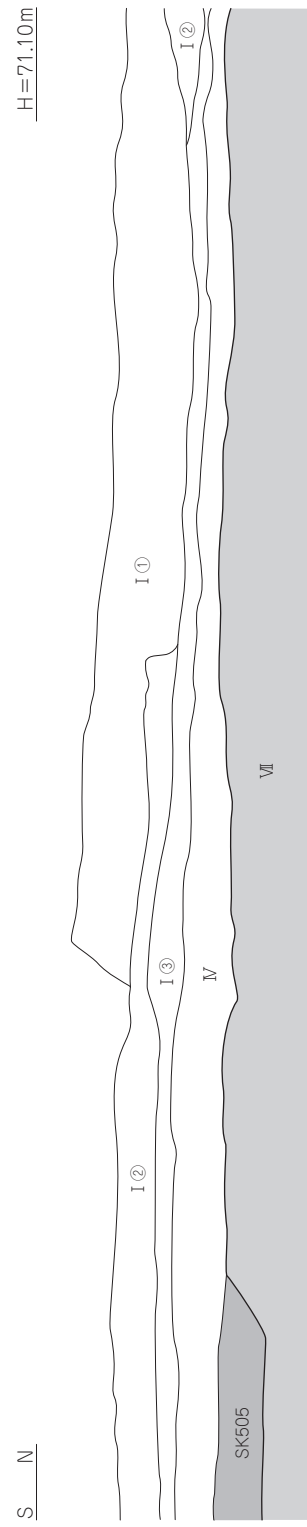
第71図 調査区位置図



第 72 図 5 区遺構配置図



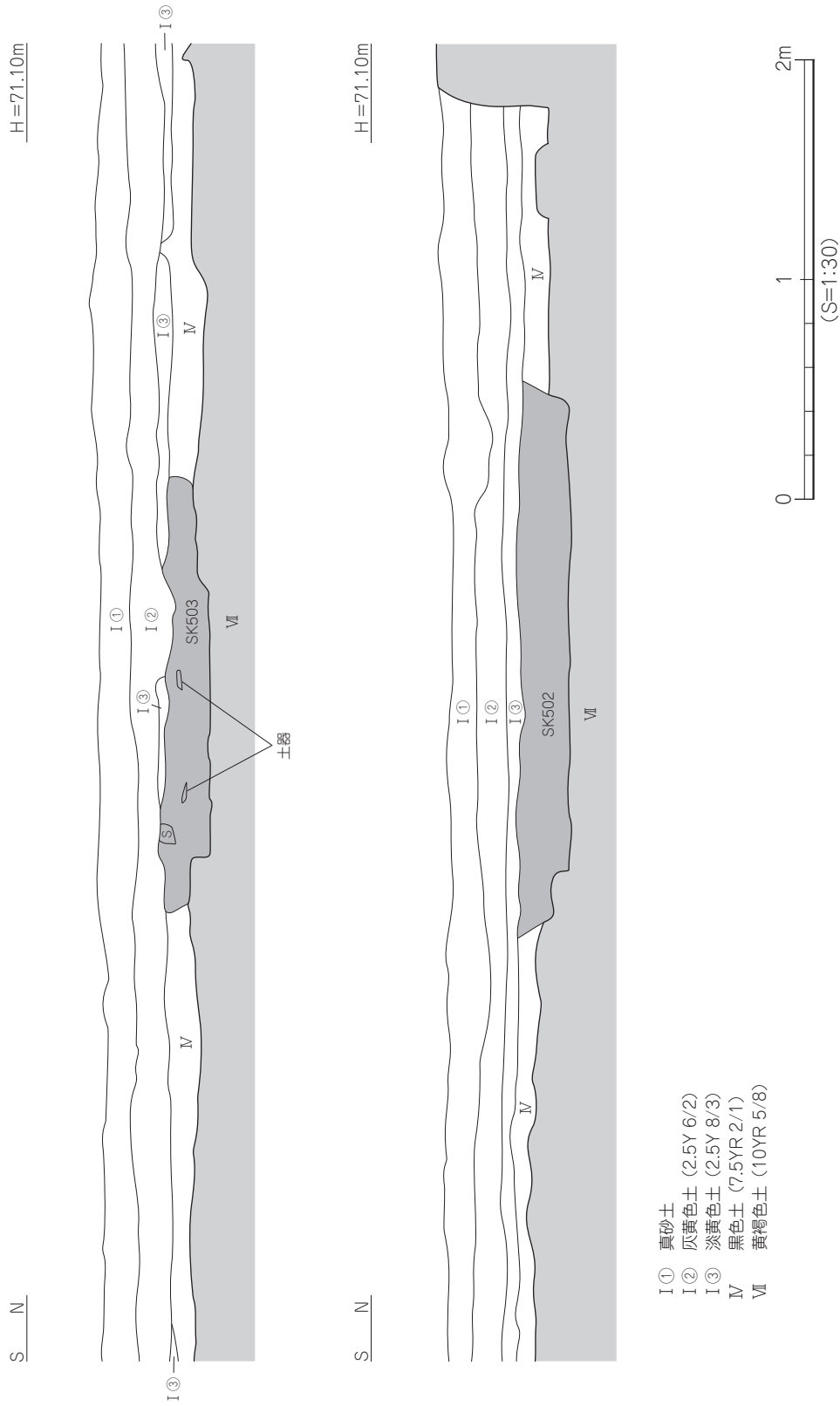
層 位



- I ① 真砂土
- I ② 灰黄色土 (2.5Y 6/2)
- I ③ 淡黄色土 (2.5Y 8/3)
- IV 黑色土 (7.5YR 2/1)
- VI 黄褐色土 (10YR 5/8)



第 73 图 5 区西壁土层图 (1)



第 74 図 5区西壁土層図 (2)

第3節 遺構と遺物

恵原新張遺跡3次調査では、竪穴建物2棟、土坑6基、柱穴10基を検出した（第72図、図版9）。遺物は弥生土器、土師器、須恵器のほか石器（石斧）が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（22×60×44cm）約5箱分である。

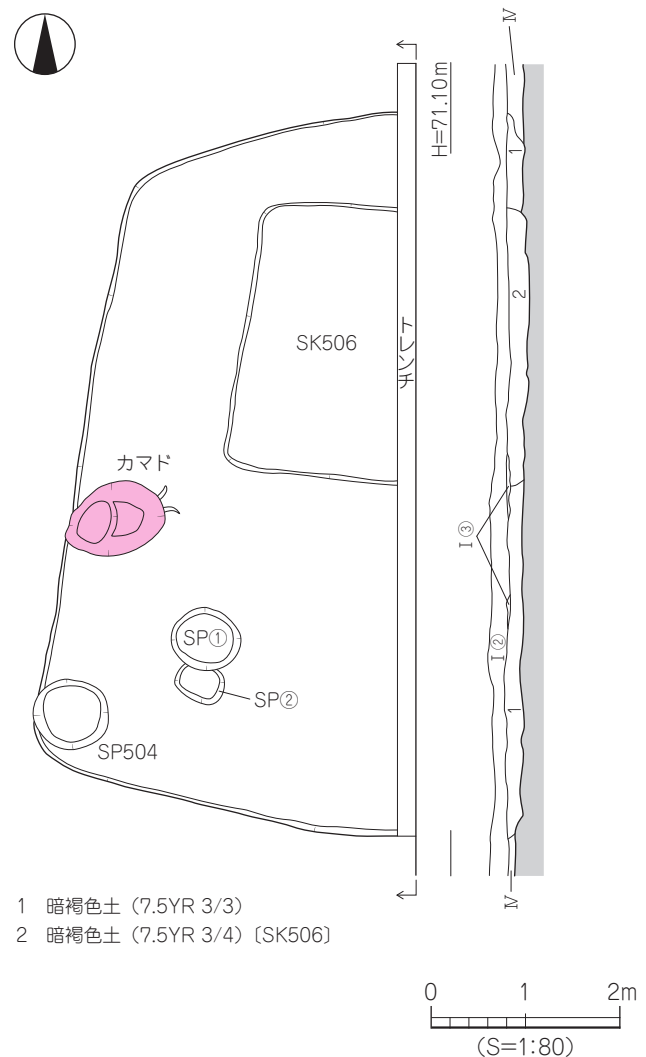
（1）竪穴建物

SB501（第75図、図版9・10）

5区北部A11～B12区に位置する竪穴建物址で、建物東半部は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅳ層中から掘削された遺構である。建物北側は土坑SK506に削平され、建物南西部は柱穴SP504に削平されている。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北長7.62m、東西検出長4.00m、壁高は18cmである。建物埋土は、暗褐色土（7.5YR 3/3）単層である。建物西壁中央部には、カマドと思われる焼土のかたまりを検出したが、形状の復元には至らなかった。内部施設は、柱穴2基（SP①・②）を検出した。各柱穴の平面形態は円形で、規模は径35～70cm、深さ10～25cmである。柱穴掘り方埋土はSP①が暗褐色土（7.5YR 3/3）、SP②は暗褐色土（7.5YR 3/3）に黄褐色土（10YR 5/8）がブロック状に混入するものである。遺物は建物埋土中より土師器、須恵器のほかに弥生土器片が数多く出土した。なお、焼土塊内からは甕が押し潰された状態で出土している。遺物の出土状況や堆積状況から、SB501は人為的に埋め戻された建物と推測される。

出土遺物（第76～78図、図版18）

179～187はSB501埋土出土品。179～182は土師器、183～185は須恵器、186・187は弥生土器である。179～181は甕で、179・180の口縁部は内湾し、179の口縁端部は内傾する。179・181の胴部外面には、ヨコないしナナメ方向のハケメ調整がみられる。182は鉢で、体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。183は高坏の坏部片で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。



第75図 SB501 測量図

184 は鉢で、口縁部は短く外反する。185 は広口壺で、口縁部は長方形に肥厚する。186 は広口壺で、口縁端面に凹線文 2 条を施す。187 は甕形土器の底部で、僅かに上げ底をなす。188～190 は SB501 カマド出土品。188 は土師器の甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は内方に僅かに肥厚する。胴部内外面には、板状工具による強いナデを施す。189 は土師器の壺。1/2 の残存で、口縁部は外反する。内外面にはナデと指頭痕が顕著に残る。190 は土師器の甌。口縁部は直立し、口縁端部は丸く仕上げ、底部は貫通する。

時期：カマド出土品の特徴より、SB501 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6 世紀後葉とする。

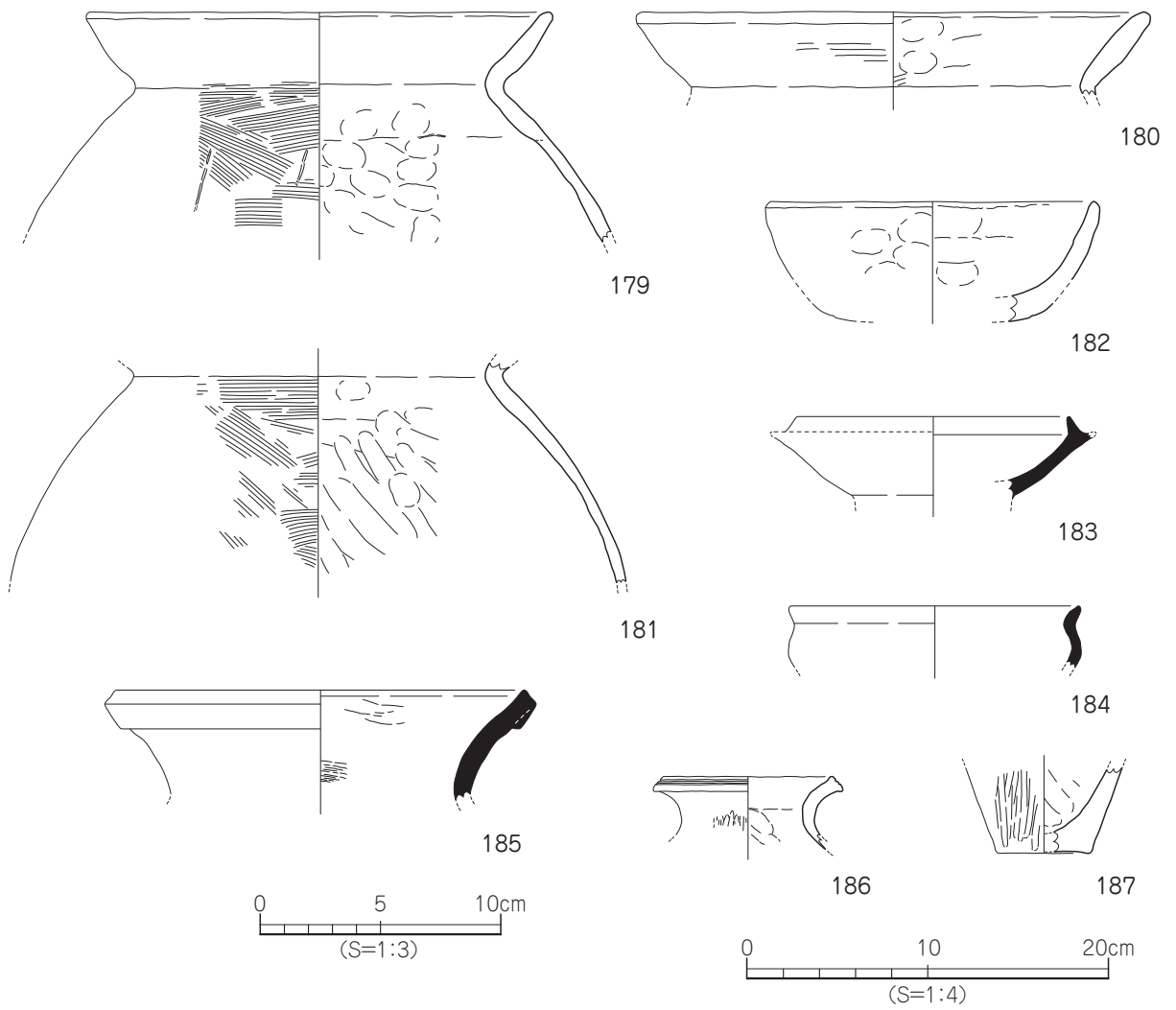
SB502 (第 79 図、図版 10)

5 区南側 C11・12 区に位置する竪穴建物で、建物南半部は調査区外へ続く。第Ⅶ層上面での検出であり、建物上面は第Ⅳ層が覆う。建物南東部は柱穴 SP508 に一部削平され、建物西側は 2 基の土坑 (SK504・505) と重複し、SB502 が後出する。平面形態は隅丸方形ないし長方形をなすものと思われ、規模は南北検出長 7.36m、東西長 7.12m、壁高は 28cm である。建物埋土は褐灰色土 (10YR 4/1) を基調とし、床面付近には褐灰色土や暗褐色土 (7.5YR 3/4) に黄橙色土 (10YR 8/6) がブロック状に混入する土層が堆積する。内部施設は、カマドや柱穴及び周壁溝を検出した。カマドは建物北壁中央部に付設されているが倒壊が著しく、平面形態は馬蹄形状をなすものと思われるが、形状の復元には至らなかった。建物床面には 7 基の柱穴を検出した。このうち、4 基の柱穴 (SP ①～④) は配置から SB502 の支柱穴と考えられる。柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径 20～50cm、深さは 20～28cm である。柱穴掘り方埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) 単層である。このほか、建物東壁沿いにて、幅 10～28cm、深さ 6～10cm の周壁溝を検出した。埋土は、褐灰色土 (10YR 4/1) である。遺物は建物埋土中より完形品を含む土師器や須恵器のほか、弥生土器片が数多く出土した。また、石器剥片なども数点出土している。

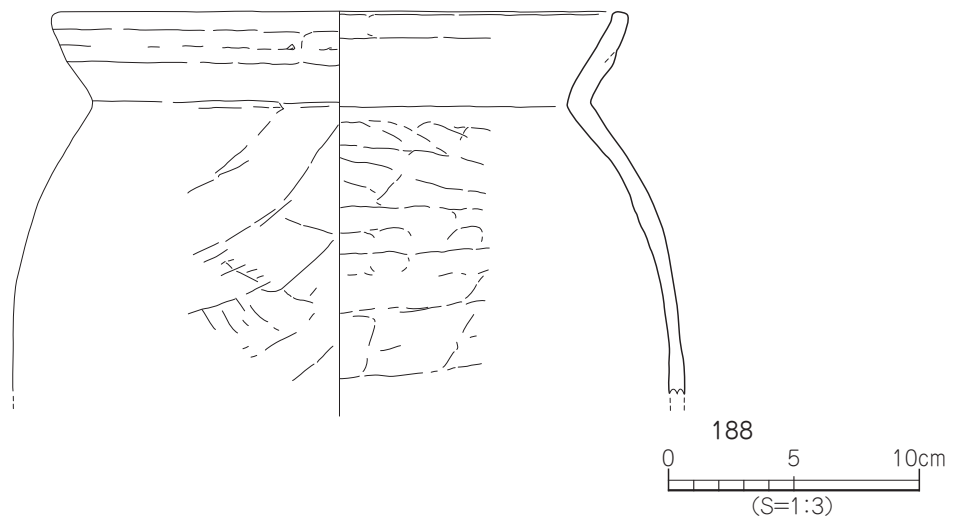
出土遺物 (第 80・81 図、図版 19)

195・196 は SB502 カマド出土品、その他は SB502 埋土出土品。191～197 は土師器。191～196 は甕。191～193 の口縁部は内湾し、191 の口縁端部は内方へ僅かに肥厚する。193・194 の口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。195・196 の外面には細かなハケメ調整がみられ、196 の底部内面には指頭痕が顕著に残る。197 は甌の底部で、外面はハケメ調整、内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。198～208 は須恵器。198 は坏蓋で、天井部は丸味をもち、口縁端部は内傾する。199～202 は坏身。199 のたちあがりは内傾し、端部は内傾する。なお、200～202 のたちあがり端部は丸く仕上げる。203 は高坏で、脚部に円孔を看守する。204 は鉢で、口縁部は短く外反する。205 は鉢の蓋で、かえりは内方に垂下し、天井部は平坦である。206・207 は壺。206 は広口壺で、口縁部は丸く拡張する。208 は甕の肩部片で、外面には平行叩き、内面は円弧叩きを施す。209～213 は弥生土器。209～211 は甕形土器。209・210 は折曲により口縁部を成形し、210 の口縁端面には凹線文 3 条を施す。211 は口縁部下に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。212・213 は壺形土器。212 は広口壺で、口縁部内面に円形浮文 2 個を貼り付ける。213 は肩部片で、内面に刳圧痕が残る。214・215 はスクレイパーで、石材はサヌカイトである。

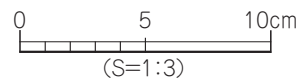
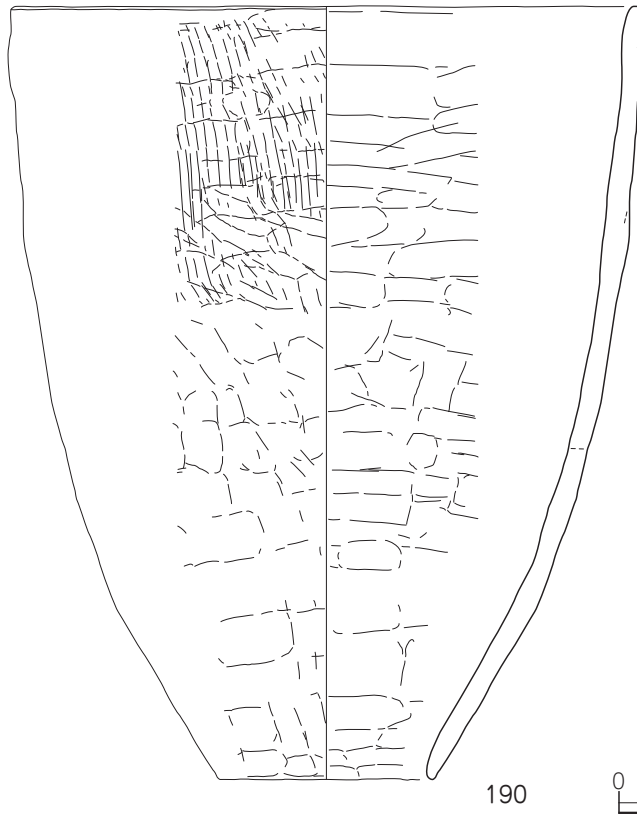
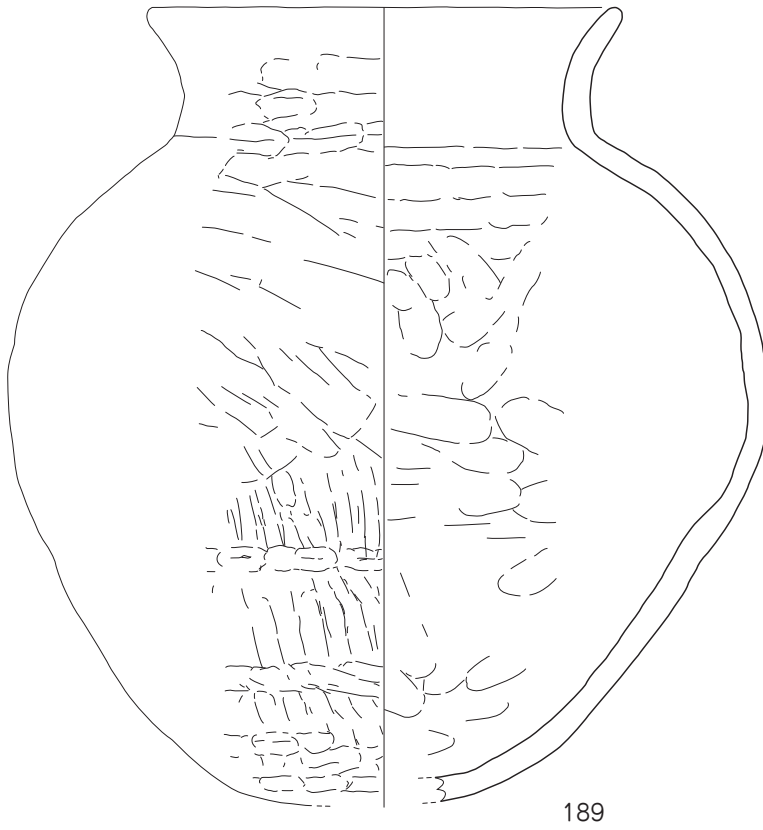
時期：出土遺物の特徴より、SB502 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6 世紀中葉とする。



第 76 図 SB501 出土遺物実測図



第 77 図 SB501 カマド出土遺物実測図 (1)



第 78 図 SB501 カマド出土遺物実測図 (2)

(2) 土 坑

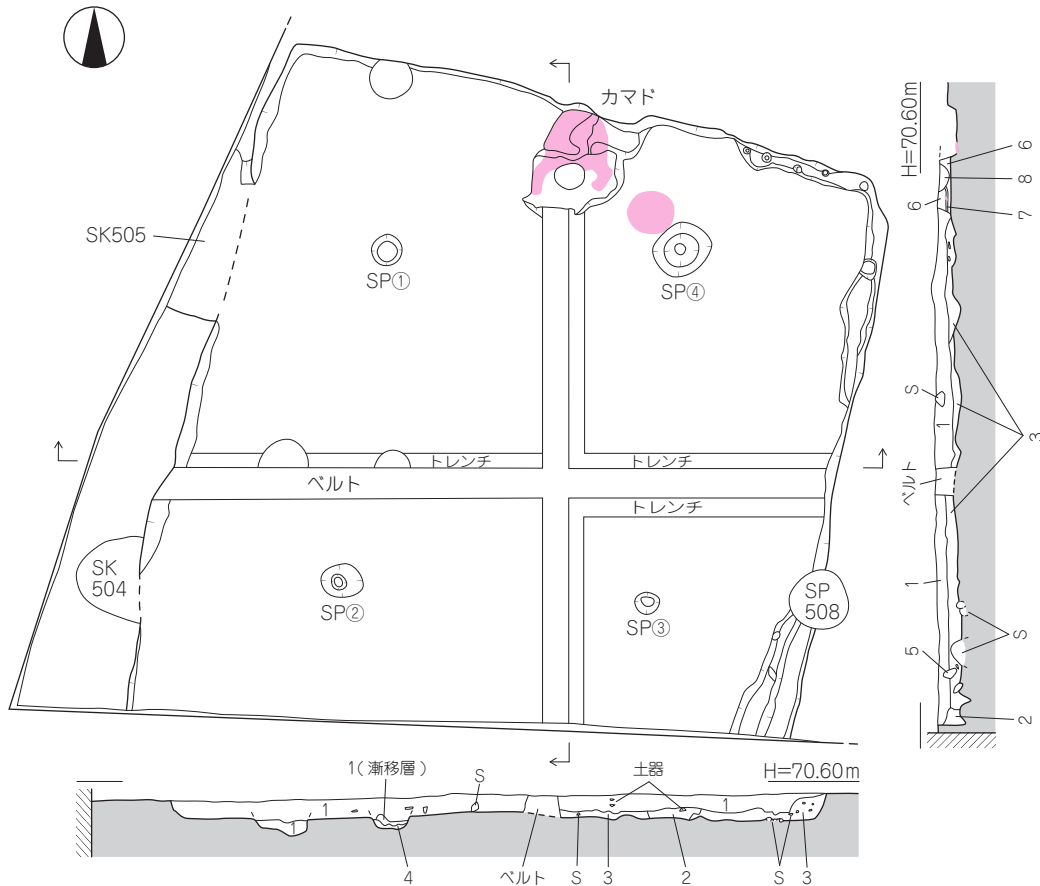
SK502 (第 82 図)

5区北部 A11 区で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、遺構上面は第 I ③層が覆う。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は南北検出長 2.50 m、東西検出長 0.85 m、深さ 26cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。遺物は土坑内から、弥生土器片が数点出土した。そのうち、実測しうる遺物 3 点を掲載した。

出土遺物 (図版 19)

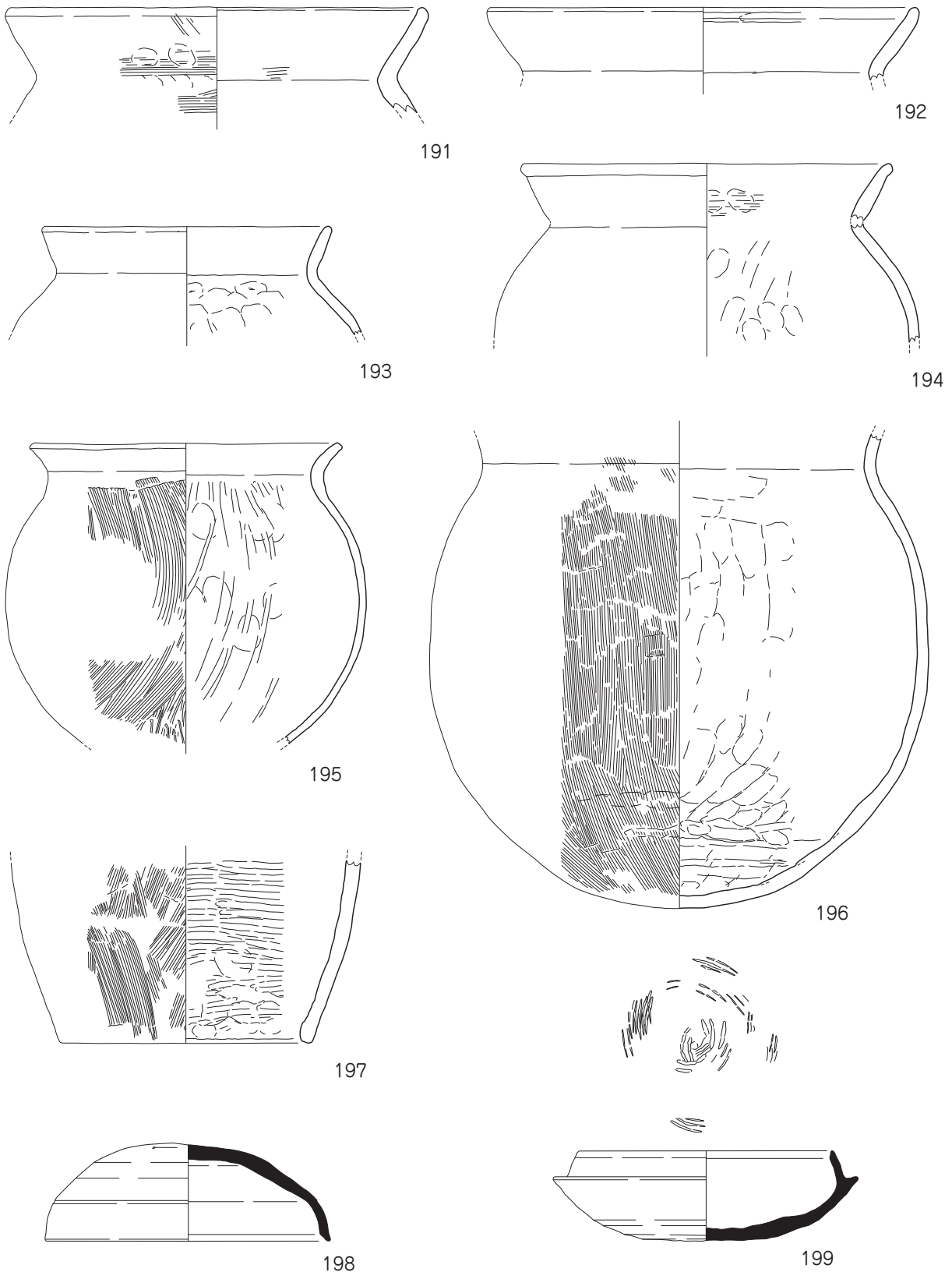
216～218 は弥生土器。216 は折曲により口縁部を成形し、胴部内面にはヨコ方向のヘラミガキが残る。217 は広口壺で、口縁部は大きく外反し、頸部に断面三角形の凸帯 1 条を貼り付ける。218 は壺形土器の底部で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



- 焼土
- 1 褐灰色土 (10YR 4/1)
- 2 褐灰色土 (10YR 4/1) に黄橙色土 (10YR 8/6) 混じり
- 3 暗褐色土 (7.5YR 3/4) に黄橙色土 (10YR 8/6) ブロック混じり
- 4 黄橙色土 (10YR 8/6)
- 5 黒褐色土 (10YR 3/1)
- 6 褐灰色土 (10YR 4/1) に焼土が混じる
- 7 黒褐色土 (5YR 3/1)
- 8 黒褐色土 (10YR 3/2)

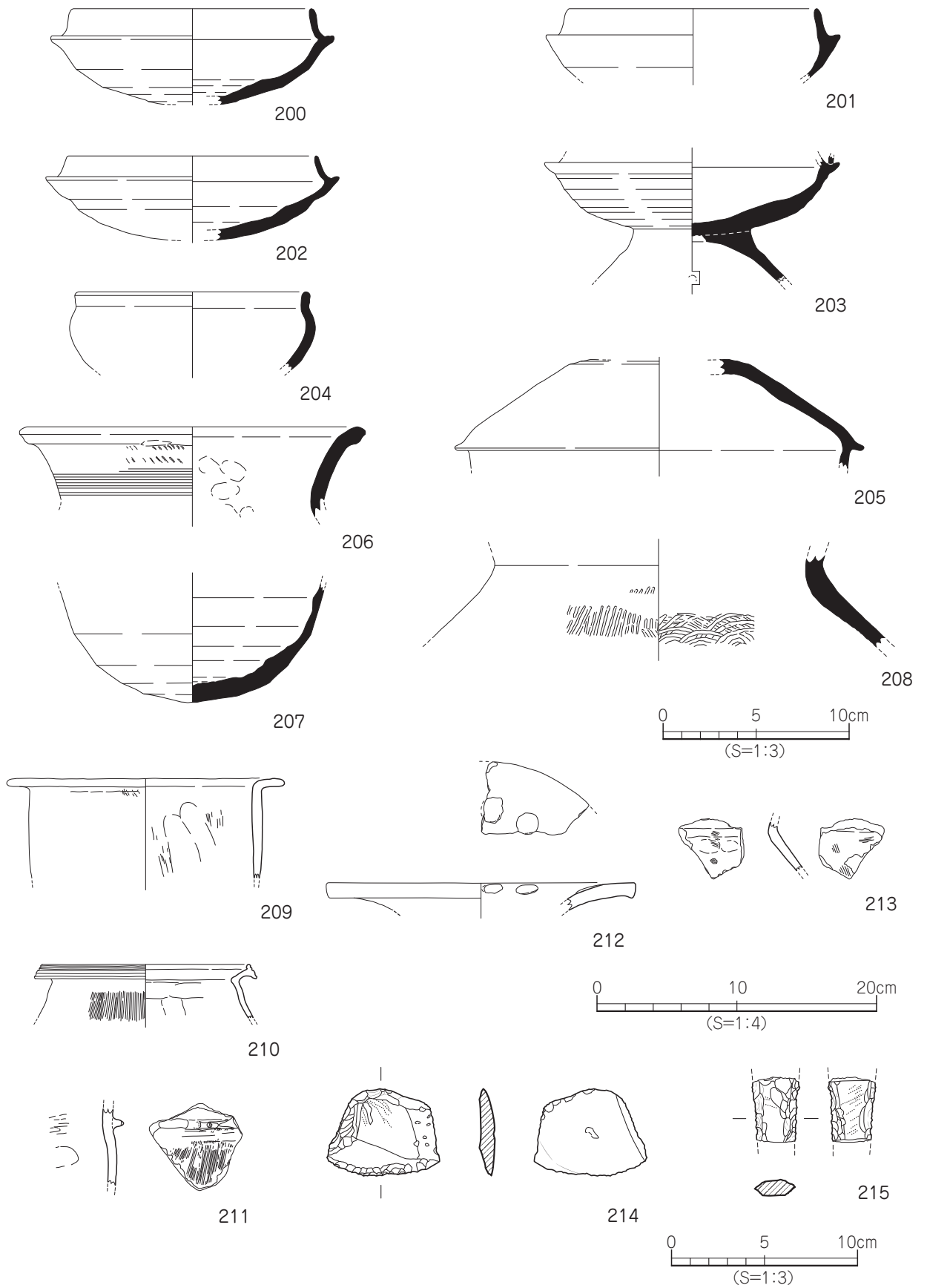
第 79 図 SB502 測量図



※ 195・196：カマド出土品

0 5 10cm
(S=1:3)

第 80 図 SB502 出土遺物実測図 (1)



第 81 図 SB502 出土遺物実測図 (2)

SK503 (第83図)

5区中央部北西寄りB11区で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、土坑上面は第I③層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北長1.26m、東西検出長0.86m、深さは28cmである。断面形態は筒状をなし、埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)単層である。遺物は埋土中位付近より甕形土器の破片が数多く出土した。SK503は壁体の特徴より、貯蔵穴として利用された土坑と考えられる。

出土遺物 (図版20)

219は弥生土器の甕形土器。折曲により口縁部を成形し、頸部内面には明瞭な稜をもつ。胴上半部外面は細かなハケメ調整、胴中位外面と胴部内面には細かなヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。

SK505 (第84図)

5区南西部C11区で検出した土坑で、土坑東側はSB502に削平され、西半部は調査区外に続く。壁面の土層観察により、土坑上面は第IV層が覆う。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は南北検出長1.83m、東西検出長0.46m、深さは18cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土(10YR 4/1)単層である。遺物は埋土中位付近より壺形土器の口縁部(完形)が出土したほか、破片が数点出土している。

出土遺物 (図版20)

220は弥生土器の壺形土器。広口壺で、口縁部は大きく外反し、頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。頸部内面には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期中葉とする。

SK504

5区南西部C11区で検出した土坑で、土坑東側はSB502に削平されている。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北長0.88m、東西検出長0.64m、深さは14cmである。断面形態は筒状をなし、埋土は褐灰色土(10YR 4/1)単層である。遺物は弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土がSK505と酷似することから、概ね弥生時代中期中葉から後葉の土坑と考えられる。

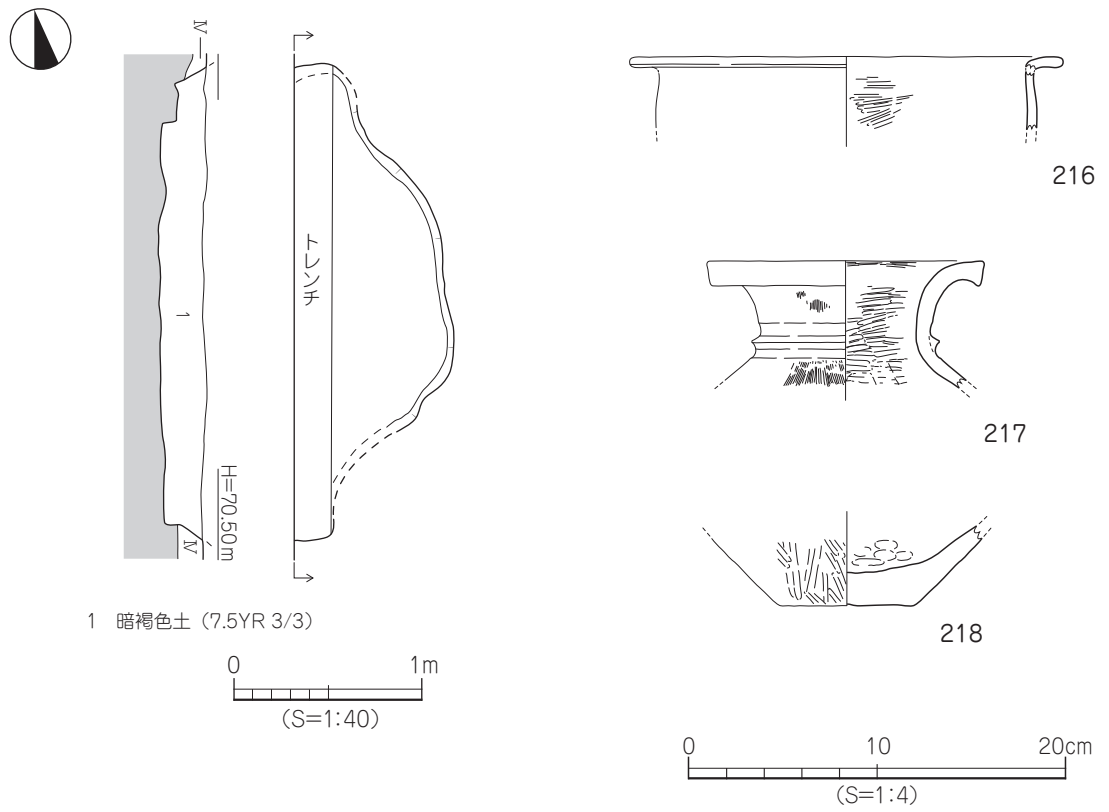
SK501

5区北部A12区で検出した土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径1.58m、短径1.25m、深さ12cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土はにぶい黄褐色土(10YR 4/3)に明黄褐色土(10YR 6/6)がブロック状に混入する。遺物は弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

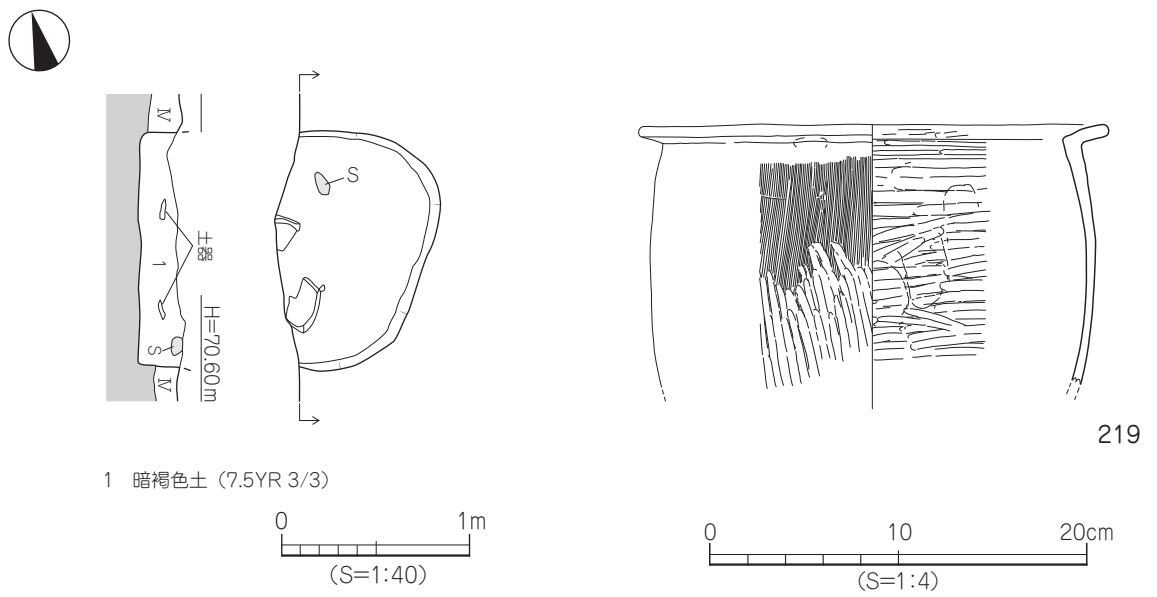
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、概ね弥生時代中期中葉から後葉の土坑と考えられる。

SK506

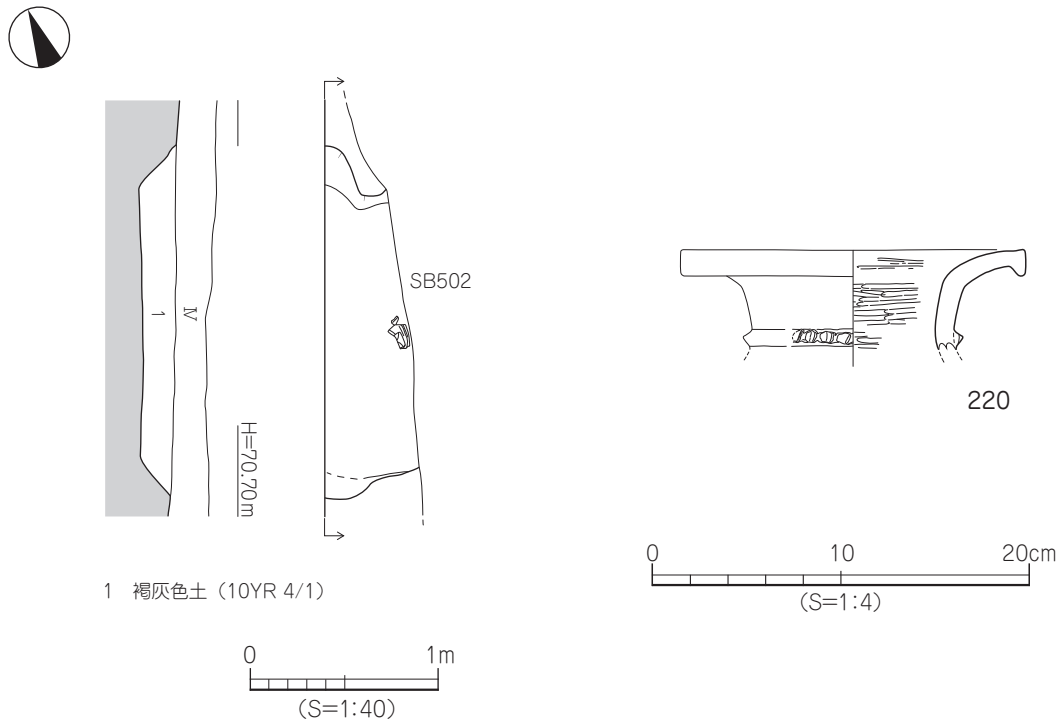
5区北東部B12区で検出した土坑で、土坑東半部は調査区外に続く。SB501上面にて検出した土坑で、平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北長2.88m、東西検出長1.80m、深さ10cmである。



第 82 図 SK502 測量図・出土遺物実測図



第 83 図 SK503 測量図・出土遺物実測図



第 84 図 SK505 測量図・出土遺物実測図

断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は暗褐色土（7.5YR 3/4）単層である。土坑内からは土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化するものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、SB501 より後出することから、概ね古墳時代後期、6世紀後葉以降の土坑と考えられる。

（3）その他の遺構と遺物

5区では、10基の柱穴を検出した。また、第IV層中からは弥生土器や須恵器、土師器のほか石器が出土した。

1) 柱 穴

検出した10基の柱穴は、掘り方埋土で分類すると以下の2種類となる。このうち、①の柱穴からは弥生土器片が数点出土した。

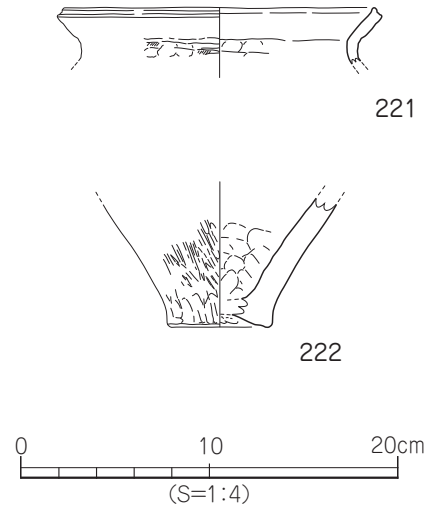
- ① 褐灰色土（10YR 4/1）：7基
- ② 暗褐色土（7.5YR 3/4）：3基

出土遺物（第85図）

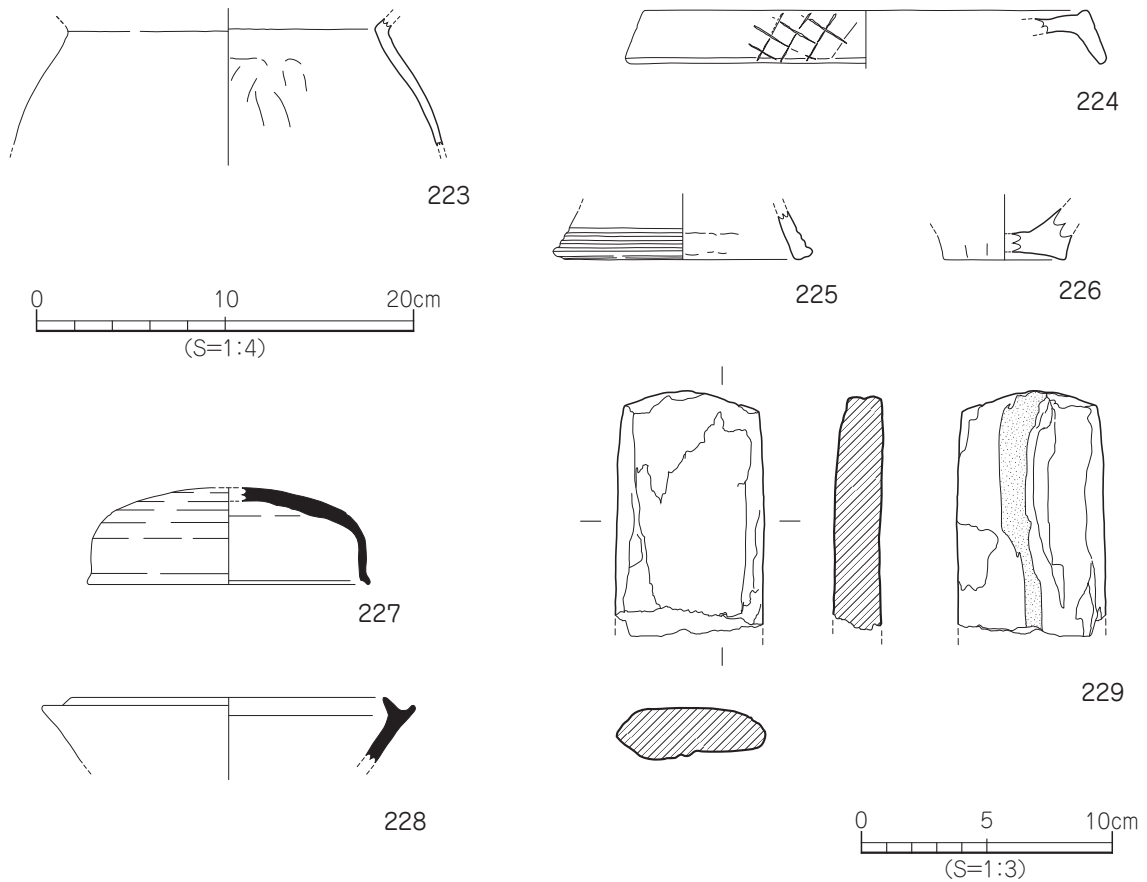
221・222はSP505出土品。221は甕形土器の口縁部片で、口縁端面はナデにより凹む。222は甕形土器で、上げ底をなす。弥生時代後期前葉。

2) 第IV層出土遺物 (第86図、図版20)

223～226は弥生土器。223は甕形土器の胴部片で、頸部内面に明瞭な稜をもつ。224は壺形土器。広口壺で、口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に斜格子目文を施す。弥生時代中期中葉。225は高坏形土器。脚部片で、脚裾部に凹線文3条、脚端面に凹線文1条を施す。弥生時代中期後葉。226は甕形土器の底部片で、上げ底をなす。弥生時代中期後葉。227・228は須恵器。227は短頸壺の蓋で、口縁端部は内傾する面をもつ。6世紀。228は坏身片で、たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。7世紀前葉。229は伐採斧で、研磨段階の未成品である。結晶片岩製。



第85図 SP505 出土遺物実測図



第86図 5区 第IV層出土遺物実測図

第 4 節 小 結

恵原新張遺跡 3 次調査では、弥生時代から古墳時代までの遺構・遺物を確認した。ここでは、時代別にまとめを行う。

(1) 弥生時代

弥生時代では、土坑 5 基を検出した。このうち、3 基の土坑 (SK502・503・505) は弥生時代中期中葉の遺構で、特に SK503 では大型の土器片が埋土中より出土している。なお、土坑壁体は筒状に立ち上がっており、断面形態の特徴から SK503 は貯蔵用の穴として利用された可能性がある。残り 2 基の土坑 (SK501・504) については時期特定しうる遺物の出土はないが、他の遺構との重複関係や埋土などから、概ね弥生時代中期中葉から後葉頃の遺構と考えられる。なお、柱穴 SP505 からは弥生時代後期前葉に時期比定される土器片が数点出土している。

遺物は、古墳時代の竪穴建物である SB502 より弥生時代前期末に時期比定される土器片が出土したほか、中期中葉から後葉に時期比定される土器片も数多く出土している。また、古墳時代の竪穴建物 SB501 からも弥生時代中期中葉から後期の土器片が数多く出土した。なお、第 IV 層中からも弥生時代中期中葉から後期後葉に時期比定される土器片や石器の出土がみられた。

(2) 古墳時代

古墳時代は、竪穴建物 2 棟と土坑 1 基を検出した。SB502 は幅 7.12 m、長さ 7.36 m 以上の隅丸方形建物で、4 本の支柱穴と周壁溝及びカマドを検出した。カマドは建物北壁中央部に付設され、カマド内には土師器の甕が押し潰された状態で埋まっていた。出土遺物より、SB502 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6 世紀中葉と考えられる。一方、SB501 は建物全体の約 1/2 を検出し、長さ 7.62 m を測る方形建物と思われる。建物西壁中央部付近には、カマドが付設されている。遺物は弥生土器や土師器、須恵器の破片が建物内に散在して出土した。出土遺物より、SB501 は SB502 より後出する 6 世紀後葉に廃棄された建物と考えられる。なお、SB501・502 は遺物の出土状況や埋没状況などから、人為的に埋め戻された建物と推測される。また、SK506 は SB501 より後出する土坑であり、6 世紀後葉以降に掘削されたものである。

3 次調査の対象となる 5 区は、今回報告する調査地の中央に位置する。調査面積は 207m²であり、狭小範囲の調査ではあったが、当地における弥生時代や古墳時代の集落様相が知れる貴重な資料を得ることができた。

【検出遺構】

弥生時代中期中葉：土坑 3 基 (SK502・503・505)

(中葉から後葉)：土坑 2 基 (SK501・504)

古墳時代後期中葉：竪穴 1 棟 (SB502)

後期後葉：竪穴 1 棟 (SB501)、土坑 1 基 (SK506)

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄：グリッド名を記載。

規模欄：() は現存値を示す。

埋土欄：複数の土層がある場合は、以下のように記載している。

例) 「褐灰色土 他」

出土遺物欄：遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、石→石器

(2) 遺物観察表

法量欄 () : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、坏→坏部、頸→頸部、胴→胴部、脚→脚部、底→底部

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→良好

表 56 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	地区	平面形	規模 長さ×幅×壁高 (m)	埋土	出土遺物	時期
501	A11 ~ B12	方形	7.62 × (4.00) × 0.18	暗褐色土	弥生・土師・須恵	古墳後期後葉
502	C11・12	隅丸方形	(7.36) × 7.12 × 0.28	褐灰色土 他	弥生・土師・須恵・石・焼土	古墳後期中葉

表 57 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期
501	A12	楕円形	逆台形状	1.58 × 1.25 × 0.12	にぶい黄褐色土 (明黄褐色土混入)	弥生	弥生中期中~後葉
502	A11	不整楕円形	逆台形状	(2.50) × (0.85) × 0.26	暗褐色土	弥生	弥生中期中葉
503	B11	(楕円形)	筒状	1.26 × (0.86) × 0.28	暗褐色土	弥生	弥生中期中葉
504	C11	(円形)	筒状	0.88 × (0.64) × 0.14	褐灰色土	弥生	弥生中期中~後葉
505	C11	(不整楕円形)	逆台形状	(1.83) × (0.46) × 0.18	褐灰色土	弥生	弥生中期中葉
506	B12	方形	逆台形状	2.88 × (1.80) × 0.10	暗褐色土	土師・須恵	古墳後期後葉以降

表 58 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
501	A12	円形	0.74 × 0.68 × 0.27	褐灰色土		
502	A11	楕円形	0.47 × 0.41 × 0.10	褐灰色土		
503	B11	円形	0.42 × 0.42 × 0.22	褐灰色土		
504	B11	円形	0.74 × 0.74 × 0.38	暗褐色土	弥生	
505	B12	(楕円形)	(0.88) × 0.78 × 0.37	褐灰色土	弥生・土師・須恵	

恵原新張遺跡 3次調査

柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
506	B11・12	楕円形	0.79 × 0.74 × 0.31	暗褐色土	弥生	柱痕
507	C11	楕円形	0.42 × 0.37 × 0.08	褐灰色土		
508	C12	楕円形	0.66 × 0.63 × 0.32	暗褐色土		
509	C11	(円形)	0.33 × (0.18) × 0.07	褐灰色土		
510	C11	円形	0.22 × 0.21 × 0.27	褐灰色土		

表 59 SB501 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
179	甕	口径 (19.0) 残高 9.5	内湾口縁。口縁端部は僅かに内傾する。1/3の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (6~7本/cm)	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) 赤 ◎		18
180	甕	口径 (20.8) 残高 3.4	内湾口縁。小片。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 黄褐色	石・長 (1~2) 赤 ◎	黒斑	
181	甕	残高 9.0	胴部片。1/4の残存。	ハケ (6~7本/cm)	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 赤 ◎		
182	鉢	口径 (13.3) 残高 4.9	内湾口縁。口縁端部は丸く仕上げる。内外面には指頭痕が顕著に残る。小片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
183	高坏	口径 (11.2) 残高 3.4	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
184	鉢	口径 (11.8) 残高 2.6	短く外反する口縁部。口縁端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
185	壺	口径 (16.8) 残高 4.5	口縁部は長方形に肥厚する。1/5の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		18
186	壺	口径 (8.0) 残高 3.8	広口壺。口縁部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文2条あり。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~2) ◎		
187	甕	底径 (5.1) 残高 4.7	僅かに上げ底。1/4の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) 赤 ◎	黒斑	
188	甕	口径 21.0 残高 15.1	内湾口縁。口縁端部は内方へ僅かに肥厚する。	㊶ヨコナデ ㊷板ナデ	㊶ヨコナデ ㊷板ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	カマド 黒斑	
189	壺	口径 18.4 残高 31.6	外反口縁。口縁端部は丸い。1/2の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	褐色 橙色	石・長 (1) ◎	カマド 黒斑	18
190	甕	口径 (24.8) 底径 (8.4) 残高 30.7	1/5の残存。口縁部は直立し、口縁端部は丸く仕上げる。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 赤 ◎	カマド	18

表 60 SB502 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
191	甕	口径 (21.0) 残高 5.3	内湾口縁。口縁部は内方へ肥厚する。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (6~7本/cm)	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (6本/cm)	灰褐色 褐色	石・長 (1~3) ◎	煤付着	
192	甕	口径 (21.7) 残高 3.7	内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ◎		
193	甕	口径 (14.4) 残高 5.4	内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
194	甕	口径 (18.4) 残高 9.1	外反口縁。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	㊶ハケ ㊷ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長 (1) ◎		
195	甕	口径 (15.4) 残高 15.3	外反口縁。口縁端部は丸い。球形の胴部。1/3の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (9本/cm)	㊶ヨコナデ ㊷ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	カマド 黒斑	19
196	甕	残高 24.1	球形の胴部。1/5の残存。	ハケ (5本/cm)	ヨコナデ 指頭痕	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎	カマド 黒斑	
197	甕	底径 (12.4) 残高 9.3	底部片。1/4の残存。	ハケ (10本/cm)	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎	黒斑	

遺物観察表

SB502 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
198	坏蓋	口径 (14.5) 残高 5.0	丸味のある天井部。口縁端部は内傾する。3/4の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		19
199	坏身	口径 (12.8) 器高 4.6	たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みあり。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	㊸回転ナデ ㊹円弧叩き	青灰色 青灰色	密 ◎		
200	坏身	口径 (12.6) 器高 5.1	たちあがり端部は丸い。受部端に沈線状の凹みあり。1/3の残存。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 橙色	密 ◎		19
201	坏身	口径 (13.2) 残高 3.7	たちあがり端部は丸い。1/4の残存。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
202	坏身	口径 (13.2) 残高 4.5	たちあがり端部は丸い。1/4の残存。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
203	高坏	残高 6.7	脚部に円孔を看取。1/4の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	自然釉	19
204	鉢	口径 (12.0) 残高 4.2	短く外反する口縁部。1/5の残存。	回転ナデ	回転ナデ	黒色 灰白色	密 ◎		19
205	蓋	残高 5.9	鉢の蓋。小片。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		19
206	壺	口径 (17.7) 残高 4.7	外反口縁。口縁部は肥厚し、頸部に回転カキメ調整がみられる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
207	壺	残高 6.4	丸底。2/3の残存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
208	甕	残高 4.9	肩部片。小片。	平行叩き	円弧叩き	青灰色 青灰色	密 ◎		
209	甕	口径 (19.8) 残高 7.2	逆L字状口縁。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~4) ◎		
210	甕	口径 (14.6) 残高 3.8	口縁部は上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条あり。	㊹ヨコナデ ㊺ハケ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1) ◎		
211	甕	残高 5.5	口縁部下に凸帯を貼付け、凸帯上に刻目あり。小片。	ハケ (12~13本/cm)	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		19
212	壺	口径 (21.8) 残高 1.9	広口壺。口縁部内面に円形浮文2ヶを貼付ける。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		
213	壺	残高 3.5	肩部片。内面に初圧痕あり。小片。	ハケ	ハケ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎		

表 61 SB502 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
214	スクレイパー	完形	サヌカイト	4.6	6.0	0.8	25.40		19
215	スクレイパー	一部欠損	サヌカイト	3.5	2.5	0.8	11.13		19

表 62 SK502 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
216	甕	口径 (22.3) 残高 3.8	逆L字状口縁。小片。	ヨコナデ	㊹ヨコナデ ㊺ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長 (1~2) 赤 ◎	黒斑	
217	壺	口径 (14.4) 残高 6.7	広口壺。頸部に凸帯1条を貼付ける。1/5の残存。	㊹ヨコナデ ㊺ハケ (8~10本/cm)	㊹ヨコナデ ㊺ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		19
218	壺	底径 (7.4) 残高 4.2	平底。1/4の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~4) ◎	黒斑	19

表 63 SK503 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
219	甕	口径 24.5 残高 11.7	逆L字状口縁。1/2の残存。	㊹ヨコナデ ㊺ハケ→ ヘラミガキ	㊹ヨコナデ ㊺ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎	煤付着	20

表 64 SK505 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
220	壺	口径 (18.0) 残高 5.2	広口壺。口縁部は下方に垂下し、頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。1/3の残存。	㊦ヨコナデ ㊧マメツ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		20

表 65 5区柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
221	甕	口径 (16.4) 残高 2.9	外反口縁。口縁端部はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~3) 赤◎	SP505	
222	甕	底径 (5.0) 残高 6.8	上げ底。1/4の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金◎	SP505	

表 66 5区第IV層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
223	甕	残高 6.7	胴部片。小片。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長 (1) ◎		
224	壺	口径 (23.3) 残高 2.8	広口壺。口縁部は下外方に垂下し、口縁端面に斜格子目文あり。小片。	マメツ	ナデ	黄褐色 褐色	石・長 (1~2) ◎		20
225	高坏	底径 (12.2) 残高 2.5	脚裾部に凹線文3条、脚端面に凹線文1条あり。小片。	マメツ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ◎		
226	甕	底径 (6.2) 残高 2.7	上げ底。1/3の残存。	ナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長 (1~4) ◎		
227	蓋	口径 (11.0) 残高 3.8	短頸壺の蓋。口縁端部は内傾する。1/5の残存。	㊨回転ヘラケズリ ㊩回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		20
228	坏身	たち脚径 (12.2) 残高 2.6	たちあがりは短く内傾、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表 67 5区第IV層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
229	石斧	刃部欠損	結晶片岩	9.5	5.9	2.0	231.59	未成品	20

第6章 調査の成果と課題

恵原新張遺跡1・2・3次調査では、縄文時代から近現代までの遺構や遺物を確認した。ここでは、遺跡の様相や変遷について、まとめを行う。

1. 遺跡の様相

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であるが、8区で検出した第V層中より縄文土器が出土した。6×7cm大の胴部片2点(177・178)は、内外面に楕円形状の押型文が施される縄文時代早期の深鉢である。色調は褐色であり、胎土は精良である。松山市内における縄文土器の出土例は少なく、とりわけ早期の遺物は極めて少ない。調査地周辺では谷田Ⅱ遺跡より早期の土器が出土しており、今回出土した縄文土器は、調査地や周辺地域における縄文集落の存在を示唆する重要な資料といえよう。

(2) 弥生時代

前期：前期前葉の資料はなく、すべて後葉から末のものである。明確な遺構は検出されていないが、時期の異なる遺構や第V層中から該期の遺物が出土している。3区検出の土坑SK302(弥生時代中期中葉)からは前期後葉の土器片(78)、同3区検出の第V層中からは前期末の土器片(98)、5区検出のSB502(古墳時代後期)からは前期後葉の土器片(211)などが出土している。

中期：中期になると、資料数が増加する。中期前葉の資料はなく、中葉から後葉の資料に限る。中期中葉では8基の土坑が検出されている。3区からは4基の土坑(SK302・304・307・308)、5区では3基の土坑(SK502・503・505)、6区からは土坑1基(SK601)が検出されているが、このうち、5区検出の土坑SK503は径1.26m、深さ28cmの楕円形土坑で、壁体は筒状をなす。断面形態の特徴より、SK503は貯蔵穴として利用された可能性を持つ土坑と考えられる。このほか、時期の異なる竪穴建物や第V層中より該期の遺物が出土している。なお、3区検出の第V層中からはジョッキ形土器の把手部(100)が出土している。

中期後葉では竪穴建物や溝、土坑が検出されている。2区検出のSB201は推定直径6m以上の円形竪穴建物で、該期の土器片のほか砥石などが出土している。さらに、2区では土坑2基(SK205・206)、6区からは3条の溝(SD601～SD603)が検出されている。このほか、古墳時代の竪穴建物6棟(SB301・302・501・502・601・602)からは該期の弥生土器片が数多く出土し、3区や5区検出の柱穴からも同時期の土器片が少量出土している。

後期：後期は中期にくらべ資料が少なく、前葉では5区検出の柱穴(SP505)や4区から該期の土器片が少量出土しているのみである。後葉の資料はなく、末葉では4区と8区で検出した竪穴建物が挙げられる。SB401・SB801は同一の竪穴建物で、推定径7.3m以上を測る円形建物である。建物壁体に沿って周壁溝を検出したが、一部に重複する箇所がみられたことから改築の施された建物と考えられる。建物内からは土器片が少量出土したが、この中には叩きを施したものがあり、建物の廃棄・埋没時期は弥生時代末と考えられる。

これらのことから、調査地内における集落の出現は弥生時代中期中葉頃であり、中期後葉には確実に居住域として土地利用されたことがわかる。

(3) 古墳時代

古墳時代になると、遺構・遺物共に資料数が飛躍的に増加する。前期の資料はなく、中期や後期、5世紀後葉から7世紀中葉の資料である。

中期：前葉の資料はなく、後葉に限る。1区からは竪穴建物1棟と土坑3基を検出した。このうち、SB101は検出長6mの隅丸方形建物で、建物北壁中央部には造り付けのカマドが付設されている。建物埋土中からは完形の須恵器が出土したほか、カマド内からは土師器の甕が押し潰された状態で出土しており、建物廃絶に伴う祭祀行為が執り行われたものと推測される。出土遺物より、SB101の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀後葉と考えられる。

後期：後期の資料は多く、とりわけ竪穴建物は8棟が確認されている。後期前葉では3区検出の竪穴建物SB302が挙げられる。検出長6.11m×5.61mの方形建物で、建物西壁にカマドの痕跡を検出した。壁体に沿って周壁溝の一部がみられ、溝基底面には杭痕と思われる小ピットが点在する。遺物は完形の土師器甕のほか、大型の土器片が散在して出土した。

後期中葉では、調査地中央部、3区・5区・6区にて3棟の竪穴建物を検出した。3区検出のSB301は長さ6.36m、幅6.21mの隅丸方形建物で、西壁中央部にカマドが付設されている。支柱穴は3本（配置から本来は4本と想定）を検出し、床面には幅広の溝が壁体に沿って巡らされている。また、5区検出のSB502は幅7.12m、長さ7.36m以上の長方形建物で、北壁中央部にカマドの痕跡を検出したほか、4基の支柱穴を確認した。SB301とSB502の埋土中からは完形品を含む数多くの土師器や須恵器が出土したが、弥生土器片や石器なども数多く出土している。なお、SB301のカマド内からはSB101と同様、土師器甕が押し潰された状態で出土している。このほか、6区検出のSB603は建物の一部を検出した。平面形態は方形をなすものと思われるが、正確な形態や規模は不明である。出土品や重複関係より、該期の建物と判断した。また、時期特定は難しいが、別の遺構との重複関係や埋土等から、3区で検出した2棟の掘立柱建物（掘立301・302）と6区検出の掘立601は後期中葉以降に構築された遺構と推測される。掘立301は建物方位を真北方向より東へ約30°振る東西棟で、総柱構造の建物址である。建物を構成する柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形で、柱穴内には柱材の一部が残存しており、柱径は約10cmである。一方、掘立302は掘立301と建物方位をほぼ等しくする東西棟で、SB301より後出する。桁行長5.89m（5間）、梁行長5.22m（4間）の側柱構造をなす建物址で、柱痕は灰褐色粘土で埋没している。検出状況からは、建物廃絶時に柱が抜き取られたものと推測される。

後期後葉では、調査地中央部5区と6区にて竪穴建物が検出されている。5区検出のSB501は検出長7.62m、検出幅4.00mの方形または長方形建物で、西壁中央部にカマドの痕跡を検出した。埋土中からは土師器や須恵器のほか、弥生土器片が少量出土した。なお、カマドからは土師器壺や甑の破片が散在して出土している。6区からはSB604の一部を検出したが、規模は不明である。

後期末、7世紀代には2棟の竪穴建物が調査地中央部6区にて検出されている。SB601は長さ5.36m、検出幅3.50mの方形または長方形建物で、北壁中央部にカマドの痕跡を検出した。建物内からは土師器や須恵器の小片のほかに、弥生時代中期中葉や後葉に時期比定される弥生土器片や石器剥片が混在して出土した。また、SB601と重複する状況で、SB602が検出されている。SB602は建物の大半が

調査区外に続いており、規模や形状は定かではない。しかしながら、埋土中からは土師器や須恵器の破片が数多く出土した。なお、SB602 からも SB601 と同様、弥生土器片が数多く出土している。

検出した竪穴建物からは、廃棄・埋没時期を示す遺物以外にも弥生時代中期の土器片のほかに石器や石器剥片が多数出土している。埋没状況や遺物の出土状況より、これらの建物は人為的に埋め戻されたものと判断される。

このほか、7世紀の遺構は2基の古墳を検出している。4区検出の1号墳は遺存状態が良好でなく、古墳の形状や規模は不明であるが、横穴式石室を主体部にもち、石室規模は現存長2.0m、幅1.2mである。調査では玄室の一部を検出したが、後世の削平が著しく、石室内からは遺物の出土はみられなかった。ただし、石室周辺に残存する盛土と思われる土壌からは7世紀前葉から中葉に時期比定される須恵器片が出土しており、本古墳の造営時期は7世紀中葉頃と考えられる。また、7区で検出した2号墳は1号墳と同様、墳丘や外郭施設は検出されず、石室の一部と墓坑を検出した。横穴式石室を主体部にもち、石室規模は長さ2.90m、幅1.15mで、石室床面には径3～5cm大の小礫が敷き詰められている。墓坑は長形状をなし、深さは検出面下25cmである。石室や墓坑からは遺物の出土がなく、築造時期の特定は難しいが、石室周辺からは7世紀前葉に時期比定される土器片が数点出土していることから、概ね1号墳と同様、7世紀中葉の造営と考えられる。

以上のことから、古墳時代中期後葉から終末期、およそ5世紀後葉から7世紀前葉までの約150年間にわたり、調査地内において集落が継続して営まれたことがわかる。この間、調査地は居住域として土地利用されていたが、7世紀中頃には古墳の造営に伴い墓域として利用されたものと考えられる。

(4) 古 代

古代の遺構は未検出であるが、第Ⅲ層中からは平安時代に時期比定される土師器片や須恵器片が数多く出土している。調査地東側、4区・8区では平安時代後期、10世紀後半から12世紀前半に時期比定される土師器や須恵器が破片であるが比較的多く出土した。これらの遺物には供膳具である坏や皿、内黒椀などのほかに煮沸具の羽釜などがあり、明確な遺構は検出されていないが、調査地東方域に広がる古代集落の存在を示唆する資料といえよう。

(5) 中 世

古代と同様、中世の遺構は検出されていないが、2区検出の第Ⅱ層中からは該期の土器がまとまって出土した。2区南西壁付近の第Ⅱ層中からは、土師器の坏9点(34～42)が出土した。口縁部や体部の一部を欠損しているが、ほぼ完形に近い土器で、底部の切り離しは回転糸切り技法によるものである。これらは鎌倉時代後半、13世紀代の遺物と考えられるが、本来は何らかの遺構に伴う可能性の高いものである。このことから、調査地や周辺地域には中世集落が存在していたものと推測される。

2. 古墳時代集落の変遷

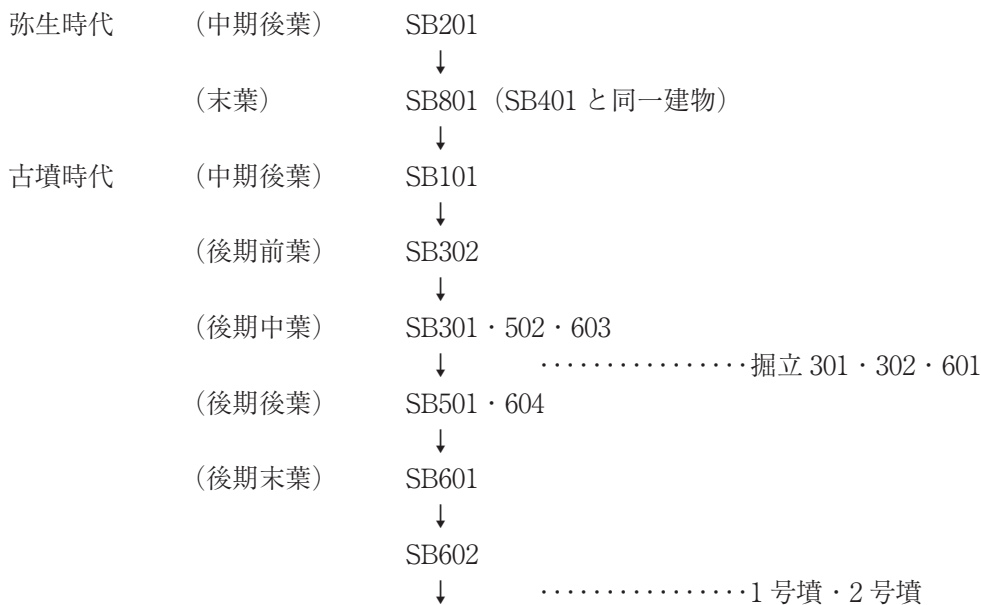
調査では、古墳時代の竪穴建物9棟が検出された。ここでは、建物の変遷についてまとめる。調査地内における建物出現期は古墳時代中期後葉、5世紀後葉である。その後、6世紀を通して数棟の建

物が構築され、7世紀前葉頃に終息を迎える。平面形態をみると、概ね隅丸方形または隅丸長方形である。規模は5世紀後葉から6世紀前葉では一辺6.1m前後であるが、6世紀中葉になると若干の大型化がみられ、SB301は一辺6.36m、5区検出のSB502は一辺7.36mとなる。さらに、6世紀後葉にはSB501が一辺7.62mであり、検出した竪穴建物の中では最大規模となる。なお、7世紀には規模の縮小化がみられ、6区検出のSB601は一辺5.36mである。

カマドは、6棟の建物で確認した。平面形態は馬蹄形状をなし、規模は長さ1.2～1.5m、幅0.8～1.1mである。建物北壁及び西壁の中央部付近に付設されているが、その方向性には建物の時期や規模などに規則性は認められない。なお、カマド内には土師器の甕が押し潰された状態で出土した事例が3例(SB101・301・501)あり、建物廃絶に伴う何らかの祭祀儀礼が執り行われたものと思われる。すべての建物ではないが、このような事例は松山市恵原地区における古墳時代の竪穴建物廃絶の様相が知れる貴重な資料といえる。

以上、今回報告した恵原新張遺跡1次・2次・3次調査は、農道工事に伴い実施した発掘調査である。調査を実施した総面積は2,394㎡、調査幅は10m前後であるが、縄文時代から中世までの遺構や遺物を多数検出した。とりわけ、弥生時代から古墳時代には調査地内において確実に集落の存在が明らかとなり、周辺地域には該期の遺跡が広く展開しているものと推測される。また、古墳時代には中期後葉から後期、5世紀後葉から7世紀前葉にかけては竪穴建物の検出により、集落が継続して営まれていることが判明した。さらには、古墳の検出により7世紀中葉を前後する時期までは居住空間として利用されたものが、それ以降は墓域に変化するという遺跡の変遷を追うこともできた。一方で、古代以降については明確な遺構が検出されず、遺跡の様相を明らかにすることはできなかった。ただし、平安時代や鎌倉時代の遺物が調査では数多く出土しており、近隣地域に該期の遺跡が存在することを示す貴重な資料を得ることができた。今後、調査地一帯における発掘調査等が進行すれば、弥生時代や古墳時代の集落の広がりや様相が一層明らかとなり、さらに古代や中世集落の様相も解明されるものと思われる。

〔遺跡の変遷〕



写真図版

写真図版 1 ～ 5 : 恵原新張遺跡 1 次調査

写真図版 6 ～ 8 : 恵原新張遺跡 2 次調査

写真図版 9 ・ 10 : 恵原新張遺跡 3 次調査

写真図版 11 ～ 16 : 恵原新張遺跡 1 次調査出土遺物

写真図版 16 ～ 18 : 恵原新張遺跡 2 次調査出土遺物

写真図版 18 ～ 20 : 恵原新張遺跡 3 次調査出土遺物



1. 1区完掘状況（南より）



2. SB101 検出状況（西より）



3. SB101 遺物出土状況（西より）



1. 2区完掘状況（南東より）



2. SB201 完掘状況（北より）



3. 3区完掘状況（南東より）



1. SB301・302 完掘状況
(南東より)



2. 掘立 301 検出状況 (北東より)



3. 掘立 301 (SP319) 検出状況
(南東より)



1. 掘立 302 検出状況（北東より）



2. 3区作業風景（西より）



3. 4区完掘状況（北より）



1. 1号墳検出状況（南より）



2. SD402 検出状況（南より）



3. 1次調査現地説明会風景
（西より）



1. 6区遺構完掘状況（西より）



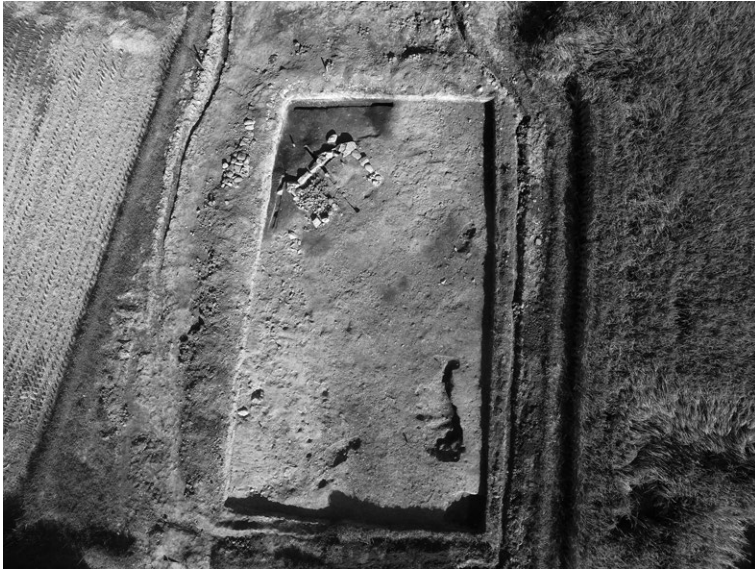
2. SB601 完掘状況（北より）



3. SB602・604 完掘状況（西より）



1. SB603 完掘状況（北東より）



2. 7区遺構完掘状況（西より）



3. 2号墳石室完掘状況（南東より）



1. 8区遺構検出状況（西より）



2. 8区遺構完掘状況（北より）



3. SB801 完掘状況（西より）



1. 5区遺構完掘状況①（南東より）



2. 5区遺構完掘状況②（北東より）



3. SB501 完掘状況（南東より）



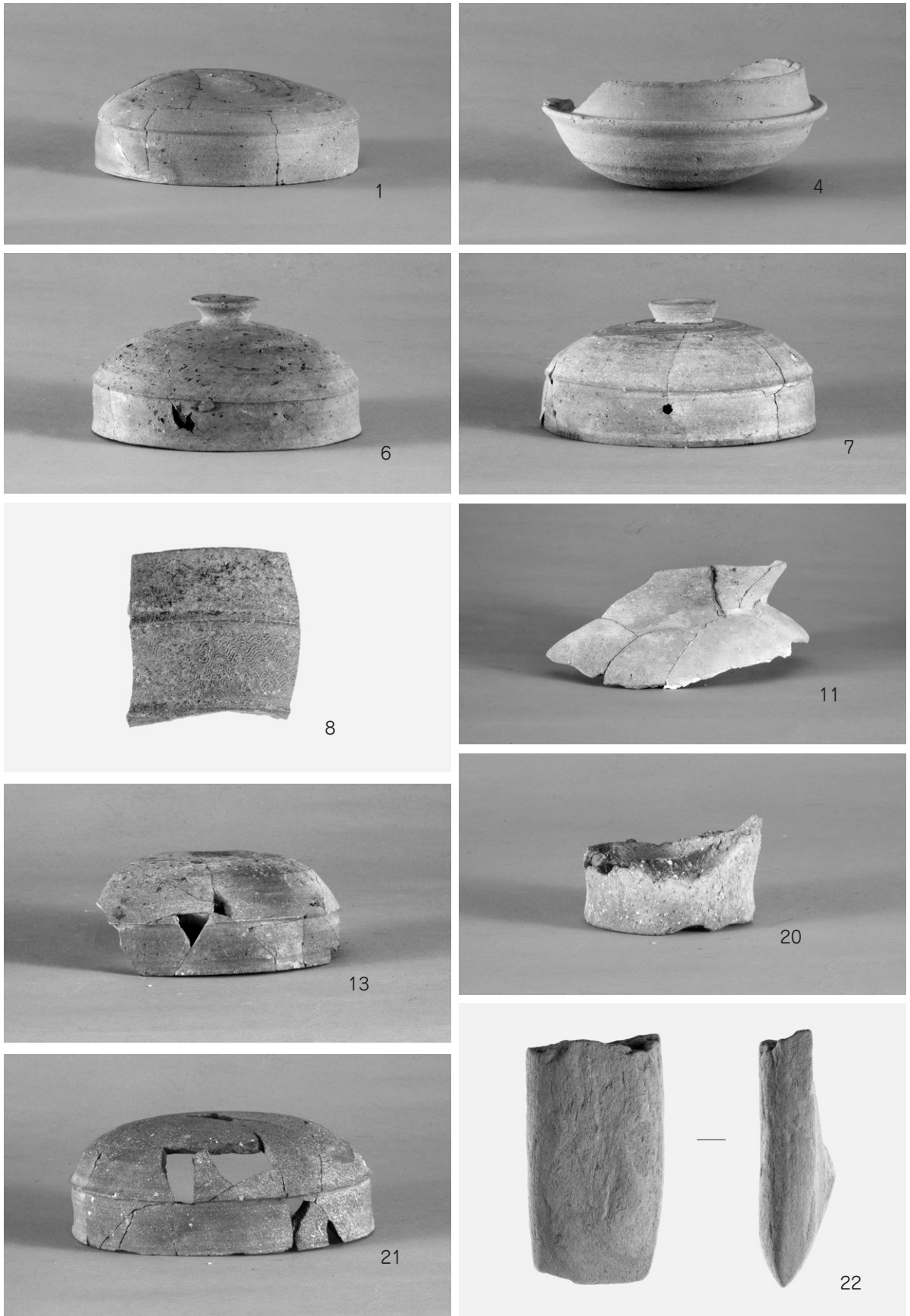
1. SB501 カマド検出状況（東より）



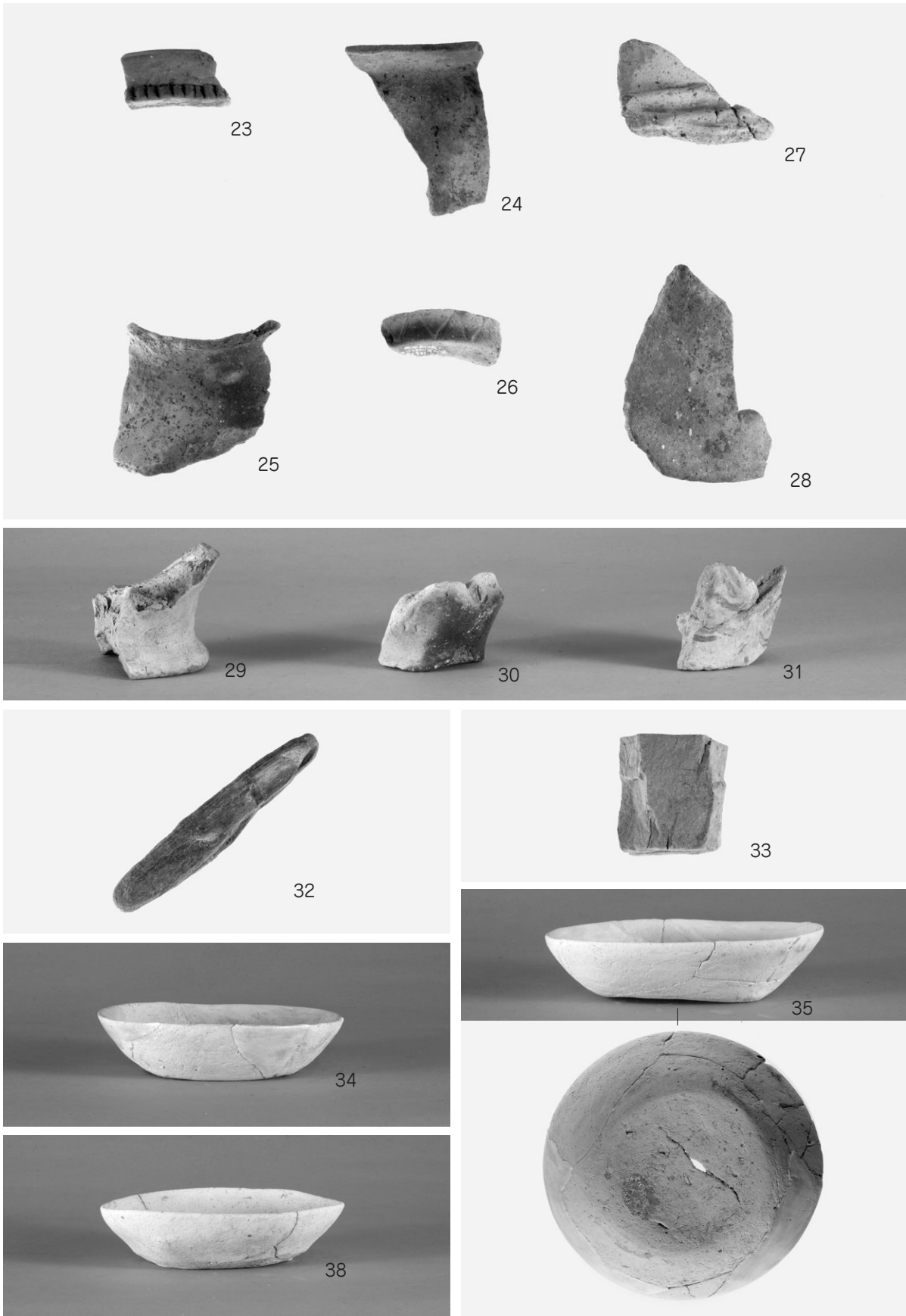
2. SB502 完掘状況（北より）



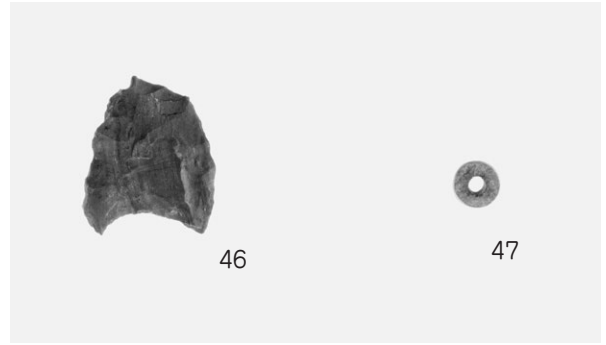
3. SB502 遺物出土状況（北より）



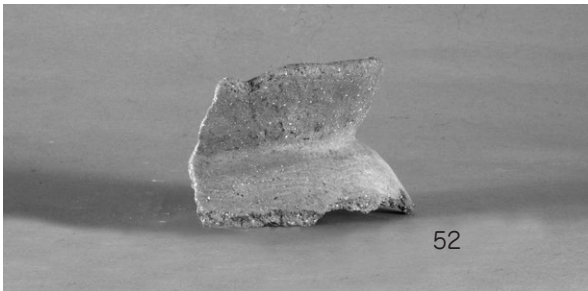
1. 出土遺物 (SB101 : 1・4・6 ~ 8・11、SD101 : 13、1区第IV層 : 20 ~ 22)



1. 出土遺物 (SB201 : 23 ~ 33、2 区第Ⅱ層 : 34・35・38)



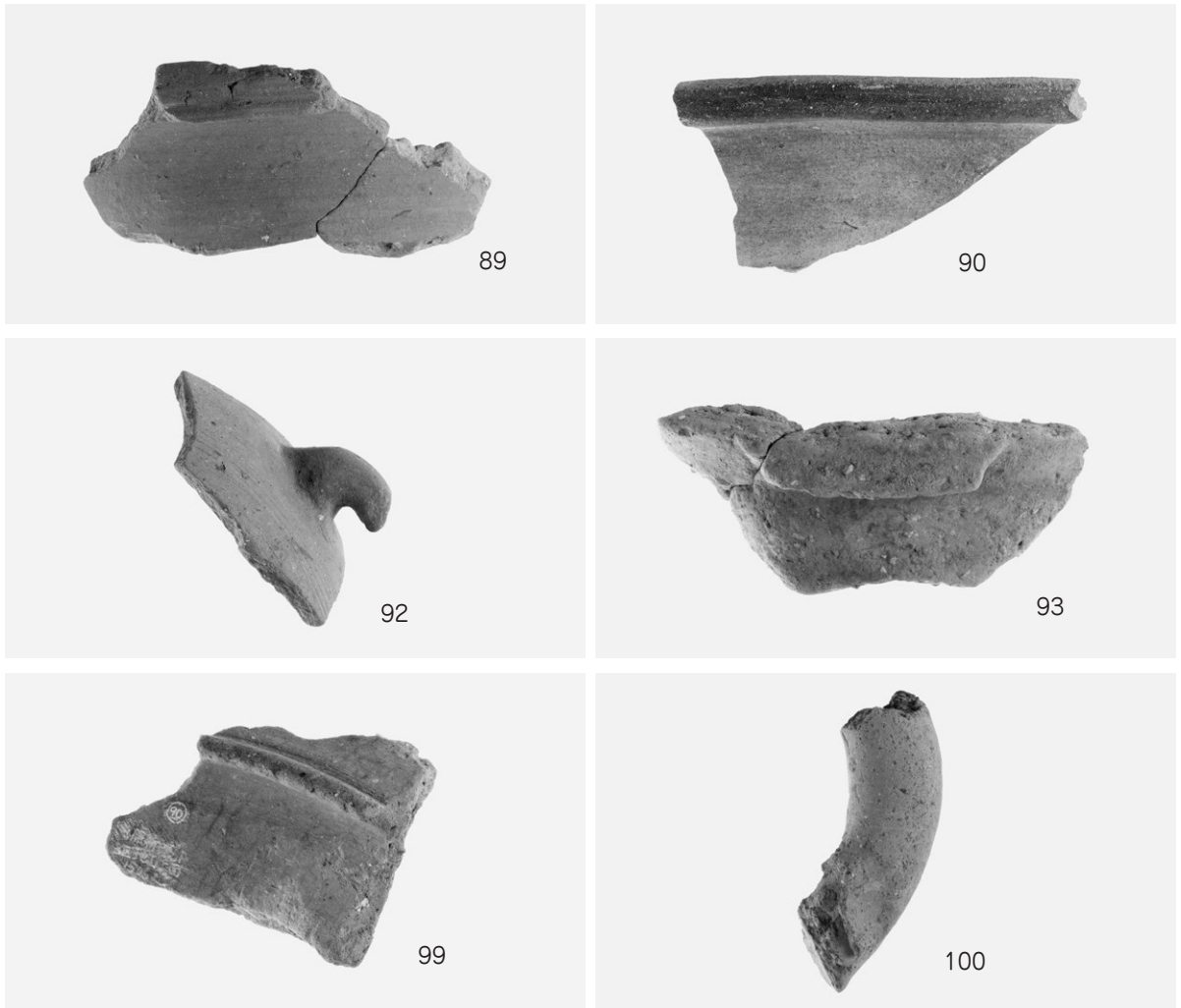
1. 2区第IV層出土遺物



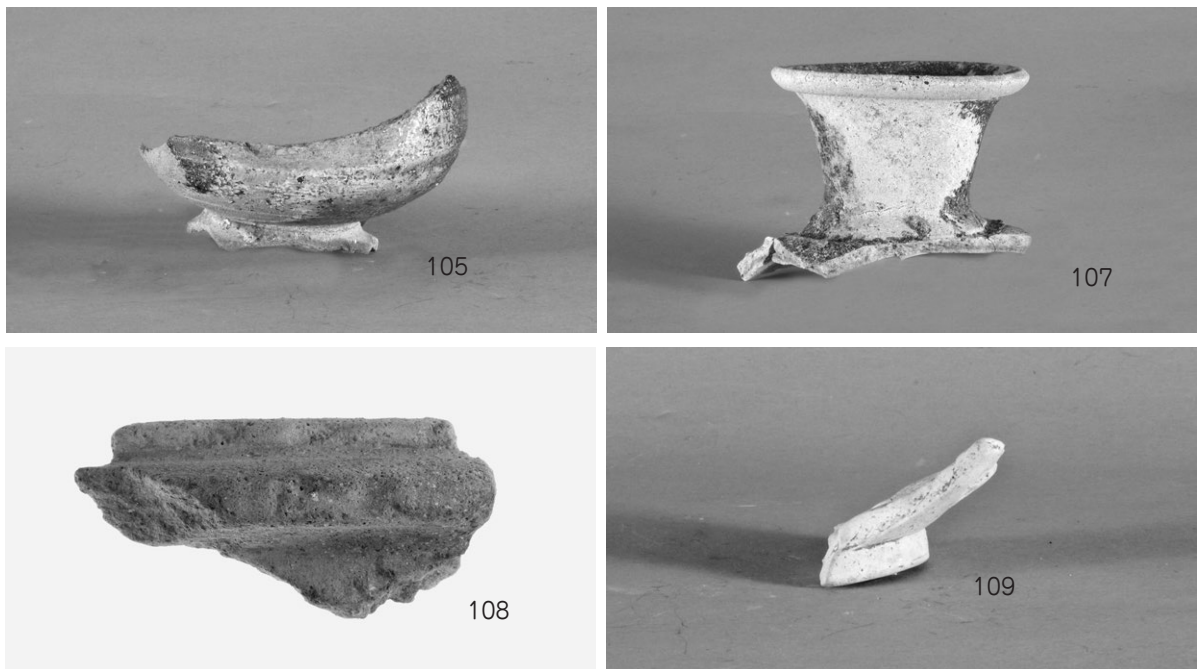
2. SB301 出土遺物①



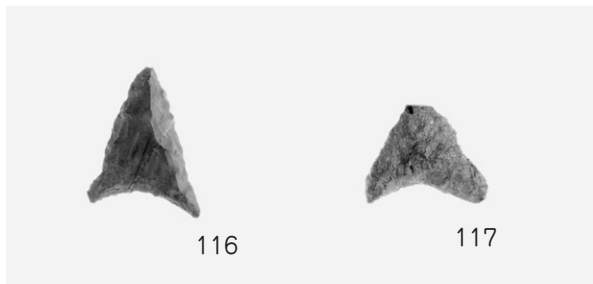
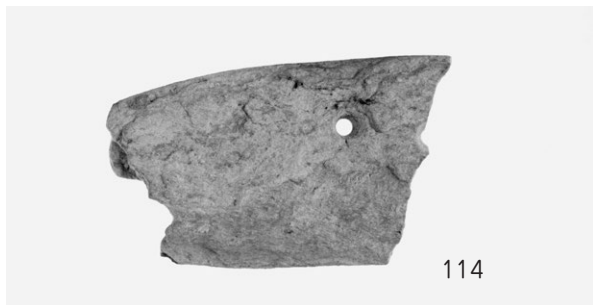
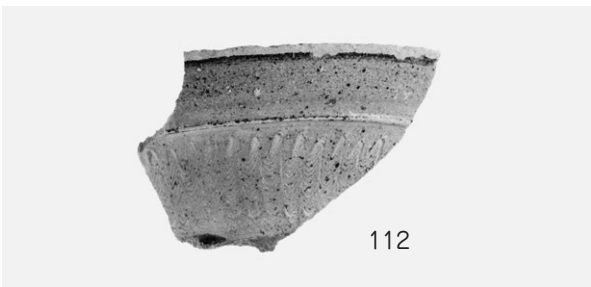
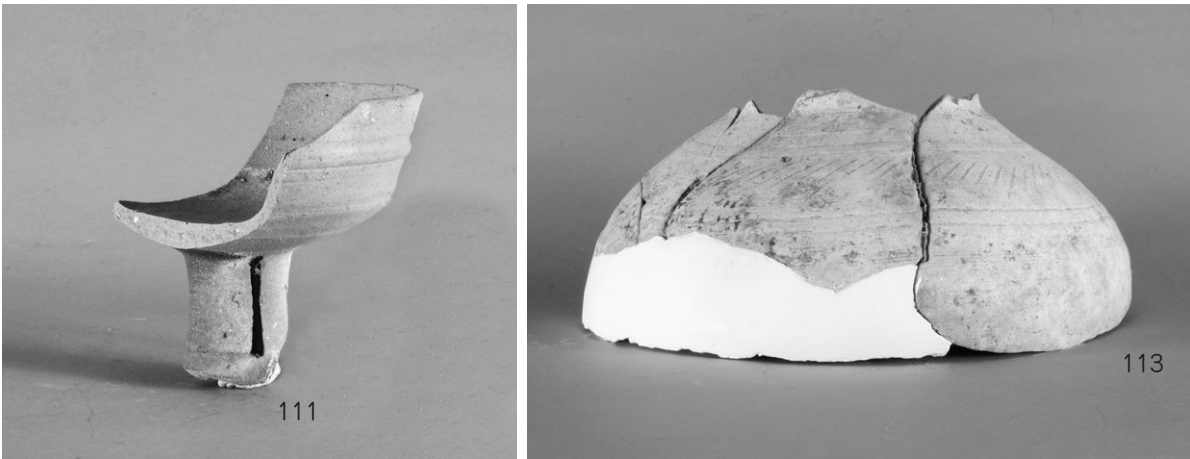
1. 出土遺物 (SB301 ② : 61 ~ 64、SB302 : 65・66・68 ~ 71・73)



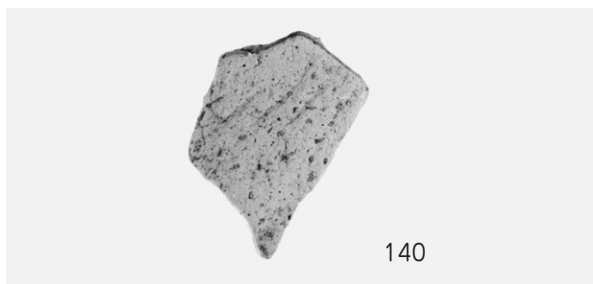
1. 出土遺物 (3区第IV層 : 89・90・92・93、3区第V層 : 99・100)



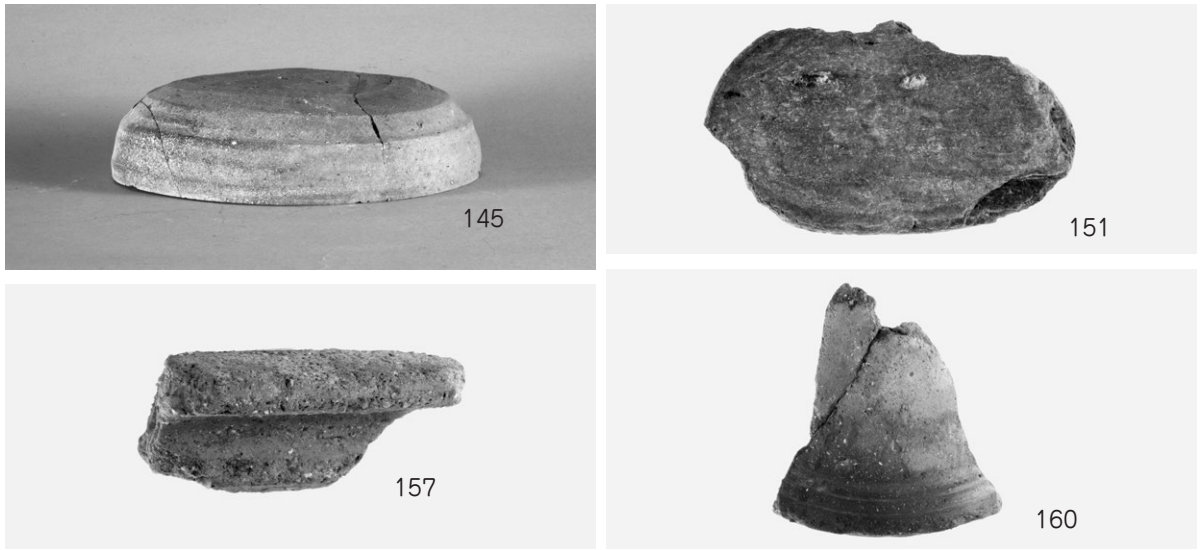
2. 出土遺物 (1号墳 : 105、SD402 : 107、4区第III層 : 108・109)



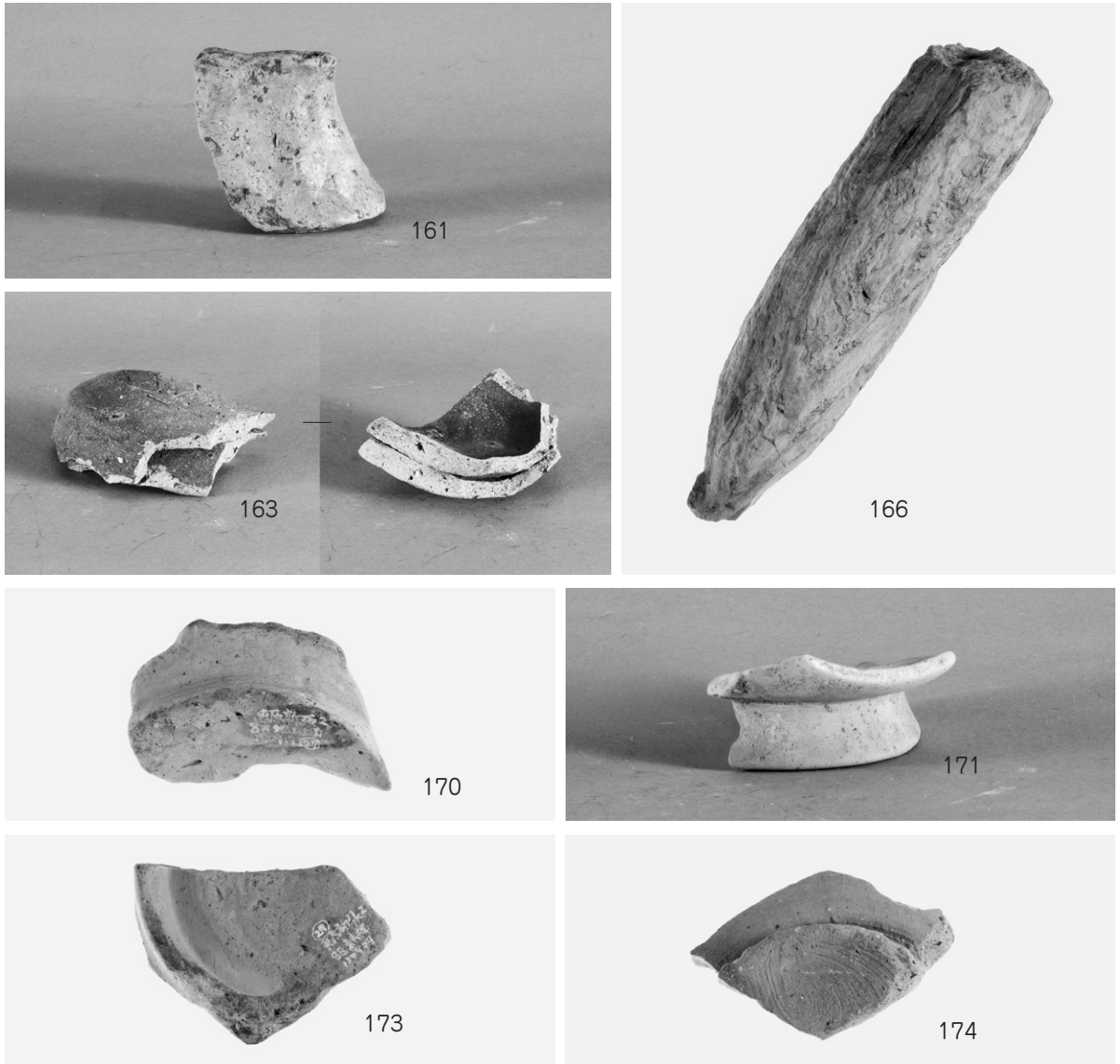
1. 4区第Ⅳ層出土遺物



2. SB602 出土遺物

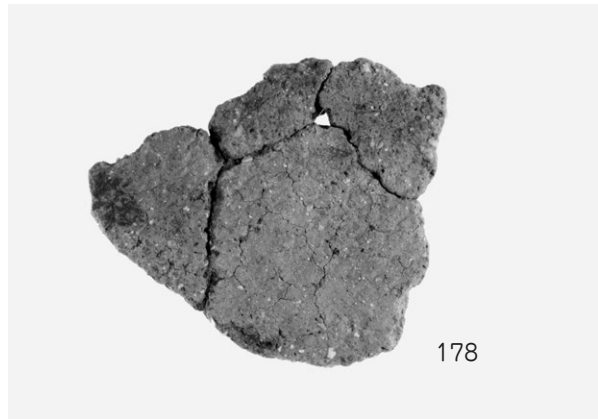
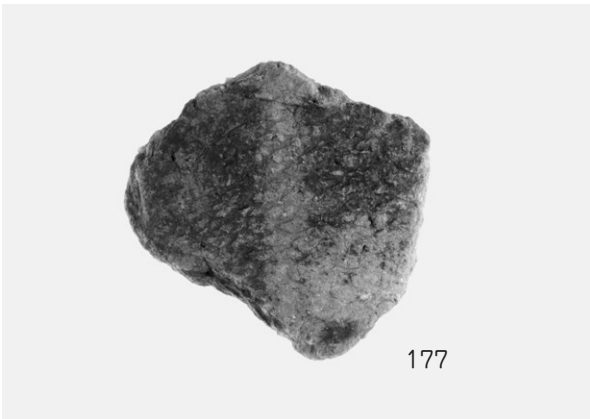


1. 出土遺物 (SB603 : 145、SD601 : 151、6区第IV層 : 157・160)

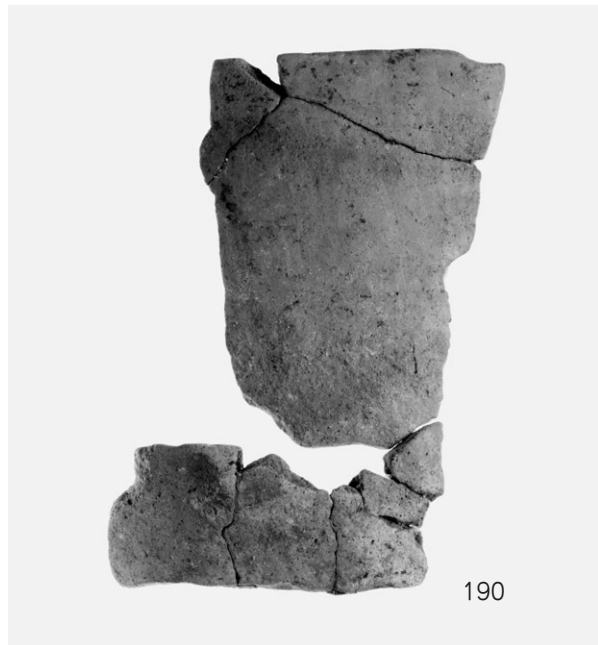
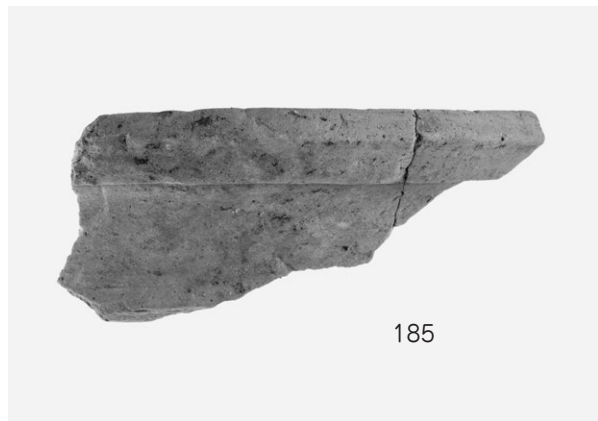


2. 出土遺物 (7区第IV層 : 161・163・166、8区第III層 : 170・171・173・174)

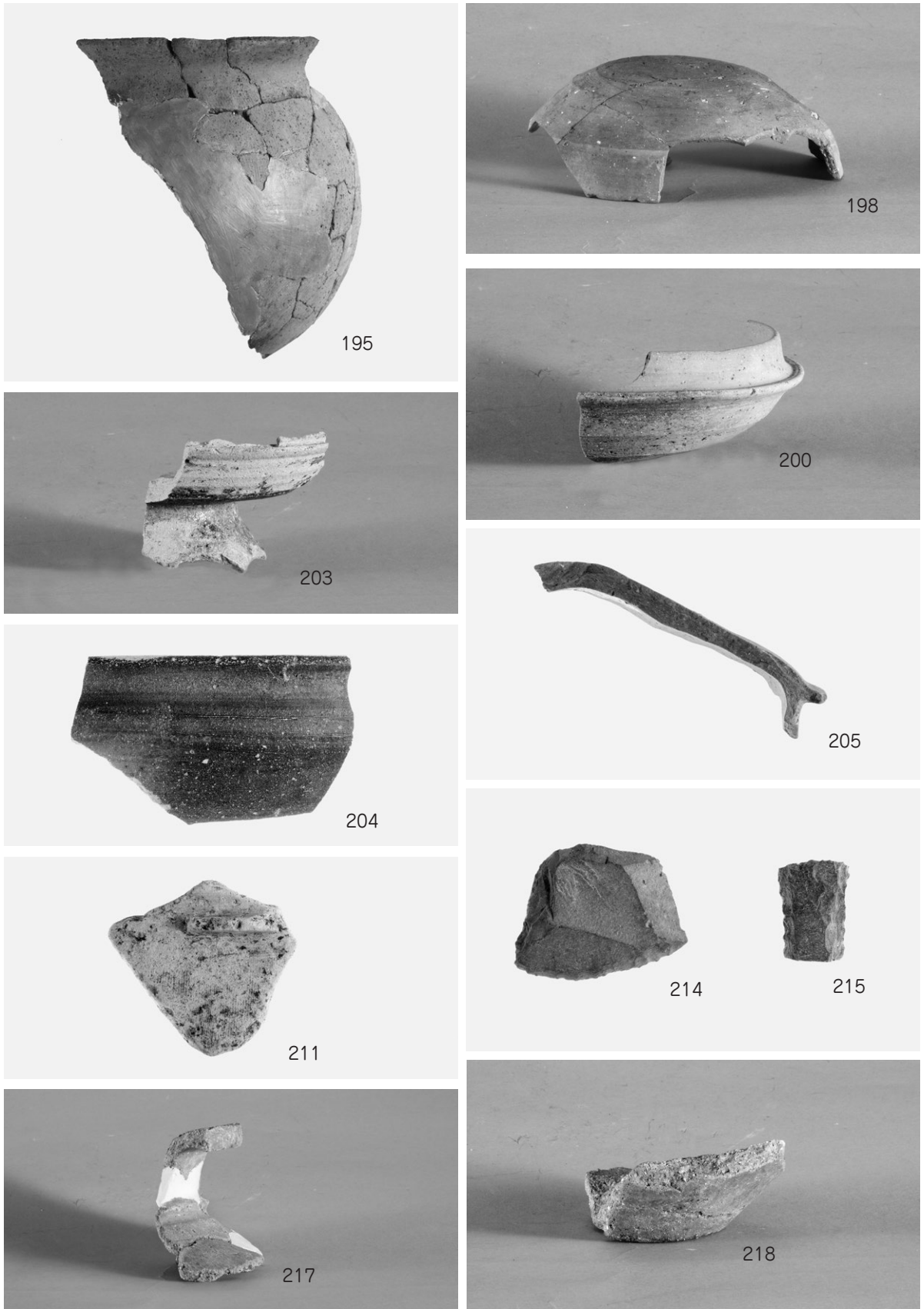
図
版
18



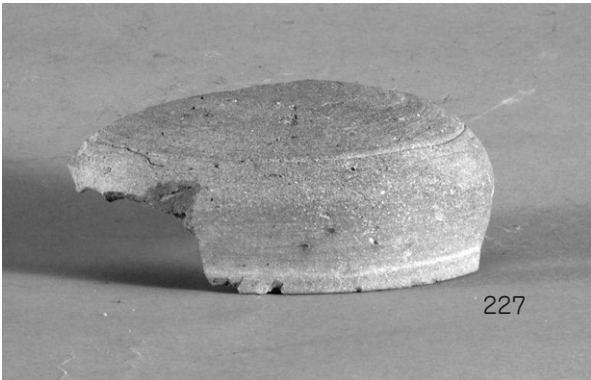
1. 8区第V層出土遺物



2. 出土遺物 (SB501 : 179・185、SB501 カマド : 189・190)



1. 出土遺物 (SB502 : 195・198・200・203～205・211・214・215、SK502 : 217・218)



1. 出土遺物 (SK503 : 219、SK505 : 220、5 区第IV層 : 224・227・229)

報 告 書 抄 録

ふりがな	えばらにばりいせき
書名	恵原新張遺跡 - 1次・2次・3次調査 -
副書名	農地整備事業（通作条件整備）松山南部3期地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第194集
編著者名	水本 完児
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2018（平成30）年11月9日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えばらにばり 恵原新張遺跡 1次調査	まつやましえばらちよう 松山市恵原町 甲1460-4 外5筆	38201	591	33° 45' 35.080"	132° 49' 03.265"	20150511) 20150918	1,361	農道工事
えばらにばり 恵原新張遺跡 2次調査	まつやましえばらちよう 松山市恵原町 甲1432-2 外3筆	38201	594	33° 45' 35.096"	132° 49' 06.257"	20150810) 20151009	826	農道工事
えばらにばり 恵原新張遺跡 3次調査	まつやましえばらちよう 松山市恵原町 甲1454-3	38201	614	33° 45' 35.281"	132° 49' 04.351"	20160509) 20160603	207	農道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵原新張遺跡 1次調査	集落	弥生 古墳 古代 中世 近現代	竪穴建物・土坑 竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・古墳 溝・土坑	弥生土器・石製品 土師器・須恵器・埴輪・石製品・玉類 土師器・須恵器 土師器	弥生時代から古墳時代の建物址及び石室を検出
恵原新張遺跡 2次調査	集落	縄文 弥生 古墳 古代	竪穴建物・溝・土坑 竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・古墳	縄文土器 弥生土器・石製品 土師器・須恵器・石製品 土師器・須恵器	縄文土器（早期）が出土
恵原新張遺跡 3次調査	集落	弥生 古墳	土坑 竪穴建物・土坑	弥生土器・石製品 土師器・須恵器	古墳時代の建物址を検出

要 約	<p>本調査では、縄文時代から中世までの遺構や遺物を確認した。縄文時代の遺構は未検出であるが、2次調査において早期押型土器が出土した。弥生時代では1次調査や3次調査にて中期後葉と末の竪穴建物が検出され、該期における集落の存在が明らかになった。次に古墳時代では前期の資料はないが、中期後葉から後期にかけて、複数の竪穴建物が検出された。建物内からは柱穴やカマドが検出され、建物構造が知れる貴重な資料を得ることができた。また、建物の変遷から古墳時代中期から後期にかけて継続的な集落経営が進められたことがわかった。なお、古墳時代終末期には古墳（石室）が築造されており、古墳時代を通して、居住域から墓域へと土地の利用方法が変化する様子も明らかになった。古代から中世の遺構は未検出であるが、鎌倉時代に使用された完形の土器が包含層中から出土している。</p> <p>今回の調査により、調査地や周辺地域には弥生時代から古墳時代にかけて、広範囲に遺跡の存在する可能性が極めて高いものと推測される。</p>
-----	---

松山市文化財調査報告書 第194集

恵原新張遺跡

－ 1次・2次・3次調査－

平成30年11月9日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791 - 8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923 - 6363

印刷 セキ株式会社
〒790 - 8686 松山市湊町七丁目7番地1
TEL (089) 945 - 0111
